39
118

始

ヰA97
39-118

大正二年五月

大日本人物誌

一名 現代人名辭書

合名會社 八紘社

大正
2. 5. 20
内交

序

和衷協同は社會團結の要諦、是ありて始めて國强く民安きを得べき也。而して和衷協同の實を擧げんとせば、先づ以て其の社會の組織要素たる人物の眞價を互に理解せざるべからず。人物の眞價を理解せんとせば、先づ以て其の人物過去の閲歴と現在の生活事實とを明にせざるべからず。而も社會は他方面、人物亦多種多樣なり、是等の人々に一々親炙するの頗る難く、親炙するも其の人の過去の閲歴を看破するの更に難きものあり、茲に於てか人物誌の必要生ず。

本書は爵位官等の有無に論なく、職業地位の高下に據らず、あらゆる社會の才能を羅致して其の性行閲歴事業を精査し、飾らず阿らず、率直、平明、に記述したるものなれば、正しく是れ我が帝國の地位と光榮とを事實に於て負擔せる現代人物の一大列傳として見るべきもの、實業家、政治家、學者、操觚者はいふに及はず、何人と雖も其の社交上、業務上常に座右にすべき要

書たるべきを信ず。若し夫れ後進青年にして本書を繙かんか、眞に成功せる人物の生活事實は、必ずしも青年が夢想せるが如き寢て待つ福の平坦暢氣なる順路を辿れるものにあらず、逆境に次ぐに逆境を以てして尙不撓不屈、七轉八起、而して、時運を看取するの敏慧と、時に自己を空しうして社會公共の利益の爲に行動する俠情と、常に不退轉の大勇猛心を以て奮鬪止まざる大意志力とを兼ね備へたるに因由する所以を一々實例に徵して會得すべく本書の數頁は實に百の抽象的成功論にも勝る大教訓たるを知るべし。たゞ憾む、編者の菲才不敏なる、愼重以て事實の調査に從ひ、一言一句苟くもせざりしとは言へ、なほ其の人物の選擇に於て大を逸して小を捉へ、其の事歷の記述に於て要を捨てゝ不要を取りたるが如きことの萬々なきを保し難きを、幸に大方の垂教を得ば重版を俟ちて完璧を期するを得んか。一言以て卷首に序すと云爾。

大正二年五月

編者識

凡例

一本書は本邦臺灣及朝鮮に於ける官民業務の區別なく偉績勳功若くは懷奇抱志の士を始め苟も一技一能に通する人物の閲歷性行及び事業の關繫並に嗜好一班等を率直平明に叙述し以て社交上の機關として汎く握手の交換を需むるに便せん目的を以て編したるに他ならざるなり故に其の收むる所は力めて記事の冗長を避けて專ら會社各方面の人物を網羅せんことを期せり然れども事業の範圍頗る宏大にして材料蒐集の困難なること豫想の外に出てたり

一本書出版の計劃は法律第五十五號豫約出版法により發行期日を定め其筋の允可を得て保證金を提出し愼重以て事に當りて苟もせず而かも材料の延着且つ事實調査に於て彼是錯雜を來し最初の期日までに出版するを得ず爲に屢々其筋へ發行延期の請願をなすの已むなきに至れるは特に豫約者諸君に謝せざるべからざる所是れ偏に內容の杜撰粗漏を避けんとの微意に出てたるに外ならず

一索引は別欄を設け目次に代へて之を附せり其法は(いろは)順を用ひ同性の下に類聚し調索の便を計れりと雖ども音韻は表音に依り原義に順はず故に(い、爲)(ゐ、江)(を、お)等の如きは(爲)は(い)の部に(ゐ)は(江)の部に(お)は(を)の部等に編入したりされど又

慣例に倣ひ「岩」の字を「い」の部に編入したる等のもの亦少こせす

一本書は調査當時の地位職業狀況等を叙述したるもの而かも人事百般の狀態は活動し一盛一衰は時々刻々に發生して止まず爲に今完成の期に於て多少其の地位、職業、狀況等に移動を生したるあり又中には鬼藉に入れるものすらあるは之れ誠に數の免れざる所萬止むを得ざるに出づ

一本書は明治四十四年九月を期し材料の蒐集を止めたるに依り其記事は大正年代に及ばず故に　天皇陛下聖上等の尊稱は先帝（明治天皇）　皇太子殿下の尊稱は即ち　今上陛下の御事なり但記述する處の事項にして往々四十五年五月に渉れるものあるは既に明なる最近の事實の如何にも捨てかたく思はれたるが爲めなり

一皇族は本文順序中に加へ奉らす卷頭別に謹んで一欄を設け敬意を表せり

一本書發刊の事業を賛し特に揮毫の勞を執られ本書の内容體裁の上に燦然たる光彩を添へられたる書畫大家諸彦に對して玆に深く感謝の意を表す

一最終の發刊期日を定めて後尚編纂校正等豫定通りに捗らず俄かに刊成を急ぐの止むなきに至り爲に文中誤植、脱字、誤字等なきを保し難し冀くば垂敎の勞を吝まれさらんことを

大正二年五月

編者識

目次

い（ゐ）之部

井伊直忠　一六八
井伊直安　五三
井原喜代太郎　一一二
井原文吉　一一二
井原百介　一六八
井林清次郎　二九
井橋兼次郎　二一〇
井坊忍敎　一一九
井藤春鳳　五
井川松齋　六
井川洗厓　一八九
井田忠信　一九一
井田清三　七三
井田武雄　一七三
井谷龜之丞　三一
井筒善太郎　一五四
井上敬次郎　六二
井上正己　二〇
井上匡四郎　二一
井上善次郎　一七
井上準之助　一八
井上德太郎　一六
井上彦左衛門　一七
井上良馨　二〇
井上密　七四
井上甃吉　一二八
井上頼圀　一一二
井上學太郎　一三五
井上忠兵衛　八〇
井上角五郎　七六
井上禧之助　一八二
井上正一　一一八
井上勇吉　六七
井上禧作朗　二三
井上馨　一八
井上哲次郎　二一
井上敏夫　六八
井上勝之助　一六
井上保藏　一四
井上公二　六六
井上雲桂　六六
井上八重吉　一八一
井上寅次郎　一八二
井上正言　一一二
井上孝哉　一一二
井上虎治　一一二
井上利助　一一二
井上仁郎　一一三
井上茂兵衛　一一五
井上十吉　一一五
井上正義　五〇
井上清治　一五五
井上治郎兵衛　一五四
井上喜久治　七七
井上芦仙　二五
井上菊松　四九
井上溫造　五七
井上要　一九二
井上囘了　五八
井上悅介　一五八
井上貞彰　五二
井上辰九郎　一八〇
井上六三郎　一六六
井上元三郎　二八
井上友吉　三〇
井上義馬　一五七
井上敏男　六三
井上好雄　七八
井上政吉　七一
井上浪藏　三三
井上善吉　一〇八
井内秋霧　二四
井内太平　六五
井内龜次郎　五八
井口半兵衛　一六
井口省吾　一八〇
井口在屋　一六
井口藤兵衛　二九
井ノ口宇三郎　七四
井深梶之助　一八一
井深忠平　一六六
井深英之助　三二
井手麟六　一一五
井出治　一一六
井出百太郎　一一三
井阪直幹　一八〇
井阪光暉　六
井阪桐陰　一七七
井澤吉五郎　一一〇
井宮助之　六一
井本常治　一八一
井芹典太　一八一

伊原木藻平 一一一
伊庭秀榮 八七
伊橋倉吉 一四五
伊部直光 一七七
伊藤幹一 一七九
伊藤悌治 七七
伊藤雋吉 一六九
伊藤榮太郎 四七
伊藤傳右衛門 六四
伊藤大八 九一
伊藤由太郎 一九〇
伊藤基 一七一
伊藤幸太郎 五四
伊藤爲吉 一七〇
伊藤德三 五四
伊藤貴志 六四
伊藤定七 六七
伊藤琢磨 一七一
伊藤平三 一一一
伊藤弘 一一〇
伊藤隼三 一〇九
伊藤喜十郎 一〇八
伊藤博邦 一〇九
伊藤小三郎 四七
伊藤悌藏 一〇九
伊藤長兵衛 一一〇
伊藤治郎左衛門 一七四
伊藤萬助 一一〇
伊藤孝太郎 一七五
伊藤治郎助 一一〇
伊藤文吉 一〇九
伊藤忠兵衛 一一〇
伊藤小左衛門 四九
伊藤嘉七 一〇九
伊藤清右衛門 一〇七
伊藤喜七 一〇八
伊藤守松 一〇七
伊藤祐保 一〇七
伊藤潔 一〇八
伊藤直應 二八
伊藤金三 三一
伊藤溪水 二九
伊藤鷺城 七五
伊藤介夫 二四
伊藤長次郎 二七
伊藤傳七 二五
伊藤孫左衛門 八六
伊藤正作 一五九
伊藤古仙 一四七
伊藤勝英 一五五
伊藤平五郎 一五〇
伊藤半次郎 一四八
伊藤英泰 一五三
伊藤正見 五四
伊藤萬藏 三三
伊藤玄海 一五一
伊藤伊八 四〇
伊藤伊三郎 三七
伊藤藏滿作 四五
伊藤欣造 八二
伊藤達敬 一六六
伊藤政重 二六
伊藤音吉 一六三
伊藤耕寅 一〇六
伊藤庄兵衛 一三六
伊藤快彦 一一三
伊藤義平 七五
伊藤清八 二四
伊藤兼吉 二七
伊藤萬藏 二五
居藤高次郎 八六
伊東義五郎 一七一
伊東陶山 一七二
伊東昌春 六五
伊東熊夫 七三
伊東己代治 一六七
伊東祐亨 一六七
伊東忠太 一七三
伊藤祐弘 一七二
伊東治三郎 一七三
伊東祐彥 五一
伊東祐忠 一七四
伊東要藏 六二
伊東榮 一〇五
伊東雅次郎 一〇四
伊東卓夫 一〇四
伊東新吉 一五六
伊東紅雲 三四
伊東義路 三八
伊東茂右衛門 四七
伊東祐賢 八九
伊東增枝 一七
伊東茂右衛門 一五
伊地知幸介 一二
伊地知壯熊 一〇五
伊地知季珍 一七一

伊地知彥次郎 一〇五
伊賀正太郎 八〇
伊賀氏廣 八一
伊丹誠一 一〇六
伊丹榮助 一〇五
伊丹春雄 一〇五
伊丹彥次郎 一七九
伊丹彌太郎 一七九
伊夫伎資弼 一六〇
伊澤竹衛 一四二
伊澤信平 一四二
伊澤修二 一四二
伊澤平藏 一四四
伊澤多喜男 一四四
伊阪市右衛門 一一一
伊木常誠 一一一
伊集院五郎 一三六
伊集院彥吉 一三七
伊集院兼知 一四〇
伊勢錠五郎 一四〇
伊瀨地好成 七七
猪原德太郎 三四
猪田岩藏 八九
猪子止戈之助 一〇五
五十嵐久助 八〇
五十嵐敬止 八一
五十嵐秀助 一〇六
五十嵐平作 一〇五
五十嵐忠次郎 一〇五
五十嵐甚藏 一七九
五辻治仲 一七九
育野龜太郎 一六〇
生駒權七 一四二
生駒親忠 一四二
生駒萬治 一四二
生沼權一郎 一四四
生田新右衛門 一四四
生田定之 一一一
生田是文 一一一
生川鐵忠 一三六
生貝力藏 一三七
生嶋嘉藏 一四〇
生嶋五兵衛 一四〇
生島五三郎 七七
生島四郎左衛門 三四
生島一德 八九
飯伺嘯谷 八九
飯田巽 七七
飯田定次郎 一一四
飯田精一 八四
飯田英三 七
飯田新七 八〇
飯田國助 一三四
飯田三治 八九
飯田勇記 一〇三
飯田忠三郎 三四
飯田政之助 一〇三
飯田俊助 七八
飯田義一 一四三
飯田保太郎 七八
飯田孤村 一〇三
飯塚春太郎 一〇三
飯塚佐吉 九〇
飯塚聖林 三七
飯塚唯一郎 三六
飯塚雲擧 一〇一
飯塚仁兵衛 一〇二
飯塚彌兵衛 一〇二
飯村丈三郎 一〇二
飯淵七三郎 一〇三
飯嶋正治 六一
飯嶋魁 一一六
飯島保作 一一九
飯嶋榮太郎 一一三
飯島純介 一一一
飯島次郎 一一一
飯島農夫雄 一一三
飯盛挺造 一一一
色部義太夫 一一一
茨木惟昭 一一一
庵原勝吉 一一三
糸原武太郎 一一三
糸山貞規 一一三
一戸兵衛 六〇
一條實輝 一四六
一立齋文庫 七九
一野安 八〇
一ノ倉貫一 一五三
一ノ瀨與左衛門 一四六
一江芳秋 二
一坂俊太郎 一一九
一木喜德郎 一一九
一宮喜十郎 一一八
一色範叙 一一八
一原盛宏 一一六

市橋保治郎　一〇七
市橋龜藏　一〇七
市場謙藏　四四
市岡紫雲　一五二
市川文藏　一三
市川吉六　四九
市川高策　一七八
市川堅太郎　一七八
市川元八　八一
市川克三　七九
市川只次　二九
市川喜七　一〇六
市川繁治郎　一〇六
市川謙一郎　一〇七
市川得庵　四六
市川塔南　四三
市川九女八　一九一
市川門之助　八四
市川壽美藏　一九二
市川泰山　一四五
市川左團次　一九二
市川鍛四郎　八二
市川茂作　一七四
市川新十郎　一九二
市河三陽　一五五
市河米　一五五
市河三喜　一五六
市田兵七　一三
市田彌一郎　一三
市田左右太　四九
市田理八　一七八
市田文次郎　一七八
市村讃次郎　八一
市村塘　七九
市村羽左衛門　二九
市村長靜　一〇六
市村芳樹　一〇六
市來乙彦　一〇七
市來圭一　四六
市山壽美　四三
市島德次郎　一九一
市瀨泰一　八四
市瀨文三郎　一九二
入江應之介　一四五
入江良之　一九二
入江保之助　八二
入江武一郎　一七四
入江汀　一九二
入江孝次郎　一〇〇
入江爲守　二四九
入江光藏　八八
入江金三郎　八九
入澤達吉　一三
犬養毅　七一
犬丸清兵衛　八六
犬丸鐵太郎　一八九
犬伏九郎左衛門　一七九
乾亮　八〇
乾月谷　八
乾新兵衛　一九八
乾孚志　三六
乾淡江　七八
乾龜松　八四
岩井禎三　四五
岩井楳太郎　七〇
岩井松之助　六四
岩井勝次郎　三七
岩井文助　九
岩原謙三　八一
岩高謹次郎　九
岩橋萬助　一九〇
岩堀嘉三郎　一六〇
岩堂保平　八一
岩川友太郎　一六五
岩龜喜助　八二
岩田友右衛門　九三
岩田孝慈　九四
岩田伊加　七二
岩田保太郎　九三
岩田大中　四六
岩田源次郎　九四
岩田武三郎　三七
岩田豊麿　一三〇
岩田惣三郎　八二
岩田宙造　八二
岩田作兵衛　八六
岩田鶴阜　二八六
岩田宗太郎　一五五
岩溪裳川　二八
岩垂邦彦　二六五
岩坪伍兵衛　九四
岩月直彦　三九
岩永省一　八七
岩永左八　二五八
岩村通俊　二六五
岩村桃谷　一二四

岩野新平　一六三
岩倉具明　三七
岩倉具張　九四
岩倉具德　三七
岩谷民藏　九五
岩谷松平　一六四
岩田惣兵衛　一六四
岩朝律郎　五二
岩佐古香　三〇
岩崎一　五四
岩崎達人　一七六
岩崎虔　一六二
岩崎友次郎　一七〇
岩崎久彌　一七八
岩崎次三郎　九二
岩崎勳　六三
岩崎行親　一六三
岩崎湖堂　一五〇
岩崎豐彌　一七六
岩崎小彌太　一七六
岩崎清七　六五
岩崎廣作　六五
岩崎彦松　三二
岩崎又造　九五
岩崎己之亮　一六三
岩崎德五郎　三七
岩崎嘯雲　九四
岩城伊平　三七
岩島匡徵　九五
岩下清周　一六四
岩下善七郎　一六四
岩本晴之　五二
岩本逸太郎　三〇
岩本吉次郎　五四
岩元吉太郎　一七六
岩元信兵衛　一六二
岩瀨覺榮　一七〇
巖谷季雄　一七八
筏井甚造　九二
筏井甚吉　六三
板井辰藏　一六三
板垣退助　一五〇
板倉　中　一七六
板倉勝觀　一七六
板倉勝達　六五
板倉勝鏤　六五
板倉松太郎　三二
板倉勝貞　九五
板谷桂舟　九五
到津公燕　九二
磯部保次　一五六
磯部仁左衛門　五〇
磯部　醇　七八
磯部百舟　九二
磯部熊太郎　一六二
磯部四郎　一七八
磯部彌一郎　七九
磯部宗右衛門　九一
磯部正春　九二
磯部包義　一七七
磯川伊三郎　三九
磯川藤吉　一七五
磯貝又藏　七
磯貝浩　一六一
磯田長秋　三五
磯田良　九
磯村豐太郎　五二
磯野良吉　七三
磯野新藏　七三
磯野直吉　九〇
磯野豐　九〇
磯野蛙巢　九八
磯野耕峰　七六
磯谷知等　九八
磯矢完山　五四
和泉乙三　五五
和泉嘉右衛門　九七
泉仙介　三八
泉米治郎　七二
泉仁三郎　七
泉孝三　七二
泉鳳泉　四
泉勝造　一八四
泉田平右衛門　六
泉谷岩吉　一六〇
泉山吉兵衛　一六一
稻葉順通　一九一
稻葉正繩　七一
稻葉三右衛門　一四五
稻畑勝太郎　一七六
稻垣市兵衛　一〇
稻垣恒吉　一八四
稼垣營造　一七七
稻垣長敬　九八
稻垣乙丙　一六二
稻垣兵太郎　五六

稲垣彌三郎　五六
稲垣太祥　七五
稲川貞美　一一
稲村辰次郎　九五
稲村貫一郎　九五
稲村源助　八三
稲延利兵衛　九四
稲茂登三郎　三七
稲本儀三郎　三七
稲本唯七　一八九
今井藤七　九〇
今井省三　一
今井通　一
今井彦三郎　六八
今井艮一　一八三
今井吉平　一八五
今井孫市　一八六
今井新兵衛　一五七
今井喜八　一八八
今井治郎三郎　一五七
今井爽邦　三一
今井市藏　一八〇
今井松雲　一九
今井玉芳

今泉雄作　七〇
今泉嘉一郎　一〇一
今泉巴城　四一
今泉卯吉　四〇
今西林三郎　一四一
今西直次郎　一五二
今西清兵衛　四二
今堀喜右衛門　一四七
今戸蝸牛　一四九
今尾景年　一七五
今津覺太郎　一八二
今中素友　一四五
今村繁三　一〇〇
今村東郊　八
今村有隣　八
今村力三郎　一〇〇
今村甲子藏　一〇〇
今村伊三吉　一〇〇
今村信敬　九九
今村興宗　九〇
今村久男　一五三
今村紫紅　九九
今田正夫　九九
今福淺吉　一一七

池邊吉太郎　一一
池邊義象　二
池部清兵衛　五六
池戸民國　五九
池貝庄太郎　六三
池上掃雨　二
池上三郎　一八二
池上仲三郎　一四五
池上輝速　一〇一
池上秀畝　五
池田兵三郎　七二
池田博愛　一〇〇
池田仲誠　一九一
池田萬藏　一八八
池田圓男　一八八
池田長準　一五〇
池田桂仙　四二
池田文太郎　三
池田政保　一八七
池田清就　五三

池田吉太郎　一二七
池田禎政　一九一
池田庄吉　八五
池田煙郎　二八
池田慶眞　一四七
池田半兵衛　一八四
池田仲博　六九
池田藤八郎　一八五
池田龍一　一五一
池田泉哉　一八五
池田成章　一八五
池田順藏　五四
池田菊苗　一八七
池田謙三　七六
池田秋方　一九〇
池田勝吉　一四一
池田覺三　一四一
池田正介　一八七
池田謙齋　一八七
池田明醇　一一四
池田猪三次　一八六
池田蕉園　一〇三
池田常吉　一四一
池田春渚　一一七

池田輝方　一〇二
池田元吉　五五
池口慶三　一四四
池松時和　一四四
池袋秀太郎　一四二
諫早家崇　一四九
石井泰助　九九
石井健吾　九九
石井行昌　一〇〇
石井倶寛　二二
石井虎之助　一五八
石井彦造　一五八
石井隼太　一三八
石井貞之助　一三八
石井菊次郎　一三九
石井秀次郎　一五二
石井省一郎　一三七
石井直　一三七
石井秀八　一四
石井波平　一三九
石井英太郎　六三
石井捨四郎　二九
石井金陵　一六九
石井蘭堂　一二

石居四郎平
石原健三
石原菊太郎
石原毛登馬
石原卯八
石原光三
石原耕太郎
石原泰一郎
石原彦太郎
石原平左衛門
石橋雲來
石橋知全
石橋裏
石橋甲子郎
石橋健藏
石橋爲之助
石橋友吉
石走房司
石堂次三郎
石渡繁胤
石渡邦之丞
石渡敏一
石割作右衛門
石川半右衛門

石川柳城　五五
石川千代松　一三九
石川光明　一三九
石川賢治　一三二
石川茂兵衛　一三九
石川石代　一三一
石川甚作　六二
石川重之　九八
石川彌七　三九
石川重玄　二八
石川信　九八
石川倶寛　一〇四
石川房次郎　三六
石川逸翁　七六
石川勝信　一三二
石川長右衛門　一三二
石川蕉玉　一三二
石川德右衛門　一三二
石川坤堂　二八
石川廸歌　五九
石川寅次　七五
石川元次郎　七五
石川照勤　一三三
石河光熙　一六〇
石河幹明　六一

石垣政平　五九
石田友太郎　一三三
石田佐太郎　四六
石田八彌　一三四
石田仁太郎　一三四
石田平吉　五五
石田謙堂　一三五
石田龜太郎　九九
石田當七　一〇四
石田音吉　一〇四
石田彦兵衛　一五三
石田保謙　六〇
石田忘軒　一〇
石田萬兵衛　一四八
石田亦一郎　一二九
石田安兵衛　一五九
石田吉左衛門　一三五
石田啓太郎　一四七
石田林太郎　八八
石田喜兵衛　四〇
石田梅窓　三〇
石田孝吉　一二九
石田熊三郎　一二八
石田光廣　一三四

石田政次郎 一五
石谷傳四郎 一〇四
石塚六三郎 六六
石塚新吾 一六一
石塚金助 一五八
石塚讓 一五八
石塚市太郎 一四四
石氏兵作 一二三
石野龍山 一二六
石野基道 一〇四
石野香南 四〇
石黒忠惠 一二四
石黒宇宙治 五九
石黒五十二 一二五
石黒涵一郎 一五九
石黒玄石 三五
石山彌平 五三
石函儀市 一〇四
石山逸八 五九
石丸重美 六七
石間英太郎 二〇四
石郷岡文吉 六四
石河有鄰 六四
石崎勝藏 八五
石崎平八郎 六九
石崎政藏 一二〇
石坂惟寛 六〇
石坂新太郎 二七
石坂莊作 三〇
石坂專之助 一二七
石坂清四郎 一二四
石島古城 五〇
石本秋園 二四六
印度胤一 一一五

ろ之部

盧朗 一一
六角英通 一二
六條有熙 一二
六鄕政賢 一二
六鹿清治 一二
六島發三郎 一二
六所國四郎 一二

は之部

羽田子雲 三〇
羽田月泉 六一
羽多嘉吉郎 一八
羽根田彌一 四九
羽倉光表 三一
波々伯部金洲 一〇
波多野承五郎 二五
波多野貞之助 三一
波多野毅 三三
芳賀矢一 五六
芳賀權四郎 三二
芳我彌三郎 三三
堺和爲昌 四二
葉住利藏 六八
馬場金助 二一
馬場三郎 二四
馬場善兵衛 二一
馬場粂次郎 二六
馬場德次郎 四六
馬場藤八郎 二六
馬場愿治 七一
馬場道久 七〇
馬場龜久生 六八
馬場達慶 四九
馬淵重太郎 二八
馬嶋香春 六
馬島杏雨 二九
馬澄文洲 六四
榛葉藤兵衛 三〇
鳩山一郎 七二
鳩山春子 六九
蜂須賀茂韶 六九
蜂須賀光次郎 一二
蜂谷宗致 六二
春山泰治 六三
春木一郎 七〇
春木南溪 六三
袴田喜四郎 一八
秦實英 六〇
秦猪之助 三八
秦佐八郎 六〇
秦武八 二四
秦銀兵衛 六〇
秦辨實 四
秦藏六 七四
秦包道 四一
畑隆太郎 七
畑仙齡 三一
畑德三郎 七五
畠中卓爾 四九
畠中良助 四四
畠山伯洲 六
畠山小兵衛 六〇
八田謹二郎 三四
端善次郎 七四
端館紫川 一一
初見敬二郎 五九
初瀨浪子 三六
服部與兵衛 四一
服部兼三郎 三五
服部於兎三郎 三五
服部幾太郎 三五
服部平兵衛 三五
服部孝太郎 三七
服部鹿次郎 三八
服部新助 三八
服部邦彦 三七
服部兵助 四二
服部與右衛門 四三
服部金太郎 四四
服部一三 二六
服部宇之吉 四三
服部鎮三郎 三七
服部太助 三七
服部海治郎 三七
服部嘉十郎 二一
服部小十郎 六〇
服部綾雄 三四
服部彌吉 七四
服部勤 一一
服部耕石 五九
服部松次郎 三六
服部每次 四一
花井抱甕 四一
花井卓藏 三五
花井畠三郎 三五
花岡敏夫 三五
花岡次邸 三七
花田元直 三七
花田義方 三八
花村久壽次郎 三七
花村覺三郎 四二
花柳芳壽 四三
花柳壽輔 四四
花柳壽賀 二六
花屋庵鼎村 四三
花房古堂 三七
花房義質 三七
花嶋兵右衛門 三七
花本聽秋 二一
華園澤稱 二二
原幸治郎 六八
原菊太 七三
原寶員 六五
原吉郎 六三
原眞一 一四
原富太郎 四四
原保太郎 二七
原敬 三九
原大三郎 四〇
原嘉道 三三
原義成 四〇
原在泉 六〇
原龍太 五九
原亮一郎 二四
原亮三郎 三三
原六郎 五七
原志免太郎 六二
原宏平 五八
原耕太郎 七一
原伊代次 二八
原國光 四五
原田虎太郎 四六
原田勝右衛門 七二
原田助 四六
原田桂 二八
原田赳城 二九
原田勘七郎 三〇
原田萬平 二六
原田十衛 二六
原田勝三郎 三五
原田西湖 三五
原口兼濟 四七
原口要 四三
原本大三郎 四二
早川龍介 三八
早川千吉郎 七四
早川周造 四二
早川昇策 六七
早川權次郎 六七
早川鐵治 六八
早川佐七 一七
早川政廣 五〇
早川幸助 五一
早川尙古齋 五七
早川宗壽 六四
早崎源吾 一三
早速鎭藏 一二

早瀨和平次　一六
速水健治郎　四〇
水次郎　林長次郎　四七
林彦一　林雲軒　七一
林權助　林田龜太郎　五六
林鐵太郎　林田勇夫　四七
林策一郎　林田守隆　四八
林曄　濱平右衛門　四七
林健　濱玉園　二七
林董　濱岡光哲　五三
林有造　濱尾新　三八
林寛一郎　濱田玄達　一八
林千八　濱田藤治郎　五四
林精一　濱田國松　三四
林爲次郎　濱田恒之助　四二
林小參　濱田天僊　一三
林源吾　濱田如洗　一〇
林春海　濱口儀兵衛　三五
林新助　濱口吉右衛門　四〇
林淳一　濱口雄幸　六四
林公平　濱口吉兵衛　五八
林箴一郎　濱口茂之助　四四
林文塘　濱崎永三郎　六二
林探樂　濱崎健吉　六九
濱本義顯　二五
濱本八治郎　七一
挾間範藏　五六
間杢右衛門　四七
萩原員種　四八
萩原佐吉　四七
萩原彦七　二七
萩原太一郎　五
萩野左門　五三
萩元茂市　五四
橋井善次郎　三四
橋詰又三郎　三四
橋野素山　四二
橋本忠次郎　一三
橋本左五郎　一三
橋本萬右衛門　三五
橋本吉兵衛　四〇
橋本哲　六七
橋本孝　六四
橋本一葉　五八
橋本半兵衛　五八
橋本清　五八
橋本鴻章　六五
橋本喜久三　七五
橋本新一郎　二五
橋本重幸　二三
橋本雄造　二七
橋本省吾　二七
橋本平左衛門　五二
橋本秀實　二六
橋本次六　二〇
橋本太吉　二一
橋本久太郎　三八
橋本安市　一八
橋本善右衛門　七四
橋本一光　五五
橋本培雨　二
橋本清助　四六
橋本吉兵衛　七二
橋本源太郎　七三
橋本正素　三八
橋本島一　四
橋本關雪　六一
橋元正明　三
長谷善之助　五
長谷部理右衛門　三三
長谷川芳之助　一
長谷川觀山　二
長谷川好道　一〇
長谷川平內　七
長谷川利左衛門　五九
長谷川長三郎　三四
長谷川糾七　一五
長谷川喬　一
長谷川吉三郎　七三
長谷川一詮　四九
長谷川宗治　五〇
長谷川直藏　二
長谷川吉內　二
長谷川彌兵衛　二
長谷川熊吉　四四
長谷川豐熊　五五
長谷川清七　六九
長谷川調七　五六
長谷川平七　五二
長谷川丑之助　五二
長谷川如隱　七一
長谷川龜一郎　六四
長谷川庄藏　一六
半田平次郎　三九
範多龍太郎　七三
長谷場純孝　七二
伴傳兵衛　二五
伴政埠　六
伴一邦　三四
般若庄三郎　三四
阪正臣　一五
阪東秀調　一
坂東百々代　七三
坂東三津五郎　四九
坂東安一　五〇
坂東三佐菊　二
坂東三喜代　二
坂東琴榮　二
梅月庵光壽　四四
塙忠雄　五五
迫間房次郎　六九
播本孝良　五六
幡山敎圓　五二

に之部

仁井田益太郎　六四
仁保龜松　一六
仁尾惟茂　三九
仁木傳吉　七三
仁科亭作　七二
丹羽長德　九
丹羽圭介　一四
丹羽忠兵衛　六一
丹羽藤吉郎　六二
丹羽宗助　六九
丹羽豐之助　五四
丹羽氏厚　一七
丹羽海鶴　三七
丹尾賴馬　一六
二階堂三郎左衛門　七〇
二宮鈴策　六三
二宮景輔　六七
二宮忠八　五九
二宮孝順　五〇
二宮辰一郎　五八
二宮虎三郎　二三
二宮彦一　二六
二條正麿　六二
二條基弘　一八
新渡戸稻造　一九
新原敏三　二一
新田邦貞　一
新田定五郎　四
新田忠純　一二
新田長次郎　一三
新妻駒五郎　一四
新野米太郎　一九
新津一郎　一二
新家實次郎　一五
新島一郎　二七
新元鹿之助　一七
新關善八　一六
庭田重行　三六
庭山耕園　一六
若王寺文健　一四
實美新十郎　一三
西豐吉郎　一一
西大助　一〇
西紳六郎　一〇
西寬二郎　一九
西英太郎　五
西彦兵衛　一七
西靖民　一八
西孝太郎　一九
西源四郎　二二
西正豐　二二
西德次郎　四
西五辻文仲　一〇

西原猪太郎 一三
西原善平 二四
西堀刀水 一七
西堀清兵衛 二三
西洞院信意 二三
西尾竹次郎 二四
西尾宗七 二四
西尾忠篤 二四
西尾柳右衛門 二四
西尾豊太 二三
西岡壽一郎 二五
西岡德助 二五
西岡道助 二五
西大路吉光 二四
西脇吳石 三五
西脇寛藏 二六
西脇新次郎 二五
西脇濟三郎 二五
西脇吉右衛門 二五
西脇儀兵衛 二八
西川庄六 一
西川庄之助 二八
西川甚五郎 二八
西川春洞 二七
西川虎之助 二七
西川武左衛門 二七
西川林一郎 二七
西川喜八 二八
西川増次郎 二八
西川正兵衛 二八
西川 春 二八
西川孫一郎 二八
西川庄五郎 二八
西川幸兵衛 二八
西川孫兵衛 二八
西川忠亮 二八
西川宗兵衛 二八
西川庄吉 二八
西川嘉右衛門 二八
西川虎次郎 二八
西川鐵次郎 二八
西川義方 二八
西川桃嶺 二八
西川清重 二八
西川太治郎 三六
西川増五郎 三八
西田敬正 二九
西田嘉兵衛 二七
西田儀三郎 二七
西田音吉 二七
西田彌兵衛 二八
西田正美 二八
西田利七 二八
西田竹雪 二八
西田雲蛭 二八
西高辻信稚 二八
西谷金嶽 二八
西谷末吉 二八
西谷常太郎 二八
西成新右衛門 二八
西成龍堂 二八
西宗元次郎 二八
西村德三郎 二八
西村小市 二八
西村光次 二八
西村與兵衛 二八
西村重郎兵衛 二八
西村繁之助 二八
西村精一 二八
西村喜三郎 二八
西村陸奥夫 二九
西村丹次郎 二九
西村吉右衛門 二九
西村和平 二九
西村熊太郎 二九
西村勘兵衛 二九
西村孫兵衛 二九
西村亮吉 二九
西村健次郎 二九
西村準三郎 二九
西村禮作 二九
西村忠吉 二九
西村彦兵衛 二九
西村榮次郎 二九
西村仁兵衛 二九
西村金三郎 二九
西村五雲 二九
西村秀岳 二九
西村總左衛門 二九
西野謙四郎 二九
西野仁兵衛 二九
西野嘉右衛門 二九
西野市兵衛 二九
西野惠之助 二九
西久保弘道 二九

西山彰 六
西山眞平 六
西山翠嶂 一六
西卷稻村 五
西九簡 八
西澤定吉 三八
西澤吉郎 三九
西澤定七 三九
西澤治作 一一
西澤仙湖 八
西澤半助 三九
西澤房太郎 三九
西澤喜太郎 三九
西澤平八 三九
西澤讓太郎 三七
西澤善七 三九
西崎弘太郎 三八
西崎半右衛門 三八
西三條實義 三八
西島忠次郎 三六
西島助義 三八
西島青浦 九
西森源兵衛 一七
西本茂吉 四
西元保太郎 六
西錦濱 六
西錦戸右門 一六
西錦織榮久 五
西錦織愚翁 八
西錦小路在明 三八

ほ之部

穗田吉郎右衛門 一一
穗積陳重 八
穗積重顯 三九
穗積金兵衛 三九
穗積久左衛門 三九
帆足俊作 三九
帆足隼太郎 三九
保阪政治郎 三八
保阪潤治 三八
保阪誠一 三八
保阪靜導 三八
保阪祐以 三六
保志虎吉 三八
保科正昭 九
保科孝一 一七
保科倍之 四
程原誠一 三七
堀百千 七
堀雄太郎 一九
堀秀孝 二一
堀英之助 九
堀興義 二一
堀眞 二一
堀正一 二六
堀正太郎 一六
堀達 一一
堀啓次郎 三三
堀藤十郎 三三
堀豊彦 三四
堀基 二九
堀米吉 二九
堀謙治郎 二一
堀鉞之亟 二八
堀榮一 二八
堀榮助 二六
堀雲岳 二八
堀甚七 二八
堀晓中 二七
堀井巳之助 二八
堀井松之助 二二
堀池彌太郎 二三
堀部德之亟 二四
堀部彦次郎 二五
堀尾茂助 九
堀岡眞一 二四
堀川長兵衛 二六
堀川勘吾 二七
堀河護摩 二六
堀田連太郎 二七
堀田康人 三一
堀田玉舟 三二
堀田正路 二八
堀田正倫 二七
堀田善右衛門 三〇
堀田鐵三郎 二一
堀田金四郎 三一
堀田有德 二一
堀田正養 二八
堀田藤吉 三三
堀田松堂 二一
堀谷左次郎 二四
堀内庄作 一〇
堀内茂右衛門 一六
堀内啓治 四

堀内鶴雄 一七
堀内伊太郎 一八
堀内調右衛門 一七
堀内壽太郎 一七
堀内次雄 六
堀内半三郎 一九
堀内源太郎 一九
堀内賢郎 二三
堀口仲七 一六
堀口兵助 一五
堀越龍湖 二五
堀越善重郎 一五
堀越勘治 一五
堀江三郎 一九
堀澤安雄 一八
堀木忠良 一九
堀切紋次郎 一四
放牛舍桃林 三一
法橋善作 一七
甫喜山藤太郎 一六
細井岩彌 一四
細井種生 三
細井榮三郎 三〇
細川潤次郎 一三
細川風谷 八
細川立興 一二
細川直行 一三
細川利文 一二
細川義昌 三〇
細川護成 三三
細田安兵衛 一四
細谷資氏 八
細谷巖太郎 八
細谷嶺湖 二六
細溪宗次郎 七
細野次郎 八
細木松之介 六
發智庄平 二一
蓬萊林太郎 二一
北條時敬 一〇
北條氏恭 一二
星一 五
星陸谷 二
星武兵衛 一五
星加彦太郎 四
星野定光 三
星野錫 二
星野恒 七
星野源左衛門 八
星野男三郎 一二
星野行則 一三
星野湖一郎 一二
星島謹一郎 三〇
本方秀麟 三三
本多靜六 一四
本多忠夫 八
本多督二 八
本多正澄 二六
本多康穣 七
本多西男 八
本多敏明 六
本多岩次郎 二一
本多庸一 二一
本多精二 一〇
本多副元 一二
本多政以 五
本多一太郎 二
本多道純 一五
本多忠鋒 四
本多天城 二
本多留吉 五
本多長平 七
本多善四郎 四
本多有知 五
本田恒之 一〇
本田伊平 三七
本田幸介 三八
本田退菴 二七
本田光吉 三五
本間金之助 三六
本間儀兵衛 三六
本間新作 三五
本間千代吉 三八
本間光彌 三四
本間常吉 三七
本郷房太郎 三四
本鄕嘉之助 三四
本庄幸三郎 三六
本庄壽巨 三二
本庄宗義 三四
本城清彦 二〇
戸次兵吉 一一
鹽宮谷清平 一一
紅谷四郎平 二

別府藤馬 二
別府探風 三
別所靜堂 二
別所彰善 二
兵頭雅譽 二
兵頭昌隆 三
兵頭通孝 三
逸見仲三郎 一

と之部

土居通豫 一
土居通夫 二
土居通憲 二
土居伊太郎 三
土居嶺三郎 二四
土居通博 二一
土井市兵衛 七
土井利剛 七
土井八郎兵衛 八
土井きり 一五
土井直次 一八
土井重吉 二五
土井利與 一九
土井助三郎 三二
土井艮四郎 四四
土倉實太郎 三
土岐頼知 八
土岐月章 三八
土肥喜代松 二九
土肥甫 三
土肥宗貞 三
土肥慶藏 九
土肥幸七 九
土肥修策 一〇
土斐崎三右衛門 一
戸井嘉作 二一
戸井田平兵衛 二二
戸部重吉 二二
戸尾善右衛門 二四
戸狩權之助 二一
戸上駒之助 七
戸田敬一郎 七
戸田氏懿 八
戸田宗見 一五
戸田忠行 一八
戸田氏共 二五
戸田忠友 一九
戸田猶七 三二
戸田與惣兵衛 四四
戸田康保 二
戸田鋭之助 八
戸田彌七 三八
戸田宇八 二九
戸塚環海 八
戸塚利作 三七
戸塚吉太郎 九
戸村榮三郎 九
戸崎德二 九
戸水寛人 一〇
登内景淵 二一
外村定次郎 二一
外村市郎兵衛 二一
外村宇兵衛 二一
外村與左衛門 一四
外山脩造 一六
外山彌助 五
外山芳太郎 六
外松孫太郎 六
富田幸次郎 一〇
富田元資 一六
富田等平 二六
富田重助 二二
富田八郎 二〇
富田富太郎 二三
富田傳次郎 二〇
富田友太郎 二三
富井章政 八
富羽政吉 二九
富樫景堂 三一
富樫文次 一九
富岡俊次郎 九
富岡宣永 五〇
富岡百錬 三八
富岡仲次郎 四二
富川喜平 五〇
富川芳太郎 四九
富田秋香 三五
富田鶴吉 一〇
富田鶴重 一〇
富田忠詮 一八
富田鐵之助 三五
富田鶴亨 一〇
富田鐵之助 二一
富田元資 一九
富田等平 一九
富田重助 二一
富田八郎 二〇
富田富太郎 二三
富田傳次郎 二〇
富田友太郎 二三

富田半兵衛 四一
富田溪仙 二八
富谷銑太郎 一一
富永忠次郎 二七
富永杜發 四一
富永久吉 六
富倉林藏 六
富安保太郎 一二
富安猪三郎 一二
富安重行 一三
富阪與八 一二
富島暢夫 一九
利根川守三郎 一五
利光平夫 一六
融　等畔 一八
遠田注 一六
遠山椿吉 二三
遠山市郎兵衛 二三
遠山正綱 四八
遠山景澄 三一
遠山恰 三四
鳥居清忠 三〇
鳥居忠文 四八
鳥居春洋 四九
鳥居德兵衛 四一
鳥居成功 二八
鳥井庄右衛門 一一
鳥羽きん 二七
鳥山虎也太 四一
鳥谷市兵衛 六
鳥谷幡山 六
鳥越貞敏 一二
鳥越密三郎 一二
東郷平八郎 一三
東郷八郎左衛門 一二
東郷　安 一九
東郷俊造 一五
東條英敎 一六
東條良平 一八
東條一郎 一六
東門五兵衛 二三
東川舍旭齋 四八
藤　利勉 三一
藤堂高寛 三四
藤堂高紹 三〇
藤堂衛 四八
頭山滿 四九
道源權治 五一
道明新兵衛 三九
豐原清作 五〇
豐原基臣 五一
豐原瑞雨 五〇
豐川良平 四五
豐田宗無 二〇
豐田福太郎 三
豐田笠洲 四
豐田實穎 一二
豐田宇右衛門 四三
豐田幸延 四二
豐田善右衛門 二七
豐田富藏 四〇
豐竹古馹太夫 四三
豐竹吾妻太夫 四五
豐竹呂昇 四七
豐永眞里 三六
豐永七藏 四六
豐增龍次郎 四六
豐福泰造 四五
豐澤一柳 四八
豐澤國造 四七
豐澤廣助 二六
豐島文治郎 三九
豐島久七 四二
豐島彦三郎 二〇
豐島正方 七
殿村平右衛門 三一
殿岡宗平 二
殿木市太郎 四
德富體平 二四
德富猪一郎 二四
德川家達 二七
德川賴倫 三四
德川達孝 三六
德川圓順 三七
德川義親 四七
德川逸道 二五
德川厚 四八
德川慶喜 三〇
德田正稔 四六
德田良一郎 三七
德田讓市 七
德田孝平 三七
德大寺實則 四〇
德永耕村 三六
德丸友熊 二九

德久恒範 三二
得能通昌 三三
床次竹二郎 三〇
時重初熊 三一
常磐井堯淵 三二
常盤津文字理喜 三四
常盤津豐藏 七
飛岡卯一郎 三二
仲野乙彌 三二
友田安清 四四
友綱貞太郎 五一
友常毅三郎 三四
朝永正三 三三

ち之部

千葉胤明 一
千葉松兵衛 四
千葉稔次郎 四
千葉秀甫 五
千葉貞幹 三
千葉彌次馬 四
千原興一 六
千早正二郎 八
千々岩英一 六
千代田長次郎 五
千賀浦藤吉 三
千頭清臣 一〇
千村定吉 二
千草安兵衛 三
千藤安次郎 六
千阪彦四郎 五
千澤專助 七
千本福隆 二
茅原白堂 八
血脇守之助 九
知念堅輝 二
治村信太郎 一〇
治野根好光 三
持明院基哲 二
近岡九郎平 九
中院通規 八
中馬興丸 二
中條久兵衛 八
長　霞 三
長　晴登 四
長　英生 六
張　達源 八
珍田捨巳 六
陳江流 五
陳松標 六
陳鎮印 四
陳雕龍 六
陳大珍 七
陳萬邦 六
陳信齋 五
陳野義三郎 七
陳内物三郎 八
陣山律藏 二

り之部

李春生 三
李景盛 一〇
李欽 二
李家隆介 九
李家政太 八
龍神雪山 二
林仁通 八
林寛敏 五
林階堂 三
林歩雲 三
林霽川 九

ぬ之部

布井良之助 一
沼尾權次郎 四
沼田重助 二
沼田政二郎 八
沼田榮太郎 五
沼田三五郎 七
沼田靜治 九
沼波定一 二
沼間敏朝 七

を(お)之部

小幡文三郎 一
小幡範藏 二
小畑種吉 三
小畑駒三 四
小原正恒 四
小原右馬允 五
小原睦吉 五
小原久兵衛 四
小原芳次郎 三
小原達明 二
小尾勘三郎 四

小川梅三郎　二〇
小川源次郎　二一
小川雄次郎　二一
小川琢治　二一
小川爲次郎　二二
小川勝三郎　二二
小川直太郎　二三
小川市太郎　二三
小川平助　二三
小川伊右衛門　一八
小川長右衛門　一九
小川平助　二三
小川平吉　一九
小川專之助　四
小川專助　六九
小川照　七六
小川治兵衛　九七
小川重浪　一一五
小川劔三郎　一五三
小川德右衛門　一一
小川正孝　七九
小川鉛吉　八〇
小川逸峰　九九
小川一眞　一五四

小河源一
小河滋次郎
小笠原安右衛門
小笠原榮治郎
小笠原勇藏
小笠原長生
小田夢洲
小田楳太郎
小田柿捨次郎
小田切萬壽之助
小田切忠四郎
小田切彌兵衛
小田切磐太郎
小田島佐市
小谷佐兵衛
小谷榮次郎
小竹祿之助
小曾根喜一郎
小野素文
小野亮廣
小野道平
小野春陵
小野鷺堂

小野利右衛門　四六
小野鶩光　二九
小野友次郎　三〇
小野慶藏　二八
小野光景　二九
小野榮左衛門　三〇
小野金六　一三八
小野田元熙　二八
小野田政次郎　二八
小野塚喜平次　二七
小野澤東江　二八
小栗三郎　二八
小栗慶次郎　二八
小栗貞雄　一二八
小倉庄太郎　六八
小倉久兵衛　七〇
小倉穀豊　一〇七
小倉金作　二六
小倉雅　七七
小倉梅之進　一三六
小柳津要人　一〇八
小山田信藏　一一五
小澤綠筠　三二
小澤溫吉　六

小澤武雄　二四
小澤七兵衛　二四
小澤衡平　二五
小澤吉之助　八〇
小笹末次郎　八二
小笹亮　一二八
小喜多盛藏　八二
小鹽寛藏　三六
尾池松太郎　三三
尾形德兵衛　三五
尾形月三　一〇三
尾形月耕　一二一
尾形雲察　三五
尾高次郎　三三
尾竹竹坡　三二
尾竹國觀　三二
尾仲百太郎　三二
尾上榮三郎　一三一
尾上榮吉　一七
尾上菊五郎　六一
尾上松助　三一
尾上梅幸　六八
尾上清兵衛　三三
尾阪駒次郎　四七

小野權四郎　四

尾崎雪翁　一二七
尾崎伊兵衛　七三
尾崎浪音　二六
尾崎行雄　六六
尾崎作次郎　五七
尾崎房太郎　三七
尾關利太郎　八三
玉慶忠　一二六
玉慶超　八
玉雪農　九
緒方正規　四〇
緒方收次郎　三九
緒方道平　三八
緒方銈次郎　四三
緒方正清　一三〇
織田惠秀　一一三
織田萬　四二
織田一　四三
織田杏齋　四四
織部次右衛門　四〇
乙宗源次郎　四三
落合幸作　四〇
落合牛太郎　四一
落合豐三郎　四一

落合宗不　一二四
越智政吉　九八
越智霞舉　五一
越智寅一　一二四
折原巳一郎　一一一
折田彥市　一四一
折田兼至　六五
大井九八郎　一二三
大井才太郎　一一八
大石正巳　一
大石和三郎　五一
大石太郎　七七
大場秀吉　一三二
大場道一　五三
大場長平　一五
大場利八　一〇六
大庭竹四郎　五一
大庭二郎　七一
大原信久　六三
大原直次郎　一二
大原慶一　一〇四
大原重右衛門　一五一
大原四郎　一三九
大原重朝　一一五

大林芳五郎　二一
大林利平　八七
大濱忠三郎　一四七
大橋正太郎　三
大橋省吾　一一三
大橋曾岸　一一四
大橋雅彥　五
大橋翠石　四九
大橋日曩　四五
大橋房太郎　一三一
大橋香陵　一三一
大橋鐵三郎　六
大橋清吉　一四七
大橋賴模　三五
大橋新太郎　四八
大西克知　四〇
大西甚一平　五二
大西榮輔　四九
大西勇齋　一三二
大西五一郎　四六
大西雄次郎　四七
大西金陽　四七
大西道生　五四
大西武雄　四七

大西能吉　六六
大西秀太　九五
大西虎吉　四六
大洞彌兵衛　四九
大戸蘭運　一二三
大智勝觀　四九
大池忠助　八四
大沼南圃　一二三
大岡育造　一一八
大和田莊七　一
大脇康直　一一八
大脇義宜　五一
大萱直市　五三
大上伊代　一五
大垣昌訓　一六
大川大造　一〇六
大川平三郎　一五
大河原淺吉　五一
大河內輝耕　七一
大河平武二　一二
大田寬　一〇四
大田益三　一五一
大田瀧熊　一三九
大田原一清　一一五

大田黒重五郎 一一三
大谷嘉兵衛 一一二
大谷五平 一二
大谷靖 一三
大谷光演 五三
大谷光瑞 五三
大谷吟右衛門 五三
大谷光瑩 五四
大谷市造 一六
大谷藤七 一四八
大谷龍吉 六四
大竹温 一〇三
大竹敬助 五二
大竹貫一 五四
大竹福司 五三
大瀧源藏 六〇
大瀧傳十郎 五二
大園清太郎 四六
大津淳一郎 一一五
大坪正義 三七
大坪嘉太郎 一〇
大坪正慣 一三七
大坪與一 四
大塚春嶺 八一
大塚榮三郎 八三
大塚金三郎 一一二
大塚惟明 一二
大塚益郎 一三
大塚彌市郎 五三
大塚久右衛門 五三
大塚金兵衛 五三
大塚要 五四
大塚保治 一六
大槻龍治 一四八
大槻懋 六四
大槻久仁 一〇三
大辻久一郎 五二
大縄久雄 五四
大村五左衛門 五三
大村純雄 六〇
大村勵 五二
大村岳陽 四六
大村彥太郎 一一五
大村西厓 三七
大海原尙義 一〇
大内暢三 一三七
大浦貞次郎 四
大浦五郎兵衛 八一
大浦兼武 八三
大野德孝 三〇
大野龜三郎 五五
大野靜方 五五
大野茂吉 五九
大野市太郎 五九
大野傳兵衛 五九
大野久次 六〇
大野善太郎 一〇
大野賢一郎 五九
大野源呂久 五九
大野洞吉 一五三
大久保端造 一〇三
大久保源兵衛 五七
大久保源吾 五五
大久保忠順 五六
大久保鐵作 五六
大久保利和 三七
大久保立 一三〇
大久保逸堂 一三〇
大久保利武 九五
大久保直道 一三一
大久保北隱 六七
大久保平藏 一七
大久保雅彥 一三三
大久保德明 一五〇
大久保辨太郎 一五一
大藏伊平二 九四
大倉彖馬 八五
大倉孫兵衛 七
大倉喜三郎 一一七
大倉鈕藏 六一
大倉喜八郎 六三
大口喜六 六四
大國眞太郎 一〇五
大熊三之助 一〇
大熊百太郎 一一
大熊氏廣 八
大隈重信 一一
大串龍太郎 一一六
大串勝次 一一二
大矢米年 九
大矢勘之助 八四
大矢馬太郎 一一八
大矢慶治 一一七
大屋權平 一三四
大家七平 七八
大山辰二 三八
大山岩次郎 六〇
大山巖 一五
大八木也香 一四二
大八木桂月 三六
大八木春曉 七二
大前光太郎 五三
大町桂月 一四一
大藤忠兵衛 七八
大藤高彥 九五
大淵卯之助 一四四
大江敬香 七一
大江幾太郎 四二
大江榮人 一四四
大澤善助 四九
大澤眞吉 六八
大澤岳太郎 四四
大澤福太郎 一七
大澤省三 九
大澤辰次郎 九六
大澤謙二 一四五
大坂金助 九五
大崎敬方 九三
大木口哲 九三
大木遠吉 一二五
大木喬命 九一
大木宗保 一四二
大喜多三郎 三六
大喜多寅之助 七二
大木戸森右衛門 五三
大三輪奈良太郎 一四一
大島義昌 七八
大島六郎 九五
大島要三 一四四
大島小太郎 七一
大島道太郎 四二
大島爲足 一四四
大島如雲 四九
大島君川 六八
大島甲子郎 四四
大島正健 一七
大島義修 九
大東延慶 九六
大平七左衛門 一四五
大森賴三 一四五
大森喜作 九五
大森房吉 九三
大森金五郎 九三
大森慶次郎 一二五
大森孝次郎 九三
大森鐘一 九三
大本吾平 二四
大瀨甚太郎 一一六
大洲鐵也 九二
大住喜右衛門 一二四
太田米所 一二四
太田重助 一二一
太田六癡 三九
太田仙次郎 二〇
太田宗七郎 二八
太田小三郎 七四
太田久左衛門 一二一
太田清平 一三四
太田信義 一四六
太田清藏 七二
太田佐兵衛 九〇
太田與兵衛 一四三
太田峰三郎 一二三
太田保太郎 一二三
岡與兵衛 一二四
岡岩太郎 一二四
岡實 八一
岡實康 一一八
岡玄卿 一四六
岡不崩 七五
岡烈 一四六
岡喜七郎 一〇七
岡胤信 八三
丘淺次郎 九八
岡覺彌 一四七
岡部香徹 五
岡部忠太郎 二七
岡部菊太郎 四一
岡部爲作 一三九
岡部眞五 一〇〇
岡部長職 一〇二
岡田治衛武 一三四
岡田磯八 一〇一
岡田太平治 一〇五
岡田泰藏 九八
岡田良平 一四三
岡田朝太郎 七八
岡田來吉 一二〇
岡田和一郎 一二六

岡田櫻村　二
岡田今吉　一五四
岡田秋湖　五
岡田播陽　一四
岡田梅壑　二九
岡田蘇水　三五
岡田雪峨　四五
岡田貫之　四八
岡田磐　四九
岡田紫郊　五一
岡田松雲　七九
岡田定治郎　一一〇
岡田米吉　七九
岡田德右衛門　一三九
岡田華蓋　一四一
岡田紫山　九一
岡田恒太　一三八
岡村竹四郎　一〇六
岡村輝彦　一〇八
岡村靜彦　一〇九
岡村龍彦　八六
岡村僕園　八五
岡村節雄　九
岡村喜萬太　九
岡村司　二
岡野悌二　一五四
岡野是保　一四
岡野利兵衛　二九
岡野敬次郎　三五
岡野喜太郎　四五
岡倉由三郎　四八
岡倉覺三　四九
岡倉秋水　五一
岡谷雪圭　七九
岡谷惣助　一一〇
岡山高蔭　七九
岡安與志枝子　一三九
岡安喜代勢　一四一
岡安登代　九一
岡安喜佐久　一三八
岡松參太郎　一〇六
岡崎佐次郎　一〇八
岡崎增太郎　一〇九
岡崎藤三郎　八六
岡崎和助　八五
岡崎末二　九
岡崎唯雄　九
岡崎邦輔　一六
岡崎運兵衛　一一三
岡崎平四郎　五五
岡崎九平　八
岡崎賢次　一一六
岡崎正也　一一〇
岡崎義香　一二五
岡崎雪聲　一二四
島廓然　一二六
島卯三郎　一三五
岡本椿所　三九
岡本左市　一二四
岡本可亭　六二
岡本丘郎　一四四
岡本春湖　一四七
岡本梅壽軒　七三
岡本重威　五八
岡本高介　九四
岡本萬四郎　九六
岡本鶴治　八七
岡本伊之助　一三七
岡本正喜　七一
岡本清右衛門　一〇九
岡本治助　七
岡本梁松　一一二
岡本定政　八六
岡本貞德　九四
岡本儀兵衛　九四
岡本善右衛門　九五
岡本清三　九六
岡本武次　六七
岡本忠藏　三四
岡本芳二郎　二五
岡本太右衛門　一〇〇
近江時五郎　一一四
奥保羣　八六
奥繁三郎　一二九
奥健藏　一四九
奥原晴翠　一三二
奥西節三　九〇
奥田芳彦　一五
奥田富太郎　一二二
奥田常右衛門　八〇
奥田大和　一五
奥田鎌吉　五八
奥田義人　五六
奥田正香　五四
奥田榮之進　八
奥田柳藏　一一一
奥谷秋石　七七
奥村芳外　一〇一
奥村吉次郎　九八
奥村孝軒　七四
奥村銈次郎　二五
奥村石亭　二六
奥村哲次郎　一二
奥村元佶　一四三
奥村則英　六四
奥村安太郎　六四
奥村榮滋　三
奥野政太郎　六七
奥山一十郎　一〇六
奥山中書　一二〇
奥山源太郎　六五
奥山政敬　六五
奥藤研造　一四三
奥澤禮次郎　七一
生出大癖　一五〇
奥津磐　一〇八
沖一誠　一一
荻野一水　八一
荻野萬太郎　七七
荻野萬之助　一一一
荻生天泉　七七
荻生錄造　一〇一
荻尾九皐　九八
長霞外　七四
長田規矩太郎　二五
長田種藏　二六
鹽置藤四郎　一二
押川則吉　一四三
押小路師保　六四
恩田鐵彌　六四
恩田得壽　三

わ之部

和田榮太郎　一二〇
和田又藏　六五
和田常市　六五
和田耕　一四三
和田東岳　七一
和田伊三郎　一五〇
和田彦次郎　一〇八
和田半兵衛　一一
和田尊義　八一
和田國次郎　七七
和田維四郎　一四四
和田垣謙三　一二五
和達陽太郎　一〇一
和波鑛太郎　一一九
和氣定慶　三三
和島源次郎　一一
若井道義　一四三
若林宗祐　八五
若林與左衛門　七〇
若林儀助　一三八
若林元之助　一三八
若林香三郎　一二九
若林元四郎　
若林忠之助　
若宗祐　一三
若原敬經　三
若尾逸平　一
若尾民造　八
若槻禮次郎　一六
若槻直作　一〇
若榮福朗　三〇
若柳壽堂　三一
若江六兵衛　三一
苦宮正響　一
綿谷平兵衛　四
綿引東海　一九
渡邊敬三郎　一一
渡邊晃南　一五
渡邊勘十郎　三一
渡邊正清　一一
渡邊泰　八
渡邊秋溪　五
渡邊昭　一九
渡邊沙鷗　一八
渡邊博剛　二二
渡邊晨峠　二五
渡邊鐵香　一四
渡邊網吉　一七
渡邊雪峰　三三
渡邊蓉溪　三〇
渡邊白民　三一
渡邊省亭　二七
渡邊祐策　八
渡邊千代次　六
渡邊虛舟　二
渡邊公觀　六

渡邊純一郎 二三
渡邊湖月 二九
渡邊綱 一九
渡邊松湖 一五
渡邊香年 一四
渡邊大治郎 一六
渡邊信四郎 一六
渡邊萬介 一五
渡邊熊四郎 二三
渡邊讓 一四
渡邊三左衛門 一三
渡邊文七 一三
渡邊福三郎 二一
渡邊甚吉 二〇
渡邊勝三郎 一三
渡邊芳一 二三
渡邊倚 二〇
渡邊對三 一九
渡邊國武 一八
渡邊修 一七
渡邊治右衛門 一九
渡邊 渡 三〇
渡邊嘉一 九
渡邊和久太郎 一二

渡邊千多 二三
渡邊千秋 二九
渡邊藤吉 一九
渡邊千代三郎 一五
渡邊融 一四
渡邊六藏 一六
渡邊亨 一六
渡邊寅藏 一五
渡邊伊之助 二三
渡邊至 一四
渡邊審也 一三
渡邊政禮 一三
渡瀨寅次郎 二一
渡瀨庄三郎 二〇
涌島長十郎 一三
分部要衛 一三
鷲尾隆聚 二〇
鷲尾長三 一九
鷲田土三郎 一八
鷲塚貞操 一七
鷲見春鄰 一九

か之部

上遠野富之助 九
上和田喜助 一二

上月安重郎 一一
上村長兵衛 三二
上山市郎兵衛 二八
上村彦之亟 二八
上條由兵衛 一〇
上條吉治 七
上條笑月 七
上土峯吉 八
加藤友太郎 五
加藤正惠 六
加藤有年 二
加藤杢左衛門 二六
加藤正義 二四
加藤弘之 二四
加藤昇一郎 二四
加藤彥兵衛 二五
加藤佐兵衛 二五
加藤賢次郎 一五
加藤照麿 一九
加藤泰秋 四
加藤恒忠 九二
加藤宇兵衛 九一
加藤高明 九一
加藤平八郎 八六

加藤八郎右衛門 八五
加藤友三郎 九六
加藤晴比古 一〇六
加藤六藏 九九
加藤英華 四三
加藤天籟 四五
加藤平四郎 四六
加藤其彰 一九
加藤清兵衛 二三
加藤長洲 一二
加藤君鳳 一二
加藤松香 一一〇
加藤義清 一〇九
加藤寅一郎 一〇八
加藤雪洲 九八
加藤英舟 九七
加藤善七 九七
加藤豐吉 九六
加藤仙之助 九六
加藤照麿 九六
加藤榮太郎 九二
加藤政之助 九二
加藤景雲 九一
加藤清太郎 九一
加藤忠四郎 九〇

加藤不二雄 一〇〇
加藤子柏堂 八二
加藤木重敎 一二五
加治英芳 二
加治壽衛吉 一一一
賀川玄吾 三四
賀田金三郎 一一三
加納鐵哉 一一二
加納久宣 一一一
加納鹿之助 一七
加納銈吉 五
加納晴雲 一二
加納三星 四
嘉納治五郎 一二四
嘉納治郎右衛門 六九
加倉井楯夫 一
加島房次郎 七九
加島樵舟 六
加本久助 六四
加瀨禧逸 六六
河井重藏 五
賀茂百樹 七二
河井喜平 七
河井仙郎

河原華月 一八
河原要一 一二
河原融齋 一二
河端貞次 一一
河邊林藏 八六
河邊華攀 一一一
河邊青蘭 八〇
河東碧梧桐 一八
河路重平 七七
河内宗知 二四
河内雅溪 六四
河上英 七七
河田與惣右衛門 八八
河村華亭 一〇五
河村菊枝 一三
河村蜻山 二七
河村虹外 四三
河村善益 五三
河村豐洲 七六
河村讓三郎 七九
河村玉雲 八〇
河村東陽 一〇六
河村秀行 一〇一
河村喜平 六一
河野光泰 三五

河野竹次郎 二二
河野徹志 七七
河野郁太郎 三一
河野政次郎 一一
河野毓雄 一四
河野通好 八六
河野政幹 八〇
河合仁平治 一八
河合德兵衛 七七
河合昌次郎 二四
河合佐兵衛 六四
河合鉋太郎 七七
河合十太郎 六二
河合才治 一三
河合英忠 二七
河相三郎 四三
河崎蘭香 五三
河喜多能達 七六
河島醇 七九
河本重次郎 八〇
河本直一郎 一〇六
河本正次 一〇一
河瀨眞孝 六一
川井爲巳 三五

川端佐七 八五
川端伊之助 一二
川端爲三郎 一二
川端玉章 五九
川原茂輔 三七
川原義太郎 一八
川橋鐵五郎 六一
川畑春翠 二三
川西龜太郎 三七
川西清兵衛 一五
川邊爲三郎 一九
川東利七 二九
川路利藤 三八
川上勝俊 五四
川上直之助 四四
川上泊堂 七一
川上恒好 三〇
川上清 二六
川上白鶴 二七
川上雅晁 六一
川上元次郎 六二
川本正徵 七六
川田正徵 九五
川田敬治 二九

川田鷹　五二
川田龍吉　二八
川村傳三郎　一〇
川村驥山　六五
川村晤竹　九六
川村曼舟　一一四
川村桃吾　三〇
川村曄　二七
川村爲助　二四
川村景明　一六
川口國次郎　一一一
川口吳川　六四
川口權平　四〇
川口木七郎　三六
川口武定　三一
川口虎雄　一〇九
川久保磯太郎　八七
川眞田市太郎　六五
川眞田德三郎　一二八
川越直三郎　八七
川越　進　二〇
川合秀嶺　二一
川合玉堂　一四
川合良男

川合直治　二五
川崎霞峰　九五
川崎金三郎　九三
川崎寛美　八九
川崎榮助　四六
川崎芳太郎　八七
川崎友之助　八七
川崎幾三郎　一六
川喜多忠兵衛　九七
川喜田四郎兵衛　八六
川喜田久太夫　七
川北理雛　二
川北金治　七五
川島古伴　一〇八
川島平五郎　一一〇
川島國春　四七
川島治右衛門　四七
川島仟司　四七
川島松次郎　三五
川島幸十郎　四二
川島忠之助　四四
川島藤五郎　五〇
川瀨正七　三九
川瀨德太郎

川瀨代助　四五
川瀨善太郎　四九
川瀨彦輔　七三
川住錠四郎　一〇五
鍛冶米藏　九
香取重吉　四
香留延太　六
香川雪紅　一一三
香川敬三　一一三
香川勝廣　一一二
香川富太郎　三九
香川眞一　一一五
狩野享吉　四
狩村平左衛門　一〇五
狩野永信　三八
狩野永秀　一一七
鹿子木孟郎　一一六
鹿島岩藏　九
鹿島秀麿　一一七
鹿島悟巳　五六
勘解由小路實承　一一七
甲斐群藏　五七
改野耕三　一〇六
改野　曠　六六

貝原遜軒　六六
貝島太助　一一七
海部多四郎　五三
海賀篤麿　八九
海外天年　五六
海江田平治　六〇
海江田金次郎　二五
開田幸吉　八
鴈金準一　九五
刈田儀一郎　六
堅石由十　五二
蒲生庄太郎　一一八
樺山資紀　一一九
門田正經　一一九
門野幾之進　一一九
門野重九郎　四八
梶　啓吉　二一
梶原保人　一〇五
梶　川　溫
梶田雲峯
梶田雲峯　五六
梶永吉藏　五七
梶村宇平　一〇六
梶浦德三郎　一二八

梶浦重藏　九四
梶野玄山　三七
揖野啓壹　九二
揖野卓治　九五
各務楳林　四七
片岡正士　一七
片岡直溫　一
片岡直輝　一
片岡北泉　一〇
片岡仁左衛門　四五
片田豐太郎　一二〇
片倉兼太郎　一二〇
片山正中　一三
片山保三　八九
片山芳林　一二六
片山東熊　一二〇
片山國嘉　一二一
片山茂助　一三
片山繁雄　一二一
片山文枝　六二
桐華鳳
片木政治郎　六八
片島せん　一二
片瀨嘉助　四〇
片瀨眞太　五四

勝川文吉　五五
勝田蕉琴　七八
勝田爲義　一〇一
勝野春畝　四二
勝矢俊助　一二
勝間田猶助　七
勝木平造　三三
勝島仙之助　一二一
勝本勝三郎　一二五
曾良鉉三郎　一二五
柄野善平　四四
柄澤照覺　九九
桂　太郎　一二五
桂　二郎　一二七
桂　甚助　三四
桂　光風　一〇〇
桂　枝雀　九三
桂　文治　二二
桂　茂助　一〇
桂　文枝　一二七
桂田富士郎　一二七
桂　蘆門　八二
兼松房次郎　一二六
兼松　熙　一二八
兼子平八

兼重暗香　六七
兼本春篁　六九
金井一章　七五
金井清志　一二九
金井　延　一二八
金井久兵衛　四〇
金尾惟敏　三三
金尾稜嚴　一二九
金田又左衛門　一二九
金田茂吉　一七
金田新助　六〇
金田平五郎　一三〇
唐端清太郎　一一七
唐澁庄三郎　一一二
唐杉久彦　五八
辛島　格　七三
神德一人　一一
神尾光臣　六三
神尾芳沖　三八
神田伯山　三一
神田香山　二九
神田靜治　三一
神田文祥　三六
神田藷華　一二

金澤利助　三二
金澤松右衛門　一二二
金澤種次郎　一二四
金澤庄三郎　一二四
金森七郎　四五
金森佐兵衛　五〇
金森鐵太郎　四八
金森南耕　六八
金森伊兵衛　七六
金森宗湯　二五
金杉英五郎　一二四
唐橋在正　三七
唐端清太郎　一二三
唐澁庄三郎　四二
唐杉久彦　八五
辛島　格　三二
神德一人　一一
神尾芳沖　三八
神尾光臣　六三
神田伯山　三一
神田香山　二九
神田靜治　三一
神田文祥　三六
神田藷華　一二

神田清右衛門　七八
神田甚兵衛　七三
神田鍋藏　一二三
神田乃武　五五
神田兵右衛門　三
神田足勝記　四一
神津邦太郎　八八
神仲糸　五三
神永清　五五
神山閏次　四一
神谷惣吉　八八
神谷傳兵衛　二一
鎌田藍齋　一五
鎌田榮吉　八二
鎌田三郎兵衛　八四

鎌田三右衛門　八三
鎌田正夫　七一
鎌田梅石　八四
鎌田勝太郎　七九
鎌田覺藏　九
鎌田駿藏　一九
鍵田忠次郎　五五
影山甚右衛門　七〇
影山禎太郎　六九
寛武文　七二
掛下重次郎　七一
鏑木誠　七二
鏑木鐵麿　四四
笠井愛次郎　一〇四
笠井信一　七五
笠井鳳齋　九五
笠原松齋　一〇六
笠原格一　一〇二
笠川佐一　一〇六
笠川繼孝　五〇
笠本霞明　五四
笠本誠太郎　六〇
風間千代

柿沼谷藏　八四
垣内太郎　一一
垣内雲嶙　三〇
亀井利三郎　一二八
亀井長太郎　二六
亀井英三郎　九三
亀井直齋　一〇七
亀岡德太郎　一〇二
亀田喜八　九三
亀谷巖　四一
亀山宗月　二三
亀井源次郎　一一六
亀谷寅吉　二八
亀田久太郎　九三
亀熊田鶴　三〇
亀木幸助　四八
栢森誓司　三二
栢森薫溪　五九
栢谷義三　九四
栢谷縫右衛門　九四
栢原米太郎　二〇
栢原與次郎　九三
栢田久太郎　一一六
栢谷寅吉　二八
栢熊田鶴　六二
栢木幸助　四八
栢森誓司　三二
栢森薫溪　五九
鴨下松次郎　九三
鴨下晁湖　二〇
粕谷義三　九四
粕谷縫右衛門　九四
春日井丈右衛門　九四

春日孫左衛門　一〇七
春日敬三　七三
春日邦彦　五六
甘露寺義長　五一
顔雲年　二〇

よ之部

容祺年　四五
容爆波　一九
葉文暉　一三
與倉東隆　二一
依田仙右衛門　四六
四平墨華　一
米井源次郎　二一
米原雲海　七
米原芳藏　四四
米林伊三郎　四四
米田虎雄　五四
米田實　四五
米谷半平　四六
米津松造　四四
米津政賢　四五
米山琴三郎　九
米山利之助　四八

米山梅吉　一八
米澤實子　一
米澤與三次　一七
米澤元健　四四
米澤紋三郎　二
米澤長次郎　四八
横井時敬　五〇
横井辨之助　四七
横井半三郎　五〇
横井玉仙　一三
横堀治三郎　三一
横尾勝右衛門　一一
横尾孝之亮　三二
横尾壽平　三二
横尾松之助　三〇
横田一平　三五
横田千之助　三三
横田國臣　三三
横田秀雄　三五
横田清七郎　三五
横田幾三郎　六
横田孝史　七
横山隆興　二三
横山章　二五

横山隆俊　四一
横山正恭　三一
横山久太郎　二二
横山寛平　二二
横山通英　三〇
横山孫一郎　二九
横山彌逸　二二
横山又次郎　二九
横山德次郎　二八
横山寅一郎　二八
横山勝太郎　二八
横山金太郎　三七
横山保太郎　二六
横山大觀　一五
横山松琴　一四
横澤本衛　三〇
吉井茂則　五〇
吉井友兄　二七
吉井幸藏　二六
吉井安吉　二五
吉井豐造　二七
吉井茂　五
吉原三郎　二〇
吉原定次郎　四

吉富簡一　五二
吉岡哲太郎　五二
吉岡七郎兵衛　五二
吉岡平助　五一
吉岡彌生　五〇
吉岡華堂　四七
吉岡清造　一六
吉岡宗次郎　一五
吉岡華洲　八
吉岡長之助　八
吉川藤吉　一三
吉川吉次郎　一九
吉川猪之助　五
吉川盤泉　三
吉川かね　四三
吉川雅喬　三八
吉川東平　二〇
吉川龜次郎　五三
吉川久七　四七
吉川孝秀　四八
吉田整　四六
吉田登穀　三八
吉田作平　三七
吉田謹爾　三七

吉田久次郎　二〇
吉田三郎右衛門　三七
吉田耕造　三六
吉田直太郎　三六
吉田常吉　三六
吉田彌平　三六
吉田常三郎　三五
吉田幸作　一八
吉田忠右衛門　一八
吉田祿在　二四
吉田東伍　二五
吉田惟清　一九
吉田伊三吉　一四
吉田長作　五
吉田琴子　四三
吉田逸言　三八
吉田豐文　二〇
吉田長敬　五三
吉田穣　四七
吉田彦一　四八
吉田藤次郎　四六
吉田登穀　三八
吉田作平　三七
吉田猪之助　一〇

吉田明寛　一〇
吉田光長　三〇
吉田平兵衛　二〇
吉田紹清　三九
吉田久太郎　三七
吉田興三　一七
吉田義路　九
吉田吉兵衛　四九
吉田新太郎　一
吉田壽　一七
吉田顯三　三四
吉田玉造　一五
吉田兵吉　一四
吉田眞水　一四
吉田金太郎　三三
吉田菘村　一二
吉田宗知　一六
吉田月湖　三一
吉田芳明　八
吉田金治郎　八
吉田喜鶴　一七
吉田しな　三二
吉田奈良　一一
吉田奈良丸　五二
吉田小音丸　二九
吉田小奈良　一六
吉谷清馨　二〇
吉谷華圃　三九
吉高岩市　三七
吉武榮之進　一七
吉永米藏　九
吉永仁藏　四九
吉村卓次郎　一
吉村鐵之助　一七
吉村長慶　三四
吉村富三郎　一五
吉村文庭　一四
吉村長策　一四
吉村千艸　三三
吉村清琴　一二
吉宗耕英　一六
吉野周太郎　三一
吉野治平　八
吉野榮吉　一七
吉野德三郎　三二
吉植庄一郎　一一
吉松千賀三　五二
吉松駒造　二九
吉益雄太郎　一六
吉江多吉　二〇
吉澤重郎　五一
吉崎薫一　一五
吉本龜三郎　三九
吉本重光　二一
吉本彦太郎　三九
吉住小三郎　五三
芳泉勇次郎　四一
芳川顯正　四〇
芳野寛　四〇

た之部

田井與之助　四二
田原良純　六
田原當一　三四
田原梅谷　三二
田原雲峰　四一
田畑宗薫　一一
田畑松雨　一三
田畑清江　三
田畑鶴堂　一九
田畑孝七　一二
田畑大藏　四二
田畑雨郎　一一
田所美治　一一
田岡忠次郎　一〇
田賀奈良吉　三三
田川大吉郎　四三
田上源太郎　三六
田邊熊一　四
田邊有榮　九
田邊朔郎　二二
田邊貞吉　四三
田邊五兵衛　五三
田邊爲三郎　四一
田邊卯八郎　四〇
田部芳　一四三
田部長右衛門　一三六
田近竹郎　二七
田垣内富吉　一四二
田沼太右衛門　二五
田付七太　四
田中經一郎　五一
田中源太郎　三三
田中武兵衛　一二七
田中富士太　一二〇
田中光顯　一一六
田中榮八郎　一一七
田中喜代次　一一四
田中定吉　一一七
田中美成　一一五
田中茂　一一五
田中正平　一一三
田中正造　一一一
田中荷德　一一二
田中正右衛門　一〇五
田中宏　一〇三
田中善助　一一一
田中稻美　二六
田中大覺　四〇
田中利三郎　二一
田中檜治郎　四
田中祥雲　二一
田中主水　一〇三
田中一華　八七
田中月耕　六九
田中梅笑　七
田中梧堂　一五
田中繁三　五八
田中松齋　五八
田中清　二一
田中秀三　一〇
田中利七　一四
田中陶村　九
田中廣吉　一五
田中松峰　一五
田中重太郎　一三
田中種　一一
田中正朔　一二
田中利三郎　一〇五
田中郁太郎　一〇三
田中勝代　一一
田中德太郎　二六
田中清太郎　四〇
田中きん　二一
田中光玉　四
田中仙樵　二一
田中墨外　一〇三
田中宗卜　八七
田中有美　七
田中石松　一五
田中鐵齋　五八
田中稻城　一二
田中平次郎　二九
田中靜堂　五三
田中長兵衛　九七
田中利喜藏　一五〇
田中喬樹　一三二
田中隆三　一〇二
田中林藏　四三
田中林助　四三
田中勝次郎　二八
田中龜之助　三
田中數之助　八
田中芳男　一三七
田中唯一郎　八七
田中民夫　一〇四
田中館愛橘　三六
田中國三郎　二三
田南岳嶂　一二二
田村英二　一四三
田村新藏　四三
田村利七　七一
田村春曉　九九
田村宇兵衛　六〇
田村月樵　一二〇
田村新吉　一三四
田村玄吉　一三五
田村和平　一五
田村藤吉　一三四
田村豪湖　一三三
田野倉常藏　一三三
田能村小篁　一三二
田能村小齋　三二
田口政五郎　一三一
田口十一郎　三一
田口義三郎　一二八
田口愨左衛門　一二六
田口百三　一二七
田口百臥　一二四
田口秀哉　一二五
田口米舫　一三三
田丸稔　二一
田淵深　一五〇
田淵清一郎　一〇〇
田阪龜二郎　一〇八
田阪貞雄　一〇七
田代正　八一
田代保之　五二
田代古蓮　一二四

田代美德 八八
田代豐助 九九
田尻林之助 六
田尻與八郎 一八
田尻稻次郎 九〇
田島竹之助 九一
田島仲吉 七五
田島竹次郎 九七
田住昇 六七
大幸勇吉 八九
谷謹一郎 九三
谷七太郎 九五
谷新助 八三
谷茂平 八二
谷勘藏 一四三
谷泉 八九
谷高三郎 六八
谷靜也 三〇
谷勘兵衛 七五
谷中勘藏 一四五
谷口香嶠 一〇八
谷口直貞 八六
谷口清兵衛 五
谷口元之助 五七
谷口九鱗 一八
谷口賢次郎 四五
谷口巖 七九
谷口長雄 八六
谷口謙 七二
谷口房藏 七九
谷崎新五郎 六九
谷崎久兵衛 七〇
谷本富 六六
谷森眞男 六六
橘智定 八八
橘善四郎 三六
垂井清右衛門 五八
俵三九郎 六一
俵國一 五七
俵孫一 六一
高井泰令 三七
高井利一郎 一二二
高井水石 八五
高石忠慥 一五
高石愈助 六〇
高羽愈兵衛 五五
高原駒治郎 一三〇
高萩政次 七三
高濱治 一九
高濱與七 五五
高畑翠石 五
高畑秋松 五五
高畑民藏 三二
高畑文質 一三六
高畑源吉 一三
高畑長吉 六五
高畑南湘 九四
高畑臥雲 四〇
高畑道八 三〇
高橋 安 三
高橋龍亭 一二九
高橋三江 一四〇
高橋芝山 一二
高橋友七 一二
高橋小十郎 七
高橋助七 一三〇
高橋是清 八
高橋慶治郎 一三〇
高橋庄之助 一三五
高橋彌次平 一三一
高橋作衛 一二四
高橋金治 一二一
高橋鉉太郎 一三四
高橋保馬 一三四
高橋文之助 一九
高橋貞碩 一六
高橋直治 一四一
高橋順太郎 一二
高橋新吉 一二九
高橋秀松 一二九
高橋辰次郎 一四二
高橋玉淵 一〇
高橋彦太郎 一〇
高橋義雄 一四四
高橋義信 一〇四
高橋拾六 一四八
高橋金一郎 一四七
高橋光威 九一
高橋實造 四八
高橋嘉七郎 一四六
高橋民藏 三二
高橋文質 一三六
高橋南湘 九四
高橋三海 三
高橋安 三
高橋三江 一四〇
高橋芝山 二四
高橋小十郎 一三〇
高橋是清 一三〇
高橋彌次平 一三一
高橋卯之輔 一三四
高橋鉉太郎 一三四
高橋保馬 一三四
高橋文之助 三六
高橋貞碩 一三九
高橋直治 一四一
高橋辰次郎 一二九
高橋辰五郎 一四二
高橋義雄 一四四
高橋義信 一四八
高橋長秋 五三

高橋藤兵衛 五四
高橋半兵衛 五五
高林五峰 八二
高林銀太郎 五四
高林泰虎 五四
高林維兵衛 五六
高取稚成 二八
高千穗宣麿 一〇四
高良宗七 三五
高川盛次 六一
高田鶴仙 三三
高田鶴洲 三二
高田桂堂 六六
高田利一 五四
高田千賀太 七三
高田早苗 一〇〇
高田露 九九
高田愼藏 一一〇
高田茂 一〇一
高田新助 一〇六
高田安吉 一〇五
高田三郎 六六
高谷篁圃 五
高谷光雄 一〇七
高津伊兵衛 一〇六
高津英馬 一四四
高築富次 一一五
高築重右衛門 一二七
高辻修長 一〇〇
高根義人 九一
高仲泰一 一八
高村光雲 九二
高村眞夫 一〇一
高野宗順 九五
高野七郎 一〇一
高楠順次郎 九五
高桑安次郎 一四九
高柳豐三郎 八三
高間時次郎 一一四
高安右人 八二
高安道成 八五
高安紫山 一三二
高山龜太郎 一一七
高山與三吉 五三
高山豐次 八五
高山長幸 八三
高山圭三 八四
高山甚太郎 八五
高松長左衛門 八八
高松長四郎 一二六
高松豐吉 八〇
高松數馬 八〇
高峰親章 七九
高崎三重郎 一三二
高崎親章 七九
高阪憨七 九七
高阪萬兵衛 七九
高木宗太郎 一八
高木朝太郎 三九
高木南海 四〇
高木寅四郎 五
高木溪翠 三七
高木克敬 六八
高木菊平 一三
高木豐三 七二
高木友枝 七八
高木與兵衛 七八
高木半子 二四
高木長葉 一一三
高木祥二郎 六三
高木正年 二
高木益太郎 一
高木正善 七八
高木元太郎 三九
高木兼寛 七七
高木貞衛 七四
高木貞治 七四
高峰讓吉 八七
高嶺敎 七三
高嶺朝申 七二
高梨源五郎 九一
高梨正治 九四
高島彌七郎 六七
高島嘉右衛門 四九
高島嘉兵衛 七一
高島小金治 七一
高島北海 七六
高島捨太 七〇
高島鈴三郎 一七
高島鞆之助 七〇
高島傳藏 四二
高島多米治 三七
高島嘉七郎 一四六
高城荒三 三三
高平小五郎 六五
高廣次平 七〇

高森碎巖　一三八
高森眞壽雄　一〇四
高瀨春曉　一三六
高瀨三郎　五九
高瀨眞卿　五六
高須峯造　四八
提中卯之助　一三二
鷹田其石　三八
鷹司熙通　五六
棚橋溪雲　一二六
棚橋一郎　二五
柵橋絢子　九
棚橋通治　一四七
棚橋文作　二五
龍居賴三　六四
辰市祐胤　二六
辰野金吾　六二
辰馬半右衛門　六二
辰馬吉左衛門　五二
宅德平　五三
館野秋亭　八〇
玉井翠玉　六一
玉田彌伊太　一一
玉利喜造　五一
玉名程三　一三八
玉舍春輝　一〇四
玉置金司　一三六
玉置格　五九
玉木秀作　五六
玉木愛石　四八
武井守正　一三二
武井庫太　三八
武部白鳳　五六
武富時敏　一二六
武岡豐太　二五
武川又兵衛　九
武田修二　一四七
武田新兵衛　二五
武田灌園房　六四
武田彌作　二六
武田福太郎　六二
武田霞洞　六二
武田恭作　五二
武田五一　五三
武田錦　八〇
武田圓吉　六一
武田仰天子　一一
武田千代三郎　五一
武田英一　四六
武村耕靄　一二九
武内新一郎　七八
武内桂舟　七二
武内都史雄　三五
武久捨吉　一四〇
武島羽衣　一二三
武弘宣路　四六
多治見久太郎　一〇二
多智花善十郎　一四六
多賀定市　一三七
多賀ふみ　四
多田忠七　四四
多田勝太郎　四七
多田好間　一
多木增次郎　三
多木粲次郎　七五
多崎孝七　二
多原友三郎　六
竹原竹江　五二
竹林高行　八八
竹尾茂　四五
竹尾治右衛門　四五
竹岡友仙　七
竹田晨正　一
竹田敬方　五五
竹田虎之助　一一三
竹中壽太郎　三〇
竹中清　一三三
竹中半次郎　九四
竹中八十吉　六二
竹村良貞　四六
竹村正　一三
竹內禪扣　二〇
竹內吉鳳　一三五
竹內左顧　六五
竹內文吉　六四
竹內福太郎　七四
竹內廣太郎　三〇
竹內久一　二〇
竹內善次郎　四二
竹內外二　三一
竹內正志　八
竹內栖鳳　一〇
竹內綱　三八
竹內節　一七
竹內平吉　三六
竹內左右吉　一七

竹野福松　四四
竹山鎌三　四〇
竹越與三郎　九〇
竹綱熊治郎　七四
竹下莊一郎　一二八
竹下弘　四〇
竹本染太夫　二四
竹本源太夫　六四
竹本末虎　二二
竹本京濱　六九
竹本津賀助　七七
竹本京枝　一二五
竹本都太夫　一一一
建部遯吾　三九
建石省吾　一一
伊達宗敦　三三
伊達宗陳　三三
伊達宗基　三五
立花小一郎　五九
立花寬治　六〇
立川勇次郎　六〇
立松山城　六三
立松輝石　七一
立見篁洲　一四五
瀧定助　四四
瀧兵右衛門　四〇
瀧川大次郎　九〇
瀧川辨三　七四
瀧村竹男　一二八
瀧口吉良　四〇
瀧山瑄　二四
瀧澤喜平治　六四
瀧澤九市　二二
瀧澤音六　六九
瀧澤筑山　七七
瀧迫治作　一二五
瀧澤藏　一一一
丹波謙　一一一
丹波敬三　三九
丹波助次郎　一一
丹下辰雄　三三
丹下良太郎　三三
爲村佐一郎　三五
團藍舟　五九
團琢磨　六〇

そ之部

曾我祐準　七一
曾我長三郎　一四五
曾我長四郎　三一
曾我部俊雄　三五
曾我廼家五郎　一二
十合重助　三四
十合伊兵衛　三〇
曾根正命　三一
曾根芦溪　二九
添田飛雄太郎　二九
添田弼　二二
添田壽一　一八
園千秋　八一
園地公靜　一三五
園田宗惠　四四
園田安賢　二七
園田實德　一六
園田孝吉　四三
園山勇　六七
祖父江聖泰　二三
祖父江重兵衛　一三四
宗國金平　二八
莊伯容　六

つ之部

津端道彥　七
津田尙之助　一七
津田長四郎　三
津田梅子　一二
津田源三郎　二二
津田七五郎　一二
津田信夫　二二
蔦友太郎　三五
津輕承昭　三一
津積恒三郎　一一
津野慶太郎　二二
津久井茂　一二
津久井彥七　九
津國百松　四
津越知次　一一
津江正規　五五
津島耕南　五五
津守國榮　一五
堆朱揚成　六
坪井正五郎　七
坪井九馬三　七
坪田十郎　八
坪內雄藏　一九
坪谷善四郎　一六
壺見嘉見　一
土橋源藏　八

土橋華城　一四
土川彌七郎　一六
土川誠一　二七
土田政次郎　一六
土田勝業　一
土屋清三郎　七
土屋彌十郎　六
土屋輙　七
土屋松華　三二
土屋孝　三二
土屋邦雄　二六
土屋愛造　二五
土谷保　二九
土谷嘉七　二
土山隆克　二七
土御門晴榮　一〇
鶴丈一郎　三〇
鶴原光邦　一五
鶴原定吉　三〇
鶴田賢治　二八
鶴岡助次郎　三〇
鶴澤勇三　九
鶴澤友助　一〇
鶴澤民之助　三二
鶴澤文京　三一
鶴澤文三郎　一二
鶴澤文敎　三四
鶴澤仲路　二
鶴澤清六　六
鶴澤辰彌　六
鶴澤靖　三三
塚原周造　二〇
塚原元兵衛　三〇
塚原靈山　一
塚原保吉　六
塚田秀鏡　三三
塚田啓太郎　三一
塚口竹香　二九
塚本袈裟雄　五
塚本靖　五
塚本喜三郎　二四
塚本長六　二九
塚本岩三郎　二八
傳秦賢　一八
都築馨六　一九
都築宗啓　九
都築眞琴　二六
都路華香　一六
築山揆一　一〇
筒井秀二郎　五
堤小三郎　一二
堤清助　八
堤頼一　二八
堤功長　二一
堤正誼　二七
堤健助　三五
堤川鶴吉　一八
恒川大造　七
恒松隆慶　二一
恒松臺太郎　二一
恒松孝治　一八
常持爲治　一一
角田林兵衛　三
角田眞平　四
角田忠行　二三
角田松梅齋　一三
角田梅外　六
佃一誠　八
月野正五郎　二九
名嘉山安忠　一九
名越彌五郎　一九
奈良原繁　二四
奈良野彌市　六五

ね之部

根津五郎右衛門　一
根津嘉一郎　二
根岸鐵太郎　二
根本正　三
根本雄吉　一
根本雪蓬　一
根本樵谷　一

な之部

名取忠愛　四六
名和靖　二四

內藤久寬　三八
內藤信任　八六
內藤政舉　三七
內藤爲三郎　八七
內藤正義　六二
內藤利八　六二
內藤正一　一九
內藤玉翠　四一
內藤達　六八
內藤氏雄　四九
內貴甚三郎　五三
浪花家小虎丸　三一
直木政之介　三
鍋島直大　四
鍋島直虎　五
鍋島直彬　一六
鍋島榮子　六
鍋島幹　六
中橘園　五〇
中井莊七　一八
中井精一　八七
中井一馬　三七
中井左一　二
中井政吉　七〇
中居曠谷　四三
中濱東一郎　二七
中原岩三郎　八二
中原淳藏　八三
中橋德五郎　二六
中西鐵馬　五八
中西耕春　二一
中西龍雄　八四
中西醒泉　四一
中西晴霞　五六
中西友次郎　一九
中尾常次郎　三三
中尾庄兵衛　四五
中尾雄　三五
中尾義三郎　五七
中尾彥助　一六
中川資策　六一
中川龜三郎　六〇
中川德右衛門　八四
中川伊勢吉　五
中川義實　一
中川喜三郎　五
中川元　五一
中川俊一　二三
中川源藏　二二
中川謙二郎　一五
中川治平　七九
中川興長　四八
中上平太郎　二九
中上成貞　一三
中田雲暉　八五
中田清兵衛　八〇
中田敬義　五三
中田勘左衛門　一
中谷甄古　六七
中谷友次郎　三五
中谷德恭　八
中谷弘吉　三六
中津川敬三郎　八〇
中辻喜次郎　五五
中根甚太郎　三
中根半嶺　五一
中根祚胤　八二
中牟田倉之助　九
中村眞次郎　六九
中村彌六　六五
中村石松　一二
中村虎次　一二
中村如水　六一
中村小歌　六五
中村三平　七三
中村成一　二七
中村修　二三
中村扇太郎　四四
中村梅玉　三六
中村宗哲　三四
中村左洲　三
中村藤吉　七七
中村一秀　四三
中村兼次郎　六九
中村月嶺　八一
中村福助　五八
中村闌臺　六二
中村雁治郎　七
中村華卿　二〇
中村不折　七六
中村方載　六〇
中村爲松　一七
中村長藏　五三
中村やす　五四
中村喜之助　八五
中村松五郎　六七

中村逵太郎 六九
中村歌右衛門 八四
中村小成 五九
中村成吉 三七
中村春坡 七四
中村藤吉 七九
中村みつ 七七
中村愛三 五二
中村清彦 八〇
中村進午 四
中村謙藏 六
中村雄次郎 三八
中村清男 六〇
中村榮助 六四
中野武營 五九
中埜又左衛門 五二
中埜半六 二六
中野半左衛門 八一
中野忠一郎 四八
中野幾次郎 一三
中野善次郎 五七
中野勝年 一七
中野德次郎 七〇
中野初子 七三
中野廣太郎 六八
中野貫一 三六
中野鴎湖 七三
中野由二郎 三九
中野致明 四〇
中倉玉翠 五四
中倉萬次郎 六六
中隈敬三 一五
中久木信順 七四
中山秋湖 六五
中山彩畝 八三
中山美光 八六
中山佐市 六〇
中山秀三郎 四六
中山信寶 四三
中山孝麿 六三
中屋敏夫 五八
中里則長 五〇
中里美之吉 六四
中里則光 四八
中澤利介 六八
中澤安次郎 四一
中澤貞造 三三
中澤彦七 二
中澤岩太 七八
中澤政俊 四五
中澤年章 八五
中澤紀 二二
中目成一 三
中御門經隆 四〇
中鹽耕造 二
中鹽龍 五二
中島總治郎 三二
中島行正 七二
中島武四郎 五一
中島多計 二八
中島保美 一八
中島喜之助 八三
中島銳治 八三
中島政次郎 一九
中島永元 一七
中島祐八 二三
中島健一郎 八
中島力造 一六
中條良園 二二
中本吉次郎 三九
仲田太三郎 三九
仲田寅吉 一九
仲小路廉 七六
永井仙助 二〇
永井四郎三郎 七〇
永井長三郎 四七
永井長江 六八
米井以保 四五
米井仙十 四二
永井香圃 四六
永井環 五七
永井如雲 四九
永井甚吉 二八
永原次之助 四三
永地秀太 六三
永田養神齋 三四
永野耕造 八四
永田良介 六三
永江純一 一六
永坂石埭 四五
永見寛二 三〇
長瀨翠塘 四七
長井政光 五八
長井一禾 七一
長井越作 七五
長井利右衛門 五九
長井長義 四一

長井長左衛門 八
長沼鷺藏 一三
長濱禮藏 三一
長西英三郎 一四
長尾長次郎 三八
長尾華陽 二
長尾傳藏 五八
長尾四郎右衛門 五四
長尾倉三 五六
長尾藤三 四九
長岡半太郎 三〇
長野與平 三四
長野草風 一六
長野純藏 二八
長屋新兵衛 七八
長屋弘 二二
長屋秋香 八七
長安雅山 二四
長阪毅 二
長阪重孝 二五
長澤留次郎 五六
長島榮壽 七七
長島武右衛門 九
長島鷲太郎 一八
長森藤太郎 二九
長瀨富郎 三〇
成川義太郎 三二
成田直衛 六
成木星洲 三三
成宮東湖 五五
成瀨隆藏 三三
成瀨仁藏 一四
成瀨駒次郎 一六
成瀨正恭 四七
成瀨貫太 五二
成戸嘉七 七
鳴瀧幸恭 一四
鳴井朴 八二
夏井保四郎 二一
七扇花助 二〇
楢崎享造 二一
納富介次郎 四三
苗村源次郎 八〇
滑川兼彦 一五
並河邦彦 六六
並河理二郎 三八
並河靖之 一〇
並木文右衛門 六六
難波宗美 四四
難波正 五五

む之部

室安太郎 一三
室田景辰 一
室田義文 二一
室谷藤七 二二
室井技鳳 一八
室伏治郎兵衛 二五
室崎間平 二
武藤孫左衛門 七
武藤嘉門 二五
武藤百太郎 一七
武藤金吉 一八
武藤山治 二四
六人部暉峰 六
向井新治郎 二
向山小平次 五
牟田萬次郎 五
牟田口元學 七
陸奥廣吉 一四
棟居喜九馬 二三
宗像政 一四
村倉兵衛 七
村戸賢德 二一
村治重厚 一〇
村岡清吉 一五
村岡淺右衛門 二一
村岡角太郎 一五
村岡應東 一二

村上專精　二五
村上委山　二六
村上福太郎　二三
村上純祥　八
村上嶺二　一四
村上田郁　二四
村上玉寶　二〇
村上愛岳　一三
村上敬一　一一
村上市助　二三
村上小齊　五
村上洗夢庵　一五
村上武八郎　八
村田古代　五
村田虎吉　一二
村田華應　四
村田金兵衛　六
村田幸吉　二〇
村田龍洲　一一
村田看雨　一
村田龍郎　五
村田丹陵　四
村田香谷　二
村田於菟次郎　二一
村田虎次郎　二五
村田正甫　二六
村田寅吉　二三
村田祐治　八
村田惇　一四
村田重治　二四
村田經芳　二〇
村田保　一三
村田一郎　一一
村田俊彦　二三
郁田六之助　五
井勇吉　一五
井房吉　八
井吉兵衛　五
井眞雄　一二
井彌兵衛　四
井恒藏　六
井至知　二〇
邑井道一　一一
村野常右衛門　一
村松雲外　五
村松鍬三　四
村松甚藏　二
村松龜一郎　一八
村木正憲　二
村瀨玉田　一二
村瀨秀月　一九
村瀨喬宗信　三
村瀨周輔　一〇
村瀨春雄　一六
椋本鶴藏　二七
麥田宰三郎　二九
虫明一太郎　二六
宇井可道　一三
宇治龍子　四三
宇治原要太　三〇
宇田伊代吉　二九
宇田川重次郎　二七
宇津宮紀綱　九
宇都宮鼎　四
宇野仁松　三
宇野先珉　六
宇野大太郎　一五
宇野朗　一六
宇佐美敬三郎　二三
鵜澤總明　一九
鵜頭松鱗　二八
鵜飼金三郎　七
內田正　二五
內田康哉　二四
內田嘉吉　八
內田正雄　一四
內田正敏　二〇
內田正治　二二
內田定槌　二二
內田重成　七
內田櫻洲　二九
內田菊　一
內田幸太郎　三八
內田駒太郎　三九
內田護　一二
內田哲郎　一〇
內田敬正　一五
內田源之助　二二
內田村正　三七
內野信一　一〇
內山信民　一四
內山松世　二三
內山竹塘　二五
內山啓太郎　九
內山文次郎　三四
內山敬三郎　一一
內木玉枝　二五
內海高鳳　九
內海羊石　三六
內海吉堂　一八
瓜生德平　三三
瓜生繁子　七
瓜生外吉　一四
漆昌巖　六
上田己之助　一三
上田滿江　三九
上田勝藏　五
上田博臣　一四
上野隆平　一四
上野清江　六
上埜安太郎　一三
上內望齋　七
上村金彌　三三
上村松園　一八
上村紫江　三六
上柳喜右衛門　一一
上島桃郁　二二
上島鳳山　二八
上杉茂憲　二八
上場平　一七
上原勇作　一七
上原桃畝　二八
上原古年　二八
上原鹿藏　二二
歌川美藏　一一
上田清五郎　二三
上田德松　二三
上田小太郎　二一
上田有澤　二一
上田萬年　二〇
上田庸　八
上田秀四郎　一一
上田定太郎　三四
上田石芝　三四
上田岩吉　三六
上田萬次郎　三六
上田正太郎　三八
植村俊平　一〇
植村久五郎　九
植村家靈　一三
植松雅平　八
植松新十郎　二二
植木豐吉　六
植木武彥　二一
浦井鍠一郎　一三
浦田治平　二七
浦鄕貞太郎　一一
卜部兵吉　二四
卜部喜太郎　三
裏松良光　一九
馬野仙太郎　二三
浮田桂三　二六
浮田和民　三七
梅原龜七　四三
梅原良　七
梅原玉邦　三三
梅戸在貞　一九
梅ヶ谷藤太郎　三三
梅田幸一郎　九
梅田惣太郎　四二
梅田英一　四二
梅田新藏　四三
梅園直之進　一五
梅村鋠八郎　三五
梅浦精一　三五
梅屋庄吉　四二
梅小路定行　一八
梅宮芳太郎　一六
楳茂都扇性　二二
海上胤平　一五
海野勝秀　一〇
海野勝珉　二四
海野武二　二五
牛場卓藏　二二
牛田松南　四
牛村一氏　三七
牛木留吉　三五
牛窪求馬　三七
牛田清五郎　三六
潮田方藏　一〇
氏家三喜　一一
臼井雪次郎　一一
臼井源藏　七
臼井宏　二六
薄井龍之　九

う之部

雲林院寶山 一二
野村恒造 三
野村眞一 一三
野村幸一郎 一四
野村久多祐 一一
野々村石子 八
野口保興 五
野口榮世 三
野口小蘋 一五
野間清三郎 一一
野澤泰次郎 六
野澤清作 一一
野澤喜三郎 一二
野崎武吉郎 一一
野崎光之丞 二
野宮定穀 七
野尻精一 一〇
野本松二郎 一〇
野本半三郎 四
能登又平 六
能勢七郎 一一
能川登 九
野村素介 一四
野村雪江 六
野村如仙 三
野村萬藏 六
野上龍起 一三
野上增藏 五
野田市兵衛 一四
野田卯太郎 一四
野田勇 三
野田貞 四
野田九浦 一三
野田茂吉 一二
野添宗三 一三
野津三次郎 一二
野中清 二
野中鴻 七
野中幾次郎 一四
野波七藏 一五
野村龍太郎 八
野村彌三郎 八

の之部

野原貞明 一二

く之部

久原躬弦 四二
久保伊一郎 二三
久保佐四郎 四〇
久保勇 四五
久保田米齊 五
久保田伊助 一二
久保田竹文 一二
久保田全 四
久保田金僊 二
久保田讓 三
久保田宗三郎 一七
久保田勝美 三
久保田與四郎 四一
久保田鼎 六
久留正道 五
久野福松 一七
久野知義 四一
久野昌一 三九
久米民之助 三八
久米良作 三三
久志本梅莊 一七
久世通章 二七
久須美秀三郎 二七
久住萬助 三〇
窪田節二郎 一九
窪田平吉 三三
窪田靜太郎 一八
黑岩涙香 四一
黑部拈華 二四
黑川吉兵衛 二二
黑川翠山 二五
黑川繁藏 三七
黑川榮次郎 四二
黑川榮勝 三四
黑河內丹治 三四
黑田菊太郎 三八
黑田宗啓 三二
黑田豐太郎 四〇
黑田清綱 一一
黑田網彥 二九
黑田清輝 一一
黑田定治 九
黑田長成 三四
黑田和志 一〇
黑谷兼次郎 三一
黑柳松次郎 二六

黑澤忠正 三三
黑澤墨山 二一
黑澤源三郎 二五
黑澤鷹次郎 七
黑崎修齋 九
黑崎諭吉 四三
黑木爲楨 四三
黑瀨與重郎 二九
黑瀨木堂 一〇
黑瀨義門 三九
黑須龍太郎 二六
畔上波之助 二四
畔柳都太郎 一二
國頭次郎 一四
國武喜次郎 二一
國枝元治 五
國井庫 三一
國井應陽 一九
國澤新兵衛 二〇
國木田収二 二
栗原宜太郎 四五
栗田貞珉 一五
栗田蒿廣 四四
栗田眞秀 一八
栗野愼一郎 一三
栗山泰 七
栗山善兵衛 一四
栗山安平 一三
栗本東明 七
栗本菊太郎 一三
栗本嘯月 二七
功力榮植 三六
來栖壯兵衛 一五
桑原權之助 三五
桑原七兵衛 一一
桑原政 一一
桑原羊次郎 一二
桑原隣藏 一六
桑田久次郎 一九
桑田熊藏 三一
桑名鐵城 一
桑野兼次郎 八
桑山兼山 四一
大五郎 八
吳秀三 二三
吳聰 一六
藏原惟郭 三〇
藏立桂石 三一
藏內次郎作 二五
藏內保房 二五
倉石松畎 八
倉尾友三郎 六
倉貫彥治郎 八
倉田續 三四
倉田重祿 三七
倉光吉郎 一六
倉島庄三郎 一六
倉重平七 一六
倉田董次郎 三九
熊谷屢雲 二八
熊谷幸之輔 四三
熊谷直彥 一三
熊谷兼行 一四
熊谷常光 九
熊澤竹藏 二八
熊耳耕年 二二
熊本謙二郎 二〇
熊川宗雄 二九
草鹿甲子太郎 二二
草苅武八郎 二四
草間時福 三二
草野清 二
日下義雄 三二
日下部辨二郎 三二
日下部鳴鶴 四
九鬼紋七 二
九鬼隆一 一
九鬼總太郎 一〇
九條道實 三八
釘本藤次郎 二〇
櫛田和助 三五
串本康三 三
公文芦淵 一八
楠秀太郎 二八
楠榮吉 三五
楠田靖 一
楠見節 一〇
楠本正敏 二九
邵司成忠 三〇
菅野傳右衛門 一五
工藤演二 二六
工藤謙 三五
工藤寬得 三八

や之部

矢板武 二
矢入六三郎 二一

矢橋賢吉　四五
矢橋亮吉　一八
矢部重藏　六五
矢頭喜三郎　二三
矢追檜次郎　三一
矢追誠一　六九
矢田文次郎　六七
矢内樣秀　一七
矢野文雄　一五
矢野二道　七四
矢野義徹　五八
矢澤久右衛門　七六
矢切芳太郎　二三
矢島中　二七
矢島雲堂　二〇
八幡金次郎　二二
八尾善四郎　七〇
八尾新助　五〇
八尾秀彌　六四
八木逸郎　六九
八木宗十郎　五二
八木宗十郎　七三
八木岡春山　三九
谷井保　四一

柳玉洞　四五
柳川柳塘　一八
柳田斗墨　六五
柳澤保惠　二三
柳澤銀藏　三一
柳澤龜之助　六九
柳澤一抱　六七
藥師院保佑　一七
山井兼文　一五
山葉寅楠　七四
山西庄五郎　五八
山岡直記　七六
山岡米華　二三
山脇銳郎　二七
山脇嶠雲　二〇
山脇春樹　二二
山脇玄　七〇
山川霽峰　五〇
山川義太郎　六四
山川孝次　六九
山川慶次郎　五二
山川健次郎　七三
山川勇木　三九

山縣有朋　四三
山縣量次　三四
山縣伊三郎　三〇
山上兼輔　三七
山梅見　三〇
山形仲藝　六三
山田鬼一　一一
山田浩堂　三五
山田翠谷　一七
山田謙次　四
山田杏園　五五
山田忠孝　一九
山田つた　七三
山田松華　三七
山田香雨　六
山田介堂　四八
山田德太郎　四四
山田義雄　二五
山田政五郎　一九
山田藍々　二二
山田永年　一二
山田善助　二四
山田敬中　一五
山田留次郎　三八

山田秋帆　一
山田耕雲　四〇
山田保次郎　三三
山田春三　三二
山田寒山　五五
山田豊策　五二
山田珠一　二七
山田左七郎　六八
山田勝太郎　四五
山田福三郎　二一
山田文太郎　七
山田三良　六一
山田揆一　六一
山田信昌　六〇
山谷元三郎　三
山根正次　五九
山根源四郎　二
山中嘉兵衛　三〇
山中神風　二五
山中儀助　七
山中紀三郎　三六
山中誠一　一六
山中古洞　六五
山中信儀　八

山名虚舟　四
山口憲　九
山口桃齋　一一
山口宗義　五七
山口銳之助　九
山名清吉　五六
山村あさ　三七
山村たつ　一七
山内香溪　五六
山内素行　三七
山内孫作　一七
山内多門　四〇
山移定政　一
山野仁兵衛　六
山野新七郎　六六
山口江月　三〇
山口卯之助　六七
山口治郎平　六〇
山口春陽　五五
山口一照　五七
山口直治　三五
山口善兵衛　二六
山口義章　四三
山口觀道　五二
山口重信　二〇
山口吉左衛門　四一
山口房五郎　七三
山口彦三郎　八

山極勝太郎　七
山下莊太郎　一一
山下秀實　一八
山下重威　六六
山下啓次郎　三
山科愼次郎　三六
山科言綱　三
山科禮藏　二一
山品捨錄　六四
山島知賀　三九
山木助次郎　六九
山本乙松　四五
山本治郎平　六三
山木曉空　一
山本梅莊　六
山本雨石　六
山本丑太郎　二
山本久三郎　一九
山本兵次郎　二〇
山本豐　二八
山本重之助　二六
山本謙治　一三
山本實庸　一六
山本繁造　四三
山本盛信　七五
山本琴嶺　二五
山本星山　二一

山本輝山　五八
山本綾太郎　五一
山本晴山　三五
山本甚作　二九
山本榮喜　二六
山本香山　二
山本たか　九
山本源次郎　四七
山本雪桂　三一
山本成峰　六五
山本杏園　一〇
山本保　五六
山本小太郎　四九
山本周太郎　六四
山本景行　三八
山本昇雲　五三
山本嘉兵衛　七四
山本瑞雲　四九
山本達雄　五〇
山本權兵衛　七一
山本悌二郎　五
山本實庸　四三
山本重之助　七一
山本謙治　一六
山本星山　七二
山本繁造　七五
山本盛信　四七

山本鼎　七六
山本源兵衛　七〇
山元春擧　六八
山森隆　六二
藪田常次郎　二九
藪田信吉　六一
藪田益太郎　六一
安井保太郎　二四
安井璞　七三
安川敬一郎　四七
安川義正　一四
安川喜一郎　六二
安田善次郎　三一
安田善三郎　一〇
安田稻實　六七
安田平四郎　四六
安田翠僊　三二
安田喜三郎　六六
安田八十吉　三三
安田蕉堂　三四
安田秀之助　三九
安田勝次郎　一七
保田大吉　七二
安武千代吉　二四
安永義章　六五
安廣伴一郎　六七
保間素堂　六〇

ま之部

間宮勇左衛門　七
眞野曉亭　三六
眞木玉峰　三九
眞木勝太　五二
眞清水藏六　二八
馬淵丑太郎　二五
馬越恭平　一
馬瀨清三郎　一六
馬杉庄平　一六
萬里小路通房　四八
前川孝嶺　四六
前川文嶺　四六
前川太兵衛　四九
前田華陽　五〇
前田珍男子　二
前田玉英　一
前田卯之吉　一三
前田金兵衛　二六
前田默鳳　二九
前田常宥　四九
前田八十松　五三
前田氏實　四七
前田由松　四八
前田利爲　五一
前田直之　三一
前田正名　二七
前田健次郎　二三
前田利同　二〇
前波松五郎　二九
前澤由次郎　二一
前島密　四五
前的場中　六
町田信次郎　四九
丸岡寛三郎　五二
丸田恒八　三八
丸山源藏　五八
丸山忍　三〇
丸山正彦　一
丸山義男　二
丸山晩霞　三六
丸山古香　一三
丸山彌三郎　二六
丸木利陽　三四
丸瀨清五郎　四八
圓山利一　二九
圓山鶴野　四三
松井直吉　五七
松井要藏　八
松井元淳　一〇
松井三治郎　二四
松井米次郎　五
松井鶴　三
松井伊兵衛　一五
松井鶴羨　四七
松家德二　二二
松原芳太郎　一五
松林雪貞　一四
松林桂月　四
松橋宗明　二四
松尾宗見　二六
松尾源次郎　五五
松尾大吉　四九
松尾寅三　五
松尾竹藏　五〇
松岡康毅　五〇

松岡壽　一七
松岡香翠　二一
松岡茂章　一四
松岡健治　一三
松方正義　五四
松方幸次郎　三二
松方乙彦　九
松方巖　二七
松吉賢次郎　一九
松田吉三郎　一
松田正久　五八
松田武一郎　五三
松田源治　三〇
松田霞城　三五
松田淞雨　五六
松田彌三郎　五八
松田眞一　二九
松田宗貞　三〇
松田機　一八
松田舒　二五
松谷八十郎　一四
松平賴安　一五
松平賴壽　三
松平正直　二三
松平康莊　六
松平直平　三九
松平直敬　三八
松平康民　五九
松永吉左衛門　五
松波政愛　一二
松波寅吉　三三
松波仁一郎　九
松村平兵衛　四〇
松浦賢作　三
松浦九平　四三
松浦羽洲　三一
松野翠洞　五五
松山爲雄　三三
松山染吉　四四
松崎三十郎　一三
松崎藏之助　二
松下要子　一七
松下太盧　二〇
松下多計夫　三二
松下軍治　三八
松下心海　一五
松島素雲　二〇
松廣彌右衛門　三六
松廣九左衛門　三七
松本佐治郎　四〇
松本貞輔　二五
松本青阿彌　四二
松本佐平　五
松本喜三郎　一二
松本幸四郎　八
松本長平　九
松本雷風　五九
松本武兵衛　一八
松本一鳳　三
松本清太郎　四三
松本善右衛門　一一
松本幾次郎　五五
松本錦糸　三三
松本義亮　四四
松本美濤　一三
松本志郎　二
松本雷一郎　一七
松本蔦齋　二〇
松本清助　三二
松本楓湖　三八
松本君平　一五
松本亦太郎　二〇
松本源太郎　三七
俱野廣玉　四〇
俱野力之助　二五
蒔田直吉　八
牧櫻雲　二四
牧常倫　二二
牧光葉　六
牧野伸顯　九
牧野廣吉　五九
牧野鐵九郎　一八
牧野平五郎　三九
牧口興一　四二
牧口義矩　一三
牧本彌太郎　一八
幕内菊太郎　六〇
正木德松　一六
正宮光大　三三
正森德太郎　三八
桝田友三郎　二三
增田義一　五三
增田增藏　五六
增田貞椿齋　四七
增田春水　五一
增田種松　三一
增田龜次郎　二六

船戸鑒吾　二四
船田弘道　一〇
船越春民　一二
福井雅香　六
福井繁太郎　二一
福井甚平　五
福井成美　一五
福井江亭　一六
福井庄八　二一
福原定雄　二九
福原花子　二五
福知繁次郎　八
福知海外　二一
福地戴五郎　三五
福岡敬堂　三八
福岡精一　一四
福田仁輔　七
福田きん　三五
福田兼吉　二六
福田幹輔　二四
福田靜處　二六
福田喜衛　三四
福田又一　一五
福田循誘　一八
福田浩湖　二四
福田梅溪　一〇
福田長次郎　二二
福谷元次　六
福永宇之四郎　二一
福澤三郎　五
福澤桃介　一五
福島儀助　一六
福島惣吉　二一
福島安正　二九
吹原九郎三郎　二五
吹田與助　八
富士岡文擧　一二
伏山敏文　三五
伏原利造　三八
普雪庵柳涯　一四

こ之部

小磯吉人　二六
小泉正義　二四
小泉義和　二六
小泉文助　一五
小泉和一郎　三四
小池學山　一八
小池勇　三
小出英延　三
小出儀一郎　三七
小早川四郎　二九
小濱美光　二七
小橋藻三衛　二五
小針常治　三一
小林德一郎　三一
小林良人　二五
小林清親　三〇
小林美鏡　一
小林吳嬌　二三
小林定三　九
小林卓齋　一二
小林信近　六
小林佐兵衛　三七
小林廣光　五七
小林芳樹　四
小林久吉　三
小林清香　四六
小林誠義　二二
小林桂助　一六
小林岩槌　二
小林重三郎　三
小林吉右衛門　九
小林宗延　三〇
小林善五郎　八
小林鉦次郎　一
小林延子　二九
小林長之助　一五
小林乙松　九
小林信八　一四
小西正一　五
小西助七　四七
小西功　五六
小西新右衛門　二五
小堀輌音　五四
小金井良精　四九
小妻啓眞　一一
小村大雲　三九
小室翠雲　五七
小久保喜七　四
小久保惠作　三
小山溫　四六
小山雲泉　二二
小山忠兵衛　一九
小山田喜庵　七
小山雪耕　五

増田伊作　四四
増成兵藏　三三
増山東里　四一
増本春道　三四
益井信　一〇
益頭峻南　五一
益田友雄　一八
益田香遠　二一
益田孝　五七
益田楳岳　四三
益田柳外　二四
益野晋三　三

け之部

計見東山　一
下條於菟丸　一
下條正雄　一一
峽謙齋　一

ふ之部

不破熊雄　一九
符阪庄右衛門　二三
豊道春海　八
武津八千穗　一〇
藤井美豐　二
藤井淵藏　三三
藤井雪田　四一
藤井包總　三四
藤井定介　一〇
藤井一康　五一
藤井兼次郎　一八
藤井丑之助　二一
藤井與四郎　五七
藤井春水　四三
藤井清次郎　二四
藤井金藏　三
藤井百太郎　一
藤井八重吉　一
藤原在翁　三
藤原省新　三
藤原元太郎　一一
藤岡貞治　一
藤川照齋　二
藤川友春　一
藤田四郎　二
藤田平太郎　一二
藤田若水　二
藤田松太郎　二六
藤田久太郎　三四
藤田善三郎　四
藤田久次郎　八
藤田紫雲　三六
藤田駒藏　三〇
藤田治右衛門　九
藤田正義　一七
藤田良緒　三三
藤塚魁石　九
藤波言忠　二二
藤浪壽得　三三
藤村九平　一一
藤村貞一　五
藤村清香　三五
藤野靜美　三三
藤野政高　一三
藤山雷太　五
藤山鶴城　二〇
藤間勘右衛門　一
藤間與四郎　二〇
藤間政彌　一六
藤間勘十郎　二
藤間房子　一四
藤江伊佐彦　二七
藤枝春雅　三四
藤澤利喜太郎　二二
藤木芳三郎　一三
藤島了穩　三一
藤本翠香　三二
藤本純吉　二五
藤本二洲　三二
藤本春吉　二七
藤本總次郎　一八
藤森憲司　一四
降旗元太郎　二八
降矢冲之助　二四
古市公威　二七
古橋東湖　一五
古川小三郎　三二
古川清一　三三
古谷たけ　二三
古谷雪山　七
古澤雪田　八
古澤重平　一九
深川喜次郎　一六
深谷錦岳　一三
船井長四郎　一四
船橋舟珉　四

小山友卿　一二
小山榮達　三〇
小山清兵衛　二
小山萬吉　五二
小町谷武雄　四四
小松崎茂助　九
小松楠彌　三四
小松雪山　五六
小松繁吉　一八
小松景和　四一
小松利三郎　一五
小松原英太郎　二七
小牧昌業　七
小間楳心　四三
小藤文次郎　三二
小寺謙吉　四二
小見山宗法　二九
小阪定次郎　四六
小阪梅吉　二八
小阪島郁　一
小阪芝田　一六
小峰邦壽　六
小宮桃溪　二二
小島伊之助　四四
小島泰次郎　一九
小島格　三〇
小島清　二一
小島重太郎　五八
小島景信　二六
小島鴻月　一一
小島吉之助　三〇
小森末三郎　一九
小菅劍之助　四八
小杉天外　一二
此木與三郎　三三
木島櫻谷　三五
古賀宗兵衛　八
古賀三千人　三七
古賀庸三　五一
古賀廉造　一四
古金德松　四五
古閑定　一一
古結喜太郎　三七
古在由直　一四
兒玉喜兵衛　四六
兒玉止　四八
兒玉彦太郎　三六
兒玉淳一郎　四四
兒玉林平　一九
兒島文義　三〇
兒島喜蘇　一一
後藤梅居　二六
後藤元朔　五八
後藤鐵二郎　二六
後藤義則　二
後藤貫道　四八
後藤貞平　一二
後藤太平　三三
後藤勝造　三五
後藤武夫　八
後藤牧太　九
後藤新平　三七
後藤一峯　五一
上阪月爲蔭　一四
上井金水　五〇
上田味秋簞　四五
島耕畝　二七
黃性田芳柳　三七
伍島吉平　一四
香西敬一　四八
香村周吉　四六
纈武　三六
巨勢小石　四八
講畑熊吉　三七
高良宗七　五
鴻池善右衛門　三一
肥塚龍　二五
幸田露伴　三一
幸田延子　六
幸野西湖　八
幸野莊平　二二
甲野業　二八
甲野　二〇
甲賀宣政　二〇
吳文聰（く）之部にあり　五一
吳森玉　三一
吳純仁　一九
吳道源　二一
黃仁榮　五三
黃喜烈　二六
黃文龍　三四
黃藏錦　四
黃鼎三　五二
黃戒三　三三
黃一　五九
辜顯榮　五〇
洪江南　一二
洪禮文　一八
洪輔臣　四〇

河野嶺藏　五〇
河野廣中　四九
鄉健重郎　三五
鄉誠之助　二二
日暮正彦　五二
日暮寬輔　五一
國分又勝　四五
國分青厓　五九
駒田小次郎　三
駒田脩甫　四五
越壽三郎　一八
越川平五郎　五四
越塚友邦　三八
近藤貞次郎　一七
近藤次繁　一三
近藤廉平　二七
近藤樵仙　四一
近藤正貞　二一
近藤多吉　一六
近藤鹿造　五三
近藤雪竹　四三
近藤伊作　五〇
近藤新十郎　一八
近藤良幹　四二

え之部

江幡美俊　一五
江原惣八　八
江原素六　六
江原甚三郎　六
江藤無逸　三
江藤茂　八
江戸又市　三
江智英　八
江上瓊山　一一
江川成之　一
江頭安太郎　九
江村勝太郎　五
江村隆章　一一
江間俊一　四
江木千之　三
江木時太郎　九
江木裏　一
江木翼　五八
江口駒之助　一〇
江口晉三　一九
江崎與右衛門　四七
江崎秀雄　一七
江見水蔭　二
江守襄吉郎　九
江角千代次郎　一三
手塚五郎平　二
手塚繁治　九
手塚太郎　一一
手塚丈平　一一
手塚正次　一三
手島精一　一四
寺西易堂　一一
寺西初太郎　二
寺尾幸吉　四
寺尾壽　一四
寺尾亨　一〇
枝德二　一二
寺垣精三　一二
寺田洪一　六
寺田甚與茂　五
寺田勇吉　九
寺田金次郎　二
寺田元吉　一〇
榎本積一　四
榎本遊谷　一
榎本與七郎　五
役花庵　七

て之部

鄭如關　二
鄭拱辰　七

寺田祐之　六
寺田織尾　一〇
寺田利吉　一二
寺内正毅　一
寺内銀三郎　一〇
寺野精一　六
寺松國太郎　四
寺崎廣業　八
寺嶋誠一郎　二
寺瀬曲川　五
照本肇　一三
豊島陽藏　六
出羽重遠　一二
出谷英一　一二
出浦力雄　六
勅使河原直次郎　四
田艇吉　七
田健次郎　一一

あ之部

安部廣助　六〇
安部幸兵衛　六六
安達仁造　一四
安達峯一郎　二八
安達顯　二三
安達謙藏　二
安達孫治　二七
安宅彌吉　三四
安樂兼道　二四
安樂勇十郎　三四
安土直次郎　六四
安東敏之　一六
安藤行藏　五八
安藤重次郎　二八
安藤玄戒　四一
安藤精軒　五〇
安藤太郎　九
安西湯次郎　三六
安念次左衛門　二六
阿部春峰　五二
阿部三男　一九
阿部初太郎　五
阿部兵熊　一四
阿部守太郎　三三
阿部吾市　五一
阿部興三郎　六六
阿部房次郎　四七
阿賀伊兵衛　五一
阿波加准二　二三
阿波權次郎　二
阿出川眞水　二七
味岡正義　三四
在原古阮　二四
縣紆武　三四
縣治郎衛　六四
足立健三郎　一六
足立文太郎　五八
足立忠八郎　二八
足立謙一郎　四一
會田澁次郎　五〇
藍谷芳藏　九
相川豊男　三六
相澤玄伯　二六
饗庭篁邨　五二
跡見玉枝　一九
跡見花溪　五
後宮新太郎　一四
有友蘭溪　三三
有地品之允　五一
有賀長雄　六六
有賀幽谷　四七
有田濃三　五一
有田儀助　一
有田喜一郎　六五
有國直七　一八
有山寅槌　六
有馬彦吉　三一
有馬彦次　五九
有馬賴之　六五
有末清重　五
有阪成章　五一
有坂貂蔵　三五
有澤江舟　五八
有本國藏　三七
有地多吉　五六
青山元　二七
青山牧太郎　三三
青山嵐通　三五
青山幸宜　五六
青山朗　二六
青柳榮司　三二
青柳忠次　四八
青柳信五郎　一三
青柳半次郎　一六
青木恒三郎　五〇
青木七郎　五〇

青木周藏　一
青木庄太郎　一二
青木逸岳　二
青木鋭太郎　五五
青木文峰　二八
青木權太郎　三
青木青雲　四六
青木仙年　一
青木壺春　二七
粟田駒吉　六八
粟田口定孝　二四
粟津清亮　四
粟屋瑞一　一七
粟屋鐵二郎　一一
粟飯原錄次郎　九
赤羽隆民　四〇
赤尾福松　五九
赤尾元一　五三
赤尾寛太　二
赤田瑛一　二九
赤塚自得　六七
赤松蓮城　一一
赤松長祥　六〇
赤阪龜次郎　六五
赤城維羊　一
赤司初太郎　二
渥美赤蓬　五五
熱海孫十郎　二八
姉川好風　三
東與市　四六
東治三郎　一
東宗春　二七
東日出子　六八
荒井寛方　二四
荒井德藏　四
荒井文二郎　一七
荒井周朋　一一
荒井泰治　九
荒尾金吾　四〇
荒川宗助　五九
荒川五郎　五三
荒川重吉　二
荒川義太郎　二九
荒川嘉之次　六七
荒川喜代次　一一
荒川青洲　六〇
荒卷利蔭　六五
荒木十吼　八
荒木寛友　三九
荒木和一　六
荒木寅三郎　五五
荒木萬三郎　五六
荒木探令　三五
荒木寛献　一一
嵐吉三郎　二一
嵐巖笑　四七
嵐傳五郎　四五
嵐橘三郎　四〇
嵐德三郎　一四
綾部惣兵衛　一七
天畠順助　四
天谷千松　四七
天野爲之　四五
天野光五郎　五二
天野忠順　四六
天野景福　六七
天野與三郎　一〇
天野與平　三
天野泰助　四六
天野健太郎　一二
天野得三　九
天野千代丸　四一
天崎紹國　二九
尼子忠藏　五三
朝日明堂　四六
朝田又七　六〇
朝田新兵衛　二三
朝賀喜一　八
朝倉龍洞　六八
朝吹英二　五七
淺井政雄　五五
淺井鴻村　二二
淺井寛哉　六八
淺羽靖　二一
淺川登久丸　二五
淺香千速　三六
淺田勝次郎　三二
淺田德則　二二
淺田一夫　二八
淺野長道　三一
淺野總一郎　六八
淺野應輔　二〇
淺野吉次郎　三三
淺野武雄　三四
淺野哲夫　五七
淺野長太郎　六二
淺野長太郎　五五

淺野善次　二五
淺野陽吉　五九
淺山富之助　一七
淺木直之助　一五
淺見又藏　三六
淺見清壽　二一
麻田金兵衛　六六
麻植房次郎　二二
麻野楠松　三二
秋葉大助　五二
秋岡義一　六
秋山斷　一八
秋山白巖　四九
秋山儀兵衛　四
秋山覺次郎　四一
秋山如卿　一〇
秋元格之助　一六
雨森菊太郎　三
雨森文園　二六
飴岩有民　六四
芦田眞七　一
芦野楠山　六七

さ之部

佐原平也　二五
佐橋春邦　五九
佐藤景方　一七
佐藤嘉三郎　一五
佐藤茂　三六
佐藤はま子　二一
佐藤大忍　六六
佐藤一景　二二
佐藤萬藏　三二
佐藤紫烱　五二
佐藤興應　六
佐藤興助　一八
佐藤雲韶　四九
佐藤翠溪　四
佐藤米翁　四一
佐藤太三郎　一〇
佐藤秀明　一六
佐藤豊太郎　三
佐藤秀廣　二六
佐藤一秀　六四
佐藤耕方　一
佐藤芳松　六七
佐藤華岳　
佐藤喜八郎　
佐藤昌介　三三
佐藤千枝子　二
佐藤三吉　二五
佐藤豐次　二
佐藤進　二二
佐保晋圓　三二
佐竹作太郎　三九
佐竹永邨　四六
佐竹藍川　二
佐竹斧三郎　二二
佐多愛彦　三一
佐野彌藏　四三
佐野春吾　四
佐野彌助　二七
佐野與兵衛　四五
佐久間精一　四三
佐久間松陰　三五
佐久間鐵園　四六
佐久間春　四七
佐久間金七　四六
佐久間左馬太　八
佐山長三郎　一八
佐々木林風　四二
佐々木高榮　三二
佐々木蘭齋　四九
佐々木仙一　一
佐々木義夫　一六
佐々木紀綱　二六
佐々木義房　四八
佐々木盛文　五
佐々木小華　二七
佐々木政次郎　一七
左右田金作　一二
齋藤仙也　四九
齋藤吉十郎　二四
齋藤十一郎　三二
齋藤宇一郎　四
齋藤政吉　六
齋藤政吉　四二
齋藤正之　四三
齋藤實　二二
齋藤福之助　一四
齋藤城之助　三七
齋藤和三郎　三六
齋藤松三　二〇
齋藤弓弦　一二
齋藤芳洲　四〇
齋藤　　三四

齊木修亭　四七
西園寺公望　一七
西能源四郎　八
西鄕寅太郎　二三
西鄕金治　二三
里見四郎　四二
里見雲嶺　一二
里見義正　四五
澤來太郎　一九
澤井萬吉　二六
澤井市造　五〇
澤原精一　三〇
澤原俊雄　七
澤原清子　四四
澤原爲綱　二三
澤渡乾齊　九
澤田誠一郎　四九
澤田金太郎　二八
澤田龜太郎　一〇
澤村源之助　三
澤村訥子　三四
澤村喜久八　二〇
澤村喜久代　四
澤村宗十郎　四〇
澤山寛民　四五
坂勘右衛門　一
坂井安次郎　二六
坂井久良岐　三三
坂井紅兒　二七
坂部秀夫　三
坂上譽二　二六
坂田耕雪　三六
坂田習軒　一四
坂田文吉　一
坂谷芳郎　四三
坂口拙三　四六
坂本義夫　一一
坂本定次郎　四〇
坂本雲谷　一八
坂本政吉　二五
坂本賀治馬　一
酒井如關　一七
酒井利三郎　一二
酒井賀一郎　二〇
酒井包義　一七
酒井道一　三六
酒井作次郎　四八
相馬國子　三八
相馬永胤　五
榊原大定　二二
榊原德次郎　四
榊原繁　一三
榊原經武　三〇
實吉安純　一六
眞田實淨　一六
櫛瀨軍之佐　三四
櫻井貞次郎　三一
櫻井雲洞　二五
櫻井賢一郎　一一
櫻井勉　四七
櫻井錠二　二五
櫻井源四郎　二一
櫻田德太　二四
櫻間伴馬　四一
櫻木勇吉　一一
三枝米太郎　三九
三田清三郎　三五
三遊亭圓窓　一九
笹清次郎　一五
篠野甚四郎　二八
蔡惠如　四〇

き之部

紀俊秀　四五
木峻　二二
木原通德　三三
木戸豐吉　二七
木戸孝正　三
木谷圭章　二六
木田三郎右衛門　一四
木蘇岐山　一
木津太郎平　四三
木津谷吉兵衛　四六
木付篤　一一
木村又三郎　四〇
木村福太郎　一八
木村春甫　二五
木村孝藏　一
木村久太郎　三九
木村德太郎　四一
木村己之助　一二
木村甚平　一七
木村貞　二〇
木村勘兵衛　三六
木村得善　三八

木村省吾 一四
木村勝美 一一
木村倉太郎 一二
木村久吉 四九
木村常諦 二一
木村喬一郎 一三
木村香雨 八
木村福藏 一五
木村光年 二二
木村順孝 三
木村仙太郎 二〇
木村利右衛門 二六
木村清四郎 三七
木村春東 四一
木村叅市 四三
木村誓太郎 四〇
木村格之輔 一〇
木内半古 四六
木内重四郎 六
木口金太郎 一八
木山巖太郎 四二
木山精一 一一
木俣文四郎 四四
木越安綱 三六
木下學而 二七
木下淑夫 三五
木下謙次郎 二五
木下新三郎 四〇
木下房之丞 二六
木下忠次郎 二九
木下山橋 三三
木元源吉 四一
木元新太郎 四六
木本光三郎 三三
喜多暉月 四〇
喜多重兵衛 三一
喜多萬右衛門 四五
喜多文子 四五
喜多六平太 三九
喜多林平 三一
喜樂亭一 四
喜多島豊三郎 一四
金令舍畊哉 二七
錦光山宗兵衛 二八
桐岡金三 二六
桐竹紋十郎 三七
桐山可造 四二
桐淵鋭次 三二
桐本佐兵衛 三
清岡長言 九
清浦奎吾 三八
清棲家敎 三〇
清元延菊勢子 三三
清元延久滿 二九
清元登志太夫 二七
清元延葉滿 四一
清元貴志太夫 四六
清元延壽太夫 三三
北井峰吉 二
北大路實信 三〇
北川乙次郎 二七
北川禮弼 二六
北川年雄 二四
北川純一 一四
北川金嶙 二八
北垣靜處 一五
北垣國道 一七
北村鋭太郎 一一
北村精造 二三
北村正次郎 四七
北村四海 三三
北村立 三九
北浦卯之助 四三
北野恒富 一
北野鐵 五〇
北里柴三郎 四九
北代達枝 二七
北代勝 二九
北島多一 一四
北島佐八 一四
吉川靈華 五
吉川重太 九
鬼頭道周 四一
氣賀賀子治 二二
京山若丸 二八
京山吾市 三七
京山小圓 四六
京山愛三 一五
京極高德 一五
菊地武夫 八
菊地壽人 一五
菊地魯岳 二四
菊地武德 九
菊地大麓 一六
菊池契月 二二
菊池芳文 三二

菊池長四郎 二三
菊池侃二 一七
菊川流雪 三〇
菊島生宜 二三
岸九岳 二一
岸禧一 四七
岸米山 一一
岸景 四四
岸井他四郎 三六
岸畑久吉 七
岸上鎌吉 二八
岸田光太郎 四五
岸浪柳溪 一九
岸野次郎 二一
岸澤仲助 四七
岸澤式佐 四二
岸本豐太郎 一三
岸本辰雄 一〇
岸本能武太 七
岸本雄二 七
貴志安次郎 五
杵屋彌重士 二九
杵屋六繁 一三
杵屋勝太郎 四九
杵屋伊子 二三
杵屋佐登壽 一七
杵屋六米 三〇
杵屋和歌伊代 二三
杵屋六太郎 二一
杵屋しう 四七
玉龍亭一山 一一
玉敬祥 四四
許照煌 三六
許梓桑 七
許藏春 二八
許松春 四五
仇聯青 一九
狂雷堂顧十 二一
近郷重孝 四七
肝付兼行 四二

ゆ之部

湯原元一 一〇
湯池定基 七
湯地定監 五
湯川梧窓 二九
湯川寛吉 一三
湯川芳山 四九
湯川安太郎 二八
湯川松堂 一六
湯淺藤市郎 四二
湯淺竹之助 三五
湯淺了雅 一六
湯澤源助 二四
湯本武比古 四一
由上又兵衛 二〇
由木尾雪雄 四六
抽木慶二 一八
遊木保太郎 二〇
結城國太郎 三
百合本安太郎 三八

め之部

目賀田種太郎 三七
目黒喜五郎 三
目黒末之亟 二
目黒和三郎 一
目田村古眞 一
妻鹿友樵 四

み之部

三谷軒秀 六
三谷有信 六
三谷兵吉 一
三原德次郎 四
三原宗浤 三
三輪猶作 一二
三輪信次郎 五
三輪繁次郎 六
三輪德寛 五
三輪經年 一
三輪田眞佐子 六
三輪田元道 三
三輪富太 二
尾吳石 一
河貞次郎 二
上參次 四
上治三郎 一
好藍石 二
好德三郎 三七
好芳石 三
好賢古 一
好彌六 二
由仁作 一
田村古眞 一
谷軒秀 五五
谷有信 五八
谷兵吉 五〇
土忠造 七
浦 三五

三浦司　一七
三浦弘夫　四六
三浦碧水　九
三浦北峽　四八
三浦石齋　一〇
三浦守治　一八
三浦梧樓　一三
三浦信造　二
三浦盛德　一七
三浦義住　四四
三浦竹泉　四一
三宅右一　五一
三宅震介　一五
三宅宗淳　二四
三宅秀　二六
三宅雄次郎　一六
三宅吳曉　四八
三宅陽溪　三
三宅米吉　二二
三木清七　五四
三木茂八　二五
三木彌兵衛　三
三木制　五
三木與吉郎　二五
水上源吉　二
水田竹圃　一三
水田靜廣　五六
水田琢藏　二八
水谷甚吉　二七
水谷芳年　三五
水谷白龍　五一
水谷嘉六　二七
水谷彰　三〇
水谷弓夫　一一
水谷市郎右衛門　一五
水谷川忠起　二
水野萬資　五二
水野源六　三七
水野鍬次郎　三六
水野富三郎　七
水野春　八
水野敏之亟　一二
水野錬太郎　一〇
水野鉉一　五一
水野南北　五二
水野鈴太郎　四四
水野清孝　二三
水町袈裟六　四六
水野早苗　四七
水木哥若　二二
水木歌元　二一
水品平右衛門　三一
美濃部貞雄　一八
美濃部俊吉　六
美濃部達吉　一七
美吉竹馬　二七
美輪平一郎　三〇
御喜喜右衛門　一一
御法川直三郎　一五
御宿喜太郎　三八
御手洗忠孝　四
御手洗南陽　五
溝口安之助　九
溝口喜六　七
溝部有山　一三
溝呂木華谷　六〇
光藤龜吉　三〇
光谷要次郎　三五
光山衛　二三
嶺田久七　三二
峰松示芳　五二
峰嶋竹泉　五七
水上房吉　五

皆川小富士　一九
南嘉兵衛　一五
南米岳　二二
南鷹次郎　五九
南坊城良興（な之部を見よ）
南方富楠　二六
南川治三郎　二八
南口立藏　二六
南楠太郎　五二
宮原二郎　三九
宮原鶴之助　五四
宮原一人　五四
宮原幸三郎　五七
宮原恒一郎　一三
宮原正喬　三四
宮西惟助　五六
宮部金吾　四〇
宮地茂助　四九
宮地巖夫　五〇
宮智一男　三八
宮川松安　四七
宮川香山　五六
宮川久次郎　五四
宮川保全　四六
宮川鐵次郎　一九
宮田貞吉　一五
宮田政次郎　二二
宮武勢藏　五九
宮武佐十郎　二六
宮內乙三郎　三八
宮內得千　二六
宮內一　二
宮內翁助　五二
宮內十郎　三九
宮野直道　五四
宮古啓三郎　五四
宮崎求日庵　五七
宮崎八十八　一三
宮崎彌三郎　三四
宮崎啓三郎　五六
宮崎九平　四〇
宮崎平七　四九
宮崎宗健　五〇
宮里正靜　三八
宮澤長治　四七
宮北自久　五六
宮嶋義信　五四
宮下德三郎　四六
宮下一清　一六
宮下治之助　一六
宮本文子　八
宮本甚七　三二
宮本治右衛門　三一
宮本虎嘯　三四
宮本包則　三七
都京德　三九
都家三勝　四三
右田年英　四三
翠川鐵三　四五
滿谷國四郎　三三

し之部

白石文吉　三
白石良藏　一六
白石博康　一三
白石松擧　三八
白男川實福　六〇
白井一太郎　一六
白井壽美代　四五
白井壽雄　四六
白井卜星子　一八
白倉吉朗　二三
白松六治郎　四二
白莊司芳之助　一
白須心華　三四
盧入月堂　四三
盧原每之亟　二
盧田眞　一一
盧崎逸陵　一三
盧崎利平　二
盧崎宗郎　二五
篠佐太郎　三六
篠卯之助　四七
篠原定吉　一六
篠原彌次兵衛　二八
篠川利祐　一七
島伊兵衛　二四
島小一郎　一一
島德平　三一
島川久吉　一八
島田墨仙　三六
島田文章　二一
島田保之助　三七
島田登美　二五
島田雅雄　二二
島田神水　一九
島田三郎　二二

島田よね　三七
島田東稻　一五
島田静三　四
島津忠重　五
島村抱月　二六
島村善助　一二
島内松南　一一
島崎柳塢　二九
島本風外　七
島本棠枝　六
清水白雲　二六
清水辰三郎　二五
清水照華　二三
清水吉兵衛　四
清水公賢　四
清水清風　一
志甫三郎平　三
志賀重昂　三二
志方鍛　一
志貴小岳　八
志村源太郎　三一
柴田隆一　一九
柴田南玉　三四
柴田耕洋　三〇
柴田邦彦　一九
柴田友藏　一三
柴田甚四郎　二〇
柴田弥哉　三二
柴田彌三郎　一六
柴谷兼三郎　三〇
柴崎亘和　三二
芝景川　一七
芝山翠圃　二〇
椎塚蕉華　一〇
椎名僊山　二
椎名直胤　三二
自念金藏　一〇
庄田晋太郎　三
庄田耕峰　三
庄田鶴友　七
松旭齊天勝　六
松月堂呑玉　三
鹿多正規　一二
品田正壽　一四
静間小次郎　三六
四條隆愛　二
宿澤欒　一四
時雨庵古笠　二七
釋大眞　一五
式守蝸牛　二〇
重田榮治　二三
重元平八　二八
滋岡從長　九
秋夜庵勝次　一九
春秋庵準一　九
七五三幸輔　二七
宍倉晴軒　八
澁谷天外　二一
澁谷幸太郎　二四
澁谷彌一郎　二六
澁澤榮一　三四
下河原政治　一〇
下田歌子　三六
下村市太郎　七
下村玉廣　一〇
下村正太郎　六
下村專之助　八
下村實栗　三一
下條鏘太郎　五
下阪藤太郎　一八
新海竹太郎　二七
新谷蓼石　一五
新莊直陳　二〇
深翠亭川柳　二三
周安邦　二八
徐杰夫　九
謝群我　一九
實川延次郎　九

ひ之部

飛田周山　二〇
肥田平次郎　二四
肥田直次郎　二六
比留間彦作　五
比志島義輝　一〇
樋詰正作　三六
樋口茂助　七
樋口仁三郎　一〇
樋口孝道　六
日吉市之助　八
日高秋父　二九
日高壯之亟　三一
日向輝武　五
日南田宇八郎　一八
日比表吉　六
日比野寛　一五
日比忠彦　一四
日比翁助　一四
日比谷平左衛門　八
日比久太郎　一一
土方久元　八
土方寧　一一
土方篠三郎　一四
土方久徵　一四
東爽五郎　一二
鰭崎英朋　三二
平井棣仙　二七
平井郁太郎　二一
平井熊三郎　三〇
平井順吾　一五
平井三郎　二八
平井省三　一六
平井權七　一四
平井晴二郎　一八
平井毓太郎　一五
平井正春　二一
林探溟　二三
戸鄰　二五
沼專藏　五
沼騏一郎　一二
沼眞卿　二〇
尾賛平　一六
尾竹霞　一二
岡萬次郎　二九
岡廣高　四
岡好文　二
東助　三
重光　一八
田吾一　二八
田定之助　三一
田盛胤　一九
田保正　一七
竹峯　二六

も之部

松三郎　七
澤興一　四
島松尾　三五
島鼓峰　一〇
姫島竹外　一九
久川善太郎　五〇
久松定弘　二四
菱川吉衛　二一
菱田保正　三一
菱田竹峯　二六
茂木習古　六
茂木鋼之　六
茂木保平　三
茂野吉兵衛　一七
諸星成章　一九
諸井春畦　一六
諸井恒平　二
諸井白峯　一六
野又十郎　二九
野溫重　一八
櫛田仲　一
櫛田成信　一七
山信　八
山英三　二一
山豊實　一六
山保太郎　九

元田肇 一二
元良勇次郎 一四
望月磯平 二
望月金鳳 一五
望月玉泉 一七
望野秀溪 一
望月圭介 一〇
森國三郎 三
森雄山 二
森琴石 二八
森鳳聲 二六
森部發 三〇
森顯禪 二三
森松次郎 一六
森春岳 二三
森禎藏 八
森正因 一八
森律子 二五
森確也 三
森寛一 四
森湖邨 六
森晋之助 八
森藤助 五
森半逸 二二
森成 一二
森青山 一四
森廣陵 二
森丘覺平 一五
森林太郎 一〇
森井喜弋郎 一
森戸鉦太郎 三
森岡顯道 二
森岡眞 二八
森岡平右衛門 二六
森脇竹藏 三〇
森川脩藏 二三
森金周學 一六
森田俊左久 二三
森田三郎右衛門 八
森田吉之助 一八
森田茂 二五
森田吉兵衛 三
森田三郎 四
森田音松 六
森田靜夫 八
森田勇次郎 五
森田五郎 二二
森田とり子 一七
森田卓爾 一四
森田金藏 二二
森村宜稻 一〇
森村平左衛門 九
森久保作藏 四
森山儀文治 一〇
森下忠恕 二一
森島庫太 三三
森本東閣 一四
森本慶明 二三
森本清兵衛 五
森本彌壽 二七
森濱吉 二四
守田勘彌 一〇
守屋此助 一三
守屋善兵衛 二一
毛利敬定 二五
毛利敬武 二五
毛利昌敬 二八
毛利廣品 一二
物集高見 八
籾山邦季 二
紅葉山喜三郎 二九
桃川燕林 二四
桃川若燕 三〇
門田增太郎 五
門田增太郎 二九

せ之部

瀬川露城 二六
瀬川昌耆 一一
瀬川喜七 九
瀬間源平 七
瀬尾萬二郎 二六
妹尾武 一八
妹尾 二四
清風與平 二六
薛允宗 二九
雪中庵宇貫 一三
說田彦助 二
關善次郎 一四
關直彦 五
關和知 七
關角之助 二〇
關信之助 一一
關甚吉 九

關民山 一二
關盧山 六
關藤次郎 一四
關新右衛門 一七
關新吾 一七
關銀作 八
關戸守彦 一二
關川清兵衛 一一
關田華亭 一六
關口眞也 三
關口一也 二
關口彦三 九
關屋祐之助 一三
關谷鐵太郎 四
關山遊月 三
關澤霞庵 一〇
千賀又市 一七
千田軍之助 一三
千田峯吉 一
千田古梅 三
千家尊福 四
僊田研雲 一
泉田鑄吉 五
仙石政固 二
仙石政敬 一二
施芳德 六

す之部

諏訪鎗太郎 一七
須原常次郎 八
須藤德爾 一二
須藤義右衛門 一一
須藤治郎 一六
須網鉞太郎 三
末吉勘四郎 二
末永清 九
末松謙澄 一三
末廣茂吉 四
角藤鐵吉 三
角谷源之助 一〇
角谷定吉 一七
陶尾祖山 一三
菅次郎 一
菅原傳 三
菅谷大鳳 一四
菅野新作 五
菅野武次郎 二
菅野傳右衛門 二
菅森夢庵 六
鈴置保長 一
鈴江南景 五
鈴木小右衛門 二五
鈴木孫一郎 五
鈴木秀芳 二
鈴木學 一二
鈴木華邨 三一
鈴木孔友 八
鈴木清九郎 三〇
鈴木直之亟 五
鈴木濟美 二
鈴木松旭齋 一
鈴木祐次 一六
鈴木古參 一〇
鈴木榮曉 二四
鈴木彌兵衛 二四
鈴木空如 二一
鈴木可明 六
鈴木雨溪 一三
鈴木清七 五
鈴木德子 一五
鈴木久五郎 一七
鈴木拳山 一七
鈴木寛豊 五
鈴木一翠 二
鈴木政吉 一七
鈴木東洲 二一
鈴木源藏 二二
鈴木鉞次郎 一六
鈴木捨之助 二八
鈴木千代 二七
鈴木佐七 一四
鈴木松翠 二五
鈴木清 三〇
鈴木源之助 二〇
鈴木源助 一六
鈴木義彦 一七
鈴木田美靜 一九
助川貞二郎 二三
杉原左馬介 二一
杉原龍子 一三
杉田盛 一〇
杉田一貫 一九
杉田定一 二四

杉溪言長 二一
杉浦幸治 九
杉浦孝次郎 二二
杉浦要太郎 三
杉山吉貞 一二
杉山岩三郎 八
杉山市三郎 二〇
杉山小兵衛 三〇
杉山令吉 二〇
杉山浪 一八
杉山源太郎 六
杉山秋谷 九
椙山正弐 二九
杉阪六三郎 二九
杉崎雪英 八
杉島牧太郎 一五
杉本音吉 七
杉本景洲 二六
杉本新左衛門 四
杉本卯兵衛 一四
杉本碧海 一八
杉森與吉 三七
杜友吉右衛門 一六
杜田長作 一二

隅田廣吉 一八

六四

補遺目次

い之部

伊藤明義 三
市川荒五郎 一
市川右團次 一
市川市藏 二
市川齋入 一
市川權三郎 一
市川吉三郎 二
岩本富三郎 一
井上圓了 二
今井直 二
滝田兵三郎 二

は之部

馬場斧吉 二
春田宣德 三
花形喜一郎 四
花柳芳三 三
花柳輔次郎 四
早川與吉 四
早速整爾 三
阪本百喜知 三

に之部

西久保自愛 四

と之部

戸倉瀧三 五
豊川光長 五
豊川秀靜 五
豊竹巴太夫 四
豊澤圓平 四
豊澤猿糸 六
豊澤竹三郎 五
豊澤廣作 四
時任武 五
常盤津佐登美太夫 四
董松秋 五

ち之部

知野根好光 六
張作人 六
張家坤 六
陳鴻鳴 六
陳采臣 六

り之部

季文樵 七
林啓我 六
林列堂 七
林熊徽 六

を之部

小川一眞 七
越智通孝 八
岡田秋湖 八
奥戸善之助 八
大野吉治 八
大隅太夫 八

わ之部

和田貫水 八
谷口巖 八

か之部

加藤藤左衛門 九
川邊旭陵 九
川ノ邊一朋 九
片岡我童 九
金子圭介 九

よ之部

米田虎雄 一〇
吉川準 一〇
楊煥彩 一〇
楊炳煌 一〇

た之部

田中嚴道 一三
高井文平 一二
高橋凌雲 一〇
高橋善雄 一二
高橋春 一二
高橋保志 一二
高橋秋華 一三
竹本南部太夫 一三
竹本七五三太夫 一三
竹本伊達太夫 一三
竹本津太夫 一二
竹本錦太夫 一三
竹本春子太夫 一三
竹本越路太夫 一三
金子竹次郎 九

竹本津賀太夫　一〇
竹本競太夫　一一
村田かく子　一四
村岡鎌一郎　一四
村瀬勝太夫　一五

そ之部

蘇有志　一三
蘇孝德　一三

う之部

哥澤芝金　一五
梅澤隆眞　一五
内海藤太郎　一五

つ之部

鶴澤松雨齋　一三
鶴澤才太郎　一三
鶴澤清六　一三
鶴澤清七　一三
土橋熊次郎　一三

の之部

野澤吉兵衛　一五

ね之部

根尾忠次　一四

な之部

中村龜江　一四
中村六三　一四
中村駒助　一四
中島芝若　一四

む之部

皇族

有栖川宮威仁親王

殿下は故有栖川一品熾仁親王殿下の第四の王子にましまし故大動位功二級熾仁親王殿下の御實弟に當らせられ文久二年壬戌正月十三日を以て御誕生あらせらる、御舊名稠宮明治十一年八月　今上天皇陛下の御猶子にならせられ熾仁親王殿下の御繼嗣とならせ給ひ御名を威仁と賜はり尋で親王宣下三品に叙せらる、十二年七月英國旗艦アインジュク號乘組被仰付十二月海軍少尉に任じ英國へ留學を命せらる十六年六月御歸朝後海軍大尉に進ませられ扶桑艦分隊長、參謀本部海軍第一局課員等に歴補せられ十九年少佐に陞らせらる尋て大勳位に叙し菊花大綬章を賜はる爾來海軍參謀本部出仕、葛城艦長心得、同艦長、高雄、千代田の諸艦長等に歴補あらせらる廿六年横須賀鎮守府海兵團長に補せられ日清の役海軍大佐松島艦長として威海衛に激戰せらる翌年四月橋立艦長に轉補せられ南征の途に就かせらる御凱旋後少將に陞任せられ功四級金鵄勳章を賜はる爾來海軍砲術練習所長、常備艦隊司令官、大喪使長官等の職務を執らせ給ふ三十年四月英皇即位六十年祝典に御參列あらせらる此年八月御歸朝後海軍司令部出仕兼海軍將官會議員に補せられ三十二年中將に進ませらる三十四年十一月特に終身現役に列せしめられ給ふ三十七年四月海軍大將に御昇任あらせらる翌年三月獨逸國皇太子御結婚式に御參列あらせられ八月御歸朝あらせらる三十九年十二月孝明天皇、英照皇太后御式年に御名代に立たせ給ふ此年十二月日露役の功を以て功三級金鵄勳章を叙賜せらる現に軍事參議官及議定官の職に在らせ給ふ

（御本邸東京麹町區三年町五、電話新橋七八六、一三一〇）

伏見宮貞愛親王

殿下は故一品邦家親王殿下第十四の王子にましまし安政五年戊午四月二十八日を以て御誕生あらせらる、文久二年十一月伏見宮相續仰付らる、明治四年三月親王宣下尋て二品に叙せられ八年一月陸軍中尉に任せられ十二月勳一等に叙し旭日大綬章を賜ふ九年十二月議定官に兼補せられ西南の役征討總督本營附として出征し給ひ御凱旋後陸軍大尉に任じ爾來陸軍士官學校出任、近衛局出仕、參謀本部出仕等

に歴補し十四年十一月歩兵少佐に任じ議定官故の如し十七年中佐に陞任せられ翌年歐洲へ差遣の命あり御巡遊一年にして歸朝し給ふ十九年十二月大勳位に叙し菊花大綬章を賜はる二十年十一月近衛歩兵第四聯隊長に補じ歩兵大佐に任せらる二十二年九月第三回内國勸業博覽會總裁仰付らる二十五年十二月少將に陞任せられ歩兵第四旅團長に補せらる日清の役威海衛、金州等各地の戰闘に參與あらせられ進んで南征の途に上り御凱旋後功三級に叙し金鵄勳章を賜はる尋で歩兵第一旅團長に補せられ二十九年三月露帝戴冠式に參列あらせらる三十一年十月中將に進ませられ歩兵第十師團長の職に就せられ三十四年四月更に第一師團長に補せらる日露の役旅順攻圍軍師團長として出征し三十七年六月陸軍大將に陞進せられ此年九月英國へ差遣の命を拜し翌年一月歸朝し給ふ三十九年十二月功を以て功二級金鵄勳章を叙賜せらる四十年二月英國へ差遣の命あり

此年七月歸朝し給ふ尋で第二第七第八師團特命檢閲使を命せらる現に軍事參議官及議定官の職にあらせ給ふ

御繼嗣博恭王殿下は貞愛親王殿下の第一王子にましまし明治八年十月十六日を以て御誕生あらせらる夙に海軍兵學校を卒業し給ひ尋で獨逸國海軍大學校に入せられ明治二十六年卒業後海軍少尉候補生を命せられ歸朝後嚴島分隊、松島乘組海軍砲術練習所學生、吳鎮守府水雷艇隊附、同隊艇長心得、富士分隊長等の任務に就せ給ふ三十八年五月韓國へ差遣の命を拜し此年六月歸朝し給ふ尋で大勳位に叙し菊花大綬章を賜はる翌年五月浪速艦副長心得に補せられ九月海軍中佐に陞任し浪速、春日等副長の職を執せらる三十九年十二月日露役の功を以て功四級金鵄勳章を叙賜せらる四十年二月海軍大學校選科生にならせられ次で選科生を免じ英國に駐在被仰付四十三年十二月大佐に進ませらる現に朝日艦長の職を執らせ給ふ

（御本邸東京市麹町區紀尾井町四、電話特長番町九九七、五〇八）

華頂宮博忠王

殿下は伏見宮御繼嗣博恭王殿下の第二王子にましまし伏見宮貞愛親王殿下の御孫に當らせ給ふ、明治三十五年一月二十六日を以て御誕生あらせらる父宮博恭王殿下曩に華頂宮家を繼がせられしも御生家に復歸あらせらるゝに當り殿下入りて華頂宮家を繼がせ給ふに至る現に學習院に入り御研學あらせらる

（御本邸東京市芝區三田臺町一ノ五、電話芝三七）

山階宮武彦王

殿下は故大勳位功四級山階宮菊麿王殿下の第一王子にましまし明治三十一年二月十三日を以て御誕生あらせらる現に學習院に入り御修學あらせらる

（御本邸東京市麹町區富士見町五ノ一、電話長番町一一一）

賀陽宮恒憲王

殿下は故大勳位邦憲王殿下の第一王子にましまし明治三十三年一月二十七日を以て御誕生あらせらる現に御修學中にあらせらる

（御本邸京都市上京區下立賣門御苑内、電話長三九五）

久邇宮邦彦王

殿下は故大勳位朝彦親王殿下の第三王子にましまし明治六年七月二十三日を以て御誕生あらせらる、御舊名世志麿後御父親王殿下の御繼嗣とならせられ久邇宮と稱し邦彦と御改名あらせ給ふ夙に學習院、成城學校へ御通學あらせられ更に陸軍士官學校に入らせ給ふ明治二十六年十一月勳一等に叙し旭日桐花大綬章を賜はり二十九年卒業直に陸軍歩兵少尉に任せられ第三師團歩兵第六聯隊附とならせらる三十二年二月中尉に進ませられ尋で陸軍大學校へ入學し三十四年三月大尉に陞任せられ第六聯隊中隊長に補せらる翌年近衛歩兵第三聯隊附に轉補あらせらる此年陸軍大學校卒業遊ばされ三十六年十一月大勳位菊花大綬章を叙賜せらる尋で參謀本部々員に補せられ少佐に進ませらる三十九年十二月日露役の功に依り功四級に叙し金鵄勳章を賜はる四十年四月外國駐在被仰付翌年四月中佐に昇任し四十三年十一月大佐に任せられ歩兵第三十八聯隊長とならせられ現に其職に就せ給ふ

（御本邸京都市上京區東櫻町二七、電話二七一四、二七一八、長九五五）

（御別邸東京市麹町區一番町二、電話番町二二、長六三五）

梨本宮守正王

殿下は故大勳位朝彦親王殿下の第四王子にましまし明治七年三月九日を以て御誕生あらせらる、御舊名多田十八年故梨本宮三品守脩親王殿下の御繼嗣とならせ給ふ、十九年三月陸軍幼年學校へ御通學遊され此年守正と御改名あらせらる二十七年卒業し給ひ翌年陸軍士官學校へ入學し尋で勳一等旭日桐花大綬章を叙賜せらる二十九年士官學校卒業し給ふ三十年陸軍歩兵少尉に任じ第十一聯隊附に補せられ三十二年二月中尉に進ませらる三十三年士官學校附仰付られ翌年三月大尉に陞任し士官學校教官に補せらる三十五年御見學の爲め歐洲へ出張あらせらる三十七年十一月大勳位に

叙し菊花大綬章を賜はり尋て少佐に昇任し三十九年五月再び歐洲へ出張遊ばさる此年十二月日露戰役の功に依り功四級金鵄勳章を叙賜せらる四十年四月外國へ御駐在被仰付翌年四月中佐に任じ四十三年十一月大佐に進ませられ歩兵第六聯隊長の職に就かせ給ふ

（御本邸東京府豐多摩郡澁谷町元青山北町七ノ二、電話芝八）

朝香宮鳩彦王

殿下は故大勳位朝彦親王殿下の第八王子にましまし明治二十年十月二日を以て御誕生あらせらる三十九年三月御分家遊ばせられ朝香宮の御稱號を賜ふ此年六月陸軍中央幼年學校卒業し給ひ尋て陸軍士官學校へ入學遊ばさる四十年十一月勳一等に叙し旭日大綬章を賜はる翌年十二月陸軍歩兵少尉に任じ近衛歩兵第二聯隊附に補せらる四十三年十二月中尉に進ませられ同聯隊の任務を執らせ給ふ

（御本邸東京市芝區高輪西臺町一、電話芝六八四）

東久邇宮稔彦王

殿下は故大勳位朝彦親王殿下の第九王子にましまし明治二十年十二月三日を以て御誕生あらせらる、三十九年十一月御分家遊ばせられ東久邇宮の御稱號を賜ふ此年六月陸軍中央幼年學校卒業し給ひ尋て陸軍士官學校へ入學遊ばされ四十一年四月勳一等に叙し旭日大綬章を賜はる此年十二月陸軍歩兵少尉に任じ近衛歩兵第三聯隊附に補せられ四十三年十二月中尉に進ませられ現に同聯隊の職を執らせ給ふ

（御本邸東京市麻布區東鳥居坂町一二、電話芝七一四）

竹田宮恒久王

殿下は故大勳位陸軍大將能久親王殿下の第一王子にましまし明治十五年九月二十二日を以て御誕生あらせらる、三十九年三月御分家遊ばせられ竹田宮の御稱號を賜はる嘗て陸軍士官學校卒業遊ばされ明治三十七年二月騎兵少尉に任じ翌年二月中尉に進ませられ近衛騎兵聯隊附に補せらる三十九年二月陸軍士官學校生徒隊附に補せらる此年十二月日露役の功を以て功五級に叙し金鵄勳章を賜はる翌年二月大尉に任じ四十一年四月勳一等旭日大綬章に叙賜せらる現に同校生徒附の任務を執らせ給ふ

（御本邸東京市芝區高輪南町一七、電話芝二五）

北白川宮成久王

殿下は故大勳位陸軍大將能久親王殿下の第三王子にましまし明治二十年四月十八日を以て御誕生あらせらる、明治三十九年六月陸軍中央幼年學校卒業し給ひ尋て陸軍士官學校へ入學遊ばされ四十年十一月勳一等に叙し旭日大綬章を賜はる翌年十二月陸軍砲兵少尉に任じ近衛野砲兵聯隊附に補せらる四十三年十二月砲兵中尉に陞任し現に陸軍砲工學校に御在學あらせらる

（御本邸東京市麹町區紀尾井町一、電話番町二七三）

閑院宮載仁親王

殿下は故一品伏見宮邦家親王殿下の第十六王子にましまし慶應元年乙丑九月二十二日を以て御誕生あらせられ尋て先帝の御養子とならせられ、明治五年一月閑院宮御繼嗣とならせ給ひ十年陸軍幼年學校へ入學し翌年八月親王の宣下あり御名を載仁と賜ひ三品に叙せらる十五年幼年學校御卒業後佛國へ留學遊ばされ佛語及陸軍兵術御研究十九年四月「サンシール」兵學校試驗の成績に依り騎兵伍長に任せらる尋て同校御卒業後騎兵少尉に任せられ大勳位に叙し菊花大綬章を賜はる更に又「ソーシュル」騎兵專門學校佛國陸軍大學校等に御通學あらせらる二十三年十一月騎兵中尉に任し翌年七月卒業し御歸朝後士官學校生徒中隊附、同校大尉教官心得、同校教官騎兵第一大隊中隊長、乘馬學校教官等に歷補せらる日清の役第一軍司令部附第三師團參謀官として平壤、海城、紅瓦寨、田庄臺等の戰鬪に參加せらる御凱旋後騎兵第一大隊附に補せられ功を以て功四級に叙し金鵄勳章を賜はる尋て騎兵少佐に陞任し騎兵第一大隊附、同聯隊長心得等に轉補せらる三十一年十一月騎兵中佐に進ませられ騎兵第一聯隊長に補せらる三十二年十一月騎兵大佐に陞叙せられ參謀本部出仕仰付らる三十三年一月更に參謀本部員に補せらる此年二月歐洲へ被差遣翌年十一月少將に進ませられ騎兵第二旅團長に任じ兼て日本赤十字社總裁の職を執らせ給ふ三十七年十一月中將に昇任し三十八年參謀本部附に補せらる翌年二月第一師團長に補せられ尋て日露役の功に依り功二級に叙し金鵄勳章を賜はり今猶第一師團長の任に在らせ給ふ

（御本邸東京市麹町區永田町二ノ二〇、電話長新橋九九四）

東伏見宮依仁親王

殿下は故一品邦家親王殿下第十七王子にましまし慶應三年丁卯九月十九日を以て御誕生あらせられる、御幼名定麿王　今上天皇陛下の御猶子なり明治二年二月山階宮晃親王御養子とならせられ十年三月海軍兵學校へ御入校あらせらる十七年英國へ御留學遊ばされ翌年小松宮彰仁親王殿下御繼嗣とに御治定十九年　聖上御養子とならせられ尋て御名を依仁と賜ひ親王宣下三品に叙し二十年佛國へ留學を命せられ同國ブレスト海軍兵學校へ御入學被遊二十七年大勳位に叙し菊花大綬章を賜はる二十三年八月同校御卒業後海軍少尉に任せられ爾來高千穗、浪速等の分隊士に轉補し二十六年軍事視察の爲に米、佛、白、和、瑞、獨等の諸國へ差遣せらる日清の役浪速艦第四分隊長心得として旅順威海衛の海戰に參與し給ふ軍中海軍大尉に進み同艦分隊長に補せられ更に橫須賀水雷隊布設部分隊長に補せらる二十八年十一月戰功を以て功五級に叙し金鵄勳章を賜はり千代田艦分隊長に轉補せらる尋て分遣艦隊附として臺灣に差遣せられ爾來扶桑、松島艦等の分隊長、海軍々令部第三局員等に歷補遊ばされ三十一年高砂分隊長の任務に就せ給ふ三十二年海軍少佐に任し八島分隊長に補せらる三十四年以降吾妻分隊長、扶桑副長等に歷補被遊三十六年一月小松宮殿下御繼嗣を止め東伏見宮の御稱號を允可せられ次で海軍大佐に任じ海軍大學校選科學生に在らせ給ふ三十八年一月大佐に進ませられ海軍々令部出仕に補せらる三十九年十二月日露役の功に依り功三級金鵄勳章を叙賜せられ四十二年十二月少將に昇任し四十四年英國皇帝陛下戴冠式に陛下御名代として參列被仰付現に海軍少將の任務を執らせ給ふ

（御本邸東京市赤阪區葵町二、電話芝七）

大日本人物誌

一名現代人名辭典

い之部

今井通

君は津市の醫師なり舊藩士今井松順の長男、文久元年八月上總國山武郡正氣村に生る、明治十一年東京大學豫備門を經て醫科大學に入り二十一年卒業して醫學士の稱號を受け醫科大學助手として第一醫院に勤務す二十二年三月三重縣に出仕し三重縣病院內科醫長となる廿三年始めて藥舖及產婆試驗を縣下に實施す次て津梅毒病院長を兼務し廿四年縣病院の廢絕と共に縣監督私立病院長となる此間地方衛生會委員、大日本私立衛生會通常會員、檢疫官、日本赤十字社三重支部商議員、縣市町村立小學校敎員恩給顧問醫、縣地方衛生會委員、檢疫官津市各小學校々費、檢疫委員、四日市港臨時檢疫醫、產婆試驗委員等に擧げらる方今津市醫會長、三重縣聯合醫會長たり君和歌を嗜み蔭通と號す（三重縣津市玉置町）

今井彦三郎

君は國學家なり舊仙臺藩士今井良英の長男、元治元年三月九日岩代國伊達に生る鱸山と號す明治十年出京して劍法を講じ又學を芳野金陵島田篁邨等に修め後熊本紫溟學舍の學監たり十九年東京大學古典科を卒業し秋田師範學校敎諭に任し次て千葉宮城二縣師範學校中學校等の敎諭を經て廿九年第一高等學校敎授に任じ從六位に叙せらる方今從五位勳六等にして其職に在り其著に語格新書、神樂催馬樂通解等あり（東京市本郷區駒込淺嘉町九九）

今西林三郎

君は大阪の實業家なり愛媛縣の人嘉永五年二月五日伊豫國北宇和郡好藤村に生る、家世々農を業とす明治十三年出京して三菱會社商業學校速成科に學び卒業後同社に採用せられ其社員となり翌年辭して大阪に出で回漕問屋業を營む十五年大阪同盟汽船取扱會社を設立し其社長となる十七年大阪商船會社の創立に與り其發起誘導委員に擧げられ後商船會社と合併するに及び同社回漕部長となり次て支配人となる廿年之を辭し石炭問屋及び內外綿糸商を營む廿三年石炭商組合役員に推さる廿四年以來大阪毛糸株式會社長、宇和島銀行、大阪興業銀行、松山商業銀行、伊豫物產株式會社、關西コークス株式會社、明治炭坑株式會社、宇和島鐵道株式會社等の取締役其他大阪三商銀行、朝日紡績株式會社等の監査役及大阪糸綿木綿取引所理事、大阪商業會議所議員、筑豊炭坑株式會社相談役等の職に在りき方今阪神電氣鐵道株式會社專務取締役、浪花電車軌道株式會社、明治製煉株式會社、東洋木材防腐株式會社等の

取締役、中央セメント株式會社、大阪瓦斯株式會社、關西馬疋改良株式會社、日本フランネル株式會社、帝國冷藏株式會社等の監査役大阪三品取引所理事長、大阪商業會議所議員等にして頗る賛畫する所あり（大阪市西區本田三番町一三〇、電話西一四二）

飯塚雲舉

君は東京の書家なり飯塚長次郎の長男、元治元年四月四日下野國下都賀郡三鴨村に生る家世々農を業とす通稱は勘藏宇は倚子、雲舉は其號、君小學卒業後漢學を儒森鷗村に修め小學校に教鞭を採る年あり後上京し教導團に入り卒業後近衛軍曹となる廿二年除隊となるや漢學の私塾を東京に開き傍ら書法を尾形雲海翁に又詩文を石川文莊に學ひ遂に大師流の書方を究む君又俳諧を好み老鼠堂永機に就き研究し其蘊奥を極め夕立庵晋湖と號し撰者の資格を得現に有聲吟社を創設し專ら書道及俳諧の教授に從事す君常に瓢を愛し所藏頗る多しと云ふ君の妻かく女は清元を能くし五代清元延壽太夫の門弟にして清元延美嘉と稱し現に門弟を教授す叔父は美家壽太夫と稱し斯道の達人なりしといふ（東京市淺草區千束町二ノ四〇四）

今西直次郎

君は京都府の人今西惣七の長男、安政五年四月十九日生る、明治四年京都府中學校に入り佛學を修め卒業後横濱生糸商バビエ商館に雇はれ東京詰となり工部省内製糸場の事務を執る後東京内藤新宿勧業局試驗場に入り養蠶製糸及撚糸の業に從事す十一年京都府より撰拔せられて佛國に留學し同國「アルデーシュ」縣生糸及撚糸會社に入りて斯業に關する各科を研究し次で「ガール」縣「オブナ」生糸檢査所に入り生糸及撚糸卒業證を得て十四年歸朝し直に京都府勧業課に出仕して同課撚糸工場に勤務す後京都博覽會繭生糸審査委員長を托せらる次で第三回内國勧業博覽會審査官を命せらる後農商務省に出仕し在職二年にして辭す二十六年神榮株式會社の相談役となり尋て日本絹綿紡績株式會社に入る二十八年八月横濱生糸檢査所技師に任せられ三十三年三月御用を以て佛國に派遣せられ四十三年十月同檢査所長心得を命せらる方今正五位勳五等農商務省生糸檢査所技師品位部長たり（神奈川縣横濱市南太田町二一九三）

今尾景年

君は京都の畫家なり今尾猪助の五男、弘化二年八月京都に生る、幼名猪三郎名は永猷、字は子裕、景年は其號別に聊自樂居の號あり十一歳始て梅川東居に就て浮世繪を學び十四歳鈴木百年の門に入る後吳春景文等の筆意を修め一轉して唐宋諸名家及李迪夔舜舉又沈南蘋梅、逸春琴等の畫體を研究し遂に一家を成す曾て佛國巴里萬國博覽會に春山花鳥圖を出品し銀賞牌を受く現に日本美術協會特別會員にして有數の畫家たり（京都市上京區堺町通夷川北入）

今村紫紅

君は東京の畫家なり、明治十三年十二月神奈川縣横濱に生る、通稱は壽三郎紫紅は其號なり實兄興宗氏は中島享齋の門弟にして又松本楓湖翁に師事し出藍の譽あり君始め實兄に學び後兄と共に楓湖翁の門に入る時に年十七なり爾來土佐派の畫法を慕ひ翁所藏の繪卷物は悉く君が研究の資料たり偶々小堀鞆音氏の門下に依り組織されたる紫紅會あり專ら土佐派を基礎として發展を試んとするに當り君乃ち之れに投じ其に研鑽を重ね造詣する處あり其作品は甫め玉成會展覽會に時宗の圖を出品し三等賞を受領し好評を博す四十三年春季巽畫會展覽會に達磨の圖を出品し二等銀牌を受領す四十四年仝會展覽會に神風雷神の圖を出品し二等銀牌を受領す又巽畫會展覽會の審査員たる事數次、方今仝會の評議員にして斯會屈指の畫家たり（東京市日本橋區馬喰町三ノ七）

稲畑勝太郎

君は大阪の輸入染料商なり京都府の人稲畑利助の長男、文久二年十月卅日生る、明治四年京都佛語學校に入り佛人レオン・ジウリー氏に就き佛學を學び卒業後京都府より選ばれて佛國に留學し同國里昂工藝學校に入り傍ら化學博士マルナース氏の染色法を研究し又和蘭國アムステルダム府萬國博覽會開設に際し京都府出品者總代となり同國の化學工業を視察し更に英獨伊白瑞各國の諸工場を視察し十七年歸朝す以て京都府御用掛を命せられ十九年京都染工講習所に入り染色教授に從事す廿一年京都織物株式會社に聘せられ染色部の技師となり幾もなく辭して佛國染料輸入商を營み爾來一意專心販路の擴張に盡瘁し染織雜誌を發刊する等苦心慘憺たること數年日清戰役後毛斯倫紡績を大阪に發起創立し其取締役に擧げられ機械購入の爲め再び佛國に渡航し居ること年餘歸朝後居を大阪に移し益々業務の發展を圖る廿九年安南國王より星龍四級勳章を贈らる後綿布塞地染業を兼營するや時恰も陸軍被服改正に際し烱眼早くも業を轉じ軍隊用カーキ色染業を創め衣服廠の御用を勤め遂に今日の大成を見るに至る後ち業務の組織を更め合資會社稲畑染工場と稱し之が業務擔當社員たり現に東京及清國に支店を設け盛に染料の販賣に從事す方今前記の外毛斯紡績株式會社取締役たり（大阪市南區順慶町二ノ一二五一電話東一二六二）

稲垣稲乙丙

君は農學博士なり長野縣の人文久三年十一月四日生る、本姓柴田氏出て、稲垣重爲の養子となり家督を相續す、明治十一年松本師範學校に入り卒業後小學校に教鞭を執る十六年五月東京師範學校に入り十九年七月卒業し長野縣師範學校附屬小學校訓導兼助教試補となり翌年九月東京農林學校に入り在學四年廿四年七月農科大學豫科に入り更に特待生として本科に入り廿七年七月卒業後大學院に入る三十年七月高等師範學校農學教授となり從七位に叙し次て農業教員取調講習會農學教授法教師を囑托せられ從六位に進む卅三年大學院規定試驗を經て農學博士の學位を授けらる此年六月農學研究の爲め獨逸國に留學を命せらる卅六年歸朝して盛岡高等農林學校教授に任す三十九年東京帝國大學農科大學教授に轉任す方今從五位勳六等にして現に其職に在り其著に農學梯梯、植物營養論、農學入門、農地改良學、農藝物理氣象學、農藝物理實驗農學、節用器辭典等あり東京（荏原郡目黒村下目黒三四八）

稲垣兵太郎

君は工學士なり東京の人明治二年十二月十一日生る、明治廿六年七月帝國大學工科大學土木科を卒業して北越鐵道株式會社に入り卅二年六月臨時臺灣鐵道敷設部技師に任じ正七位に叙せらる後臺灣總督府鐵道技師に任じ從六位に進む次で鐵道財産整理委員を兼ぬ卅九年四月日露事件の功に依り勳五等に叙す此年九月歐米へ差遣を命せられ四十年十二月歸朝す四十二年二月鐵道院技師となり累進して從五位に叙せられ現に北海道建設事務所長たり（北海道上川郡旭川町鐵道官舍第一號）

磯部宗右衛門

君は金澤市の藥種商なり本姓伊東氏後ち磯部と改む其先は伊東祐親に出づ承久三年順德帝佐渡國に遷幸し給ふ祐親供奉して同國に抵る長享中祐親の後裔伊東宗次郎政誠加賀國に出で河北郡本根布村に居し鄕士の雄を以て稱せらる之を君の祖とす天正三年北國大に亂る政誠難を能登國に避く既にして加州河北郡磯部村に移住し農に歸して名を宗右衛門と改め米齊と號す前田氏が加賀國を領するに及び尾山に移り磯部屋と稱し初めて商業を營む實に文祿二年なり尾山後ち金澤と改む爾來代々皆祖業を繼承す初め藥種、生付子、菫物、米穀を鬻き又酒造を營む就中赤玉丸、順氣藥種は共に有名なり九世の祖に至り生付子菫物等を專業とす十一世の時に至り誤りて損耗を招き家運殆ど傾圮す其子吉次郎拮抗鞅掌して遂に克く恢復す之を十二世宗右衛門とす君は其長男なり明治四年生る幼名喜太郎十七歲家督を相續して今名に改め善く家業を勉めて全國に六千餘の販賣店を有し傍ら公共事業に盡力す明治廿九年二月金澤市會議員に當選し次で衛生會委員を囑托せらる三十二年七月市所得稅調査委員に擧げられ三十四年三月金澤商業會議所會員に當選す爾來屢々各種委員に推さる現に市會議員、金澤商業會議所議員、市所得稅調査委員たり性風雅に富み生花を嗜み松香齋美照と號す其他茶道に長じ筆禮を能くす（加賀縣金澤市横安江町）

井藤春鳳

君は東京の畫家なり舊尾州藩士井藤鉄田氏男、明治八年九月生る、君通稱慶邁、春鳳は其號又巖松齋の號あり年始めて十五、奥村石蘭の門に四條派の繪法を修め二十歲上京して望月金鳳翁に師事し動物の筆格を研究し傍ら川端玉章翁の門に遊び翁の指導を受け得る處あり卅九年業を卒へ爾來專ら丹青を事とし最も動物に長じ山水之れに次ぐ第四回東京勸業博覽會に其作品鹿の圖を出陳し三等銅賞を受領す後日本美術展覽會に於て褒章を受領す四十三年日本繪畫共進會に於て百畫當選の一に入り此出品宮内省御用品たるの榮を擔ふ嗜好、頗る淨曲を好み紅葉と號す（東京市下谷區御徒士町三ノ入二）

今村東郊

君は石川縣の俳家なり舊金澤藩士今村廉之助の長男、天保十年九月生る、幼名清次郎又權兵衛と稱す後ち東郊と改む十八歲の時家を繼ぎ屢々藩の公役に任ず夙に俳志あり勾空庵雪偕の門に學び後一家を成す其師雪偕の遺言に依り師の遺跡を繼ぎ勾空庵賢外と號す（石川縣金澤市大手町二二）

井坂光暉

君は衆議院議員なり大阪府の人井坂耕作の長男、安政二年六月七日生る、夙に大阪府會議員、同常置委員、界市會議員等に選擧せられ地方公共事業に盡力す四十一年郡部より選出せられて衆議院議員となる四十五年五月總選擧に際し再選し現に其任に在り方今政友會所屬代議士たり（大阪府界市宿屋町西二丁目）

今泉巴城

君は東京の石版畫及彫刻家なり舊三河藩士今泉長雄の長男、明治二年七月東京築地に生る、通稱福太郎、巴城は其號、幼より畫を好み小學卒業後繪を學び陶器繪付業に從事する年あり明治二十二年石版畫の始祖中川耕山翁に師事し刻苦研究四年技大に進み師家を辭し獨立にて斯業に從事す爾來大に發奮して業務の發展に努力し漸次を顧客の高評を博し家道頗る隆昌を極む方今都下有數の石版彫刻家たり嗜好圍碁（東京芝區佐久間町一ノ一）

井川松齋

君は東京の彫金家なり舊黒田藩士井川眞澄氏の長男、明治十一年六月二日東京市赤阪區溜池に生る、通稱貢雄、松齋は其號夙に小學を卒へ年十三にして始め彫金術を碓井菊次郎に修め二十一歳の時本間壽次に師事し刻苦研鑽四年師家を辭し獨立斯業を開始す爾來裝身具品を以て專門とし、熱心斯業に努め顧客の好評を博し營業漸次に盛境に入るに至れり、君繪畫は吉田紫花園を師として四條風を能くし又俳諧を好み東梓庵嶌齊に學びて菊廼屋松齊と號す（東京市下谷區西町三はノ一七號）

磯邊包義

君は後備海軍武官なり舊熊本藩士にして天保十三年六月廿三日豊前國鶴崎に生る、幼名虎之助後今名に改む同岬庵、豊曜等の號あり文久三年藩命により江戸に出で航海術を修む後藩主の特命を以て舊幕府の水夫となり次で士官の學術を學ぶ慶應元年歸藩して藩の氣船に乘組み士卒を教授し翌年長崎に赴き英式砲術運用術を傳習す元治元年軍務官に出仕し攝津艦に乘組北越の役に從事す翌年戊辰の軍功を賞し目録金百兩を下賜せらる爾來攝津艦長、飛龍丸艦長等を歴て四年海軍大尉に任じ千代田形艦長、甲鉄船老功指揮官、同艦副長、工卯大阪孟春艦長等に轉補す五年西海御巡幸供奉艦として水路教導の任務を奉ず七年臺灣蕃地處分の爲め大久保全權護衛として上海天津に回航し大使の命に依り北京に出張す此年勅語を賜ひ並に馬具料金若干及酒饌を賜はる八年春日艦長に轉じ朝鮮釜山浦官民保護として出張す十年西南の役熊本變動に際り九州各地へ廻航す十一年一月勲に臺灣蕃地の役及鹿兒島逆徒征討の功を以て勳四等旭日小綬章を叙賜せらる十四年以來清輝、迅鯨、海門、筑紫、金剛、浪速、高千穗、嚴島の諸艦長に歴任し十六年朝鮮事變の慰勞として金若干を下賜せらる十九年五月勳三等に叙し旭日中綬章を賜はる廿四年佐世保軍港司令官に補し更に嚴島艦回航委員長同艦長呉軍港司令官等に轉補し海軍少將に任ず廿六年後備となる此年冬郵船會社取締役に擧げらる二十八年之を辭す二十九年貴族員議員に勅任せられ後從四位に叙せらる爾來攝津航業株式會社長、郵船會社顧問等の任に在り方今貴族院議員たり（東京市麻布區仲ノ町五）

磯部四郎

君は東京の辯護士なり舊富山藩士林英尚の三男、嘉永四年七月十五日生る後出でゝ同藩士磯部宗右衛門の養子となる夙に江戸藩邸に勤番し十七歳禁闕警衛の爲め京師に在り明治二年東京に出て昌平黌に入り漢學を學び村上英俊の塾に佛學を修む四年大學南校に入り翌年八月司法省民法寮學生となる八年佛國巴里大學に留學を命ぜられ在學三年にして卒業す十二年判事に任じ尋て民法編纂委員に推さる十三年一月以降司法省權少書記官、太政官少書記官、參事院議官補、司法省權大書記官等に歴任し十七年法律學士の稱號を受く十九年大審院檢事に任じ從五位に叙す廿三年富山縣第一區より選出せられて衆議院議員となる次で大審院判事に任じ從四位勳六等に叙し單光旭日章を賜はる廿五年官を辭し辯護士の業務を執る廿六年法典調査委員を命ぜらる三十一年東京組合辯護士會長に推され業務の餘暇明治法律學校、東京專門學校の聘に應じて法律學の講義に從事すること多年卅五年八月東京郡部より衆議院議員に選出せられ卅六年三月再選す後法學博士の學位を授けらる方今市參事會員にして專ら法律事務に從事す君又詩文を嗜み吳峰と號す殊に淨曲を巧にして四光と稱す（東京市本所區龜澤町二ノ三、電話下谷七六六）

五十嵐秀助

君は工學博士なり羽前舊米澤藩士德間久三郎の三男、安政五年十二月廿二日米澤に生る、明治十年山形縣士族五十嵐正知の養子となる明治十五年工部大學を卒業して工部省に出仕し電信建築に從事し二十年東京電信學校教授となり幾もなく電信建築長となる廿二年私費を以て米國に遊び電信電話其他電氣事業を視察し翌年六月歸朝し遞信技師に任ず廿四年再び東京郵便電信學校教授に任じ宮内省電氣工事監督の囑托を受く廿六年東京郵便電信局建築課長に轉じ翌年東京電話交換局長となり次で通信技師に任ず此間累進して從五位勳五等に至る、爾來電氣事業取調委員又た電氣力及び光力本位取調委員を命ぜらる三十一年勳六等に叙し瑞寶章を賜ふ翌年三月工學博士の學位を授けられ正五位勳三等に陞叙す後ち電氣學會評議員に推さる方今從四位勳三等遞信省通信局工務課長、兼東京遞信管理局工務部長、農商務省特許局技師、内匠寮御用掛たり（東京市麻布區六本木町六七）

筏井甚造

君は富山縣の實業家なり石里藤右衛門の二男、天保十年二月十六日生る後出でゝ筏井家に入り養子となり家督を

相續す夙に區長となり地租改正の際功勞あり明治廿一年十一月中越汽船株式會社の創立に與り其社長に擧げられ爾來勤續今尚其任に在り姓頗る酒を嗜む又刀劍書畫を愛し最も鑑識に長す其所藏甚だ多し（越中國射水郡二塚村）

市村羽左衛門

丈は東京の俳優なり先代坂東家橘の長男、明治七年十一月生る、年甫めて五歳新富座に初舞臺を勤む又踊技を花柳壽輔に修め父と共に丁歳座其他の名座に出演し二十七年歌舞技座に於て市村家橘を襲き三十六年更に市村羽左衛門を襲名す方今歌舞技座技藝委員たり（東京市京橋區築地一ノ一五）

池田兵三郎

君は東京の糸釦類商なり、家號池田商店と稱す、君初め日本橋區中橋廣小路の越前屋に勤め同家の爲に盡す處あり、後ち現所に前記の商業を開始し懇篤誠實の就業者として知らる（東京市日本橋區食喰町四ノ七、電話長浪一八七七）

池上秀畝

君は東京の畫家なり池上秀華の次男明治七年十月信州上伊那郡高遠に生る父秀華氏は岡本豊彦の門弟四條派を能くす君通稱國次郎字は繼隆、秀畝は其號又傳神堂の號あり夙に漢學を佐久間象山の門人春日政德に修め畫を家庭に學び明治二十二年笈を東都に負ひ荒木寛畝翁の門に南北合派の筆格を修む其筆輕快、殊に寫生に力め詩趣の才に富み粗密共に長ず二十七年以來日本美術協會に褒狀を受くる七回三十二年以來日本畫會に於て百畫中に當選數回、日本畫會出品難の圖及山水の圖皇后宮職御用品となる三十四年以來日本美術協會に於て銅印を受くる三回三十七年以來日本美術協會に於て銅牌を受くる二回、同會出品中鹿の圖及日下の猛虎圖宮内省御用品となる四十年東京博覽會に時雨圖を出品し二等賞牌を受領す同年日本美術協會に於て一等賞銀牌を受領し其畫（秋晴圖）宮内省御用品となる

同年皇太子殿下日本畫會、行啓の際御席畫揮毫の榮を憺ふ四十一年正派同志會第一回展覽會出品（朝露圖）二等賞を受領す四十二年日本畫會出品（波に千鳥圖）宮内省御用品となる四十三年名古屋開府三百年紀念新古美術展覽會に枯木寒禽圖出品二等賞銀牌を受領す同年日本美術協會第一部委員囑托せらる同年七月八日　天皇陛下前田侯爵家へ

行幸の際御前揮毫及同年七月十日皇后陛下同家行啓の際御前揮毫の光榮を辱ふす同年十月四十五回美術展覽會出品鑑査委員囑托せらる嗜好俳諧（東京市下谷區清水町一二）

伯爵板垣退助

伯は舊高知藩士板垣榮六正成の男、天保八年四月十六日生る幼名猪之助後退助と改む諱は正形、山内家の世臣たり夙に尊王の大義を唱ふ明治の初年東山道總督府參謀として出征し甲州勝沼に近藤勇の兵を敗り進で野州に戰ひ白河を陷れ會津を降し米澤を歸順せしめ平定後參與に任じ明治二年從四位參議に任せられ功を以て賞典祿千石を賜はる六年西郷隆盛等と征韓論を主唱し議

竟に容られずして野に下り翌年副島種臣、後藤象次郎等と民選議院の設立を建白し亦容れらず歸縣して立志社を起し其社長となり大に自由民權の說を唱ふ八年參議に任せられ幾もなく之れを辭す翌年愛國社を設立して益々民權自由を唱導す十三年國會開設請願有志大會を大阪に開き其議を決し愛國公黨組織を宣言す後更に自由黨を組織し各地に遊說し其途次岐阜に於て相原尙聚の爲に傷けらる十五年後藤象次郎等と歐洲に航し政況を視察し歸朝後專ら力を政黨政社に盡す二十年五月特旨を以て華族に列し伯爵を授けらる君再三之を辭するも聽し給はず二十三年立憲自由黨を組織し其總理に推さる後伊藤博文と提携して内務大臣に親任せらる僅かにし伊板内閣倒る、三十一年六月憲政黨内閣成るに當り再び入りて内務大臣と爲り正三位勳一等に叙せらる此年十月内閣倒る君乃ち辭職を奏上して野に退く後從二位に累進す方今閑地に在りて社會敎育に盡す所あり（東京市芝區愛宕町二ノ一、電話芝七六〇）

入江鷹之介

君は東京の辯護士なり富山縣の人安政四年正月五日越中富山に生る夙に上京して一ツ橋外開成所に學ひ後大學南校に入り英佛學を修め次て法學部に入り明治十三年卒業して法學士となる十四年驛遞局屬となり後判事補に任せられ横濱始審裁判所に在勤す十六年判事に任せられ從七位に叙す廿一年檢事に轉す後辭して米國に留學し「ミシガン」大學に入り法律學を專攻し廿四年歸朝し判事に任し東京控訴院に在勤し正七位に進む二十五年大阪控訴院判事に轉任し二十六年官を辭し辯護士となりて大阪に其事務所を開く後居を東京に移し爾來專ら訟訴事務に從事す方今前記職の外浪速電車軌道株式會社、有馬電氣株式會社、新潟水力電氣株式會社等監査役たり（東京市赤阪區青山高樹町一二ノ六號、電話芝二九三四）

入江保之助

君は茨城縣の人舊水戸藩士入江時久

の長男、文久元年一月廿一日生る、明治八年新潟縣に出仕し次て茨城縣に轉任す十二年同縣筑波郡書記となり出納主任兼租稅掛たり後又土木掛を兼務す廿三年農商務屬に任し商工局會社課に勤務す三十四年辭して株式會社東京米穀取引所支配人となり現に其職に在り（東京市本郷區元町一ノ三）

石川逸翁

君は大阪の畫家なり富山縣の人弘化元年十一月生る幼より繪事を嗜み專ら南宗畫を研究す弱冠笈を長崎に負ひ沙門鐵翁、木下逸雲の門に南宗の六法を修む明治元年清國に航し胡公壽、張子祥等の門を叩き丹青の蘊底を究めて一家を成す歸朝後海内を歷遊し山川の勝區を探り其畫趣を練り詩囊を富まし造詣する所益々深し方今年來貯ふる所の胸中丘岳を描出して廣く四方の需に應ず、餘技、詩、書を能くす（大阪市北區西野田吉野東之町）

和泉嘉右衛門

君は東京の神道家なり嘉永三年十二月廿四日武藏國南多摩郡八王子町に生る、家世々呉服商を業とす本姓内田氏幼時出でゝ和泉家に入り養嗣子となる性敬神の心深く初め陶求術を信せしも其嗣子の病氣に罹るに及んで其平愈を金光教大神に祈願し遂に斯教に歸依するに至る爾來和泉教會長畑德三郎、芝教會長大場道一等に就き其教旨を修め自ら芝白金教會を設置して献身以て斯道の爲に盡瘁しつゝあり方今其大講義たり、嗜好、園藝を好み庭園を作るに巧なりと云ふ（東京市芝區白銀志田町五七）

磯村豐太郎

君は大分縣の人磯村鷲二の長男、明治元年十一月七日生る、明治廿二年慶應義塾を卒業して遞信省に出仕し後新聞記者となる二十七年日本銀行に入り二十九年三井物産會社に轉じ營業部長となり機械鐵道用品並金物取扱部長を兼ぬ後ち同社倫敦支店長となり現に其任地に在り（英國倫敦三井物産會社支店内）

犬養毅

君は岡山縣の人犬養源左衛門の二男、安政二年四月廿日備中國賀陽郡庭瀬に生る、父を水莊と稱し板倉氏部下の鄕士たり君夙に森田月瀨翁に就て漢學を學ふ長して犬養杉窓翁の門に入る明治七年上京して湯島共慣義塾に學ひ幾もなく學資盡き藤田茂吉氏に寄食す頗る文章に長し所論又卓越聞くべきものあり氏深く其學才を愛し勸めて報知新聞に寄稿せしむ是に於て學資を得て慶應義塾に入る爾來刻苦研究遂に卒業して報知新聞社に入る隅々西南の亂あり通信員を以て戰地に奔走し其名漸く著はる時に年廿二なり先是田口卯吉氏等頻りに自由貿易を主張す十三年嘗了法と謀り東海經濟雜誌を發刊し田口卯吉氏の說を駁し大に保護貿易說を唱ふ十四年擢てられて統計院權少書記官に任し正七位に叙せらる後大隈重信氏の冠を掛くるや君亦職を辭し再び報知社に入りて文筆に從事す時に立憲改進黨組織の事起るや君亦其黨員となりて頗る盡力す此年東京府會議員に選ばれ翌年常置委員となり十八年朝野新聞社に入り末廣重恭氏を助けて紙面の光彩を添ふ此際日本經濟會の創立あり君推されて其會主となる後改進黨と異見協はず黨を脫して大同派を輔く後又改進黨に復歸し尾崎行雄氏等と報知新聞に執筆す廿三年岡山縣第三區より選ばれて衆議院議員となる爾來總選毎に必ず當選す第七議會召集の際精勵の廉を以て銀盃を賜はる三十一年六月憲政黨内閣成るに及び文部大臣に任せられ正三位に叙せらる幾もなく之れを辭し憲政本黨の總務委員として專ら黨務に鞅掌す後ち立憲國民黨の成立に盡力する所あり三十九年四月三十七八年事件の功に依り勳四等に叙せらる、三十五年五月岡山縣郡部より選出せられて衆議院議員となり現に其任に在り其著に圭氏經濟學、議事典型、政海之燈等あり（東京市牛込區馬場下町三五、電話番町四〇）

一戸兵衛

君は陸軍武官なり青森舊津輕藩士一戸範真の長男安政二年六月廿日に生る、明治七年兵學寮に入り十年戸山學校に轉し少尉試補となり東京鎭臺第二聯隊付となる西南の役別動第四旅團附少尉となり戰功を以て勳六等に叙し金三百五十圓を賜ふ十三年中尉に進み教導湖步兵大隊長に補せらる爾來東京鎭臺第二聯隊小隊長、十八聯隊第二大隊中隊長、步兵第八聯隊修業兵教官等に歷補して大尉に任す十八年第十旅團參謀となり勳五等双光旭日章を授けられ廿年第十二聯隊付となり少佐に進み第十一聯隊第一大隊長に轉補す二十六年勳四等に叙し二十七年中佐に進み第五師團參謀となる二十八年第二十一聯隊長に轉補せられついて第五師團副官となり更に又た第四師團司令部付となる此年日清戰役の功に依り功四級金鵄勳章及年金五百圓を賜はる後ち旭日中綬章及從軍記章を授けられ二十九年以來中部都督部參謀、近衞師團工兵第四聯隊長、第六師團參謀長等に歷補し大佐に進み勳三等に叙せらる、三十四年少將に昇任し正五位に進み第六旅團長に轉補す、三十七年日露戰役の際第三軍參謀長より步兵第一旅團長に轉補し功を以て功二級金鵄勳章を賜ひ勳二等に陞叙し中將に進み第十七師團長となり現に其の職に在り（岡山縣御津郡伊島村）

稻川貞美

君は東京の金彫家なり書家稻川雲溪の長男、明治十三年二月生る、通稱は端、貞美は其號なり夙に繪畫を海野美成に學び又金彫の術を滑川貞勝の門に修むる事十年後師と共に日本美術院に入り教職に在る二年にして辭して後獨立斯業に從事し以て今日に至る其技工

裝身具品等の小細工物を以て妙とす君修業中は屢々各種公私の諸會に出品し賞を得たる十數回爾來斯業隆盛忙中閑を得す其機を逸し未だ出品の期を得ずと云ふ、嗜好、繪畫を能くす（東京市牛込區水道端町一ノ一七）

石井蘭堂

君は京都の書家なり、明治元年十一月、山口縣長門國厚狹郡に生る、通稱元重、蘭堂は其號なり夙に漢籍を廣瀬淡窓の學派福永叔人の家塾西鄙私塾に修め壯時京都に出で京都府屬に出仕す後書道の衰頽を憂ひ斷然官を罷め揮毫家となる好で篆隷の二體を書す、詩は盛唐に濫り和歌は萬葉の調をよろこび俳句は新派の風を好みて皆堪能なり殊に又た南宗畫を能くす嘗つて門弟等の薦に依り印辭會を創設し大に斯道の奬勵に努む、其の著に岳陽樓印譜、篆文略等考あり（京都市上京區衣棚通夷川南入）

公爵 一條實輝

公は舊公卿なり其先は藤原鎌足の後胤從一位攝政太政大臣道家の三男實經に出づ爾來內基に至り嗣なきを以て後陽成院第九皇子を請ふて嗣子となす公は故侯爵四條隆謌の七子、慶應二年八月二十四日生る、幼名孝麿後出でゝ一條實良の養嗣子となり家督を相續して今名に改め元服して從五位に叙し天盃を賜ふ十七年公爵を授けられ同年海軍兵學校に入る十八年四月從四位に叙せらる二十年海軍少尉候補となり筑波、扶桑艦等に轉乘す廿二年佛國に留學を命せられ少尉に任じ在學三年佛國製造の軍艦松島號分隊士に補し其回航事務委員となり之を回航して歸朝す次で水雷術練習の爲め迅鯨艦乘込みとなる二十四年七月貴族院議員となり二十六年大尉に進む後ち赤城艦分隊長心得を經て赤城吉野和泉諸艦の分隊長となる日清戰役の功を以て功五級勳六等に叙し金鵄勳章及び瑞寶章を賜ふ爾來横須賀水雷團第一水雷艇長同水雷團副官等に歷任し北米桑港及隣邦航海を命せられ尋で海軍少佐に進み龍田水雷長兼分隊長に補し從三位に陞叙す後ち横須賀鎮守府兵事官、佛國公使館附武官等に歷補し從二位勳三等に累進し海軍大佐に進み東宮侍從長、貴族院議員たり（東京市赤阪區福吉町二、電話新橋一二七六）

伊地和壯熊

君は東京府の人伊地知貞馨の二男、元治元年九月四日生る、夙に米國に遊學して工學を研究し二十五年鐵道廳傭となる二十六年逓信省鐵道技師に任せられ同省御用掛を兼勤す四十年帝國鐵道廳技師に任す後鐵道院技師として鹿兒島建設事務所長を兼ぬ方今從五位勳四等に累進し現に其職に在り（鹿兒島縣鹿兒島市濱町三）

市川文藏

君は山梨縣の大地主（多額納稅者）なり市川太右衞門の長男、元治元年十一月二十一日生る、明治十一年家督を相續す、家世々農業とす夙に公共の事に盡瘁し明治二十四年以來郡會議員、郡參事會員、縣會議員等の職に在り二十七年所得稅調査委員に擧げられ爾來勤續數年二十八年五明村長に推され三十二年之を辭し次で縣會議員に選擧せられ兼て學務委員たり先是明治十八年富士銀行の創立に與り其取締役に推され三十四年同行頭取となる其前年山梨縣農工銀行取締役に擧げられ次で其頭取たり三十七年富士銀行となすや又擧げられて其頭取となり今尙其任に在り四十年富士水電株式會社取締役となり四十一年互選せられて貴族院議員となる四十三年峽西電力株式會社取締役に推され以て其專務取締役となり現に其職に在り（甲斐國中巨摩郡五明村、東京市小石川區水道端町一ノ一二、電話番町二六〇四）

市田兵七

君は青森縣の大地主なり市田利平の長男、安政三年三月二十五日生る、嘗て津輕鐵道株式會社取締役たり明治三十二年縣會議員に選擧せられ次で同參事會員となる又青森縣郡部より衆議院議員に當選すること二回、三十七八年事件の功に依り勳四等に叙し旭日小綬章を賜はる黨籍を國民黨に有す方今株式會社木造南盛銀行頭取たり（陸奥國西津輕郡木造町）

市田彌一郎

君は京都の吳服商なり近州神崎郡旭村字北町屋の人市田彌惣八の長男、明治二年十一月七日生る、父彌惣八氏は夙に京都に出で吳服店を開始し丸桝と稱し勤儉力行今日の基礎を築きし人なり明治七年店舗を東京に開き之を販賣所とし京都の店は專ら染吳服の仕入所となし吳服部、關東織物の販賣を營み現に市內有數の商店たり君家業繼承以來多く京都に在りて益々業務の擴張を計り横濱大阪等の各地に支店を設く其取扱ふ所の友仙類、染絹、西陣織、刺繍、其他諸國產の絹織物等頗る精撰優美にして之を各種公私の諸會に出品し優等の賞を得る其數枚擧に遑あらず殊に每月「都の花」を發行して定時全國各吳服店に配布し又之を顧客に頒ち時好を知るに便ならしむ方今京三運輸株式會社取締役たり（京都市上京區東洞院通三條北入、電話特六一二、八〇六一二八二、東京日本橋區田所町二七、電話特浪花六九八、同一〇九）

絲山貞規

君は甲府の辯護士なり舊佐賀藩儒絲山貞幹の長男、慶應三年七月肥前國佐

賀郡新北村に生る、夙に中學校に學び後ち上京して明治法律學校に入り法律政治の二科を卒業し明治二十七年司法官試補となり横濱佐賀高崎千葉等の裁判所を經て甲府地方裁判所檢事に轉じ高等官五等從六位に叙せらる後ち辭して辨護士事務所を甲府に開き以て今日に至る（山梨縣甲府市百石町）

石井秀八

君は臺灣の電氣工業家なり明治九年一月佐賀縣杵島市住吉村に生る、實父は石川政右衛門君其長子、家代々鍋島侯の藩臣たりき幼にして學を鄉校に修め二十二年東上して歐文成功學館に入り專ら語學を研め、後ち工手學校に入り芝中學校に轉學卒業後高等工業學校に入學電氣科を卒業直に東京の三吉電氣工場に入りて技手となる後ち京都電燈會社附屬工場の主任技手に轉じ更に横濱電話交換局技手、不二製紐會社電氣部技師横濱「ヒーリング」商會の主任技師等を經て三十五年横濱に於て電氣商會を起し獨力之が經營に從事したれど成功見込なきを以て大阪に出でゝ關西電氣商會を設立經營せしも是又思ふに任せず三十九年三月渡臺、臺南に於て電氣商會を開設して以て今日の大成功を見るに至れり方今南部臺灣に於て斯業從業者中、君は正しく其の首位を占む阿里仙工事、南部各製糖會社等の電氣部は悉く君の手によりて成されたるもの今や臺南竹仔街其他各所に支店を設け各製糖業家の顧問として盛に活動しつゝあり、嗜好俳句（臺灣臺南五帝廟街丙一七六電話二五一）

絲原武太郎

君は貴族院議員なり絲原權造の長男嘉永六年十月十日生る、家世々砂鐵採取、製鐵及農業を營み縣下の豪士にして多額納稅者たり夙に力を公共に竭し造船及畜産森林事業又牛馬の改良に貢献する所少からず明治三十三年農商務省の委囑を受け種馬所を居村に設置して改良に努む嘗て縣農會評議員仁多郡會議員、同參事會員、同所得稅調査委員其他仁多郡私立牛馬共進會長、私立教育會長等に推擧せらる三十四年株式會社八雲銀行を發起創設し其頭取に推さる三十九年互撰せられて貴族院議員となる爾來縣勸業教育調査委員、地方森林會議員に擧げられ現に其職に在り方今前記の外株式會社松江銀行、同八雲銀行等頭取たり（島根縣仁多郡八川村）

井上保藏

君は神戸の製油及肥料商なり井上彌兵衛の長男、安政六年十一月五日生る、家世々製油商を業とし連綿九代の舊家たり明治十五年同志と石油會社を起して海外石油業視察の必要を感じ二十一年露米國を巡視し尚越後石油の視察を了へ歸國後益々奮鬪活躍す二十二三年の交銀塊下落の大打擊を受け同會社は遂に解散の已むなきに至れり而て一面一家協力奮鬪の結果は毫も信用を墜さず頽勢を挽回す三十六年石蠟製造を開始し三十九年種油製造大工場を宇治川に起し四十一年豆粕製造業を創め各皆着々奏功し殊に豆粕の如きは期年ならずして設備を增大にし一日千枚以上を製造するに至るといふ（兵庫縣神戸市元町七ノ一三、電話一三八九）

石田政次郎

君は東京の鑄金家なり石田松次郎長男、明治十一年三月富山縣高岡市地子木町に生る、家世々材木商を業とす通稱政次郎、一政と號す幼より鑄金業を好み年十五、甫め黑谷津次郎に就き彫金術を學びて高岡物産の火鉢に彫刻す僻遠の地良師を得ず意を決し鄉閭を辭し單身東都に來りて具に辛酸を嘗め漸く大竹德國氏に倚り金彫及銅器鑄造の技を兼修し後ち人を介して鑄金家野上龍起の門に刻苦奮勵三年頗る得る所あり明治三十三年師家を辭し獨立自營門を張り鑄金業を開始す三十二年五月始めて美術展覽會に銅製鷲の置物を出陳し二等褒狀を受領す三十八年九月第二十回彫工競技會に銅製牛の置物を出品し三等銅賞を受領す三十九年第二十一回彫刻競技會に鑄銅童兒捕鳥の置物を出品し「一童は餌を撒き籠を裝置して捕捉に注意し二童は之を窺て談笑を劇す情趣を穿ち得て最も興あり」との賛辭を得て二等銀賞を受領す四十年七月東京勸業博覽會に銅製置物を出品し三等賞を受領し四十二年九月第三回鑄金展覽會に鼠に羽箒模樣花瓶を出陳し妙技銅賞を受領す四十二年十二月第四十四回美術展覽會に各種金屬鑄金群鼠を出品し技藝銅賞を受領す其他各種の諸會に於て受賞前後十數回に及ぶ嗜好銃獵（東京市下谷區上車坂町三）

男爵伊地知幸介

男は陸軍武官なり舊鹿兒島藩士伊地和直右衛門の長男、安政元年一月六日生る、明治四年御親兵として上京す五年幼年學校に入學し八年士官學校に入る十二年陸軍少尉に任じ翌年五月佛國に留學を命せられ在學中中尉に進み十五年歸朝す翌年近衛步兵隊副官に補し砲兵射的演習規則改正調査委員を命せらる十七年陸軍卿大山巖の歐洲巡遊に隨行し砲兵大尉に進み獨逸に留學を命せらる二十年乃木川上兩少將に隨行して歐洲を巡遊す二十一年六月歸朝し野戰砲兵第一聯隊第二大隊長心得に補す二十二年步兵少佐に任じ二十四年勳六等に叙し瑞寶章を賜ふ次で參謀本部第二局員となり從六位に進む二十七年日清戰役の際大本營附參謀に補し廣島に到り砲兵中佐に進み次で第二軍參謀副長を命せられ金州旅順の役に參加し二十八年遼東半島占領に盡瘁し又北洋水

師提督丁汝昌伏降を乞ふに及び其納降處分に關し參畫する所多し平定後勳五等に叙し瑞寶章を賜はり功四級金鵄勳章及双光旭日章を授け賜ふ次で從五位に陞叙し大佐に累進し英國公使館附武官となり英國に在勤す後少將に任じ三十三年參謀本部第一部長に轉ず後ち陸軍中將に任じ東京要塞司令長官に補す日露戰役の際第三軍參謀長、旅順開城談判委員長、旅順要塞司令長官として功あり平和克復功を以て功二級金鵄勳章を賜ひ男爵を授けられ現に第十一師團長たり（香川縣仲多度郡善通寺町）

井上勝之助

君は舊山口藩士井上五郎三郎の二男文久元年七月十一日生る、後ち伯父侯爵井上馨の養子となる、明治四年海外留學生となり歐州に渡航し十二年歸朝す後大藏省、日本銀行等に出仕し正七位に叙す尋で外務省權少書記官に任じ爾來諸官に歷任し從四位勳四等に累任す三十一年特命全權公使として獨逸駐剤白耳義國兼務を命ぜられ正四位勳二等に陞叙す後ち特命全權大使に任じ獨逸國に駐在し大正二年英國全權大使に任命せらる從三位勳一等たり（東京市麻布區北日下窪四三電話芝四六二）

井口半兵衛

君は愛知縣の實業家なり先代半助の長子、文久二年二月五日生る、家世々米穀肥料商兼委托販賣商を營み縣下の多額納稅者たり方今龜崎建物株式會社長、株式會社、龜崎銀行、有隣生命保險株式會社、東海倉庫株式會社、株式會社龜崎鐵工場、株式會社尾參木綿商會等取締役なり（愛知縣知多郡龜崎町）

井口在屋

君は工學博士なり舊金澤藩士井口濟の三男、安政三年十月三十日生る、幼名窓助後改む明治九年四月工部大學校に入り（官費生）機械學を專攻し十五年卒業し直ちに工部省七等技師に任じ尋で工作局教授補工部大學助教等に歷任し十六年十一月海軍省一等出仕となり更に海軍六等教官に任じ正八位に叙す次で機關學校普通學教授となり工科大學教授に任じ從七位に叙す二十七年海軍大學教授を托せられ此年七月機械工學研究として英國へ留學を命ぜられ在留期年餘にして歸朝し東京帝國大學工科大學教授に任じ正七位に叙す三十一年從六位に進み翌年工學博士の學位を授けられ勳六等瑞寶章を賜ふ方今東京帝國大學工科大學教授にして正五位勳三等たり（東京市小石川區西原町二ノ四〇、電話番町二一二六）

井上德太郎

君は神戸の稅關事務官なり明治十二年八月三日山口縣周防國都濃郡富岡村に生る、始め德山中學校に學び後ち豐浦中學校及山口中學校等を修了し三十

五年東京帝國法科大學に入り三十九年卒業す次で大藏省に奉職し四十一年一月神戸稅務監督局に轉任し此年四月神戸稅關に轉じ事務官として以て今日に至る方今正七位たり（神戸市中山手通二丁目）

伊東茂右衞門

君は東京の文士なり竹山と號す、嘉永四年豐後國速見郡立石に生る、學を豐前中津市の學校に修め明治十年上京して福澤翁の門客となり翁も亦屬望し君克く諸藝に通じ漢籍を讀み、洋書を解す又數理に明晰し傍ら詩文、和歌、繪畫、俳諧、種樹を能くす而て最も貨殖經濟の學に長ず平居自ら儉素を奉じ身に綿衣を被き財を廢せず獨り起て能く數萬の富を致す明治十四年の交時事新報（東京）の主筆たり今や閑散以て筆硯を友とす近作一詩を得たり「高峰長立聳雲間、知是關東第一山、白日晴天無定態、紫烟來往好屏顏」其著に海產論、蠶絲要錄、富國策、經濟事情、和文五十物語、雜記（漢文）見聞錄、詩集、和歌、間行錄等あり（東京府豐多摩郡西大久保四三八）

井上彥左衞門

君は靜岡縣の大地主なり先代錠平の長男、嘉永六年十月二十五日生る、明治十六年家督を相續す爾來村會議員、聯合會議員、徵兵參事會員、所得稅調査委員等に擧げらる其他野崎銀行靜岡銀行等の創立に與り共に之が取締役支配人たり二十三年始めて帝國議會の開設に際し縣の第一區より選出せられて衆議院議員となり爾來改選毎に當選して第十二議會に及ぶ第七議會召集の際精勵の廉を以て銀盃を下賜せらる其間靜岡農工銀行創立委員に推され後ち其頭取に擧げらる曾て株式會社偕榮銀行相談役たること久し殊に公共事業に盡瘁して賞狀木盃を受領する頗る多し方今株式會社偕榮銀行專務取締役株式會社靜岡農工銀行取締役たり（靜岡縣安倍郡豐田村字八幡）

井上善次郎

君は醫學博士なり舊高松藩士田中利平の二男、文久二年八月十二日生る、後ち井上家に入り養嗣子となる夙に大阪に出て藤澤南岳翁の門に遊學を修め次で上京し獨逸學を研究して東京大學醫學部に入り十六年豫備門を修了して醫科大學に入り明治二十一年卒業し直に同大學助手に任ず二十四年第三高等中學校教授に任じ從七位に叙せらる後從六位に進む三十一年第一高等學校教諭に轉任し三十二年醫學博士の學位を受け三十四年千葉醫學專門學校教授に任じ後正六位に叙す此年九月消化器病及醫化學研究の爲め獨逸に留學を命ぜられ三十六年歸朝す方今正五位勳五等

に進み其職に在り（千葉縣千葉郡千葉町）

岩溪裳川

君は東京の詩人なり丹波國舊福知山藩士岩溪帶刀の長男安政二年正月江戸の藩邸に生る、名は晋字は士讓、裳川は其號夙に歸郷して佐藤一齋の門弟近藤善藏に就き漢學を學び明治五年再び東上し神田御玉ケ池の儒海保漁村に師事し後又森春濤翁の門に學ぶ爾來洋學盛にして漢學漸次衰微に傾き時勢一變洋書を學ばざれば立身出世の餘地なきの趨勢なり是に於て君志を變じ壬辛義塾に入り獨逸學を學ぶ在學中學資を捕鯨會社員某に托し保管する處ありしが社員某は失敗の爲め君の學資を失ふに至る是より君頗る苦學す明治十三年職を太政官に奉じ在職五年尋で文部省に出仕し辭職後諸新聞諸雜誌の評林に寄稿し詩名都下に聞ゆ曾て萬朝報社に在りて詩部を擔當し後人民新聞社に入り執筆せり君俳諧を嗜み俳號を半風と稱す其著に伯士長慶集（註釋）あり（東京市麹町區三番町六〇）

井上隼之助

君は法學士なり大分縣の人井上清の五男、明治二年三月生る、後出でゝ同姓館の養子となる、明治二十九年東京帝國法科大學を卒業し日本銀行に入り大阪支店に勤務し次で英國に出張を命せられ「ハウス、バンク」に勤務す歸朝後檢査役となり次で大阪支店調査役たり三十六年京都出張所長となり翌年大阪支店長に轉じ國債募集の事務に當り軍國財界に盡す所あり後ち勳五等に叙し本店營業局長となる四十年紐育代理店監督の任務を帶びて渡米す歸朝後正金銀行に入り取締役となり四十四年副頭取に推され現に其職に在り（東京市芝區葵手町二五、電話芝三四四〇）

井上僖作朗

君は奈良縣の材木商なり井上儀右衛門の二男、天保十三年一月十五日生る夙に村長、村會議員、郡會議員、縣會議員等の公職を帶び地方公共の事に盡瘁する所少からず四十一年郡部より選出せられて衆議院議員となる方今黨籍を政友會に置き村會議員、郡會議員、吉野材木同業組合聯合會組長たり（奈良縣吉野郡川上村）

井上禧之助

君は理學士なり舊山口藩士井上信厚の二男、明治六年十二月四日生る、明治二十九年帝國大學理科大學地質部を卒業す三十年拓殖務省技手となり以て臺灣總督府民政局技師に任じ殖產部鑛務課勤務を命ぜらる後ち同總督府技師となり從七位に叙す三十一年地質鑛物調査の爲め清國福州地方を周遊す同年農商務省技師となり鑛山局勤務を命ぜられ次で地質調査所地質課長たり三十二年臨時稅關工事部地質調査を囑托せらる翌年正七位に進む三十四年東京灣築港地質調査の囑托を受け地質調査所技師にして地質課長となり從六位に叙す四十三年瑞典國へ派遣せらる爾來累進して從五位勳六等に至る方今農商務省技師同鑛山局地質調査所長たり（東京市麻布區我善坊町二六、電話芝二八六〇）

今井玉芳

君は東京の畫家なり舊鹿兒島藩士今井藤次郎の長男明治十一年三月鹿兒島縣鹿兒島市に生る、通稱孝吉、玉芳は其號、君幼にして畫才あり小學時代毛筆畫習字の二科は校中群を拔き常に優等にして首席を占め教師をして驚嘆せしむ稍々長じて繪畫を以て世に樹たんとの素志を祖父に告ぐ祖父其素志を容れず軍人となり身を起せよと諄々慫慂する處ありしも君元來蒲柳の質軍人に適すべくもあらず既にして祖父之を悟り甫めて平山東岳に就き四條風を學ばしむ此に於て素志を達し爾來拮抗奮勵技大に進む知己椎原國幹氏の紹介を得て島津公秘藏の名畫に臨摹し孜々怠らず稅所子爵の眷顧を受け富豪家の所藏せる諸名家の遺墨を摸寫し大に得る處あり明治二十六年大阪に出て父の膝下に臻り京都に遊學せんこと再三請ふも聽れず去つて郷里に歸り修業大に勉む三十二年和歌山縣警部長樋脇盛苗氏の勸に應じ紀州に遊ぶこと二年其間專ら蘆雪の畫風を研鑽し兼て各地を歷遊し和漢大家の名畫遺墨に臨摹し又到る處の山水風光の勝地より花鳥昆蟲の類に至る迄熱心寫生に從事し遂に畫材積んで山を成すに至る三十四年父の許す處となり笈を負ふて上京し有村國彥氏の斡旋盡力に依り園田實德氏の知遇を受け氏の邸に寓し川端玉章翁の門に入り刻苦精勵數年其間川上左太郎氏に招れ大阪に赴き請囑の揮毫に從事し傍ら杖を近畿に曳き寫生を事とし益々造詣する處深し方今園田邸に在りて專ら丹青を事とす平素詩を賦し又和歌を詠ず時に草花を愛し茶事を好む（東京市芝區西久保巴町二九、園田邸内）

子爵 井上良馨

子は海軍武官なり舊鹿兒島藩士井上七郎の長男、弘化二年十一月三日生る幼名直八、明治初年春日艦に乘じ東北及函館に回艦し功あり四年驤龍艦に轉じ五年中尉に任じ幾もなく大尉に進む六年同艦副長に補し次で少佐に任じ春日艦長に轉じ從六位に叙す七年雲揚艦長となり朝鮮國へ出張し海路を研究す江華島に於て韓人蜂起して我が艦に發砲す子乃ち之を擊退し永宗城を攻落して歸朝す後ち清輝艦長に補せらる八年江華島事件の功を稱し慰勞金を下賜せられ九年高雄艦長として黑田辯理大臣に隨行して朝鮮に出張す歸朝後正六位に叙し十一年西南役の功に依り勳四等に叙し年金百八十圓下賜せらる次で歐洲各國に巡航し十二年歸朝し東艦、淺間艦等に轉乘す十五年海軍大佐に進み從五位に叙す爾來扶桑艦兼淺間艦長たり十七年軍事部次長に補し次で金剛艦長に補す十八年福岡縣へ行幸の際御召艦山城丸臨時乘込となり勳三等に叙す十九年常備小艦隊參謀長軍務局次長、將校課長、軍務局長、將官會議員等に歷補し從四位に進む二十年特旨を以て華族に列し男爵を授けられ横須賀鎮守府軍法會議判士となり次で朝鮮國公使館附となる二十一年海軍大學校長、將官會議員、海軍省第一局長、常備艦隊司令官、同司令長官等に補せらる二十二年帝國憲法發布紀念章を授與せられ二十四年海軍參謀部長兼將官會議員に補す二十五年正四位に叙し海軍大演習審判官仰付けられ海軍中將に任じ佐世保鎮守府司令官に補せらる二十六年横須賀鎮守府司令長官に轉じ日清の役西海艦隊司令長官として征臺の役に參加の功を以て從三位勳二等に陞叙し旭日中綬章を賜ふ次で吳鎮守府司令長官となり三十三年更に横須賀鎮守府司令長官兼將官會議員に補し後ち正三位勳一等に叙し海軍大將に任ず三十九年四月日露戰功を以て功二級金鵄勳章を賜ひ次で子爵を授けらる方今從二位海軍大將にして軍事參議官たり（東京市麻布區廣尾町三三、電話芝一三八一）

子爵 井上正巳

子は舊常陸下妻藩主なり從五位下伊豫守正兼の二男、安政三年正月五日生る、其先は源經基四代の孫井上頼季に出づ其子正德の次男正長の後裔なり正長父の所領を分與せられ常陸下妻藩主として封一萬石を領す代を經る子に至り十三代とす子幼名晨若慶應二年襲封し今名に改む明治元年從五位下伊豫守に任ず二年版籍を奉還し下妻知事に任ず四年東京府に貫屬し十七年子爵を授けらる十八年宮中祇候仰付けられ次で賢所勤番となる二十年正五位に叙し二十五年從四位に進む方今從三位たり（東京市本郷區本郷五ノ四七、茨城縣眞壁郡下妻町二三）

侯爵 井上馨

侯は舊山口藩士天保六年十一月二十八日生る、幼名聞多と云ふ後改む夙に攘夷論を唱へ四方の志士と交り大に奔走す後ち外國の狀況を視察するの目的を以て伊藤俊介等と共に長崎に出で外國帆船に搭じて英國に航す途次香港に到りて自說の實行難を悟り俄に之を更め英語を學び英國倫敦に至り更に師を求めて之を修む居ること二年偶々倫敦タイムス新聞を讀み英艦下の關攻擊の企あるを知り侯は俊介氏と共に歸朝し元治元年六月藩廳に至りて止戰調和の議を陳言す爲めに和約成る此年九月要擊せられて傷を受く既にして幕府征長の師を發するや侯大村益次郎と共に防戰し進で石州を略す、戊辰の役京都守護の任に在り明治元年參與に徵され尋て外國事務局判事となる後ち長崎府判事に轉じ翌年民部大丞に任せられ幾もなく少輔を經て大輔に進む二年冬山口藩騎兵隊の亂あり侯木戸孝允、品川彌二郎等と歸藩して鎭撫に從事し平定後大藏大輔に轉ず四年廢藩後に於ける民政及び財政統一の實を擧ぐるに至りしは實に侯及澁澤榮一氏等の力與りて多に在ると云ふ六年辭職す七年支收會社を創設して之が總裁となり米穀輸出業を營め八年元老院議官に任ず此年韓民我軍艦雲揚を砲擊す仍て問罪使として參議黑田清隆全權辯理大使を命ぜられ侯其副使たり後ち會計事務取調として英國に派遣を命ぜらる十一年參議兼工部卿に任じ翌年外務卿を兼攝して條約改正に鞅掌す十五年朝鮮大院君の亂あり侯之が善後策として各國使臣を東京に會し朝鮮國の獨立を公認せしめ且つ正金銀行をして貨幣を貸出しむ十七年京城に變あり特派全權大使として京城に到り談判の結果京城條約を締結して歸朝す十八年外務大臣に任じ正三位に叙し伯爵を授けらる二十年條約改正に關し輿論の反對を受けて其職を退く尋て宮中顧問官に任ず二十一年自治制研究會を起し竟に自治黨を組織す此年農商務大臣に任じ幾許もなく之を辭し更に麝香間祇候を命ぜらる二十五年內務大臣となり第四議會開會に際し臨時總理大臣を攝行す二十七年特命全權公使に任じ京城駐劄を命ぜらる爾來同國々政釐革に努め翌年歸朝す後ち王宮事變起る侯乃ち慰問使として差遣せられ善後處分を施治す歸朝後功を以て旭日桐花大綠章を授け賜ふ三十一年伊藤內閣成るに際し大藏大臣に親任せられ幾もなく之を辭し前官の禮遇を賜はる三十九年日露戰役の功に依り侯爵を授けられ正二位大勳位に叙す方今議定官、貴族院議員たり（東京市麻布區宮村町四二、電話芝八二）

子爵 井上匡四郎

子は理學博士なり舊肥後藩主岡松甕谷の四男、明治九年四月三十日生る、後

出でゝ故文部大臣子爵井上毅の養嗣子となる明治二十八年三月卒去後襲爵し從五位に叙す三十二年東京帝國大學工科大學を卒業して同大學助教に任じ正五位に進む三十三年教授に任じ三十四年歐洲へ留學を命ぜられ四十年歸朝す先是三十九年大阪高等工業學校教授に任ぜらる次で京都帝國大學理工科大學教授を兼ね爾來累進して從四位に叙す四十三年十月貴族院議員に選擧せらる（京都市上京區寺町今出川北入、東京市牛込區市ヶ谷藥王寺前町八〇）

石井俱寛

君は岡山縣の實業家なり、舊岡山藩士、高原善之亟義法の二男嘉永元年十月朔日生る、幼名留三郎後改む諱は俊雄安政六年二月出でゝ同藩士石井家の養嗣子となる此年五月幼君池田政和侯の御伽役を命ぜらる文久二年十二月該役を免ぜられ御紋服其他種々の下賜品あり四年九月元服し翌年十月上覽調練御供申付けらる同年十一月藩公の長征軍に從ひ出征し慶應元年十月凱旋す後功を以て金帛若干を賜ふ二年正月弓術劍道の上達を賞し御手元金武百疋を下賜せらる七月兒島郡天城表へ御出勢御側詰仰付けられ翌月歸城す次で岩田町の陣屋へ出張を命ぜらる四年正月西宮札の辻陣屋御出陣御供仰付けられ二月歸城す明治元年十一月藩の小隊令司を拜命し四年家督を相續す七年四月岡山温知學校二等助教を拜命し九年六月第十三中學區又學小學校へ轉勤す十年五月三等教授に進み翌年職を罷め實業に從事す二十三年一月岡山十五箇町聯合會議員に選擧せらる此年六月鑛山合資會社に入り熊本縣球磨郡五木村鑛山支店長となる二十六年十月鑛山所在地の學校へ金圓を寄附す二十九年道路修繕費を寄附し木盃を受領す三十年株式會社勝山銀行監査役に擧げられ翌年岡山市會議員に當選す三十三年勝山銀行取締役となり三十四年十月大日本武德會岡山地方幹事に推さる三十五年大日本赤十字社岡山支部商議員となり翌年衛生會評議員に擧げらる爾來大日本武德會常議員、岡山市參事會員、私立中學閑谷校理事、岡山實科女學校理事等に推擧せらる四十一年二十二銀行監査役となる翌年赤十字特別會員に列す此年四月九州鐵道株券を熊本縣球磨郡五木村の基本財産として寄附し賞勳局より銀盃一個を下賜せらる八月岡山武德會支部監査役となり九月市參事會員に再選す四十三年四月山陽新報社取締役に推され方今に至る、嗜好、遊獵（岡山縣岡山市西田町）

井上哲次郎

君は文學博士なり船越俊達の三男、安政二年十二月二十七日筑前國太宰府に生る、君少時母を喪ひ父は富田家に入り養子となり君は小見船越芳哉の鞠育する所となる、幼名乙三郎後今名に改む巽軒と號す夙に中村周平の門に經史詩文を學ぶ長じて叔父井上鐵英に養はれ家を嗣ぐ明治四年長崎廣運館に入り英學を修め八年上京して開成學校に入り次で東京大學文學部に入り哲學政治學を修め傍ら漢籍を中村敬宇に國學を横山由清に學ぶ十三年卒業して文部省御用掛となり十五年東京大學助教授に任じ十七年哲學研究の爲め獨逸に留學を命ぜられ在學六年餘此間ハイデルブルヒ大學、ライプチヒ大學、伯林大學其他巴里文科大學、コレーヂ、ド、フランス大學等に研學し萬國東洋學會員に擧げられ又伯林東洋學校講師に推され東洋哲學、爲史、日本語學、日本神道論等を講じ大に令聲を博す二十三年歸朝す次で文科大學教授に任じ翌年文學博士の學位を受領し正七位に叙す後ち學習院教授を囑托せらる二十八年東京學士會院會員に推薦せられ正六位に叙す三十年萬國東洋學會參列の爲め佛國に差遣せられ次で東京大學文科大學長に任ぜらる歸朝後正五位に進む三十四年勳四等に叙す方今正四位勳四等に進む其職に在り其著に誓學叢書、哲學字彙、釋迦種族論、釋迦牟尼傳、巽軒講話集初編二編等論文初集二集、巽軒講話集初編二編等あり（東京市小石川區表町一〇九、電話番町九六六）

井上正一

君は法學博士なり舊山口藩士井上正健の長男、嘉永三年二月二十五日生る夙に藩立明倫館、文學寮等に漢籍を學ぶ維新後上京して箕作麟祥氏に就て佛蘭西學を修め明治三年藩選貢進生として大學南校に入り五年司法省明法寮に入り佛國法學士ブスケ氏及法律大博士ボアメナード氏等に從ひ研究す八年法律研究の爲め佛國へ留學を命ぜらる十一年巴里大學に於て「リサンシエー」の稱號を受く次で同國「ジヂョン」府學校に轉じ十七年「ドクトール」の學位を得て歸朝し直に司法省に出仕し同省學生教授を命ぜられ兼て法科大學講師を囑托せらる後ち法律學士の稱號を受領す十八年訴訟規則取調委員を命ぜられ司法省准奏任御用掛となり爾來翻譯課長司法書記官、總務局文書課長等に歷任し從六位に叙す次で法學生徒教授兼司法省參事官に任じ二十一年法學博士の學位を授けらる二十三年帝國議會開設に際し縣の第二區より選出せられて衆議院議員となり第五議會に及ぶ後ち判事に任じ之を罷む爾來控訴院大審院判事たり其間民法草案編纂委員、法律取調報告委員、法典調査會員、判檢事、辯護士、文官高等試驗委員等に擧げらる三十三年會計檢査官懲戒裁判所、豫備裁判官に兼補し從四位勳三等に叙せらる方今正四位勳二等に進み大審院判事たり（東京市麴町區上二番町三一、電話番町五一五）

稻葉三右衛門

君は三重縣の實業家なり、天保八年生る、家世々鰯問屋を業とす文久二年幕府に献金し一代苗字を許され始めて稻葉と稱せり慶應二年再び献金し永代苗字を許さる時人之を榮とす初め太政官會計局御用掛となり尋て領商方となる明治三年戀年寄たり同年貨幣調査役

こ任せられ傳馬所取締役後見を兼ぬ四年戸長兼船改役取締を命せらる此時に至り四日市開築に志し職を辭し意を築港の事に決す六年埠頭新築溝渠改鑿の豫算書就る時に同志田中武右衛門を得て二人共に允許を請ひ此年三月始めて起業に着手す未だ幾ならずして武右衛門故ありて之を辭す君乃ち單獨工事に從事し七年三月波戸場及海岸の石垣を除くの外は略ぼ落成し故ありて小野組に負擔せしめしも亦未だ着手するに至らずして止む或人君を誡むるに此事業の益なきを以てす君曰く吾十萬金を費し而して四日市に百萬金の利を餘すものは是れ四日市に九十萬金の利を餘すものなり況や工業の費率ね貧民の得る所となりて他に流出することなしと初め君が献金に依りて姓を用ひることを許されたる時人或は君を以て名利を好むものに非ざるかと疑を抱きしも此に至りて大に其志に服せり八年三重縣廳に於て其事業を繼ぎ之を經營せしも十年に至りて之を中止せり君其事業の成らざるを慨し十三年再び自費を以て殘業を修めんことを請ふ十四年允許を得直に工夫を募り自ら工事を監督すること若干日にして開築する一萬四千有餘坪に及ぶ此に於て溝渠鑿ち埠頭を造り以て漕輸を便にし竣功の後も尚ほ海濱を塡め公益を計りて倦まず其前後投ずる所の家資實に二十萬圓に下らずと云ふ明治二十一年官之を賞し特に勅定の藍綬褒章を賜て其善行を表彰せらる先是明治十年私費を以て築港所に一橋を架設せしに依り官其功を以て銀盃を下賜せらる十七年皇城延燒の際献金せしに依り木盃を下賜せらる其他受賞數擧すべからず方今隱退し長嗣甲太郎氏に家督を讓り點茶を嗜み悠々自適す其嗣甲太郎氏專ら家業に從事し方今市會議長商業會議所議員たり（三重縣四日市市中納屋町）

伊藤介夫

君は大阪の經史家なり、伊藤新左衞門重熙の長男、天保四年正月二十五日大阪に生る、名は和字は介夫、雪香又如石と號す、二歳の時父を喪ひ祖母に鞠育せられて人となる二十五歳にして江戸に出で漢籍を安積艮齋、大橋訥庵（順藏）等に學び後ち聖堂に入る明治元年初め漢學所の教官たり翌年文部省に出仕す尋て飾磨縣に轉任し後ち再び東京に來り太政官收支館に出仕する數年官職を辭爾し來帷を垂れ專ら子弟を薫陶して以て今に及ぶ（大阪市南區天王寺徒士山通一丁目）

井内秋霽

君は大阪の畫家なり、明治六年二月一日阿波國名東郡加茂村字田宮に生る名は正平字は房之、秋霽は其號、幼より繪畫を好み二十二歳甫めて森關山に師事す師の歿後中川畫塾の研究會に入り問志者と共に研鑽す後ち京都に赴き竹内栖鳳の門に遊び傍ら三谷雪園翁を師とし國語を學ぶ明治三十三年皇太子殿下御慶事の際嵐峽春色の圖を献納し御嘉納の榮を荷ふ第五回勸業博覽に出品し褒賞を受領す又大阪戰捷紀念博會に貴船の春圖を出陳て二等賞銀牌を受領す其他各種の諸會に於て受賞する數次曾て浪花青年畫會を創設に盡力する所あり三十八年以來寫生旅行の途に上り四國、中國、北陸等の地方を漫遊して深く造詣す（大阪市東區小橋東之町一三四）

井上菊松

君は大阪の寄席主なり、明治二年九月三日生る、父は廣澤虎吉と云ひ浪華節の講演師たり、君幼時母より常に藝人となる勿れと堅く戒しめらるゝ所あり長するに及で藝人を厭ひて父の業を襲ふことを避け十一歳の時出でゝ大阪順慶町の小山時計店に奉公せり十四歳の秋父より呼び戻され諄々説得を受け遂に父の業を繼承せざるを得ざる運命となれり於是藝名を廣濱菊丸と稱し父の指導を受く後ち東京定に伴はれ各地を巡業する中一日京定曰く君の講演拙劣にして聞くに堪へず寧ろ藝を以て立を廢せよと殆んど嘲笑を以て迎へらるれが爲め非常に精心の刺激となり爾來粉骨碎身數年を出すして技大に上達し十九歳にして座長の位置を占む嘗て岡野義治なる者突然君の講演席に來りて今講演せる筋書は自家所有の版權を侵害せるものとて嚴談を受く座主同輩等皆之を聞き周章狼狽俄かに相談會を開き委員を選んで其版權者に歎願的和解を試んとの議に決するや君獨り之れに反し斷然應せず他の同志と謀り法庭に立ち其曲直を爭ひ終に勝訴を得て斯界の爲め前途に光曙を與へりといふ爾來斯界の時弊を矯正するの必要を感じ同志と相謀り親友派を創設し推されて正取締役となり大に風紀の矯正に努む三十七年業を廢し今や大阪松島、同築港に廣澤亭及京都千本に喜多座等を有し其席主となり專ら後進の指導誘掖に從事しつゝあり（大阪市西區松島花園町五一、電話西二七一二）

伊藤傳七

君は三重縣の紡績事業家（多額納稅者）なり先代傳七の長男、嘉永五年六月二十四日生る、幼名傳一郎後ち改む壯時父の事業を補佐し經營其宜しきを得たり明治十六年九月家督を相續して第十世となる家代々農を業とし近世に至りて質屋及木綿仲買を兼營す八世傳七其兼營を廢し清酒釀造業を翔む爾來繼續以て今に至る後ち君は酒造業を實弟傳平氏に托して身を紡績事業に委ね專ら父の遺業を續ぎたり之れ蓋し君は父と同じく夙に紡績事業を以て我國に最大必要なるものとし其國益事業たること酒造と同視しすべからざることを信ずればなり開業以來十年一日の如く刻苦奮勵川島紡績所の規模を擴張して一大工場となし其利益を增加して完全の營業となさん事を企圖し之れを石井知事に開陳し上京して政府に懇請する所あり又第一國立銀行頭取澁澤榮一氏及同行四日市支店支配人八卷道成氏等の賛成を得て遂に三重紡績會社を組織

し資本金三十萬圓を以て更らに一大工場を四日市港に設け川島工場を以て附屬工場となし之を職工練習所に充てたり是に於て推されて委員兼支配人となる明治二十二年更らに資本金を增して七十萬圓となし工場を增築するに至り三重紡績會社の聲名大に揚る、君又近時麥酒の需用日に盛にして其供給一に之を外國に仰がざるを得ざるを慨し自家の本業たる清酒釀造の傍ら其釀造を創め弟傳平氏をして此事を管理せしめ竟に伊藤ビールの芳醇を稱せしむるに至る君性慈公仁益の爲めに資財を捐る事を吝まず窮民を憫み業を授けて生計を得せしめし者少からず先是明治三十年株式會社三重縣農工銀行の創立に與り其取締役となる又四日市商業會議所副會頭、四日市倉庫株式會社取締役及三重紡績株式會社常務取締役を兼務す又驥足を大阪に伸ばし現に株式會社大阪五二會館取締役、內外綿株式會社監査役、琺瑯鐵器株式會社取締役社長たり（本籍伊勢國三重郡四鄕村字玉山、居宅 三重縣四日市濱町）

伊藤政重

君は明治十一年山梨縣西八代郡富里村に生る、鄕里に於て普通學を修め神童の譽鄕黨の間に高く、十六歲にて小學校に授業生となる、爾來村校に教鞭を執る四ヶ年、明治二十九年の初夏奮然笈を負うて東都に出で、東京法學院（今の中央大學）に入學し苦學三年、三十二年七月優等の成績を以て同校を卒業、其の年判檢事、辯護士、の兩試驗を受けて及第せり。爾來沼津區裁判所千葉地方裁判所橫濱區裁判所に判檢事たる數年、三十五年臺灣總督府法院判官に轉官臺灣地方法院に勤務する三年日露の役に際しては軍法會議事務を囑託せられ、平和克復後叙勳賜金の恩典を得たり三十九年一月、思ふ所あり、法服を撤して野に下り、辯護士を開業次で全臺日報社を設立し、推されて其の社長となる。更に實業方面にも興味を感じ、臺灣殖產株式會社を起し亦推されて是が取締役となり、同時に育英を志し臺北學院てふ補習的私立學校を經營して實業家の子弟を敎養せんとし君自ら之が理事となる。四十一年衆議院議員總選擧に際し、山梨縣の有志に推されて候補者たらんとしたれど年齡滿三十歲たらざるの故を以て之を辭し政反會中の先輩手塚正次氏に自己に選擧區を讓れり。四十二年第二十五議會には內地臺灣司法共通問題の上京委員として運動其の効を奏し執行共通案を通過せしめ、同年六月臺灣總督府警察本署保安課長兼警官練習所長森孝三の非仁を絕叫して官紀振肅の實を擧げしめ爲に總督府の更僚をして心肝を寒からしめたり四十三年二月、製糖會社の土地不法買收事件起るや君挺身救民の事に任じ奔走亘月遂に橫暴なる官憲を屈伏せしめ買收中止を聲言するの止む

を得ざるに至らしめ進んで不法買收地全部の返還を爲さしめ臺中廳北斗支廳十六ヶ村一萬有餘の人民を塗炭の苦より脫出せしめたり、頭腦明晰元氣橫溢、仁俠的精神を以て臺灣に鳴る。（臺灣臺北大稻埕）

石坂新太郎

君は臺灣の建築請負業家なり、早川新平の長男明治三年岐阜市白木町に生る、家代々松葳樓と稱す。料理店を營業とす故ありて石坂家を襲ぐ歲十一大阪に出で紙屑屋に奉公し後ち東上し某紙屑屋に勤む明治二十四年東京に於て徵兵檢査に合格近衞師團に入營軍務て服し除隊後一旦歸鄕し六で再び東京に出で事業計畫中日淸の役起り召集せられ出征陸軍步兵軍曹として各地に轉戰功あり後ち北白川宮殿下に從ひて渡臺し土匪征討の軍に參加し事平くや除隊となる二十九年杉本組の會計主任に聘せらる幾もなく辭す三十一年建築請負及陸軍用達業を開く爾來幾多の困難を經て家產を興す今や臺灣有數の建築業者と稱せらるゝに至る嗜好、書畫器菫、大弓（臺灣臺北書院街二ノ五）

伊藤長次郎

君は有名なる播州の豪商伊藤長次郎の長男、明治六年四月十一日生る、其先は寬政の頃播州今市村に住し伊藤忠次郎と云ふ其次男長次郎氏農商の二途を勵み勤儉力行以て家道を擧ぐ爾來世嗣は皆長次郎を襲名す四世長次郎氏に至りて性濶達宏量大に人才を擧用して銳意以て事業の經營に努力し頗る公共の爲に盡瘁せしに因り名聲四方に揚る君幼名熊藏明治二十八年九月家督を相續し襲名して長次郎と改め第五世となる、幼にして學を好み二十歲の時姫路中學校を卒業し京都に遊び顯道學校に入學し卒業後上京して國民英學會、日本法律學校等を卒業して故山に歸り家務を見る、縣下十一郡に跨り町村五十有餘を包含せる耕地に伊藤家農會を創設し地方の發達と小作人の福利を計りて有益なる施設を試み父祖の遺業を墜さゞらんことに勉む而して實業界に在ては幾多の銀行會社の經營に與り其聲望は實に非常にして現に株式會社三十八銀行、神榮株式會社、兵庫縣農工銀行、神戸、海上運送火災保險株式會社神戸貿合港灣埋立株式會社各取締役、加古川銀行取締役頭取、熟皮會社長、起業銀行取締役、株式會社韓國銀行監査役、東洋拓殖會社創立委員等の重職を帶ぶ三十七年六月貴族院議員に當選し院中年少議員を以て異彩を放つに至る爾來益々地方の發達に心を潛め產米改良を圖り加印兩郡の改良會長となり又米穀檢査の縣令發布せらるるや縣下農界の革新を計り又村民の育英に意を注ぎ興仁會を創設して學者名士を聘し其講演を開かしむる等實に貢献する所尠からず四十年九月官其功に依り勳四

等瓜日小綬章を授けらる四十一年七月勅定の藍綬褒賞を賜はり其善行を表彰せらる方今貴族院議員にして歐米漫遊の途に在り（兵庫縣印南郡伊保村大字今市、別邸東京麹町區富士見町二丁目）

井上元三郎

君は大阪の人小西助三郎の二男、明治元年二月三十日生る、父助三郎氏は醫を業とす君明治十七年井上家に入り養嗣子となる養家は堂島米穀取引仲買商を業とす、同二十九年一月初めて堂島尋常小學校同幼稚園建築世話掛を囑托せられたる以來北區衞生組合會幹事區會議員、日本赤十字社大阪支部北區協贊委員北區敎育會幹事、評議員、日本體育會大阪支部委員、大阪市高等商業學校商議員、所得稅調査委員家屋稅調査委員、第五回內國勸業博覽會協賛員及評議第、北區敎育會敎育品展覽會第一第五部委員、堂島尋常小學校沿革誌編纂委員、大阪市敎育會代議員、同評議員北區軍事協會幹事、大阪市學務委員大阪實業協會常議員、高等小學校建築商議員大日本武德會大阪府地方委員等の公職を帶び貢獻する甚だ多し四十一年市會議員改選に際し衆望を荷ひ區民に推されて其候補に立つも足跡門を出ずず又一毛の微だも靈底を煩はさずして大多數を以て當選するに至れりと云ふ近時運動の盛なる時代に當りて君の如きは實に稀有の事にして蓋し平素着實克く職責を盡さるゝ結果に外ならざるべし方今市會議員たり（大阪市北區）

石橋雲來

君は大阪の詩人なり弘化四年六月播州姫路に生る、名は敎、雲來は其號、幼にして浮屠氏に歸し高野山に法道を修むる十年餘後ち錫を浪華に移し敎導の職を奉するもの亦十年、中年に及び病を以て職を辭して還俗し交を江湖文墨の諸名流に締し吟咏以て娛む夙に四方の志あり然れども性屠弱にして遠遊すること能はず唯內地の諸勝を捉るを得るのみ（大阪市北區木幡町）

伊藤直應

君は大阪の神道家なり、生田宜當の

君は大阪の畫家なり明治十五年十一月山口縣萩市に生る、通稱廣、直應は其號なり夙に深田直城の門に入り四條派の畫法を學ぶ年あり其作品は各種公私の諸會に於て銅牌褒狀を受領する數次、方今專ら丹青を事とす嗜好、古書畫、讀書（大阪市東區玉造眞田山三光神社鳥居下）

池田煙村

君は大阪の畫家なり舊加州藩士前田政之助の長男、明治三年八月廿八日大阪堂島に生る、後ち故ありて母性池田氏を冒す、字は士春、通稱林之助、煙村は其號、幼より畫を好み十三歲市めて守住貫魚の門に學ぶこと四年、免狀を受く後ち畫風を轉くて姫島竹外翁に師事し南宗派の畫法を修む各種の博覽會、共進會等に出品して受賞する數次嗜好、圍碁、謠曲（大阪府西成郡中津村字下三番）

石走房司

君は大阪の畫家なり、生田宜當の二子、文久二年十一月生る後ち出でゝ石走家に入り養子となる養父は弘愛と云ひ大江神社の社司たり明治二十七年養父歿後其後を襲き社司となる夙に國學及祭典を大阪皇典講究所に修了し後ち同所の評議員に推擧せられ盡力する所あり曾て大阪皇典講究所を財團と爲し大阪國學院と改稱するに當り其創立委員に推さる方今理事となり專ら其局に當り斡旋盡瘁しつゝあり、嗜好、音樂、又和歌を能くし素秋の號あり（大阪市南區天王寺夕陽丘町鄕社大江神社）

伊藤溪水

君は大阪の畫家なり、明治十三年一月愛媛縣北宇和島町に生る、通稱一雄溪水は其號なり、幼にして繪事を嗜み始め學を鄕校に修め後ち笈を負ふて大阪に適遊し平井直水の門に畫法を修むる多年其作品は各種公私の諸會に於て受賞する數次方今專ら丹青を事とす、嗜好、旅行（大阪市北區本莊橫道町）

井口藤兵衞

君は大阪の表裝家なり先代藤兵衞氏の長子、慶應三年一月十日大阪に生る家代々古今堂と稱し表裝匠たり藤兵衞氏俳諧を能くす君幼名卯之助、父隱居するに及び家督を相續して襲名す、業を父に受け克く家法を傳へ業務益々繁盛なり、嗜好、性頗る畫を好み、指頭を以て畫くに巧なり村仙と號す（大阪市東區平野町一丁目）

井林清次郎

君は京都の機業家なり明治九年二月十三日生る、家世々繻子織物製造を業とす明治三十五年二月以降業務を擴張して機械撚糸業を兼業し盛に營業す方今市會議員、上京區會議員、西陣織物同業組合議員、繻子組合評議員たり）京都上京區油小路通今出川北入、電話二二六七）

市川只次

君は新潟縣の大地主（多額納稅者）なり明治四年十月十三日生る、本姓川合氏明治三十六年出でゝ市川むるの入夫となり家督を相續す家世々農を業とし縣下の大地主たり（新潟縣南蒲原郡加茂町）

石井捨四郎

君は京都の綿布裏地染業家なり石井兎毛氏の次男、明治十年三月生る、後故ありて家督を相續す夙に京都府立中學校に入學し三年學期にして退校して家業に從事し專ら染業の改善發達を計り盛に營業す曾て硝子製洋燈口金を考按し實用新案登錄を受け利する所あり四十二年九月捺染器及乾燥器を發明して特許登錄を得る等大に盡瘁す現に滋賀縣長濱字八幡町に工場を新設し發明に係る乾燥器を据付け蚊帳染業を開始

石坂莊作

君は臺灣の紳商なり、明治三年三月群馬縣吾妻郡原町に生る、家は世々農業、實父は石坂太源次、君は其の長男郷里に於て普通學を修め、秀才の譽高く、年少己に鄕校に出で教鞭を執る、二十七八年戰役に際しては、君近衛砲兵隊付として出征し各地に轉戰して戰功少なからず、平和克復後勳八等に叙せられ、三十一年五月初めて渡臺、臺東方面に於て某氏の委囑を受け鑛山採掘のことに從ひ、三十二年臺灣新報社へ入社、三十三年十二月土地問題に關して基隆に來り、三十六年基隆に於て補習夜學校を創設し、併せて石坂文庫を設置して公衆教育の爲に盡力せり、曾て東京觀業博覽會開設に際し、臺灣寫眞帳を製して有志に頒與し、更に臺灣鐵道全通式に際しても同樣寫眞帳を作りて世に頒布せり、現に營む所の業務は火藥度量衡の一手販賣業なれども君の名聲を博したるは實に石坂文庫の創立によると言へり、同文庫に藏する所の書籍現在一万餘部、君又文章を善くし曾て臺灣蹈査實記といふを公にしたることあり、帝國生命保險會社、東京製工會社代理店を託せられ、赤十字終身社員たり、囘南と號し、讀書姥を嗜む（臺灣隆基義重橋四七）

石川元次郎

君は京都の表裝匠（萬榮堂）なり明治十五年四月生る、家世々裱裝匠を業とす君幼時父を喪ひ母の手に鞠育せられて人となる母きみ良人の遺業を繼承し幾多の徒弟を指導誘掖して家聲を墜さず業務の發展に努めり君夙に業を家庭に受け母氏の指導に從ひ克く其家法を傳へ軸物表裝の技に特長を有す明治三十五年軍籍に入り第四師團輜重兵第四聯隊に入營し三十七八年日露戰役に從軍して功あり後勳八等に叙せらる除隊後專ら家業に精勵し營業益々隆盛す、嗜好、點茶、生花（京都市下京區萬壽寺通室町東入）

岩佐古香

君は京都の畫家なり明治十七年一月愛知縣名古屋市久屋町に生る、岩佐利兵衛の長男、通稱丈助、古香は其號なり夙に鄕里に於て普通學を修め後上京して東京成城學校に入學し中途病に罹り歸鄕後日比野文儕の門に入り繪畫を學ぶ明治三十七年京都に出で谷口香嶠に師事し刻苦研鑽す其作品京都美術協會新古美術展覽會に出陳し受賞する數次、方今專ら丹青を事とす、嗜好、茶事（京都市上京區烏丸太町南入）

井上友吉

君は東京の文學家なり大分機の人井上已之助の次男、明治五年十月一日東國東郡竹田津村に生る、家世々商を業とす君字は二甫、折山と號す明治十七年八月涵養舍に入り國語漢文を修め兼て近藤弘紀に國文學を學ふ廿二年五月卒業して同舍の囑托教員となり在職四年此間南壽を兼本後興に修む廿六年上京して私立淑德女學校及每夕學校の教員となり傍ら內藤耻叟、岡松甕溪、根本通明等の諸氏に就て漢文學を研究し又至誠學舘獨逸學舍等に於て獨語を修む三十六年四月成田中學校の教員となり在職年餘、三十一年十一月私立法政大學の講師となる翌年三月辭職す此間清國人陳崇基邵章に就き支那語を研究す爾來家庭雜誌教育界、青年世界、婦人界、少年界、婦人畫報等の操觚に從事す其著に言文一致大學講義、書經集解、詩經集、解花鳥獸故事集、日華大辭典等稱々あり（東京市本鄕區千駄木町四三ノ一〇）

伊藤金三

丈は東京の落語家なり明治十一年八月廿八日東京日本橋區蛎殼町に生る、藝名三福と稱す、十九歳の時先代圓福の門に入り小福と云ふ後ち麗々亭柳橋に師事して柳福と改む師の歿后各地を巡業すること三年後ち新派俳優伊井芙蓉の門に歌舞を練習す前師圓遊之を聞て許さず遂に再び落語籍に入り小傳遊と改名す爾來流離困憊具さに辛酸を嘗むる年あり終に櫻木雪天の救助を得て漸く頭角を現すに至れり方今關西地方を巡業して好評を博す（東京市本鄕區湯島天神町）

今井市藏

君は兵庫縣の人今井市藏の男、安政三年十月神戸榮町に生る、家世々船舶を業とす資性醇朴恭謙にして虛飾を街はず德望家を以て聞ゆ、君父祖の業を繼ぐや時恰も維新革政に當り殊に神戸は開港地にして變遷最も甚しく君姥に見る所ありて業を廢し味淋製造業を經營し後ち質商に轉ず此間神戸汽船株式會社を起し又因の島船渠株式會社を設立す四十二年家業を廢し爾來專ら力を公共事業に盡す嘗て區會議員に選擧せられ勳績十二箇年の久きに亘る方今神戸中立合同會に列し市會議員たり（兵庫縣神戸市元町二ノ三一〇、電話二九八二）

井谷龜之丞

君は大阪の實業家なり舊紀州藩士井谷吉五郎の長男、慶應三年三月十日紀州和歌山に生る、九歳にし父を喪ひて十一歳母又鬼籍に入る、後ち高野元治（和歌山縣書記官）氏の爲めに養育せらる稍々長して東京に出で諸方の寺院に入り小姓となり具さに艱苦を嘗む後ち紀州に戻り高野に適き舊紀州藩醫板原庵拙の次男恭安齋（京山と稱し浮レ節の元祖）に就き浪華節の練習を受く時に歳十七なり技稍々進み京山齋一と稱し師と共に各地を巡講して廣島に出づ其滯在中師偶々病を得て歿す君廿六歳にして大阪に到り各席に出演して大に好評を博す廿九歳斷然斯業を廢することを決し紀念として鄕里に歸り大阪相撲興行を催ふし全然廢業するに至れり

今や浪華節講演師より身を起し巨萬の富を贏ち得て成功したるもの蓋し全國君を以て嚆矢とす後ち大阪に居住し席主となりて難波新地、谷町、鞠上通、内本町の四ヶ所に亭席を設け愛信亭と稱し盛に興行す又榜ら演劇研究會を起し會長滋野伯爵を戴き自ら幹事となる梨園界の改善進歩を計り或は盡忠會を創設して河内の古刹觀心寺の保存修理を援助し兼て精神教育の材料として同寺の寶物楠公父子の肖像を復寫せしめ之を表裝して各學校に寄贈し或又浪華火災秡式會社の創立發起に與り幹旋盡瘁する所あり、嗜好、盆栽書畫骨董（大阪市南區笠屋町二四ノ甲、電話南八〇一）

井深英之助

君は京都の紋上畫業家なり明治五年六月廿八日生る、夙に義兄岩本利兵衛に就き修業す明治廿三年一月別に一家を搆へ本業を開始するに至る廿九年五月紋上畫部同友會を創設し其會長となり專ら斯業の改善進歩を計るに盡力す三十年京都染物同業組合會議員に選擧せらる此年三月京染品評會審査員に推薦せらる三十四年三月大日本商工聯合品評審査幹事となる爾來大日本染織物競技會、全國意匠博覽會、内國製産品共進會、第一回染物競技會、染織商工同盟會品評會、紋上畫競技會、染織品評會、戰時紀念五二會品評會、征露紀念商工品評會、凱旋紀念内國製産品博覽會等の審査員となり盡瘁する所少からず三十四年二月京都染物同業組合紋上畫部長に當選し今尚其任に在り卅五年二月第五回内國勸業博覽會出品委員を囑托せらる四十年四月京都染物同業組合評議員に推され現に其職に在り嗜好、淨曲（京都市上京區釜座通御池北入）

岩崎彦松

君は工學博士なり丹波舊福知山藩士岩崎金助の長男、安政六年三月十二日江戸に生る、明治五年一月家督を相續す夙に藩黌諄明館に入り漢籍を學ふ同七年滋賀縣大津歐學校に入り獨逸人ロッエン、スタインに就て英學を學ひ同校の廢止となるに及で大阪英和學校に入り卒業す十年四月工部大學に入學し十六年五月卒業す此年七月海軍省主船局に出仕し翌年十月農商務省四等技師となる廿年三月北海道廳四等技師に轉任し四月北海道事務所汽車課長となり廿一年山陽鐵道株式會社の創立せらるゝや官を辭し同社に入りて汽車課長たり廿九年十一月社命を帶び歐米鐵道經營視察の途に上り備さに彼國鐵道經營狀態を講究し三十年五月歸朝す是より卒先して鐵道業上諸種の改善を實施し遂に我邦鐵道の模範を以て稱せらるゝに至る是れ蓋し君の努力に俟つ所多し三十二年工學博士に推選せられて學位を受く此年三月九州鐵道汽車課長顧問を囑托せらる三十九年鐵道の官有となるや直に運輸部組となり次て官制を改め西部鐵道管理局長に昇進す此間累進して正五位○四等に至る（兵庫縣武庫郡垂水村）

井上浪藏

君は兵庫縣の活牛販賣家なり安政二年六月播州加古郡傳馬村に生る、君の幼時父は數年以前より病床に在りて生計意の如くならず四隣の境遇は君を驅つて十四歳の折一家の米鹽を慮るの身たらしむ十八歳にして近郷を跋渉して活牛の賣買を始め明治十二三年頃兵庫棒鼻に舊因幡藩士淺田一心齋と云へるもの市場を設け暴威を揮て同業を劫掠して其弊甚しきを嘆き君之を法庭に訴へ其積弊を一掃し大に同業の改善を計れり爾來專ら商務に力を傾注し信用大に高まり日々七八十頭の活牛を取引して巨額の富を積めり十七八年頃斷然斯業を廢し他業に轉せんと決し居を神戸に移す當時君にして一朝業を廢せんか大打擊を被る者尠からざるより之を止むる者多く己むなく再び斯界に活躍するに至る是より不良乳牛の改良を計り大に雜種乳牛の産出を企て東京横濱を始め全國に亘りて供給を試み益々業務を擴張せんとするに當り牛疫の襲來に遇ひ數十頭の牛を失ひ加ふるに自己も亦病床に呻吟する厄難に罹りて一頓座を爲すに至れり二十七年日清戰役に際し俄然牛肉の需要激増し來るや東京罐詰界に活牛の供給を盛に爲し前の損失を償ふに至る次て自ら發起して神戸葺合村に屠畜場を起し後ち船越衛氏と家畜商會を組織するに當り之れに屠畜場を合同して大に商務の發展を扶け名聲益々揚る廿九年以來播州千種川改修地の開拓に力を注ぐ後ち之を奥戸健吉氏に讓れり三十七年日露戰役の際東京陸軍糧秣廠の要求に應じ日々七八十頭の活牛を一手に引受け入札後牛價の昇騰して倍額以上に成り是を完納すれば廿萬圓以上の損失を招くに至るも至誠の一念に驅られ其大部分を納入せしが當局も君が奉公の念篤きに感じ破格の優遇をなし五萬に近き支債を免せらるゝに至れり今猶糧秣廠の入札を持續して盛に營業す現に株式會社神戸家畜市場常務取締役たり（兵庫縣神戸市東尻池村番外五）

伊藤万藏

君は東京の表裝家（樂全堂）なり池田庄太郎の長男、慶應二年二月廿八日加賀國金澤に生る、家世々前田家の御用經具師たり後出でゝ伊藤家を嗣ぐ年十三、鄉關を辭し遠く京都に出で斯業を練習し居ること一ヶ年後歸鄉し十五歳上京して伊藤新藏氏の徒弟となり刻苦修業八ヶ年技大に進み辭して一家を爲し斯業を開始す爾來拮据經營業務の發展に努め新規の考按に心を潜め大に顧客の好評を博し市内屈指の各門に出入し京都及北海道より幾多の注文を受け家業頗る繁榮なり明治四十三年九月巽

書會主催第一回表裝競技會に出品し褒賞を受領す嗜好、生花を愛し花の本流を能くす（東京市神田區松枝町一二）

伊東義路

君は臺灣嘉義商工會の組合長なり舊館林秋元藩の藩臣伊東益五郎の長男、嘉永六年三月東京濱町秋元藩邸に生る幼時杉四郎竹外先生に就て漢學を修め歳十四擧げられて藩公の小姓となる戊辰の役藩公に從ひて館林に歸る明治四年東京に警察部の設置せらるゝや君率先して羅卒となり所々に警衛して功あり十四年岐阜縣書記に奉職、後愛知縣廳に轉ず日清の役後臺灣の我に隷屬するや廿九年總督府屬として渡臺總督府に奉職監獄經營の任に當り三十一年嘉義典獄として就任三十六年思ふ所あり職を辭し嘉義製紙合資會社に入り是が營業方面に盡力する數年三十九年獨立して共榮組といふを起して專ら是が經營に從事目下嘉義に於ける一實業家たり君字を東學横月と號し、圍碁、謠曲を嗜む、室未子、長男克己今尚修學中、正八位勳八等（臺灣嘉義土名大街九四、電嘉三九）

猪原德太郎

君は東京の鑑定家なり猪原謙齋の長男、安政三年十月駿河國志太郡島田に生る、通稱德太郎字は欽夫、臺南と號す又別に綠所の號あり甫め靜岡縣衛生課に出仕し明治十九年上京して內務省衛生局に奉職し後病を以て職を辭し一旦歸鄉し廿三年更に上京し再び同省衛生局に奉職し在職八年、一年官を罷め爾來書畫骨董を愛翫し傍ら其鑑定の業務に從事す最も文人儒者は君の特長とする所たり（東京市下谷區阪町一七）

石田光廣

君は東京の軟質金屬彫刻家なり實業家石田藤兵衛の長男、明治二年九月廿七日東京市本所に生る通稱國次郎、光廣は其號、年甫めて十三、鈴木宗次郎氏に就き彫金の術を學ぶと九年辭して獨立斯業を自營し爾來業を軟質金屬の彫刻に執り海外輸出向を專門として刻苦精勵業務の發展を努めたる功空しからず家道頗る隆盛なり明治三十八年東京彫工會第十二部委員として斯會の爲に盡瘁したる廉を以て同會より記念狀を受領す三十九年七月日本金工會第四回競技會にアンチモニー製品彫刻を出品し「彫作能く熟して盛に輸出品に資す工技を勉むるを見る」との賛辭を得て銀賞牌を受領す君夙に彫型を以て名あり方今彫工會第十二部委員金工會彫型部副部長たり嗜好盆栽又柔道術に達し戸塚派揚心流四級の格を有す（東京市本所區押上町一一六）

育野龜太郎

君は東京の茶道具商なり育野安翁の三男慶應元年正月十八日加賀國金澤に生る、父は日覩庵と號し千家裏流義の宗匠たり君又夙に風流の道を嗜み父の指導を受け茶道の蘊奥を極め克く茶什器及び書畫の鑑識に長す、年十四父に伴はれて大阪に出で父は蓄產株式會社を創設して蓄產事業に鞅掌す君は學を大阪に修め兼て斯道の研究に勉めり三十三年上京して茶道具商を現住所に開始し爾來熱心斯業の發展に努むると同時に茶道は日々隆昌の域に進むるの好運に會して家道大に盛壇に入る資性篤實にして謙遜頗る好評あり茶器の鑑識に至りては方今其名都下に高し（東京市神田區連雀町一八、藪蕎麥横）

板井辰藏

君は兵庫縣の人板井喜介の三男、安政三年攝津國武庫郡御影に生る、父通稱を早渡喜介と呼び同地の相撲頭取たり君幼にして狂浪自放諸所に奉公するも孰れも旬日を出ずして主家を去る十四歳瓢然神戸に出で大工職の徒弟となり居ること半歳去つて「ケイス」商會郵便船のボーイとなり四ヶ月にして又去る再大工職に奉公す後思ふ所ありて八十五番商館の持船に乘り渡臺せんとす時に父兄の知る所となり制止せられて之を罷む十七歳上京して大工職を修業すること六ヶ年西南の役起るや少壯氣鋭勇氣勃々禁ずる能はず廿二歳一旦歸阪して神戸に向ふ時に戰終り世平定す此に於て足を福原に留め荏苒空日を送る偶々福原に遊廓設置を許可せらるを是より建築請負業を始め一時盛に從事せしも傲骨漸く蘇り煩鑽事に堪へず終に業を他人に讓り自ら俠客鈴木幸三郎の兒分に投す此時に當り福原遊廓に火番所を新設す始め親分幸三郎の持場たり後之を其兒分の佐々木金太郎に讓れり後又君之を讓受くるに至る當時身內に友垣松五郎あり大に之を嫉み百方策を設けて排濟せんとす君之を聞き切齒憤激蹶起せんとするも彼は劒法に達し力量衆に超へ到底一人の力能く及ぶ所にあらず於是乎二名の仲間を談合ひ彼を斃すに至れりと云ふ是より神戸を逃れ各地に隱遁するも警吏の君を求むる益々急を加へ漸く京都に入るのとき捕はれて獄に投せられ審理の結果死刑の宣告を受くるや更に不服を申立て大阪控訴院に上訴し無罪となり出獄を免さる人皆機徵の存する所を知らざれば聞くもの唯呆然たるのみ後驀然悔悟する所あり嘗て湊川改修の事に關し盡す所少からず方今福原南見番取締にして大辰樓、大鶴樓、大豊樓等の青樓を營業す（兵庫縣神戸市福原）

石黑玄石

君は名古屋の圖案家なり舊尾州藩士石黑親一の長男、明治二年七月生る、父親一氏は維新後私立石玄學校を興し兒童に習字を敎授せり君通稱正十郎石玄は其號なり明治十五年始めて美術に志し繪畫を織田杏齊の門に學び傍ら圖

案家に通學す廿二年東京青年繪畫共進會に出品し褒賞を受けたるを始めとし其他各種公私の諸會に於て受賞數回四十年中京彩美會を發起創設し其幹事に推され專ら模樣圖案の奬勵に力む現に同會幹事にして愛知同好畫會員たり嗜好、和歌(愛知縣名古屋市針屋町一ノ去)

生貝力藏

君は東京の履物問屋商なり生貝才助の長男明治九年十二月千葉縣安房郡に生る、其先尾形三郎の後裔甞て源頼朝伊豆より房州に落ち來りし時生貝を献納して姓を生貝と賜へり君弱冠學に志し勝山藩儒野呂俊に就き漢籍を學び後上京して神田鍛冶町履物商横田彌三郎(近江屋)の店員となり勤務する事十年其間夜間漢籍書法を研究し書は初め菱湖風を好み古帖に據り獨修せり明治三十三年主家を辭し獨立斯業を開始して尾形屋と稱す爾來鋭意熱心家業に力を揚して大に業務を擴張し東京を始めとし全國殆んど各地に渉り取引先を有せざる所なき繁榮を呈せり曾て東京履物商組合創設の擧あるや其創立委員に推され幹旋盡力する所あり君三十三年以來專心斯業に從事し時流に適する新規の意匠を考按し又大に世の流行を誘掖する等盡瘁する處鮮少ならず四十三年二月組合は其功勞を賞し感謝狀を贈與せらる性頗る書を好み營業の爲に忙殺せられ寸暇を得ざるも夜間を俟て必ず臨池を事とすること十年一日の如しと云ふ後閑を得て尾形雲海翁に師事し大師流の書法を研究し竟に其蘊奥を究め屢々千葉、群馬、足利等の各地に漫遊し大家の門を叩き書法を聞き得る處あり近時詩文を嗜み大に研究す號を雲畝と稱す(東京市本所區相生町五ノ八)

石橋知全

翁は名古屋の人なり天保四年愛知郡御器所村に生る、幼名龜吉後ち今名に改む少時江戸の豪商石橋榮藏方の店員たり弱冠辭して鄕里に歸り榮藏の實弟石橋蘿窓に師事し和歌を學び又禪學を修す蘿窓歿后其後を繼ぎ山下に住す境内楓樹梅林に富む翁常に點茶を嗜み爐邊に端座して茶禪一味に風月の友を加へ悠々自適す(愛知縣愛知郡東山村)

市村芳樹

君は教育家なり、慶應三年四月五日備後國尾道に生る明治二十年二月東京高等商業學校卒業後歸鄕す此年六月自ら資を投じて私立尾道商業學校を創設す廿一年十月同校が公立となるに及び其校長兼教諭に任ぜらる廿六年九月名古屋商業學校に轉任し爾來勤續現に其職に在り三十九年十二月名古屋市民其他有志家の組織せる頌德會より金七千五百圓の贈與を受け翌年五月私財二萬餘圓を投じて名古屋女子商業學校を創設す之れ蓋し本邦女子商業學校の嚆矢なり先是從六位に叙せらる爾來名古屋商業會議所特別會員同特別議員日本弘道會名古屋支會長にして名古屋市教育會副會長たること最も久し(名古屋市東區布地町本籍廣島縣尾之道市久保町)

伊藤伊三郎

君は名古屋の實業家なり先代伊八の長男、明治十年四月五日生る、父伊八氏は始め菓子製造を業とす性雅樂を好み芳忠と號せり後ち紙商を營むに及んで家督を相續す君字は忠誠唯聽と號す幼にして父の質を享け又雅樂を好み始め父の指導を受け後ち羽塚慈圓に學ぶ尋て上京して山井基萬を師とす又舞技は辻高節の門に研究して堪能なり其他蜂谷百技師に就き志野流の歌道を學ぶこと十三ケ年其蘊奥を極むといふ(愛知縣名古屋市西萬町一ノ九)

男爵岩倉具德

男は公爵故岩倉具視の分家にして正二位勳一等岩倉具綱の二男なり、明治十三年五月二日生る、同十六年七月分家し特旨を以て華族に列し男爵を授けらる三十三年五月從五位に叙し後正五位に陞叙せらる(東京市麹町區永田町二ノ二五)

子爵岩倉具明

子は公爵岩倉具視の三男にして岩倉具經の長男たり、明治十三年六月七日生る同二十四年四日父具經氏の勳功に依り特に子爵を授けられ後正位に陞叙せらる(東京府北豐島郡瀧之川村大字田端字東臺三七五)

生川鐵忠

君は三重縣の神道家なり、卯野宣忠の次男嘉永六年九月十日生る、後ち出て丶生川家に入り養子となる養家は世々神職にして君に至り十四代とす君字は深衷、陶硯と號す、漢學は舊鳥羽藩士長山之常、中内朴堂等に修む又國學は八羽光穗を師とす方今諏訪神社宮司たり(三重縣四日市濱田四二)

稻本儀三郎

君は大阪の木綿卸商なり、滋賀縣の人稻本幸三郎の長男明治二十二月七日生る、同二十五年九月家督を相續す家業は木綿卸商を營み稻西屋と稱す(大阪市東區本町二ノ一二)

稻本唯七

君は大阪の縞木綿兼綿ネル小倉帶地商なり、滋賀縣の人稻本利右衛門の二男嘉永五年十月十五日生る、明治七年分家し木綿商を營み稻西屋と稱す(大阪市東區本町二ノ一七)

岩田武三郎

君は埼玉縣の實業家なり、野口直之の二男、元治元年正月三日生る後出て丶岩田家を嗣ぐ家世々荒物商を業とす

夙にに島田重禮の家塾に入り漢學を學び後上京して東京物理學校に入り度量衡科を專修し卒業後度量衡器製作所の代表社員たり爾來埼玉縣教育會代議員町會議員郡會議員同議長等に推擧せられ公共の事に盡瘁し縣知事より賞品賞狀を受領し又町會より銀盃銀銚子等を贈與せらる方今前記業の外度量衡器製作に從事しつゝあり（埼玉縣北足立郡川口町電話川口二三）

伊東茂右衛門

君は東京の質商なり先代茂一郎の長男、嘉永二年一月二十五日生る、家世々質商を業とし江島屋と稱す頗る富豪を以て聞ゆ幼名太一郎明治十二年十一月家督を相續して今名に改む嘗て區會議員、區學務委員、所得稅調査委員、徴兵參事員、衛生會幹事、教育會評議員等の名譽職に擧げられ公共の事に盡力す明治二十四年三月東京府會議員に當選す先是海防費を献納す因て二十五年十月宇都宮舊城趾に於て天顔を拜し立食の饗應に與るの光榮に浴す殊に三十四年以降東京質商組合取締役たること多年君又甲州身延山林の增植を圖り畢生の事業として私費を投じ前途公益上大に期する所あり今猶幹旋盡瘁しつゝあり方今水難救濟會幹事、區會議員所得稅調査委員たり、嗜好、君頗る書を能くし閑を得れば臨池を事と云ふ（東京市神田區佐久間町四ノ一六、電話下谷六三八）

磯部百舟

君は三重縣の書家なり、磯部百鱗の三男、明治十一年十二月勢州宇治山田市今在家に生る、父百鱗翁は書家にして名あり君通稱舟造、百舟は其號、十九歳父に就き書法を學ぶ二十一歳京都に赴き贄を森川曾文翁の門に執ること三ケ年一旦歸鄉し夫より紀州を漫遊し專ら寫生に從事す居ること一ケ年最も花鳥山水動物を能くす、嗜好、魚釣（三重縣宇治山田市今在家一三）

今井通

君は醫學士なり、文久元年八月上總國山武郡正氣村字家德に生る、舊藩主今井松順の長男、夙に普通學を修め明治十一年東京大學豫備門を修了して帝國醫科大學に入り二十一年卒業し次で醫科大學助手として第一醫院に勤務し二十二年三月三重縣病院內科醫長となる二十三年君始めて藥舗及產婆試驗を縣下に實施し此年津梅毒病院長を兼務し二十四年縣病院廢院と同時に縣監督私立病院長となる其間地方衛生會委員大日本私立衛生會通常會員、檢疫官、日本赤十字社三重支部商議員、縣市町村立小學校教員恩給顧問醫、縣地方衛生會委員、檢疫官、津市各小學校醫、檢疫委員、四日市港臨時檢疫醫產婆試驗委員等に推擧せらる又三重縣聯合醫會長、津市醫會長等の任に在り四十三年三月縣監督私立病院長を辭し爾來自邸に在りて濟生に從事す嗜好和歌を能くし蔭通と號す（三重縣津市玉置町）

岩瀨覺榮

師は淨土宗西山派の僧なり元治元年十二月十二日三河國幡豆郡寺津村大字巨海に生る、岩瀨戸左衛門の二男、明治六年八月一日同國東加茂郡足助町實珠院住職金原覺全に就き得度す十六年京都に遊學す十八年十月步兵第十八聯隊に入營し二十年五月除隊となる二十三年三河新聞社の設立せらるゝや客員として同新聞の編輯に從事す二十四年六月京都に出て修學の傍ら同派機關雜誌（眞之光）の主筆として執筆すること二年餘二十七年五月愛知縣知多郡大野町東龍寺の住職となる先是明治十二年十月教導職に補せられ爾來住職又は兼務住職を命ぜられたる寺院前後六ケ寺に及ぶ二十三年七月兵役滿期となる二十七年八月非常召集に應じ同年十一月從軍し翌年五月凱旋す二十九年一月勳八等に叙せられ金圓勳記及從軍記章を受く三十年五月南本山初學寮教師を命せらる以來同寮司、專門寮教授、同寮司、西本山執事長、宗務院執事、公撰及特撰議員、巡回布教使、軍隊慰問使戰院地布教等を命せらる三十七年七月學階己講の稱號を得此年召集せられ同年九月從軍し三十九年二月凱旋す同年四月勳七等に叙し金圓勳記及從軍徽章を下賜せらる後ち從軍記念學術勉勵等の爲め管長又は大本山より五條衣及び金員の下附七回に及ぶ四十三年十二月累進して少僧正に至る（愛知縣知多郡大野村東龍寺）

岩井文助

君は大阪の實業家なり、岩井仁右衛門の三男、天保十三年三月三日生る、家業は貿易商を業とし又別に石炭業を營み神戸に支店二ケ所を有し盛に營業す（大阪市東町南久太郎町四ノ二九、電話東三五一九）

岩井松之助

君は大阪の藥種商なり、岩井善七の長男、文久元年四月十三日生る家世々藥種卸問屋を業とす現に浪速製藥株式會社の取締役たり（大阪市東區道修町三ノ四〇、電話東一一〇三）

石原泰一郎

君は大阪の醫師なり、石原源次郎の長男明治十年二月生る、家世々刀圭を業とす夙に學を修め大阪高等醫學校に入り明治三十一年十月卒業す後ち同校附屬病院の助手となり實地の研究を爲す此年十二月志願兵となる三十七年日露戰役に從軍し功あり後ち二等軍醫に進み從七位勳六等に叙せらる四十年秋獨逸に留學し卒業後論文及び實地試驗に登第し「ドクトル、メヂシーネ」の稱號を得て歸朝し石原醫院を開設して內

科を專門とし頗る腦脊髓神經等の施術に富む、嗜好釣魚（大阪市東區北久寶寺町四ノ四八）

伊藤伊八

君は名古屋の雅樂家なり天保八年八月廿八日生る、始め家業は菓子製造を業とし後ち紙類販賣を營む君幼より雅樂を好み淨眞寺住職秋樂院師に就き學ぶ師の歿後樂人東儀季芳に從ひ研究すること十ヶ年此間專ら力を營業に注ぎ僅に其餘暇を求めて勉學するに過ぎざりき晩年に及んで家勢大に擧り幾多の富を博し初めて潛心斯道を研究するを得たりと云ふ君始め忠芳と號す其嗣伊三郎氏に家督を讓り隱退して身を佛門に入りて山樂敎應と改む方今老後の樂を以て子弟の指導誘掖に從事す（名古屋市西万町一ノ九）

石川寅次

君は東京の洋畫家なり、舊高知藩士石川義忠の長男、明治八年四月高知縣高知市に生る、幼より繪畫を好み長じて小學校に入り其在學中圖畫科は群童を拔き常に優等の位置を占む年十六上京して中村清十郎に就て洋畫を學ぶ後ち小山正太郎の不動舍に入り研鑽す明治三十三年佛國巴里萬國博覽會に朝露竹林の二圖を出品し共に選拔せられて農商務省の御買上げとなる三十五年渡米し同國各州を漫遊し美術學校博物館其他美術大家を訪問し親しく視察を遂げ次で英國に渡り倫敦府に留まること二閱月各地を歷遊し更に佛國に適きサロンの開設に際し幸に之を實地に視察し翌年歸朝す先是君渡米の際日本卉花の水彩畫を多數携帶し到着後知人に公設展覽會の開設を勸められ其人の援助を得て米國「ボストン」「バック、ヘ、ロー」等に於て開設し其携帶せる水彩畫全部の賣却を見るの盛況を極む四十年內國勸業博覽會に於て三等賞銅牌を受領す第二回文部省公設展覽會に菊花の圖、金魚の圖を出陳し內菊花の圖は宮內省御用品として御買上の榮を荷ひ金魚の圖は日本洋畫蒐集の爲に來朝せる米國「デンバアール」美術館委員の特に選拔買上げる所となる現に該品は同國美術館に陳列せらる第三回同省展覽會に葡萄の圖を出品し四等賞を受領す君曾て斯道奬勵の爲め大平洋畫會を發起創設し推されて其理事となり今猶其任に在り、嗜好としては建築及園藝上に多大の趣味を有し其設計亦堪能なりといふ（東京市小石川區丸山町五）

石野香南

君は兵庫縣の畫家なり、其先は赤松丹心の末弟丹鏡に出つ丹鏡故ありて天台宗の僧となり諸州を歷遊し後ち加賀國河北郡八田村に庵を結ぶ其孫浮觀蓮如上人の門弟となり世々同村に住す十三世慧山の時法圓寺と改め姓石井氏を冒す十五世履淨の末弟俗に歸し仕兵衛と稱し明治初年氏を石野と改む之を君の父とす君は其二子にして明治四年一月七日加賀金澤に生る、實兄は金澤に在りて龍山と號し畫家たり君名は徹通稱は藤次郎、香南は其號なり初め鄕里金澤の畫家靑山觀水に就き南宗の畫法を學ぶ後ち垣內雲嶙翁の門に圓山派の筆意を修め明治三十一年上京して贊を川端玉章翁の門に執り其指導を享く在學八ヶ年大阪に出で繪事を業とし居ること一ヶ年更に兵庫西ノ宮の如意寺に假寓し專ら丹靑を事とす（兵庫縣武庫郡西宮町如意寺內）

今嶺秀海

君姓は平氏北畠顯能卿の後胤、紀平貞原の次男、天保十一年九月五日伊勢國安濃郡草生鄕に生る、嘉永三年一月父貞原の志願に從ひ同郡津市寺町の巨刹西來寺方丈宗淵僧正の紹介を以て比叡山延曆寺別院大原奧山實光院僧正觀海和尙の弟子となり佛敎を修業す四年十一月禁裡御所內淸水谷の從一位公正卿の猶子となる五年十一月二十五日得度し假名を宰相實名を秀海と授與せらる安政六年七月實光院に於て初行五七日間文珠の法を修む次で別行一百日間引籠り秘密眞言の敎法を修行す時に觀渉僧正の敎授を受く畢て一山僧衆を請ひて披露す萬延元年十二月比叡山に登り行光坊の戒灌順道場に入り秘密敎法を傳授を受け小阿闍梨に進む文久元年一月梶井一品親王の允可を得て一山諸法會に列す此年二月師の僧正に從ひ比叡山に登り一山の友衆となり大原一圓と同樣に叡山の諸法會に出仕する事を許可せらる三年八月梶井宮の思召を以て龜山普賢院へ住職被仰付、此年九月淸水谷從一位公正卿の猶子表向披露の葬式執行禁裡御所へ御屆に及び關白其他大臣方へ廻禮す次で法眼位の宣旨を賜ふ十月禁中第壹なる嚴義御法要御祈法講を淸凉殿御執行孝明天皇御出仕ありて親ら御經及花籠を御手にし給ひ參勤の僧侶と同樣に御行道被遊時に各宮殿下始め大僧正以下十二名の末席に列するの勅請に接し參勤す三日間の法會終て御滿足の勅語を賜ふ之れ即ち他に比類なき御法會なり御衣を拜領し少僧都に補せらる慶應三年十二月叡山に勅令大法會あり參勤を許され勅使及大僧正並に大中敎師其他列座の面前に於て顯敎の奧義を證して僧綱の位を賜ひ尙密敎灌項の壇に登り秘密敎法の奧義を極め大阿闍梨に進む是れ即ち天臺宗旨の大體にして一代經歷の本義式たり明治元年一月孝明天皇崩御に付御中陰五七日間禁裡御里戶たる般舟院に於て御法會先例の通り行はせらる晝夜六時の勤行を修す御忌明の際法衣を拜領す時に君法印に叙せらる二年七月權大僧都に補せらる此年師跡實光院へ轉住し大原御殿御留主居兼任被仰付六年七月敎部省より敎導職試補を命せられ八年九月少講義に進む九年五月勝林院へ榮轉

し十一年十二月病を以て職を罷め還俗して居を京都にトし三十五年七月衆議院議員選擧立會人に當選す先是廿三年上京區第二十二區會議員に選擧せらる三十一年六月上京區第十七學區爲換方囑托せられ在職七年、四十二年十二月春日尋常小學校設備改良商議員囑托せらる、嗜好、書畫、骨董、和歌（京都市上京區西三本木丸太町北入出水町）

今村久男

君は東京の理髮師なり今村久太郎の長男、明治二十四年七月東京牛込通寺町に生る、父は市内有名なる理髮師にして夙に斯業界の白眉として同業者間に重せられ現に巨擘を以て稱せらる、金子竹次郎の如きも氏の薫陶を享しものなりと云ふ嘗て牛込區理髮業組合の總取締たり又東京市十五區同業組合の創立に與り盡力する所多く爲に銀盃木杯を受領する數次明治四十二年十月病歿す君幼より業を父に受け後大場秀吉に就き歐風の技術を學び四十三年理髮研究の爲め清國上海に航し斯業を研鑽する年餘技大に進み歸朝後父業を繼承して高等調髮所を開設し爾來拮据精勵家業益々隆盛す（東京市牛込區鶴卷町一二〇）

池部清兵衛

君は三重縣の擬革紙製造家なり先代清兵衛の長男、安政元年二月生る、家世々斯業を營み壺屋本舗と稱す幼名奏之助後襲名す玉壺と號す本業は元祿年間初代清兵衛宗義始て煙草入用紙皮製造に從事す爾來代々清兵衛と稱し三代清兵衛道安に至り大に改良し壺屋紙の名世に照飛す是より七代の時天明中益々改良を加へ諸種の袋物を製出し販路殖んど全國に擴張す亨和年間始めて羊羹色の革紙を發明し九代清兵衛宗久更に丹精を凝らし天保年間固縮を發明せり十代宗氏即ち君の父なり頗る和歌を嗜み最も高尚なる蒔繪を施し始めて美術的製品を見る後敷物を製作し大に好評を博せり君亦和歌茶道を好み熱誠家業に從事し益々隆盛なり之を內外各種公私の博覽會、共進會等に出品し金銀銅の優等賞を得る數次なり（伊勢國飯南郡漕代村字稻本、支店宇治山田町今在家町一九）

泉勝造

君は神戸の實業家なり、明治十年一月十一日阿波國德島市船場町に生る、本姓楠本氏年十二久住商店に奉公して肥料商に從事する多年其間同商店の支店を兵庫に設くるや君擢られて同支店詰たり二十一歳にして主人の媒介に依り泉家の女婿となる養家は市內有數なる米穀肥料商にして養父を理右衞門と云ふ養父歿後嗣子ありと雖ども未だ幼弱なるを以て君一家經營の任に當り爾來勤勉摯實家業益々進み現に英獨等より硫酸安母尼亞等の肥料を直輸入して盛に營業す（兵庫縣神戸市兵庫島上町）

市川塔南

君は伊勢津市の書家なり、先代市兵衛の長子、安政三年十月十九日生る、家世々製油を業とす君名は進字は德夫幼名市太郎後ら塔南と改め又通じて號とす甫め漢籍を櫻本春山に後ら龜井改堂に修む、書法及篆刻を野田半谷に師事し研鑽す一時職を三重縣廳に奉す織を罷め爾來書を以て立つ明治二十八年七月第四回內國勸業博覽會に篆書を出陳し全國褒章を受くるもの勤かに三名君其一に加る而して審査報告中書を評して曰く書は皆細謹慎密數百千字を寫して誤脫なきを以て能とするものゝ如し自作の詩文を出す者僅かに天長節の一古詩あるのみ筆書の韻に乏きを知るべし加之此回の出品者は率ね霜髯二毛の老生にして青年有爲の人に非あらず此輩にして早く窺究の中に歸し去らば後來復た此に繼ぐものなからん書道の衰頽せる實に甚しと君最も篆書に長ず方今都下屈指の書家たり天長節古詩を得たれば爰に掲ぐ天長瑞節結城神社聞見諸士競馬陸軍樂隊奏樂謹賦、維明治甲午小春初、天長瑞節氣和愉待時菊花開綺爛、馨香宛然德化敷、方今陸海軍征清陣、將賢士勇共前進、醜虜如何脆弱尤所向輸我以大勝、吉事其然況良辰、結城神社會官民、設音樂隊與馬將、競騰驤不相奪倫、悲壯優雅翕及繹、逸氣稜々無仇敵、感觸雖異忠誠同、武夫文士之閱歷恭賀、聖祥繼紹萬斯年、兼祝我軍功績終始全（三重縣津市萬町二六）

石田龜太郎

君は吳市の殖產家なり、先代治右衞門の長男、萬延元年十一月生る、家世々農を業とす嘗て舊吉浦村長たり後ち吉浦村の一部を市に編入するに際し再

び推されて村長となりて盡力す而して市に編入されたる一部に更らに町名を附するに當り紛議の生せんことを慮り幸に大字あり河原兩城と云ふ君其兩と河との二字を取りて以て二川町と命名して事なきを得たりといふ編入後選ばれて市會議員となり爾來累選今猶其任に在り、嗜好、盆栽（廣島縣吳市二川町）

州藩士一野家に嫁し夫に隨ひ名古屋に歸藩す幾もなく不幸夫に永別するに至る是より官に出て修得せる江戸唄を以て業とし杵屋安と稱す明治十七年歸東して門弟の指導誘掖に從事すること多年女史又能く三味線の技に長ず其間女史天稟の美音と巧妙なる三絃は兩々相俟て其技實に神に入り名聲忽ち斯界を壓す今や藝號を長女今子に讓り自ら補佐となりて專ら後進の指南に從事しつゝあり（東京市麹町區下二番町二一）

一野安

女史は東京の長唄師匠なり嘉永三年十月四日生る、家世々舊幕府の作事係たり父頗る長唄に長じ藝號を杵屋彌三郎と稱す女史亦幼にして斯道を好み夙に父に就き修業して其妙技に入り父の藝號を襲ぐ後ち實弟に藝號を讓りて尾

市場謙藏

君は三重縣の神職なり、弘化元年八月十八日生る、崇文と號す本姓伊藤氏幼名豊太郎後ち市場家に入り養嗣子となり今名に改む、夙に漢學を舊宇島藩儒森金山に學び傍ら習字を舊忍藩士西原大郎九に修む後ち舊尾張藩黌明倫堂に入り又國學を舊尾州藩士山田千畝に學ぶ明治十九年岐阜縣廳に出仕し二十四年技手となる三十年十月職を罷む此間日本赤十字社、岐阜縣委員、葉煙草取扱所新築工事、郵便電信局新築工事の監督たり三十五年二月桑名郡赤須賀村名譽村長第五回内國勧業博覽會三重協賛會桑名郡委員、其他日本赤十字社三重支部桑名郡委員となる三十九年四月明治三十七八年事件の功に依り勳七等に叙し青色桐葉章及金若干を賜ふ次で日本赤十字社より同戰役中救護事務に盡瘁せし廉を以て木杯一個を受く又三重縣廳振武會、尚武會等より同戰役中軍務に幇助し後援事業に盡力せし功に依り紀念として各銀牌及感謝狀を受く四十年十二月同縣河藝郡若松村深田神社の社掌に任せらる四十一年祝詞作文祭典歴史等の講習を皇學館に受く此年四月桑名郡赤須賀神明社の社掌に轉任して今日に至る君幼より繪畫を好み浮田可爲帆山唯念（花乃舍）等に學び後ち從四位下土佐備前守光文を師とす方今專ら丹青を事とす（三重縣桑名郡赤須賀村大字獵場町二二八）

石田謙堂

君は伊勢津の畫家なり、舊津藩士山田耕作の次男萬延元年十二月二十七日生る後ち同藩士石田家を嗣ぐ、幼名金二郎後ち千箭と改む謙堂は其號別に南汀の號あり、夙に叔父中村竹汀に就き書畫を學ぶ二十一歳松阪に出で堀南涯の門に入り南宗の畫法を研鑽すること十ヶ年明治二十六年津に歸りて以來筆硯を事とす三十三年津私立勵精館に入り繪畫科を擔任教授し現に其職に在り嘗て縣廳の命を受け高松市開設共進會の出品を寫生し又明治三十五年内國勧業博覽會開設に際し大阪に出張して出品の寫生に從事し方今大日本南畫協會正會員、津市千歳社（書畫會）幹事三重繪畫協會正會員たり、嗜好、酒又杯の蒐集（三重縣津市大瀬古町一九）

伊藤滿作

君は名古屋の建築家なり、安政六年九月生る伊藤九郎助の四男、諱は守房後ち出でゝ親戚伊藤平左衛門の養子となる養家は世々尾州藩の棟梁にして元祿年間名古屋東本願寺別院を建築せし以來各地寺社等の建築を以て名あり、明治七年家督を相續す翌年愛知縣廳用度方を命せらる爾來東西兩京及び各地の寺社宮殿貴舍紳邸等の建築の棟梁たり十七年皇居御造營工事御用仰付られ正門内御車寄同御門受附の間侍從武官伺候所、吹上御門、御常御殿御門等を奉建す二十五年名古屋建築會社建築部長となり翌年之を辭す此年宮内省内匠寮一般御用達仰仕けられ兼て名古屋離宮の御用工たり三十年御料局名古屋支廳々舍以下建築設計圖案取調及び工事監督を囑托せられ其落成に及び金三百圓を賞賜せらる次で越前永平寺再建の總棟梁として工事を監し三十四年落成に及び厚く賞せらる同年名古屋匠工組合頭取に推さる又能登曹洞宗大本山總持寺敕門以下五大建築及名古屋覺土殿各建物五千八百餘坪の圖案設計に從事す四十年伊藤公爵恩賜館の建設及其嗣博邦氏邸宅の新築を竣功す其他東京三田西蓮寺、品川正德寺、赤坂報土寺、千駄ヶ谷瑞圓寺、本所源光寺等皆君の受負に成るものにして大和丹波市の天理教本部教會所も亦君の設計圖案より工事完成するに至る君嘗て組合頭取に推さるゝや自ら工匠技藝の榮を發行して組合員に頒ち大に指導に力む（名古屋市矢場町一ノ切七三）

市山壽美

女史は東京の市山派踊師匠なり中村榮藏の三女、天保二年十二月十七日江戸京橋出雲町に生る、年甫て五歳市山七十郎の門に入り踊を修業し二十一歳にして名取して市山壽美と稱す後ち禮儀作法見習の爲に上杉家に奉公し二十三歳の時鈴木家に嫁す明治十二年六月以降踊を以て業とし爾來專ら子弟の教養に從事し以て今に及ぶ女史齡今八十二而かも矍鑠として壯者を凌ぐ女史嗣なし實弟の子壽幸を養女となし之に代稽古を爲さしめ自ら監督指揮し今に渝

らず盛に教授しつゝあり（東京市芝區濱松町一ノ一五）

石川光明

君は東京の彫刻家なり石川藤吉の長男、嘉永五年九月十八日江戸に生る、家世々彫刻を業とす君祖業を繼ぐ文久三年狩野素川に就て畫法を修むること四年慶應二年菊川正光の門に入り牙角彫刻の技を學ぶ明治五年以降獨立自營す十四年第二回内國勸業博覽會へ象牙の置物觀音像を出陳し妙技二等賞を受領す且各賞牌の原型彫刻を命せらる翌年第三回觀古美術會へ行幸の際席上彫刻の命を拜す二十年工藝品共進會の審査員を囑托せられ次で皇居御造營の御學問所階上階下御障子框縁彫刻仰付けらる二十一年皇居御二階下欄間並に謁見所竹節欄間彫刻を命せらる二十三年七月東京美術學校に出仕し第三回内國勸業博覽會へ象牙加茂長明像及木製屏風秋鹿彫を出陳し共に二等妙技賞を受領す此年十月帝室技藝員を命せられ勸業博覽會審査員の功勞を賞し銀盃を下賜せらる二十四年美術學校教授に任じ從七位に叙せらる二十五年米國市俄古萬國博覽會出品鑑査官となる二十七年故山田伯銅像木型製作主任となり二十八年第四回内國勸業博覽會審査役を命せらる三十一年正七位に進み三十三年佛國巴里萬國博覽會鑑査官となり翌年從六位に叙せらる三十六年第五回内國勸業博覽會審査官となり次で米國聖路易萬國博覽會鑑査官となる三十六年敕定の藍綬章を賜はる三十七年正六位勳六等に叙し四十年從五位に陞叙す爾來東京勸業博覽會審査員文部省美術展覽會審査員たり四十三年勳五等に叙せられ現に東京美術學校教授日本美術協會特別會員たり（東京市下谷區谷中天王寺町三二）

岩田大中

君は富山縣の人舊金澤藩士岩田安益の男、夙に日本孤兒教育社を創設し四方慈善家の賛襄を得て各地方の孤兒院育兒院等に於て小學科程を修了し進んで中等教育を受けんとする者に學資を補給し大に就學奬勵に盡瘁する處あり傍ら倫道（雜誌）を發刊し兼て富山中央新聞の主幹にして業間富山藥業時報に執筆す方今政友會に籍を有し縣會議員たり（富山縣越中國富山市旅籠町、電話三〇二）

市川得菴

君は横濱の書家なり舊加賀藩士にして書家市川遂庵の長子、天保五年六月五日江戸下谷に生る、祖考米庵書を以て天下に鳴る君名は鉉吉字は三鼎、得庵は其號なり夙に家學を受け出藍の譽あり文久二年命藩に依り加州金澤城下に移住す明治四年上京し七年大藏省に出仕す八年所藏書畫の天覽を辱ふするの光榮を荷ふ九年書畫幅、法帖類百五

十種を宮内省に献納し其賞として金帛を下賜せらる二十三年官職を罷め四國九州に漫遊す二十五年居を横濱に移し書法を教授し傍ら古書を鑑し以て餘生を送ると云ふ餘技と雖ども外祖父寛齋翁に私淑し詩賦を能くす（神奈川縣横濱市北方町四九二）

伊東祐賢

君は富山縣の溫泉家なり、伊東祐明の長男明治二年一月二十三日生る、其先は左衛門祐經伊豆國伊東より來りて礪波郡大西村に住し世々前田侯に仕ふ其九世の孫義陳藩命に依り延享四年下新川郡泊町に移住し藩主に仕へ扶持高二十石を賜はる文化五年金澤城新築の際里部山より材木伐採方を命せられ功に依り其賞として小川溫泉を賜はる以來溫泉宿を業とし藩主の本陣を勤めり君夙に漢籍を岡田信行の門に學ぶ後ち上京して東京專修學校、慶應義塾等に修め卒業後專ら家業に從事して小川溫泉場を修復し浴室を新築し不老閣長生館、紅葉樓等皆善美を盡し益々時勢の要求に應ずるの策を講ず明治十一年車駕北陸の地に幸するに方り新殿を築き て行在所を設け赤誠以て之を迎へ御駐輦の光榮を辱ふするに至り緞子二卷、御紋附三重銀盃を下賜せらる後又陸軍大將有栖川宮殿下御旅館の榮を荷ひ御染筆扁額、御紋附銀盃を賜ふ四十一年小川溫泉附近の山崎溫泉を買收し更に業務の發展に盡す處あり先是明治二十二年以降町會議員、縣會議員株式會社泊銀行取締役等に選擧せられ又西信越鐵道敷設に關し請願委員に推され斡旋盡瘁す四十一年選ばれて衆議院議員たり四十二年春御眞影を奉安す資性篤實公共事業の志に深く二十九年山崎街道開修の擧あるや卒先献金すること前後五千圓に及ぶ其他地方公益の事に與り義捐盡力する處尠からず方今町會議員縣會議員、日本赤十字社特別社員にして立憲政友會に屬す、嗜好、書畫、骨董（富山縣越中國下新川郡泊町）

伊藤小三郎

君は京都府の人伊藤新造の次男、明治四年七月八日生る明治三十年帝國大學文科大學を卒業し文學士となり直に富山縣中學校教諭に任じ翌年八月第三高等學校教授に轉じ現に其職に在り四十二年四月從五位に陞叙す（京都市上京區寺町桝形）

伊藤榮太郎

君は五十二銀行支配人なり舊松山藩士伊藤兵藏の長男、嘉永三年正月十七日生る、夙に宮島清助に就て漢學を修む十七歳藩兵として藩主に隨ひ江戸大阪等に在り維新後に兵を罷め明治三年藩廳書記となり五年石鐵縣に轉任す六年愛媛縣と改稱せらるゝや其縣屬たり三十六年職を罷め株式會社五十二銀行に入りて其支配人となり以て今日に至

る（愛媛縣松山市溫泉柳井町）

乾　淡江

君は東京の書家なり大村藤兵衛の次男明治七年四月山梨縣甲府に生る、年二十九、出でゝ大阪の乾家に入り其養嗣子となる通稱は角太郎字は藏角、淡江は其號なり甫め漢學を鄉里秀齋塾に學び年十七、笈を負ふて上京し、長谷川泰氏の濟生學舍に入り醫學を專攻す在學中日清戰爭の事端發するや海軍文官となる偶々惡疫流行に會す君醫學の素養あるを以て選ばれて防疫の任務を帶び清國に航す遂に病を得て歸期し幾もなく病平愈す再び清國に渡り上海に行き轉じて厦門に出で語學を研究すること四年、臺灣平定後總督府に出仕し更に上海に戻り吳淞寶山に行き翰林蕃鴻鼎に會し嘉定に至り翰林秦曾澤と交り常塾縣に出で言敦首に師事し書道を學び蘇州に入り翰林蔣炳章に就き聞く處あり嘉興に於て吳愛福（擧人）に抗州（錢塘）に翰林吳震春等に會し又稽（紹興）に行き翰林何元泰に就き指導を受く後梁湖に遊び上虞に孝女曹娥の遺蹟を訪ひ又更に湖を橫きり餘姚に遊び翰林何聯思に接し得る所あり或は橫河を渡り、鎭海に出て大江に入り、江陰に上陸し翰林章際治に會し秦望山を經て陽湖に遊び翰林董若洵に交り尋て丹徒鎭江）江寧（南京）に至り翰林鄧邦述仝魏家驛等に就き書道を研究し或は又巢湖を橫きり合肥に行き翰林周維藩に師事し丁岡、東土山を越へ肥州に出で淮河に入り西肥河を溯り亳に出で、高邱（歸德）に來り、祥符（開封）に行き翰林

牛東藩に又汜水に至り翰林趙東階等に謁事す夫より龍臥河に出で洛陽に入り翰林林東郊、仝邵毓嵩等に交り、再び又黃河に返り孟津、七里頭、陳河口、芦花嶺を過ぎ長安に入り、又威陽に遊び長安より漢陽に入り翰林蔣熊に又武昌に至り翰林饒叔光等に師事す江を渡り黃岡に翰林張鳴珂、汪明源等に交り更に九江（德化）湖口より南昌に至り轉還して大江に出で巴陵（丘州）に入り洞庭を過ぎ善化（長沙）に達し翰林張鴻基周渤等に就き指導を受け夫より岳麓山を踏へ寧鄉に入り鳳凰湖を渡り益陽に出て龍陽（常德）を過ぎて洞庭溪を溯り武陵、桃源の勝地を探り巴陵に歸る後又一轉して重慶に向ひ江安に至り翰林傳增湘に會し南溪、宜賓より昆明（雲南）に入り又呈貢、河陽等より曲江に出で佛領勞開、河口、海防を經て非律賓、マニラに至り香港に達す又更に廣東（番禺）に至り翰林崔肇琳に會し厦門に入り福州に行き翰林葉在藻、陳培鋸、陳海梅、黃彥鴻等と交り書法を研究して臺灣に入る於是時の總督府海軍幕僚は君に清語通譯の事を囑托す明治卅九年職を辭し歸朝の途に就く途中神戸に滯在し清國領事官員等に書道の敎授を爲し一旦歸鄉し居ること僅に一年同四十一年居を東都に移し書法學院を設置し、速成敎授を以て大に斯道の普及を計る君が清國に在る事滿十三年其間足跡四百餘州二千六百餘里を踏破し到る所の翰林、進士の著名なる大家に就き具さに刻苦を嘗め研鑽の功を積み洵に造詣する處深し今や時勢の趨向に鑑み書道速成法を工夫し以て帷を下し專ら子弟の董陶に從事す君臺灣にあるや僅かに一年有半其門に來り敎を請ふもの實に八百餘名の多きに及ぶと云ふ方今君が門下に敎を乞ふ者七百餘名にして多くは朝野知名の縉紳なり嗜好、詩文を愛し忙中閑あれば鐵筆を弄す其室玉江女史併び立て又書を能くす（東京市神田區三崎町一ノ一〇、電話本局四二九〇）

市川吉六

君は甲府の齒科醫なり市川昌重の二男、明治八年甲州東山梨郡八幡村に生る、明治二十八年高山紀齋氏の經營せる高山齒科醫學院を卒業して內務省醫術開業齒科試驗に及第し爾來東京銀座の高山紀齋の治療所に在りて專ら濟生に從事す三十二年辭して歸國し甲府市に出で現住所に開業して以て今に及ぶ君常に柔道を好み山梨柔道會を創設し大に斯道の奬勵に努めつゝあり（山梨縣甲府市錦町六三）

伊藤小左衛門

君は三重縣の實業家なり天保十四年五月十八日生る、世々淸酒味噌醬油釀造販賣を業とし兼て羽二重製糸を營み豪富一鄉に冠たり曾て株式會社四日市銀行の創立に與り其取締役たりき縣下の多額納稅者にして現に稅額千百卅餘圓を納む（三重縣三重郡四鄉村字室山）

井上溫造

君は吳市の實業家なり嘉永五年四月吳庄山田に生る、砂糖商を營む世々一鄉の名門たり明治六年大組總代役を勤

め十一年以來戸長たること十一年、二十一年再び戸長に推され二十三年村長に當選す、市制實施と共に其職を罷む四十二年一月推されて市參事會員となり現に其職に在り（廣島縣吳市庄山田明神町、電話**三一九**）

岩城伊平

君は德島縣の蠶業家なり、五形道造の四男、元治元年九月阿波國板野郡撫養に生る、年十二、日野藍商店に奉公し十六歳にして四十物商を獨營す十九歳九州久留米に出で藍商を營み傍ら絹織物業に從事し二十三歳の時歸鄕して岩城家に入り養子となり家督を相續して舊名新藏と改め先代伊平を襲名し藍問屋業を營む後時勢の變遷に伴ひ業を廢し蠶業を起し明治三十九年桑園開き翌年蠶室を新設し專ら力を養蠶業に竭し此年德島市繭糸同業組合の創立に與り推されて組長に擧げらる四十年製糸工場竣成す時に東宮殿下德島市へ行啓の事あり因て該工場を紀念館と名付たりと云ふ方今市會議員縣會議員、德島市繭糸同業組合組長たり、嗜好、釣魚（阿波國德島市下助任 電話**一四六**）

石島古城

君は横濱の畫家なり石島房吉の長男明治十一年十一月二十九日常陸國稻敷郡江戸崎町に生る、家世々商を業とす通稱文太郎古城は其號、三歳父を喪ひ祖父に鞠育せらる祖父繪事を嗜み屢々之を君に與ふ之れが動機となり遂に繪畫に趣味を有するに至る、漸く長じて東京に來り始め梶田半古の門に學ぶ後ち博物館美術部技師齋藤謙に師事す卅三年東京美術學校に入學し卅八年卒業す後ち審美書院に入り古畫の復寫に從事して得る所あり三十九年東京印刷株式會社横濱支部に勤務す先是三十六年大日本圖案協會第八回展覽會に中形浴衣圖案を出品し一等賞を受領す尋で横濱寫眞會審査員に推薦せらる、方今横濱貿易新報繪畫部主任兼美術擅當記者にして傍ら文學美術雜誌を經營發刊す（神奈川縣横濱市南太田町二一九二）

井上清治

君は富山縣の大地主（多額納税者）なり井上清六の二男、弘化元年九月二十五日生る、後ち先代井上清治の養二子となる縣下の大地主を以て知らる方今株式會社第四十七銀行取締役たり（富市縣婦負郡速星村）

井上正義

子は舊上總鶴舞藩主なり子爵井上正巳の二男、明治十六年四月二十三日生る、明治三十九年三月井上家に入り其後を繼ぎ襲爵仰付けられ從五位に叙せらる養家は源經基四代井上頼季の末裔たり頼季より二十代を經て清秀に至る此間德川氏に仕へ遠州横須賀五萬六千五百石を領す後清春に至り上總國鶴舞

六萬石の藩主たり君は先代正英の後を嗣ぐに至る（東京市牛込區喜久井町三四、電話番町**八七二**）

板倉中

君は東京の辯護士なり板倉周二の長男、安政三年九月朔日上總國長生郡關村に生る、家世々里見家の客將板倉大炊介の後裔、先考は漢籍に通せり、君春峰と號す別に桃李園醉月の號あり幼より經史百家の書を渉獵す歳十八、漢學私塾蓋醫學舍の講師となる明治十八年上京して箕作麟祥、河津祐之、大井憲太郎氏等に就て佛學を修め又法律學を研究す後代言人となり爾來身を政海に投じ自由黨員たり十九年千葉縣會議員に選擧せられ二十三年議長に推さる此年衆議院議員に選出せられ二十六年再選す先是縣下に東海新報なる自由主義の新聞を發刊して自ら其主幹たり三十五年同縣より選出せられて衆議院議員となり翌年三月再選す後三十七八年事件の功に依り勳四等に叙す四十三年五月萬國議員會議參列の爲め白耳義國に渡航す同年十月歸朝して衆議院決算委員長に推さる四十五年總改選に際し千葉縣より選出せられて衆議院議員となる嘗て檜原木材株式會社取締役たり方今前記職の外政友會所屬代議士たり其著に磯の芥、佛國行政法等あり居常詩文和歌俳諧を嗜み皆堪能なり（東京市神田區新石町五、電話本局**四五四**）

泉鳳泉

君は東京の畫家なり材木問屋泉伊勢三郎の次男、明治十九年三月生る、通稱勢、鳳泉は其號又二橋の別號あり歳十六始て望月金鳳翁の門に入り畫法を學び傍ら中島靜圃に就て漢學を修む後師の勸に依り日本美術協會、日本畫會明治畫會等の展覽會に其作品を出陳して受賞あり又屢々宮内省御用品たるの光榮を荷へり明治四十三年師の紹介を以て京都に出で菊池芳文の門に遊び傍ら古社寺の國寶畫を模寫し造詣する所あり方今專ら丹青を事とす、嗜好、詩賦尺八（東京市本所區相生町五ノ一、電話浪花**四八九〇**）

石田孝吉

君は現代議士なり島根縣の人石田量太郎の長男、明治五年二月晦日生る、夙に鄕校に學び後上京して慶應義塾に入り卒業後歸鄕し郡會議員に擧げられ次で同議長となる後縣會議員たり明治三十七年同縣郡部より推されて衆議院議員に當選し爾來累選其職に在り日露事件の功に依り勳四等に叙し旭日小綬章を賜はる四十五年五月又郡部より衆議院議員に選出せられ現に其職に在り方今前記の外株式會社石見銀行取締役たり（島根縣邇摩郡波積村）

伊東祐彦

君は醫學博士なり舊米澤士伊藤祐順

の長男、慶應元年八月十七日生る、明治二十五年帝國醫科大學を卒業して同大學助手となる二十八年縣立福岡病院小兒科部長に任せられ福岡縣技師及海港檢疫醫官を兼務し二十四年獨逸に留學を命せられ三十七年歸朝し次で京都帝國大學福岡醫科大學教授に任じ現に其職に在り其間累進して從五位に叙せられ三十九年醫學博士の學位を授けらる（福岡縣福岡市市船町三〇）

岩朝律郎

○は德島縣の清酒釀造家なり嘉永四年正月生る、其先は細川家の重臣應仁の亂敗戰して大和葛城に落ち一郡の城主たり其子孫阿波國撫養に移住し德島藩の銀座を勤め苗字帶刀を許され元祿年間酒造業を開始す爾來子孫相繼ぎ君に至る君十六歳家督を相續し家業を繼ぐ後醬油釀造を兼業し一意專心業務の發展に努力す清酒萬輝、旭鶴最も名あり之を各種公私の諸會に出品し褒狀賞牌を受領する數回明治十年酒造合資會社を創立し又阿部興人と阿波肥料會社を組織し更に又撫養精米株式會社を創立して各其社長に推され後撫養精米株式會社の社長を辭し後其取締役に擧げられ現に其任に在り、嗜好、書畫骨董（阿波國板野郡撫養町字木津町）

一立齋文車

丈は東京の講談家なり春日久兵衛の次男、嘉永元年四月江戸淺草聖天町に生る、通稱岩吉一立齋文車は其藝名なり始め神田松富町窪田保の門に講談を學ぶ年二十一文晁に師事し小文字文晁と改名各席に出演明治十七年一立齋文車に襲ぎ大岡政談西遊記は尤も得意とす方今東京講談界中に嘖々の名あり嗜好、俳諧、川柳、號を悟空と稱す（東京市下谷區竹町一）

井上辰九郎

君は法學博士なり舊靜岡藩士井上清相の長男、明治元年九月二十三日生る明治二十年帝國大學法科大學に入り政治科を專攻し二十三年七月卒業して大學院に入り應用經濟學を攻究し後ち農科大學及工科大學の講師に囑托せられ廿五年學習院教授を兼務し經濟學を擔任し傍ら東京專門學校同專修學校其他私立學校に入り理財學の講義を擔任す三十年九月日本銀行に入り翌年副支配人となる次で檢査役に轉じ更に名古屋支店長たり三十二年本店詰となり株式局調査役に推さる三十五年日本興業銀行の創立に際し入りて其理事となり同行營業第二部長を兼務す四十年六月博覽會の推薦に依り法學博士の學位を授けらる四十二年五月滿洲鐵道株式會社々債及興業銀行の用務を帶び歐米に航し四十四年歸朝し方今社務の傍ら早稲田大學に入り講義の勞を執り後進の誘掖に努めつゝあり其著に外國貿易論、マーシャル氏經濟原論、バステーブル財政學等あり（東京市小石川區關口水道町三〇、電話番町一三一三）

石山彌平

君は東京の辯護士なり埼玉縣の人石山逸平の次男、慶應二年六月十一日北葛飾郡櫻井村字蘆橋に生る、明治二十年英吉利法律學校を卒業して代言試驗及判檢事登用試驗に及第し判事試補となり二十三年判事に任じ二十四年從七位に叙し千葉裁判所に勤務し後東京裁判所詰となる二十六年辭して辯護士となり神戸居留地に事務所を設け增島六一郎氏と共に專ら內外交涉事件を掌理す二十七年東京に移住し特許代理者を兼ぬ聲望頗る高く東京辯護士會常議員日本辯護士協會雜誌編輯主事、東京法學院評議員其他各種の倶樂部協會等に於ける樞要の位置に推さる方今中央大學評議員兼理事にして日本辯護士會副會長たり（東京市麴町區內幸町一ノ四電話新橋四三〇）

子爵井伊直安

子は貴族院議員なり舊越後與板藩主舊高三萬石正四位下左近衛權中將掃部頭直弼の三男、嘉永四年二月十一日江戸に生る、文久二年九月宗宗より入て從五位下兵部少輔井伊直充の養嗣子となる養家は藤原鎌足に出づ兵部少輔井伊直政の二子直勝の孫なり直勝三萬石を分與され上州安中の城主となる是より十一代を經て子に至る子は元治元年從五位下兵部少輔に任じ慶應三年右京亮となる明治二年版籍を奉還し戊辰の際北越軍に屬し各所に轉戰し功に依り幣帛を下賜せられ與板藩知事を免ぜらる五年歐洲各國に歷遊し翌年歸朝し十七年子爵を授けられ二十年正五位に二十五年從四位に昇叙せらる二十九年貴族院議員に選擧せられ三十年改選期の際再選し爾來累選今尙其職に在り三十九年日露事件の功に依り勳四等に叙し旭日小綬章を賜ふ現今從三位（東京市麴町區紀尾井町六、電話番町三三七）

今福淺吉

君は神戸の燐寸軸木製造家なり今福留吉の次男、明治八年三月播州美囊郡三木町に生る、君九歳の時一家を擧げて神戸に移住し父は鍛冶職を業とす君出でゝ株式會社開榮社に入り軸木製造に從事す十六歳製軸機械を發明し二十一歳前田直七氏に隨ひ名古屋に往き製軸事業を起し自ら工場長となり苦辛慘憺七ヶ年終に失敗に歸す時偶々横濱に大火あり十數本の樅木を榊原貞藏氏より借受け之を横濱に出し數百金を利す是より信州大河內に到り軸木製造業を創む爾後軸木の價格暴騰し數千金の利益を得時に父重患の報に接し倉皇歸神し後ち軸木請負賃製造業に從事し拮据營々漸次業務を發展し明治二十三年始めて製軸業を獨營し爾來益々精勵以て今日の隆盛を見るに至る今や精巧なる

製軸機拾數臺を備へ工場の設備頗る完全にして精良品を製出し名聲斯業界に高し（兵庫縣神戸市兵庫明治通二、電話二四六八）

岩崎一

君は東京の實業家なり舊幕臣岩崎亮之輔の次男、明治元年九月三日生る、父亮之輔氏は曾て日本莫大小製造會社長たり君夙に小永井小舟の門に漢學を修め後ち三井家に入りて地所部副支配人となり東京市會議員に選擧せらる方今大阪信托株式會社取締役社長、日本信托株式會社專務取締役、玉川電氣鐵道株式會社、日本硬質陶器株式會社監査役たり（東京市芝區高輪南町五三、電話芝一一五一）

伊藤幸太郎

君は東京の實業家なり伊藤庄次郎の長男、明治三年六月十八日生る、家世々壁紙製造を業とす明治二十五年東京專門學校を卒業して一年志願兵たり後ち專ら父を輔けて家業に從事す三十三年以來株式會社淺草銀行取締役となり兼て同行仲野町支店長となる方今千住吾妻瀧船株式會社取締役、株式會社豊國銀行取締役たり（東京市淺草區山之宿町五三、電話下谷七八六）

伊藤德三

君は大阪の辯護士なり嘉永六年六月尾州名古屋に生る、明治二年東京に遊學し七年佐賀裁判所に出仕す後ち長崎に出で代言人試驗に合格し二十年居を浪華に移し法律事務を執り傍ら府會議員、市會議員、大阪辯護士會長其他會社の顧問たり三十一年六月第十二議會解散後大阪府の第二區より撰ばれて衆議院議員となる三十六年以來大津及京津電車の經營に與り又韓國瓦斯電氣株式會社を起し現に其監査役たり（東京市四ッ谷區伊賀町三、大阪市東區北濱町四ノ五五）

池田順藏

君は明治十四年六月、鹿兒島市に生る、實家は世々舊藩主島津侯の家臣、實父は山尾盛吉、君は其の三男、故ありて幼少の頃、池田家を嗣ぐ、小學校卒業後、鹿兒島商業學校に入り、卒業後、一年志願兵として鹿兒島四十五聯隊歩兵科へ入營、日露戰爭に際し、第六師團野戰病院計手として出征、中途經理部付となり、各地の戰爭に參加す事平ぎて除隊、功によりて勳七等に叙せらる、明治四十年三月、渡臺して小松利三郎氏の小松商會に入り、其の營業係として目下盛に活動中なり（臺灣基隆鼻仔頭街）

磯部保次

君は前代議士なり舊水戸藩士磯部吉保の長男、明治元年七月二十六日生る明治二十八年九月家督を相續す曾て電氣事業視察の爲め歐米各國を歷遊し四十一年茨城縣郡部より選出せられて衆議院議員たり方今千代田瓦斯株式會社常務取締役、東洋製鹽株式會社、株式會社隆文館等の取締役三協印刷株式會社監査役の職に在り（東京市芝區車町三〇五、電話芝一〇三三）

池田元吉

君は長野市の杏罐詰製造家（昇信堂）なり池田富作の長男、安政六年六月信州埴科郡松代町に生る、明治十年の頃長野市に出て始めて茶商を業とし後ち業を廢し海陸物産、諸罐詰卸小賣商を營み爾來杏罐詰に全力を注き刻苦研鑽多年終に奏功して純良品を製作し大に聲價を揚げ今や長野縣下の一物産として世に歡迎せらるゝに至る現に信州上水内郡安茂里村に五千坪の土地を開墾し杏樹を栽培して家業益々殷盛す明治三十年長野商業會議所議員に選擧せらる四十一年卒先商業會議所を建議して商工業使用人奬勵法を制定せ專しら市内商工業の發達を計るに盡力し四十二年市會議員に當選し此年商業會議所常議員に推さる次で同所理財部長たり曾て長野市開設全國罐詰聯合博覽會の審査委員に推薦せらる方今長野市會議員同商業會議所議員、政友會員、日本赤十字社正社員たり、嗜好盆栽（長野縣長野市間御所町、電話一六三）

石居四郎平

君は滋賀縣の實業家なり明治十四年四月十四日生る、家世々肥料商兼米穀貸付業を營む夙に滋賀縣商業學校を卒業し後ち上京して早稲田大學に入り法科を專修し卒業後專ら家業に從事し明治四十年十二月父歿後家督を相續し爾來支店を北海道小樽及越前敦賀等に設け盛に營業す方今株式會社二十一銀行同盟金銀行、株式會社伊香銀行等取締役、日本赤十字社有功社員たり、家に豊公の長濱城に在りし當時の金燈籠あり此品城趾の田地より發堀したるものにして慶長四年三月の刻文あり君が貴重品の一にして秘藏する所なりと云ふ（近江國阪田郡長濱町字舟山町五四、電話一〇）

磯部仁左衛門

君は門司の土本請負業者なり磯部松藏の長男、明治十八年五月六日生る、同四十二年家督を相續す福岡縣の多額納税者にして現に税額二千九十餘圓を納め縣下有數の土本請負業者たり（福岡縣門司市西海岸通）

石川石代

君は三重縣の人石川治旬十郎の長男明治元年三月七日伊勢國龜岡に生る、明治二十三年帝國大學土木工學科を卒業し直に内務省土木監督署技師試補となり次で技師に進み二十八年遞信省鐵道技師兼青森縣技師に轉じ翌年鐵道作

業局青森出張所長として奥羽北線の經營に任じ三十七年日露戰役の際大本營臨時軍用鐵道監部技師長として渡韓し三十九年統監府鐵道管理局建設部長兼工務部長となり四十二年六月鐵道調査の爲め歐米に渡航し四十三年四月歸朝し鐵道院に入り技師に任じ現に其職に在り曾て一年志願兵として軍籍に入り歩兵中尉に任ず日露事件の功に依り勳三等に叙せられ正五位に累進す（東京市赤坂區丹後町三七）

稲垣彌三郎

君は神奈川縣の米穀商なり先代彌三郎の長男、文久元年七月四日勢州三重郡八郷村に生る、家世々醤油醸造及米穀販賣を業とす幼名民治郎後家督を相續して襲名す明治十八年冬始めて横濱に出で米雑穀問屋業を開始し拮据奮勵業務漸次に旺盛す二十八年以來米穀貿易商組合組長に推され今猶其任に在り又二十七年以降横濱米穀取引所仲買人、同取引所監査役武藏商業銀行取締役たり三十六年三月横濱商業會議所談員に選擧せられ三十八年一月同米穀貿易商組合組長に擧げらる三十九年横濱改良精米株引會社の創立に與り後其相談役に推さる方今横濱商業會議所議員たり（横濱市元濱町四ノ四二、電話長一八五）

今西清兵衛 a

君は奈良の實業家なり先代清一の長男、明治十一年六月一日生る、父歿後家督を相續し明治十八年父添上郡平尾村より此地に出で始めて八重櫻酒醸造業を營む二十四年霞酒醸造を兼營す家號を鍵岐屋と稱し盛に營業す宮内省、陸海軍其他伏見宮家より御用命を蒙ること數次又内外博覽會、共進會等に出品し銀銅賞牌を受領する數回に及ぶ（奈良縣奈良市福智院町、電話二五五）

磯野蛙巣

君は東京の篆刻家なり元治元年二月越前福井市に生る、家世々福井藩士たり名は肇、字は叔元、蛙巣は其號、幼より篆刻を嗜み小林愛竹伊東半竹に就き學ぶ故に二竹醉士とも號す明治四十二年九月梨本宮殿下の命に依り金印一顆及翌年十一月朝香宮殿下の石印三顆を刻す其他、故伊藤公、德大寺公、田中伯、岩崎男等の印を刻し其名官海に高し（東京市麹町區隼町一六）

泉仙介 a

君は兵庫縣の清酒及味淋醸造家なり元治元年正月攝津灘御影に生る家世々酒造を業とす本泉屋と稱す縣下の大地主たり君家業繼承以來熱心酒造の改良に意を注ぎ且之を皷舞振興し須臾も怠ることなし今日灘名酒の聲價を失はざるもの君の力與りて大なり彼の有名なる泉正宗は君が研究の結果鑑製せる所にして嘗て宮内省御用品たるの光榮を擔へり殊に又世に歡迎せらるゝ銀釜製造法の如きは實に我邦に於ける嚆矢なり（兵庫縣武庫郡御影町ノ内東明）

市瀬文三郎

君は長野縣の實業家なり先代文三郎の長男、明治七年十一月生る、家世々呉服太物祝儀小袖の販賣を業とし家號を澤村屋と稱す代を經る四代とす幼名邦次郎後ち家督を相續し襲名す明治二十七年日清役の補充兵に召集せられ東京灣要塞守備たり三十七年日露戰役に際し重砲兵旅團砲廠附として從軍し功あり勳八等に叙し一時金百五十圓を下賜せらる除隊後實弟英三氏と協力家業に從事し家聲益々發揚す方今有數の呉服商店たり、嗜好、書畫、園恭（長野縣下伊那郡飯田町、電話一〇〇）

井上要

君は伊豫松山の實業家なり有友兵衛の次男、慶應元年五月五日伊豫國喜多郡大洲に生る、明治十六年井上氏を繼く夙に中學を出で上京して早稲田專門學校に修め十八年代言人試驗に及第して法律事務所を松山に開き傍ら愛媛新報を發刊して改進黨の勢力扶植に力む二十九年縣會議員に選擧せられ直に議長に推さる爾來改選毎に當選し議長の席に在ること多年其間松山辯護士會長たりしこと再三、三十年松山商業銀行の創立に與り翌年伊豫鐵道會社の創立に盡力し終に辯護士の業務を罷む三十二年以來伊豫鐵道會社の專務取締役たり兼議松山商業會議所議員擧にげらるる其他實業團體にして君の關せざるもの殆んどなし三十五年八月衆議院議員總選擧に際し市部より選出せられ翌年三月再選す三十九年日露事件の功に依り勳四等に叙せられ旭日小綬章を賜はる方今黨籍を國民黨に有し伊豫鐵道株式會社長松山商業銀行取締役たり、嗜好園恭（愛媛縣松山市豊阪町二）

入澤達吉

君は醫學博士なり舊新發田藩士入澤恭平の長男、慶應元年一月五日越後國蒲原郡今町に生る、父恭平氏は陸軍々醫たり明治二十一年東京大學醫學部を卒業してベルツ博士に就き内科助手たり二十三年私費を以て獨逸に留學し「ストラスブルヒ」大學に入り内科を攻究し更に伯林に到り有名なるゲルハルト博士に從ひ内科を專修す二十七年歸朝して侍醫局に出仕し幾もなく之を辭す二十八年醫科大學教授に任せられ三十年東京市養育院醫長に任じ駒込病院長を兼ぬ後其兼職を罷む三十二年論文を提出して醫學博士の學位を受く次で正六位に叙せらる方今正五位勳四等にして東京帝國大學醫科大學教授たり（東京市本郷區金助町一、電話長下谷三〇四七）

井内龜次郎

君は德島市の綿ネル業家なり呉服商井内太平の姉婿にして安政六年十一月生る、夙に井内家に入り店務を總理し店員を指導誘掖して商務の發達を計り明治十九年絨織織物製造業を開始し大に販路の擴張に盡力する等貢献する所多し二十三年別家して獨立呉服商を自營し專ら意を綿ネル製造に注ぎ和歌山京都等の製産地に詣り親しく其狀況を視察し殊に和歌山市に在て綿ネル業家富田八次郎に就て其指導を享け歸國後新に工場を設け綿ネル機織を兼營し爾來堅牢なる染色と斬新意匠の模樣を以て大に世評を博せり蓋し縣下綿ネル製織業の嚆矢なり是より市内之に倣ふものゝ續出し竟に今日の隆盛を見るに至れりと云ふ三十年德島市綿ネル同業組合の評議員に推擧せられ此年縣下重要物産共進會開設に際し審査員に推薦せらる三十三年農商務省の囑托を受け工業視察の爲め清國に渡航す三十四年綿ネル創製の功を以て同業組合より銀盃一個を贈與せらる四十年農商務大臣より銀盃を賞賜せらる君嘗て德島商業會議所議員たり方今德島染織同業組合第一部長たり、嗜好淨瑠璃に長し千竹齋と號し世話物を得意とす（德島縣德島市西新町）

井上悅介

君は丸龜の眼科專門醫なり德島縣の人明治八年生る、明治三十一年岡山高等學校醫學部卒業後一年志願兵となり陸軍三等軍醫に任じ正八位に叙せられ歸休後上京して井上眼科病院に入り醫員となる三十三年同病院の眼科講習科の講師となり三十五年同院副院長に進み名聲嘖々たり三十七年日露戰役に際し召集せられ十一師團豫備病院眼科部主任を命せられ二等軍醫に進み從七位に叙し三十九年勳六等に叙せらる除隊後井上眼科病院を丸龜に開設し若井剛を副院長とし自ら其院長となる四十二年歐米國に漫遊し彼國大學を視察し大に得る所あり歸朝後專ら濟生に從事す（香川縣丸龜市米屋町）

石山逸八

君は靜岡縣の教育家なり明治元年十一月十一日遠州小笠郡粟本村に生る、明治二十三年三月靜岡縣尋常師範學校卒業して倉眞尋常小學校訓導となる二十四年六月伊豆三島尋常小學校に轉任す翌年四月三島町學務委員に擧げらる二十九年九月靜岡縣尋常師範學校訓導に任じ次で講習科教授の囑托を受け靜岡市講習所を兼務す三十年四月同縣志太郡藤枝町講習所に轉じ尋で濱校講習所詰を命せらる三十一年九月濱松町立女子尋常高等小學校長に任せらる三十八年三年多年教職の功勞を賞し同縣より賞與せられ四十二年二月文部省は教育効績の著しきを賞し金百五十圓を下賜せらる方今濱松女子尋常高等小學校長たり（靜岡縣濱名郡濱松町鴨江）

石黑宇宙治

君は新潟の人石黑玄愼の長男、嘉永五年二月生る、夙に海軍々醫學校を卒業し海軍少軍醫となり爾來累進して海軍々醫總監に任じ豫備役御付けらる日清戰役の功に依り功四級金鵄勳章を賜ふ現に從四位勳三等にして富士生命保險株式會社取締役たり（東京市芝區西久保巴町二四）

石堂次三郎

君は石川縣の花莚製造家なり石堂清次の長男安政五年二月二十八日生る、家世々農を業とす君夙に花莚製作業に從事し熱心業務の發達に努め專ら海外輸出に力め竭す明治二十八年石川縣輸出花莚同業組合組長に推され同業者を導き斯業の改善を奬勵し勤勉自ら率ひ今日の隆昌を見るに至る甞て米國聖路易萬國博覽會に出品し一等金牌賞を得内外人の高評を受け大に國産花莚の聲價を博せり爾來内外各種公私の諸會ある毎に出品し金銀銅等の優等賞を受領すること數次三十八年農商務省より滿洲利源調査委員を囑托せられ同時に石川縣滿韓實業視察員として彼地に渡航し利源調査に從事し大に得る所あり君又自治制實施以來町會議員、郡參事會員、縣會議員、縣參事會員等の公職を帶び地方公共の事に盡力す方今官設花莚檢査所商議員、石川縣輸出花莚同業組合組長、縣會議員たり（加賀國郡能美小松町字本折町）

石川柳城

君は愛知縣の書畫家なり名は戈足字は子淵柳城は其號弘化四年十月、名古屋に生る幼より詩書畫を嗜み弱冠經史を郡筑忍齋の門に學び詩を故森春濤及清人陳曼壽に修む後ち書を日下部鳴鶴に又畫を故吉田稼雲に學び爾來筆硯を提げ清國に遊び名勝を縣巡し交を名士に通じ到る所に唱和若くは弔古の詩を蒐集し竟に小泛槎圖を著す歸朝後名古屋に住し同地東宗畫會を組織し專ら斯道の發達を計る後東都に來り久しく筆硯を事とし、も現今名古屋市外に住し專ら丹青を事とす（愛知縣望知郡千種町六〇）

今堀喜右衛門

君は京都伏見の人天保九年三月生る其先は嵯峨源氏の末葉にして累代伏見に住す舊幕府内盛時代は日本分限長者の一に數へられたる舊家なり高瀨川開通以來醬油釀造を業とし町役人を勤め苗字帶刀を免さる中頃伏見西濱に於て木炭商を營めり君夙に父祖の遺業を繼承す明治元年十二月大年寄を命せらる六年八月總區長たり十三年三月府會議員に選擧せられ二十二年町村制實施後町會議員に選擧せらる其他幾多の公職

を帶び地方公共事業に與り貢献する所尠からず後其嗣妖折し後繼者を絶つに及で已むなく一時家業を廢す近時分家源一氏の弟眞三氏を迎へて其嗣となり方今實業に就くの計畫あり（京都府紀伊郡伐見町家川家七五七）

石川房次郎

君は靜岡縣の桑細工匠なり石川萬藏の男文久元年八月生る、父萬藏氏は桑細工を以て名あり君幼より業を父に受く明治十七年父歿後家督を相續し爾來實弟杉浦甚藏氏と協力以て家業に從ふ二十五年七月新に鋸器を發明し爾來諸種の挽物に應用するの便利を得て家業益々進む其作品は各種公利の諸會に於て褒賞牌を受領する數回是より先き明治十七年漆器組合創設に際し選ばれて指物職第四部取締役となる後ち部長工人部委員工人長等の職務を兼任す二十七年市立製產品評會審委員に推薦せらる三十一年五月組合役改選に當り組合委員工人會議長等に選擧せらる方今前記の外靜岡五二會漆器部議員たり、嗜好、心學的讀書（靜岡市寺町、電話七六七）

石坂惟寛

君は東京の醫師なり舊岡山藩士赤松秀の二男、天保十一年二月二十一日生る後出でゝ石坂家を繼ぐ性篤厚而かも奇骨あり夙に醫學に志し笈を江戸に負ひ贄を諸方の門に執り醫術を講ず維新の際北越の役に從ひ進んで奥羽の野に轉戰す爾來職を陸軍に奉じ累進軍醫總監に至る後勇退して醫業を開き專ら濟生に從事し以て今に及ぶ（東京市麹町區富士町二ノ四三）

男爵 石田入彌

君は秋田縣の人奈良又助の五男、文久三年八月二十一日生る、明治十三年故男爵石田英吉の養子となり家督を相續す明治二十年工部大學を卒業し大學院に入り翌年小眞木鑛山會社に勤務し尋て三菱會社に轉す此年獨逸に留學し「フヒヒ ベルヒ」鑛山大學に入り二十四年卒業し歸朝後御料局技師に任じ次で工科大學教授に轉す此間正五位に陞叙す後官を罷め大阪製錬所長となる後又更に三菱會社に入り現に大阪支店副長たり（大阪市北區天滿橋筋三ノ一〇）

飯田保太郎

君は長野縣の實業家なり飯田市助の長男、元治元年四月十二日生る、家世々疊表商を業み後ち又別に運送業を起し井筒運送店と稱す停車場前に開業す君甞て町會議員たり明治四十年十二月卒先有志と謀り諏訪湖氷株式會社を發起創設し其取締役兼支配人に推擧せられ爾來拮抗營々支店を東京に設け大に業勢の擴張を計り社運益々隆昌の域に達す方今日本赤十字社終身社員たり、嗜好、觀世流謠曲（長野縣諏訪郡上諏訪町、電話一〇七）

井宮助之

君は大阪府の農業家なり先代助右衛門の長男、安政二年八月攝津國東成郡喜連村に生る、家世々喜連村に住し農を業とし代を經る十代とす始め東成郡役所の用掛たり明治十七年七月聯合村戸長となる十八年以後郡書記となり在職六年之を辭す二十四年勸業委員に推さる就職一年以て徴兵參事會員となる爾來村會議員、學務委員、郡參事會員郡會議員たり、四十年九月府會議員に當選す君郡政村治の左翼に參與すること三十有餘年其間勸業、農事、土木、學事等に關し恪勤勵精功績少からず方今村會議員、郡會議員、府會議員、赤十字社東成郡支部評議員、太日本武德會、大阪支部幹事にして政友會員たり嗜好、茶道に通じ南溪の號あり（大阪府東成郡喜連村）

石川半右衛門

君は横濱の銀行家なり先代半右衛門の二男、安政五年十二月十一日舊横濱村に生る幼名茂一夙に普通學を修め明治十四年七月家督を相續し父名を襲ふ爾來專ら力を實業上に盡し傍ら公共事業に盡す所少からず曾て横濱區會議員學務委員、神奈川縣會議員等に擧げられ又株式會社横濱實業銀行の創立に與り其專務取締役に推され兼て同貯蓄銀行頭取たり方今株式會社横濱實業蓄貯銀行、株式會社横濱實業銀行等の專務取締役の職に在り（神奈川縣横濱市元町三ノ一一六、電話一〇四七）

飯餌嘯谷

君は京都の畫家なり猪飼卯郎の長男字は敬眞通稱卯吉嘯谷は其號なり始め谷口香嶠氏の間に入り其塾長となる後師の推擧に依り京都美術學校に入學し明治三十三年卒業す此間學資に缺乏し師及他より救助を受け頗る苦しく同校の寫事生となり次で助手に進み三十七年四月助教諭に昇任す最も歴史人物畫に長ず四十一年文部省公設展覽會に閨愁の圖を出品し撰拔せらる四十二年同省展覽會に大燈國師の圖を出品し又撰拔せらる其他博覽會共進伏等に於て受賞する數回、方今專ら丹青を事とす、嗜好、金剛流謠曲（京都市上京區二條通衣棚東入）

磯矢完山

君は東京の描金家なり磯矢宗庸の次男、明治八年二月大阪船場に生る、通稱邦之助、完山は其號、年十六小川松民翁の門に入り蒔繪を學び師歿後川之邊一朝翁を師とし傍ら東京美術學校に入り明治三十年卒業後師一朝翁を扶けて宮内省御用掛製作物に從事せり三十五年第五回内國勸業博覽會に出品して銀賞牌を受領す又米國聖路易萬國博覽

會に出品し金賞牌を受領す、嗜好、俳諧を好み此君院と號す又觀世流謠曲を能くす（東京市小石川區關口臺町二五電話番町一四一六）

井上敬次郎

君は東京の實業家なり舊肥後藩士文久元年八月三日生る、幼にして孤獨落魄自ら薪水の勞を執り苦學獨修す既にして西南の亂あり薩南の健兒熊本を過ぐ君胸中の英氣横溢して禁ずる能はず窃かに入りて大に斡旋す後ち上京して自由黨に加盟し近事評論社の編輯員となり大に政治界に馳驅し其言論危矯に渉り禁獄三年後赤井景韶破獄事件に關し禁錮二年二十年井上伯條約改正案に反對し囹圄に拘ること三回在監前後八ヶ年獄中洋書を學ぶの機を得爾來專ら心を政治經濟に傾く後ち星亨氏と共に米國に航し在米二年歸朝後海外殖民の急務を感じ同志と熊本移民合資會社を起し之が業務擔當社員として大に盡力す次で東京市街鐵道株式會社に入り其專務取締役となり後同社の東京鐵道株式會社となるに及び引續き專務取締役として現に其職に在り其他日本木材輸出株式會社取締役、隆文館監査役たり（東京市赤坂區青山北町四ノ六五、電話芝三〇七）

石原耕太郎

君は京都府の人慶應元年十二月十三日生る、本姓村田氏少時出でゝ石原家に入り養嗣子となる、養家は世々農を業とす一郷の名門たり明治三十年朱雀野村助役となり翌年村長に擧げられ今猶其職に在り三十六年郡會議員に當選し資性篤厚にして博愛慈善の念に富み日本赤十字社創設するや家族をして皆加入せしめ其正社員たり殊に地方教育の事業に熱中し明治十七年朱雀野小學校建築するに當り卒先敷地買收金七百六十五圓を寄附し四十二年同校の增築に際し二千五百圓を寄贈し其他慈善團體等に金圓を義捐すること數次なり爲めに賞狀木杯、銀盃等を受領せる甚だ多し方今日本赤十字社特別社員都市記念動物園商議員、赤十字社分區委員たり（京都府葛野郡朱雀野村字壬生八一）

伊東要藏

君は現代議士なり、元治元年三月十七日生る、本姓山田氏出でゝ伊東磯平治の養子となり家督を相續し養家は縣下の大地主にして多額納税者なり曾て株式會社濱松信用銀行取締役たり又縣會議員、郡會議員、郡農會議員等の職を帶び地方公共の事に盡瘁するもの尠からず明治四十五年五月郡部より衆議院議員選出せられ現に其任に在り方今濱松委託株式會社社長、株式會社豊國銀行取締役高砂製糖株式會社、富士瓦斯紡績株式會社等監査員にして政友會所屬代議士たり（靜岡縣引佐郡中川村）

石井英太郎

君は廣島縣の大地主（多額納税者なり、石井安之助盈武の長男天保十四年正月生る、諱は盈清、山家と號す夙に庄屋、戸長等の役を務め二十八歳福山藩の御用達たり廢藩後小田縣設置せらるゝや學區取締を命ぜられ次で深津郡區長となる後小田縣を廢し廣島縣となる明治十二年廣島縣會議員に選擧せられ次で議長に推さる後福山中學校長となり三十一年廣島縣農工銀行の創立に與り其頭取となる曾て、車駕廣島縣下に行幸の際多年公共に盡せし廉を以て白絹壹匹を下賜せられ又賞勳局より銀盃を受く方今株式會社廣島縣農工銀行取締役、福山銀行相談役、深津郡農會長義倉財團專務理事たり（備後國深安郡深津村）

井上敏男

君は京都の貿易商なり、明治五年八月二十八日生る、夙に京都府立中學校に入學し英學を修め英語に通じて實業に志を立て熱心貿易上の事を研究す偶々粟田陶器商金光山宗兵衛氏に知られ其知遇を受け十六歳にして同氏に仕へ執務の餘暇を求めて佛露獨の三語を天主堂教師「ソスロン、オリエンチス」に就き研究して主家に忠勤すること十七年、明治三十七年辭して獨立別に一家を爲し陶磁器の貿易商を營み歐州へ直輸出の取引を開き今や大に其擴張を計り家道隆々として繁榮の域に在り、嗜好、讀書京都市下京區佛光寺通高倉東八、電話二三四五）

岩崎勳

君は東京の辯護士なり、靜岡縣の人明治十一年二月二十五日生る、岩崎元功の長男、家世々清水八幡神社の神職たり君夙に鄕校に學び後笈を帝都に負ひ第一高等學校修了して東京帝國大學法科大學に入り佛國法律を專修して明治三十六年卒業し次で高等文官試驗に及等し後辯護士となり法律事務を執りて以て今日に至る頗る文筆に長じ屢々少年雜誌を執筆し其名硯海に現はる（東京市日本橋區伊勢町二六　電話長本局三一八四、事務所神田區美倉町一〇）

今戸蝸牛

君は大阪の木彫家なり、大分縣の人明治十四年六月生る、名は精司、蝸牛は其號なり始め大阪の田中主水氏に就き木彫の技を學ぶ後ち上京して東京美術學校に入り明治三十五年卒業し次で帝室技藝員高村光雲翁の門に修め技大に進む内外各種の協會に出品し受賞する數回、嗜好、音樂（大阪府東成郡墨江村字長峡五二）

犬丸清兵衛

君は茨城縣の實業家なり、小篠倉平

の三男嘉永二年九月三日生る、出でゝ犬丸家に入り養嗣子となる養家は近清と稱し醬油醸造販賣及肥料を商業とす明治三十年結城産織物合資會社を創立し其業務擔當社員に擧げられ在任多年方今株式會社小山銀行常務取締役たり（茨城縣結城郡結城町字浦町）

市瀨泰一

君は長野縣の實業家なり、先代泰次郎の長男、安政三年十二月生る、家業は國産元結水引製造販賣を業とし代を經る君に至り三代とす商號を萬泰と稱し市内有數の老舗なり明治二十年家督を相續し父祖の遺業を繼ぎ爾來益々販路を擴張し東京北海道關西等の地方に取引して隆に營業す其製品を山梨縣及長野縣開設府縣聯合共進會に出陳し各金牌賞を受領す其他各種公私の諸會に出品し賞牌褒狀を受くる十數回に及ぶ先是明治二十二年町制實施の際町會議員に選擧せられ後ち郡會議員に當選す方今町會議員、郡會議員、郡參事會員日本赤十字社正社員たり、嗜好、謠曲（長野縣信濃國下伊那郡飯田町字大横町）

石郷岡文吉

君は前代議士なり、石郷平次郎の長男、文久三年八月一日生る、夙に東奥義塾に學び嘗て市會議員、郡會議員青森縣會議員同議長同參事會員等に擧げられ地方公共の事に盡力する所尠からず又青森山林協會幹事長、株式會社東辰日報社長たり、明治四十一年弘前市より推され衆議院議員となる方今市會議員の職に在り（青森縣弘前市馬屋町）

石河有粼

君は名古屋の畫家なり、舊尾州藩士石河正基の三男、明治三年五月生る、名は正德有輒は其號夙に園田忠盛に就て土佐派の畫法を學び後ち織田春齊の門に南北合派の筆意を修めて花鳥に長ず明治二十二年以降内外各種公私の諸會に出品し受賞あり又宮内省御用品たること數次方今專ら丹青を事とす（愛知縣西春日井郡枇杷島町一）

伊藤貴志

君は東京の實業家なり、先代貴之の長男、安政五年十二月二十二日播磨國揖保郡林田に生る、明治六年東都に來り始め報國學舍に學び後ち共貫義塾修文館等に入り英學を修む十年印刷局に奉職し勤續五ヶ年其間課長たり三十二年辭して同志を謀り印刷合資會社を創設し爾來苦心經營之が發展に努力し後其組織を改め凸版印刷株式會社とし推されて專務取締役に擧げられ印刷界に一新生面を開き自ら其經營に任し今日の隆昌を見るに至る（東京市下谷區二長町一・電話下谷三三二六）

伊藤傳右衛門

君は福岡縣の實業家なり、伊藤傳六の長男、萬延元年十一月二十六日生る縣下有數の資産家たり嘗て博多瓦斯株式會社を發起創立し其社長に推され現に其任に在り方今前記の外株式會社嘉穗銀行、株式會社十七銀行等取締役たり（福岡縣嘉穗郡大谷村）

井内太平

君は德島市の實業家なり、先代太平の長男、文久二年六月二十五日生る、家代々呉服太物商を業とし素封家たり幼名善助後家督を相續し襲名して家業を繼ぎ熱誠業務の發達を圖る家道頗る隆昌す四十二年大阪朝日新聞社の主催せる世界一周團に加盟し歐米其他諸外國を歴遊し各地の商況を視察し得る所あり歸朝後力を公共事業に盡し教育衛生其他公共事業の經營與りて力ありと云ふ、方今德島商業會議所會頭、市參事會員たり、嗜好、繪畫を能くし又淨曲を嗜み案外と號し時代物を得意とす（阿波國德島市西新町）

伊東昌春

君は群馬縣の辯護士なり、舊幕臣伊東昌孝の長男、安政三年正月長崎に生る、幼名福之丞後源一郎と改め更に今名に改む夙に家學を受く長じて京都に出で京都佛語學校に入り、レオンヂウリー氏に就て佛學を專攻し尋て富井正章、高木豊三氏等の董陶を受く明治五年工部省十三等出仕少手心得となり生野銀山に出張し外人と共に礦山用大器械建設に從事し十年神戸裁判所權少屬に任じ翌年大隅の礦山事業を監督し十二年以降京都大阪東京等の裁判所に歴任し判事補となる二十年判事登用試驗に合格し判事に進み前橋始審裁判所詰となる二十六年水戸地方裁判所に轉じ正七位に叙し在職數旬辭職して群馬割引倉庫會社顧問となり次で辯護士となる後前橋市參事會員に選擧せられ三十一年前橋組合辯護士會長に推され在任多年方今熱誠法律事務に從事す（群馬縣前橋市北曲輪町五四）

岩崎清七

君は東京の實業家なり、先代清七の長男、元治元年十二月十八日生る、幼名清吉明治十六年十二月家督を相續し襲名す、家號を錢屋と稱し米穀仲買業を營み業務頗る隆昌なり方今日清紡績株式會社、日本坩堝株式會社、磐城セメント株式會社等取締役、日本製粉株式會社、滿州製粉株式會社等監査役たり（東京市深川區佐賀町二ノ三三、電話浪花四九七）

岩崎廣作

君は新潟縣の實業家なり、慶應元年二月十四月生る、本姓山田氏後出でゝ岩崎家に入り養嗣子となる夙に鄕校に學び後ち上京して慶應義塾に入り卒業後專ら實業に身を委ぬ方今北越製材株式會社長、株式會社北越倉庫銀行專務

取締役たり（新潟縣中頸城郡直江津町）

井上雲桂

君は長野縣の醫師なり、井上雲庵の長男、弘化元年生る、家世々醫を業とす諱は義房字は暸然、夙に幕府の侍醫士生翁に就て眼科を修業す後ち父の箕籠を繼承す現に雙龍堂醫院を設立し之が醫長となり、眼科の治療を以て名あり餘技書を能くし兼て國風、俳諧、茶道を嗜好とす（長野縣更級郡小島田村）

石塚六三郎

君は新潟縣の廻船問屋なり、石塚辰四郎の長男、嘉永五年二月十二日生る家世々廻船問屋を業とし直江津に於ける濕船廻漕及銀行業の卒先者たり維新以前は榊原容の御用達を勤め君夙に戸長町長に推され勤續多年當て直江津港と越中の濕船航路を開き又率先して北海道へ米麥の輸出を計る等專ら業務の發展に努め後ち石炭販賣商を兼營し家業益々隆盛す明治三十一年直江津解株式會社を發起創設し其社長に擧げられ今猶其任に在り後ら直江津商品取引所の理事長となる次で米穀取引所創立に與り後ち其社長に推さる三十二年九月縣會議員に當選す方今前記の外直江津商業會議所會頭たり長嗣豊作氏は管て慶應義塾大學を卒業し爾來專ら家業に從事し外國品直輸入の始祖を以て稱せられ聲望益々高し、嗜好、書畫、骨董（越後國中頸城郡直江津町九五六、電話長六三、同六二）

石田亦一郎

君は東京の實業家なり、舊水澤藩醫石田俊二の長男、安政五年十月生る、家世々陸中舊水澤藩の典醫たり、君夙に實業に志し明治十五年宮城縣氣仙沼に居を移し汽船數隻を購ひ運輸航海業を起し始めて鹽釜地方の交通を完からしめたり傍ら畜産事業を經營し宮內省及び陸軍々馬御用を命せられ納付せし良馬數千頭の多きに及ぶと云ふ殊に西大將に贈りし駿馬は深く將軍の感賞を得て銀盃を添え謝狀を贈らる日露戰役の際所有汽船二隻御用船に徵せられ船主として軍國の爲め盡す所あり後又鑛山事業を經營し越後北魚沼郡鑛山及び外數ヶ所の金鑛銅鑛亞鉛鑛等を採掘し鋭意事業の發展を努め次で青森縣狩場澤山林を拂下げ木材の伐採を開始し鐵道枕木、薪炭等の供給を爲し更に私財を投じて狩場澤輕便鐵道を敷設して交通機關の完備を計る又眞綿紡績合資會社を創設し廢物を利用し以て國富の增進に資せんとし熱心之れが經營に任じつゝあり（東京市芝區高輪車町八三、電話芝二一九七）

井上公二

君は舊備中高梁藩士井上公一の長男文久三年十一月二十四日生る、夙に慶應義塾を卒業し明治二十一年古河家に入り鑛業に從事し在職二十有餘年今に渝らず、勤續す其間鑛業事務所總務部庶務課長、會計課長、古河鑛業會社理事、同會計課長、同足尾鑛業所副所長に歷任し現に古河鑛業會社足尾鑛業所長、日光電氣軌道株式會社取締役たり（栃木縣上都賀郡足尾町二二八一）

石丸重美

君は工學士なり、豊後舊臼杵藩士石丸裘袈藏の長男、元治元年一月十五日生る、幼名袈裟次郎後今名に改む十一歲藩校に入り漢籍を修め後ち洋學に志し自ら字書を謄寫して洋書を研究す明治十四年上京して三菱商業校學に入り十九年大學豫備門に入學し尋て第一高等中學校を經て二十年工科大學に入り土木工科を專攻し二十三年卒業して內務省技師試補となり秋田縣廳に出仕す二十五年鐵道局に轉任し鐵道線路調査委員を兼ね二十七年韓國に出張を命せられ同地鐵道の調査に從事し翌年歸朝して國府津保線事務所長となり又建設事務所長として篠井線建設事務を擔任す三十三年陰陽連絡線米子出張所長を命せられ境鳥取間鐵道の經營に任し四十年鐵道視察の爲め歐米各國へ差遣せられ正五位に叙せらる四十一年歸朝し鐵道院技師に任じ現に建設部技術課長の職に在り四十四年臨時線路調査課を兼務し建設部長代理を命せらる曾て日清戰役の功に依り勳六等に叙し單光旭日章を賜はる後ち累進して勳四等に叙せらる（東京市麻布區市兵衛町二ノ一三、電話芝二八三一）

井上勇吉

君は神戸の代辨業家なり、井上利作の二男、安政四年十二月十五日生る、明治十八年の頃共同運輸會社を經營し後ち見る所ありて製茶の貿易に從事し後又播州八重畑大黑鑛山事業を試み尋て質商を經營す明治二十五年以降地所賣買業に從事し何れも其功を奏せざるなし遂に慧眼と勤勉とを以て空拳より起り巨萬の產を獲得するに至れり現時有隣生命保險株式會社代理店の外株式會社神港倶樂部監査役たり（神戸市北野町四丁目）

伊藤定七

君は東京の實業家なり、松丸茂助の長男、明治六年十一月十七日生る、明治十二年伊藤家に入り養子となる幼名文次郎家督を相續し先代定七を襲名す養家は伊勢屋と稱し世々質商を業とす君明治二十七年始めて本郷區會議員に選擧せられ次で區學務委員となる四十一年市會議員に當選し後ち市學務委員、本郷區兵事義會理事同衛生會及教育會評議員を兼任す先是三十八年以來本鄉區相續稅審査委員たり方今前記の外日本セメント株式會社取締役、株式會社日進銀行、北越肥料株式會社等監査たり（東京市本郷區春木町三ノ五、電話下谷二四三一）

飯田巽

君は舊弘前藩士飯田勇馬の男、天保十三年八月五日生る、明治三年弘前藩權大屬となる五年一月大藏省出納寮十四等出仕となり八月出納中屬に進み六年十二月同權大屬に任じ八年八月同大屬となり、九年八月同權助に任じ正七位に叙せらる十年一月大藏省權小書記となり十二年七月少書記官に進み十六年四月辭職し正六位に叙せらる此年日本銀行理事を命ぜられ次で國庫局長を兼ね國庫金取扱に從事す二十年五月宮内省藏助に任じ帝室會計法の創設並に御財政整理の事に從ふ二十六年八月調度局主事を兼任し三十年三月主殿助兼式部官に任じ功に依り特に菊花御紋章付三組銀盃を賜はる此年勳四等に陞叙す三十一年帝室會計審査官に轉任し式部官を兼ね三十三年十一月功を以て從四位に進み次で官を罷め身を實業界に投じ爾來日本煉炭株式會社加納鑛山株式會社等の取締役にして日本郵船株式會社、監査役日本赤十字社監事たり（東京市小石川區西江戸川町一八、電話番町一一二八）

今井艮一

君は豊後舊森藩士田坂蔀の六男なり弘化元年三月十一日生る出でゝ同藩士今井主齢の死跡を相續す夙に學を講じ十六歳藩校助教に擧げらる明治元年以來森軍事周旋役、同顧問局議事及監察森藩大屬たり四年彈正、權大巡察等に任ぜられ五年大分縣に出仕し翌年司法省に轉任し宇都宮裁判所に勤務し大檢部中解部大解部等に歴任し十一年檢事に任じ東京地方裁判所詰となり後大阪始審裁判所長となる尋で大審院檢事に補し十九年正六位勳六等瑞寶章を賜はる二十二年名古屋控訴院檢事に補す爾來東京始審裁判所大審院等に轉勤し從五位勳五等瑞寶章を賜ふ二十八年行政裁判所評定官となり正五位勳四等に叙し三十二年臺灣總督府法院判官となり覆審院長に補し三十三年臺南縣知事に任し從四位に叙し三十四年臺南縣廢止と共に官職を罷む四十一年日本商船株式會社に聘せられ現に其社長の任に在り（東京市本郷區駒込西片町一〇ほノ一三、電話下谷三四三七）

井上敏夫

君は豫備海軍武官なり舊金澤藩士井上榮信の二男、安政四年八月十二日加州金澤に生る、明治三年東京に來り海軍兵學校に入り卒業後海軍少尉候補生となる十四年海軍少尉に進む爾來累進して海軍少將に至る三十九年四月三十七八年事件の功に依り功四級金鵄勳章を授けられ從四位勳二等に累進し豫備役に入る、四十一年伊勢四日市市部より選出せられて衆議院議員となる四十五年總選擧に際し復た當選し現に政友會所屬代議士たり（東京市牛込區若松町一四、電話番町一五七六）

石田安兵衛

君は石川縣の機業家なり先代安右衛門の長男、嘉永六年四月三日生る、家世々絹織物製造を業とす君歳廿二にして家督を相續し父業を繼ぎ專ら輸出羽二重織に鋭意熱心し又本折村須天の機業家高木清七氏と謀り「シルケット」織物を試織して各地に其販路を需むるや大に時好に投し需用頓に增加し是より郡中之に倣ふもの勃興し今日の隆盛を見る至れり明治三十五年以降「メカニック」の使用を奬勵し郡中に之を普及し大に機業界の革新を計り裨益を與ふる尠からず嘗て東宮殿下北陸行啓の際に「メカニック」紀念塔建設を發起し自ら委員長となりて斡旋盡力の結果之を建設す先是明治十八年時の郡長は君の製織上に貢献する所を多とし特に木盃一個を贈與して其善行を表彰せらる二十年能美郡産繭糸外四品共進會審査員に推薦せられ盡す所あり後ち其切勞を賞し郡長より木盃一個を授與せらる二十二年石川縣物産展覽會開設に際し盡力せる廉を以て九谷燒鍾一對を授與せらる三十年小松商業銀行取締役に推薦せられ翌年石川縣勸業諮問委員を命ぜらる尋で能美郡絹織物同業組合組長石川縣工藝品共進會審査員に擧げられ三十八年農商務省の囑托を受け滿韓地方視察の途に上る後ち電話架設速成に關し委員長に推され上京して斡旋の勞を執り其職責を盡せり方今株式會社小松商業銀行取締役、能美郡絹織物同業組合組長たり（加賀國能美郡小松町字京町）

池田半兵衛

君は大阪の實業家なり池田半作の長男、安政三年九月六日生る家世々諸油卸商を業とす明治九年二月家督を相續す會て津守煉瓦株式會社監査役及大阪商業會議所運輸部長の任に在り方今株式會社大阪油取引所理事長たり（大阪市東區釣鐘町二ノ一八四、電話東一五一二）

池田藤八郎

君は山形縣の大地主なり舊藩士本間光貞の次男、文久二年十二月二十三日生る、舊名光禮出でゝ池田家に入り養嗣子となり名を改む夙に上京して同人社に學び飽海中學校助教諭に任せらる後ち町長、郡會議員同議長、縣會議員等に擧げられ又莊内銀行取締役、酒田倉庫株式會社取締役、酒田織物株式會社取締役及酒田商業會議所會議員となり明治四十年郡部より選擧せられて衆議院議員となる方今酒田商業會議所特別議員たり（羽後國飽海郡酒田町字本町）

石崎平八郎

君は愛媛縣の廻漕業者（濱屋）なり先代庄十郎の二男天保九年八月二十六日生る　曾て三津濱魚市株式會社松山米

穀取引所等の監査役又株式會社三津濱銀行取締役にして今尚其職に在り方今前配の外松山紡績株式會社取締役を兼ね（伊豫國溫泉郡三津濱町榮町）

今泉雄作

君は古物學家なり舊幕士嘉永三年六月生る、幼名龜太郎又熊作、後今名に改む慶應二年二月舊幕昌平坂學問所に入り漢籍を學び維新後昌平黌教授となる明治十年五月佛國に留學し里昂府私立ジユゼー學校に入り佛語羅典語を攻究し在學三年後同府博物館に雇はれ東洋美術品の鑑定人として職に在ること五年其間印度錫蘭島の僧バンレタ、チレカに就て梵語を學び又同府大學文學部に入り羅馬、希臘古物學及梵語埃及象形文學等を研究し十六年歸朝して文部省御用掛となり專問學務局、編輯局等に勤務し二十二年東京美術學校教授に兼任し二十四年宮内省に出仕し臨時寶物取調局鑑査掛を命せられ從七位に叙せらる二十五年臨時博覽會鑑査官となり翌年京都工藝學校長となり京都新古美術品展覽會審査長を囑托せられ其勞に依り總裁より銀盃を下賜せらる三十一年一月東京美術學校教授となり從六位勳六等に叙せられ尋て東京帝室博物館美術部長に轉任し現に從五位勳五等にして其職に在り（東京市下谷區中根岸八）

石田常七

君は神戸の實業家なり石田常三郎の二男、天保十四年六月六日生る、人と爲り謹嚴率直にして頗る氣慨に富む幼にして商業に志し明治初年神戸多聞通に酒商を開始し爾來幾多の艱難辛苦を忍び大に社會の信用を博し遂に家を興すに至る後ち水車業を營み傍ら輸出花莚の業を起し大に擴張を計りしも補佐其人を得ずして多少の損失を見しも爾來店務を整理し自ら監督の下に業務の發展を計り爲めに大に盛なるに至れり方今養嗣勝作氏專ら花莚部を主宰し家聲益々進む（兵庫縣神戸市荒田町三ノ六三電話一一八三）

市島德次郎

君は新潟縣の大地主（多額納稅者）なり市島德次郎の長男、弘化四年四月二十三日生る、其先は丹波國市島村に住す、因て氏とす永祿年間兵亂を避けて加賀に徒る慶長三年大聖寺城主溝口侯に從ひ越後芝田に移住し爾來世々農を業とす君は其八世の主なり幼名龜太郎後改む明治四年以來新潟縣第二十二大區八小區天王新田用掛、第二十二大區長同大區小區長たり十年第四國立銀行の創設に際し其頭取となり後ち之を辭し十八年以降北蒲原郡天王新田外十二ヶ村戸長、北蒲原郡天王村長となる二十三年帝國議會開設の際同縣多額納稅者の互撰を以て貴族院議員となり滿期之を罷む資性溫厚至孝にして勤儉の

井上政吉

君は神戸の實業家なり三好久十郎の二男、慶應元年十一月小豆島草壁村に生る、明治十年大阪に出て醬油釀造業家に奉公すること八ヶ年にして一旦歸鄉し二十年神戸の井上家に入り養嗣子となる養家は醬油商を業とす爾來專ら家業に從事す三十一年父業を廢し米穀肥料を營みしも幾もなく亦之を廢し舊業に復して熱心商務の發展を計り家勢大に昂る三十九年第十二回九州醬油聯合共進會開設に際し農商務省より審査員を命せらる後ち小豆島丸金印醬油株式會社の特約店を兼業し益々販路の擴張を圖りバンクバー、ポードランド、ローサンセルス、シヤトル、滿韓臺灣等に輸出して盛に營業す四十一年神戸商業會議所議員に選擧せられ今猶其職に在り（神戸市海岸通四ノ四四、電話二一四五）

市田左右太

君は神戸の寫眞師なり舊福井藩士小島武傳の次男、安政六年十二月十五日生る、後出でゝ兵庫縣市田左右太の養嗣子となる幼名季次郎、家督を相續して襲名す養父は夙に寫眞業を神戸に開き爾來技術の研究に多大の苦心を嘗め遂に卓越なる技倆を發揮して內外人の賞賛を博し寫眞術を以て成功するに至る君家業を繼承し益々精勵以て業務を擴張して製版印刷の業を起し大に活躍を試み家聲を倍舊し燦然斯業界に異彩を放ち今や關西寫眞界に冠たり（兵庫縣神戸市元町二ノ二八七）

磯貝浩

君は尾州熱田の實業家なり磯貝安左衛門の二男、元治元年八月二十六日三州大濱に生る、明治五年分家を成し魚問屋を業として大森と稱し常に力を公共事業に竭し其要職に在ること數々なり明治三十二年以來縣會議員たり三十五年熱田實業協會理事に擧げられ今尚其任に在り嘗て名古屋商品取引所理事株式會社鐵道車輛製造所監査役等たりき方今愛知縣參事會員名古屋市會議員名古屋劇場株式會社、大阪火災海上運送保險株式會社等に取締役、東海印刷株式會社、有隣生命保險株式會社、東海株式會社等監査役たり（名古屋市南區熱田木之免町一三四、電話一三三九）

磯部彌一郎

君は大分縣の人後備海軍少將貴族院議員礦部包義の弟文久元年二月七日豊後國大分に生る、明治八年上京して慶

應義塾に入る二十一年米人イーストレーキ氏と共に國民英學會を東京神田錦町に設立し二十三年氏の同會を退くや君自ら之が經營の任に膺り學生の薫陶に從事す三十三年學事視察の爲め英國に航し歐米各國を歴遊し翌年歸朝し方今英語專門學校として其名都下に高し

（東京市麹町區三番町八四）

磯部熊太郎

君は神戸の花莚貿易商なり岡山縣の人明治元年六月生る、磯部次郎の長男家世々農を業とし庄屋、戸長、村長等の職を勤めたり君夙に西義一の門に入り漢籍を學び後ち岡山中學校に入り中途退校して專ら英學を修む明治三十年神戸に出て花莚貿易商を創む爾來拮抗奮勵家業大に進む三十三年花莚聯合組合を發起創立し後ち評議員に擧げられ次て神戸花莚商組合組長となる後ち花莚國定檢査所の設立せらるゝや推されて其評議員たり四十年關西六ヶ國花莚同業組合聯合會副會長に推擧せらる四十三年實業同志會を起し其會長に推され斯業界の元老として名聲嘖々たり、嗜好、園碁（兵庫縣神戸市三宮町一、電話二七二四）

今村有隣

君は佛語學家なり舊金澤藩士今村自然齊の男、弘化二年四月二十五日生る幼名豐後改む安政四年藩費に入り漢籍及蘭學英學を修め後横濱に出で佛國公使館附書記官カション氏に就て佛學を學ふこと六ヶ年次て箕作麟祥氏を師とし佛學を研究す明治二年大學南校に入り三年十二月大學少助教に任じ爾來文部少助教、中助教等に歴任し六年一月歐州に留學し八年二等教諭を以て東京外國語學校教諭を囑托せらる後ち更に教諭に任じ正七位に叙す爾來東京大學部佛語教導、東京大學豫備門教諭、高等商業學校教諭、第一高等中學校教諭同校幹事等に歴任す二十四年勳六等瑞寶章を賜はる後從五位勳五等に陞叙す三十三年十一月佛國共和政府より贈與したる「オフヒシエーダカデミー」紀章を受領し及び佩用を免許せられ第一高等學校教授たり三十九年八月同校長に任じ正五位勳四等に叙せらる後ち之を辭し方今閑散の身に在り其著に佛語啓蒙、佛蘭西文法、外國々勢一覽等あり（東京市本郷區駒込曙町一六）

岩田伊加

女史は靜岡縣の看護婦なり明治元年八月駿河國志太郡藤枝町に生る、明治二十二年上京して芝の慈惠醫院に入り研學六ヶ年卒業後本所横綱町村松產婆學校に實習すること年餘、後ち東京府より營業免狀を受け横濱に住して斯業に從事する事五ヶ年三十三年五月三井物產會社藤瀬支店長の招に應じ新嘉坡に抵り居ること數月、三十三年十一月一旦歸郷し同年十二月靜岡市に出て東海看護婦學校に奉職して以て今に及ぶ方今靜岡看護婦會長たり、嗜好、讀書

（靜岡市屋形町一一、電話四一二）

子爵 板倉勝達

子は舊三河重原藩主なり板倉勝正の長男、天保十年五月朔日生る、初め溢川敬之助と云ふ後正己の養子となる養家は清和天皇の皇孫源經基八世陸奥守足利義康の裔にして板倉二郎義顯の末葉從四位下重矩の二男、石見守重種の後なり初め野州烏山の城主たりしも後奥州福島に封せられ是より數代を經て正己に至る子は卽ち其後を繼承す明治二年六月重原藩知事に任じ次で司法省大解部となる六年六月群馬裁判所に勤務し副長たり此年十二月高崎裁判所に轉じ十年九月華族局第一部長となる爾來宮內省御用掛、判事、農商務省御用掛等に歴任して正四位に叙せらる十七年七月子爵を授けらる二十三年十一月帝國議會の開設に際し貴族院議員に互選せられ三十年七月再選し爾來累選今尙其任に在り其間牛込區會議員たり又遠越石油株式會社及び御嶽貯蓄銀行等監査役なりき方今從三位勳四等貴族院議員にして株式會社東華銀行監査役たり（東京市麹町區飯田町五）

伊東熊夫

君は京都府の實業家なり伊藤喜藏の長男、嘉永二年十二月十日生る、家世々農を業とす夙に京都に出て漢學を修む後ち歸郷して古物商を業とし傍ら南山義塾を起し地方子弟の教授に從事せり明治十六年府會議員に選擧せられ次て伏見商業會議所會頭に推され在職多年此間明治二十三年十一月京都府第四區より選出せられて衆議院議員となり第二議會解散後候補を西川義延に讓り爾來實業界に盡力し日本製茶輸出株式會社、株式會社玉水銀行、株式會社伏見銀行等取締役又伏見商品取引所監査役たりき方今日本製茶輸出株式會社取締役社長、株式會社伏見銀行取締役たり（京都府綴喜郡普賢寺村）

子爵 板倉勝觀

子は舊上州安中藩主なり舊高三萬石板倉勝殷の嗣子實は從五位子爵戸田尤香齊光庸の男、安政元年十月十一日生る幼名錦之助後松平康載と稱せり明治元年松平周防守康英の養子となり二年四月襲封して武州川越八萬石餘を食み從五位下周防守に任ず尋て川越藩知事となり四年東京府に貫屬し知事を罷む十三年松平家を離緣し位記を返上して生家に歸り十五年三月更に板倉勝殷の後嗣花子に入夫し今名に改む十九年四月家督を相續し從五位に叙せられ子爵を授く二十四年六月正五位に進み後累進して正四位に至る（東京府豐多摩郡大久保村字西大久保南裏三九四）

井田清三

君は横濱の實業家なり舊播州姫路藩士井田佐の長男、元治元年六月十一日江戸に生る、明治十八年慶應義塾を卒業して山陽鐵道株式會社に入り會計課に勤務す二十八年會計課長倉庫課長を兼務す三十六年歐米鐵道經營視察を命せられ歐米各國の鐵道事業の經營及倉

庫事業の調査を遂げ三十七年歸朝す尋て日露戰役輸送に盡力し其功に依り勳五等に叙す後ち官營となるに及び清算事務に從事す四十年横濱麒麟麥株式會社に搜せられ現に總支配人たり（神奈川縣横濱市根岸町三八一八、電話六二）

井ノ口　宇三郎

君は臺灣の釀造業者たり、明治十二年八月、福岡縣八女郡下妻村字下妻に生る、家は代々農を業とす、實父は井口長藏君は其の長男、二十三年、歳十一にして家を出で、熊本市白川町市原屋に丁稚奉公をなし、二十五年筑後の花莚商に輸出業見習として奉公する七ヶ年、三十二年、渡臺、臺北に住す、三十三年徴兵適齢にて一旦歸國、輜重輸卒として入營、現役滿期後、獨力を以て花莚輸出業を筑後に於て營業す三十六年再び渡臺、直に新規街三丁目に酒、味噌、醬油の製造業を開始し、現に基隆に於ける釀造家として有力なる一人たるに至れり、（臺灣基隆新成街三丁目、電話一一〇）

一木喜德郎

君は法學博士なり岡田良一郎の二男慶應三年四月四日遠州小笠郡倉眞村に生る、舊名丘平後一木喜三司の養子となり今名に改む、明治十六年東京大學豫備門修了後東京大學に入り政治理財學科を專修し二十年卒業して内務省に出仕し二十三年内務書記官に任せられ此年自費を以て獨逸に留學し二十六年歸朝して復職し從七位に叙せらる翌年九月法科大學教授に轉任し内務書記官を兼ね後從五位に進む三十一年五月兼官を罷め更に内務省參事官を兼務す正五位に叙し次で内務省參與官となる三十二年法學博士の學位を授けられ法典調査會委員を命せらる三十三年貴族院は員に勅任せられ次で兼官を辭し帝室制度調査局御用係仰付けらる三十五年從四位に叙し法制局長官兼恩給局長に任し大學教授を辭す四十一年内務次官に任せらる方今正四位勳三等内務次官、貴族院議員法科大學講師たり（東京市牛込區若松町二六ノ三號、電話番町七七七）

井上　密

君は法學博士なり、千葉縣の人富坂齊治の三男、慶應三年十月二日生る、後舊上總大多喜藩士故從六位井上義行の養嗣子となる、明治二十五年帝國大法學科大學獨逸法科を卒業し大學院に入り憲法を專攻す爾來東京專門學校、明治法律學校、日本法律學校等に入り憲法行政法國法學を擔任教授す二十九年文部省より憲法國法學及行政法研究の爲め獨、佛國へ留學を命せられ三十二年歸朝し後京都帝國大學法科大學教授に任し正七位に叙す三十四年法學博士の學位を授けられ三十九年法科大學長となる此間京都法政學校、關西法律

學校講師を兼職す四十二年歐米へ差遣を命し大學長を免じ從六位に進む四十三年六月歸朝し方今京都帝國大學法科大學教授にして正五位たり（京都府愛宕郡下鴨村）

伊藤鷲城

君は京都の畫家なり、明治六年一月兵庫縣姫路市に生る、藥劑師伊藤又十郎の長男、家累代姫路に住し藥種商を業とし代を經る十三代とす君字は士清通稱又次、鷲城は其號又如雲軒の別號あり夙に鄕校に學を修め後神戸に出て勉學す更らに大阪に到り始め深田直城に師事し繪畫を學ぶ明治三十三年京都に遊び谷口香嶠の門に研鑽年あり技大に進み暫く小學校に奉職し圖畫科を擔任教授す各種の諸會へ出品し受賞する數回、其室小坡女史は通稱さと云ひ伊勢宇治山田の人二見貞幹の二女、始め磯部百鱗翁に師事し後京都に赴き森川曾文の門に學び明治三十四年一月以降谷口香嶠の門に遊び其指導を享く最も人物畫に長す三十八年六月伊藤氏に嫁し今や鷲城氏と共に丹青を事とす女史又中村甚左衛門に師事し柔道初段の免狀を受く又盆石を修め高野流の蘊奥に達すといふ（京都市上京區室町通夷川北入）

子爵稲垣太祥

子は貴族院議員なり、江州山上の城主稲垣若狭守大清の長男、安政六年六月十一日生る、幼名英太郎明治四年家督を相續し襲爵仰付らる廢藩置縣後、居を東都に移し東京府華族となる明治十八年宮内省華族局御用掛を拜し二十五年八月貴族院議員に選ばれ二十九年六月從四位に叙し三十年七月再度貴族院議員に選ばれ二十九年六月從四位に叙し三十年七月再度貴族院議員に擧げられ日露戰役の功に依り勳四等に陞叙現に其職にあり殊に尙友會の幹事にして豫算委員たり方今正四位勳四等、子は殊に詩を賦し繪畫を能くす字は子俊蘭圃と號し瀧和亭翁に師事し能く其筆意を修む、嗜好、書畫（東京市牛込區二十騎町二、電話番町一〇一三）

石渡繁胤

君は神奈川縣の人石渡正敏の長男、明治元年十月三日生る明治二十六年九月群馬縣尋常中學校教諭に任せられ二十九年農商務技手となり三十一年十一月蠶業講習所技師に任じ從七位に叙せられ三十八年四月農商務技師兼蠶業講習所技師に任ず四十二年五月蠶業講習所技師兼農商務技師となり次で京都蠶業講習所長兼東京蠶業講習所技師に轉任し現に從五位勳六等にして其職に在り（京都市上京區椹木町室町東入養安町）

石渡邦之丞

君は群馬縣の人白石庫之輔の次男、慶應二年十二月四日生る、後出でゝ石渡重太郎の養嗣子となる夙に職を逓信省に奉じ書記官に任じ監理課長たり此間累進して從五位に叙す後辭職して日清汽船株式會社長となり今尙其職に在り（東京市赤坂區福吉町一ノ甲三、電話新橋四〇三〇）

池田謙三

君は東京の銀行家たり、池田澄治の長男、安政三年十二月三日但馬國出石郡雷田町に生る、始め兵庫に遊學し理學博士酒匂常明に就て英學を學び明治七年の頃上京して東京府廳に出仕し地租改正事務に鞅掌す在職二年神鞭知常氏の勸に依り内務省勸奬局に入る次で大藏省十四等出仕となり更に九等屬に進む十三年官を辭し身を實業界に投し刻苦營々二年其間原六郎、阿部彦太郎朝吹英二、吉田幸兵衛の諸氏と三五組を起し專ら生糸貿易業に從事せり十六年三月原六郎氏に代て第百銀行に入り取締役兼支配人となり後株式會社東京貯藏銀行頭取を兼ぬ爾來勤續今尚其職に在り三十年以來臺灣銀行創立委員、東京商業會議所會員等に推擧せらる最も銀行事務に通曉す方今前記の外第一生命保險相互會社相談役東京興信所評議員、東京交換所委員等の職に在り

（東京市京橋區築地三ノ八、電話新橋二九三六）

板谷桂舟

君は東京の畫家なり、明治四年十二月二十二日生る、住吉派七代目板谷桂意、廣春の四男、通稱廣永、初め慶舟と號し後ち桂舟と改む其先は藤原鎌足七世基光より出で累世繪事を以て朝に仕ふ基光數世の孫經隆に至りて土佐氏と稱し後世其流派を土佐派と稱せり後水尾天皇の御宇光吉の次男、廣通勅により姓を住吉と改む、其子廣澄幕府に聘せられ東上して奥繪師となる四世廣守に至り嗣なし家名將に斷絶せんとす同族板谷廣當之を憂ひ自ら入りて之を繼ぎ其子廣行を推して廣守妾腹の子と稱し嗣となし僅に全きを得たり是即ち板谷の開祖にして住吉派復興の概子たり君夙に斯道を家庭に修め兄歿後其衣鉢を繼承し專ら丹青に從ふ（東京府豊多摩郡下澁谷町五二七）

石橋襄

君は福岡縣の銀行家なり、石橋茂平次の長男、明治六年十月十二日生る、現に株式會社六十一銀行、株式會社久留米貯蓄銀行等の監査役たり（福岡縣三井郡宮ノ陣村）

井上忠兵衛

君は神戸の實業家なり、井上伊八の長男、安政五年六月十三日兵庫西仲町に生る、家世々餅屋を業とす君幼にして父を喪ひ祖父の撫育を受く二十歳の時家業を廢し新に雜穀及砂糖商を開始し爾來苦心經營大に業務を發展して砂糖販賣を廢し米雜穀專門とし北海道産大豆、小豆及北清幷に韓國産の雜穀を販賣し之が販路を擴張し今日の隆盛を見るに至る現に米雜穀問屋業たり（兵庫縣神戸市兵庫西仲町一九、電話一二〇四）

男爵伊瀨地好成

男は豫備陸軍武官なり、舊鹿兒島藩士伊瀨勇四郎の長男、嘉永元年十月二十八日生る、戊辰の役に從軍し後小隊小頭となる明治四年御親兵として上京し後陸軍歩兵大尉に任し西南の役東京鎮臺附となり出征し功あり勳四等に叙し金六百五十圓を賞賜せらる十三年正七位に叙し十五年從六位に進み歩兵少佐に任じ十八年近衛二聯隊二大隊長となる翌年中佐に進み勳三等に叙す二十三年大佐に進級し近衛三聯隊長となる二十四年從五位に陞叙す爾來第一師團參謀長、歩兵第二聯隊長等を經て二十七八年の役再び第一師團參謀長となり少將に昇任し十一旅團長に轉じ正五位に叙す尋で威海衛占領軍司令官となる二十八年功を以て功四級に叙し金鵄勳章を授け年金五百圓を賜ひ勳二等瑞寶章を授けらる三十一年近衛第二旅團長に轉じ三十三年中將に進み第六師團長となり從四位に叙す三十五年休職となり次で豫備仰付らる四十年華族に列し男爵を授けらる（鹿兒島縣鹿兒島市中郡宇村中六三八）

伊藤悌治

君は新潟縣の人安政五年六月二十五日越後國中蒲原郡中高井村に生る、本姓大矢氏後出でゝ伊藤家を嗣ぐ、明治十六年東京大學法學部を卒業し判事に補せられ爾來東京仙臺等の始審裁判所東京控訴院に轉任し從七位に叙せらる十九年十月東京控訴院評定官に任じ重罪裁判所陪席を命せられ尋で正七位に進む二十三年同院判事となり從六位に叙す二十五年同院部長に補せらる爾來海軍主計學校教授、第一高等中學校講師等を囑托せられ二十七年四月大審院判事に補し正六位勳六等に叙す後屢々判檢事登用試驗委員を命せらる三十八年累進して從四位勳三等に至る三十九年會計檢査官懲戒裁判所判事を兼任す

（東京市麻布區新龍土町一二、電話芝二三九九）

猪子止才之助

君は醫學博士なり、京都府の人猪子清の長男、万延元年四月四日生る、明治六年東京外國語學校に入り獨逸學を學び次で東京醫學校に入學す十五年東京大學醫科大學を卒業して京都醫學校一等教諭を命せらる翌年同校副校長及府立療病院長を兼務す十九年地方衛生會委員を命せられ次で府立療病院長兼京都府立醫學校長となる二十三年第三高等中學校教授に任じ從六位に叙せらる二十五年醫事狀態視察の爲め歐洲に渡航し二十七年歸朝す二十九年日清事件の功に依り勳六等に叙し瑞寶章を賜はる三十一年正六位に進む三十二年京都帝國大學醫科大學教授に任じ京都帝國大學醫科大學附屬醫院長となり醫學博士の學位を授けらる方今正五位勳三等に進み京都帝國大學醫科大學教授たり（京都市上京區堺町通押小路南入）

井上芦仙

君は大阪の畫家なり、岡山縣の人明治六年五月六日生る、通稱專次郎蘆仙は其號始め、中川蘆月氏の門に繪畫を

學ぶ後ち京都に赴き菊池芳文氏を師とす第五回内國勸業博覽會に出品し褒狀を受領す方今相愛高等女學校に奉職し繪畫科を擔任教授す、嗜好、俳諧（大阪市東區淡路町魚棚北入）

井上好雄

君は臺灣の實業家なり、明治六年一月、廣島縣御調郡三原町に生る、實父は實造と稱し、舊廣島淺野侯の藩臣、君は其の長男なり、郷里に於て普通學を修め、歳十七、横濱に行き、丹羽貿易商會に入り、明治二十九年四月、臺灣貿易株式會社々員として臺北に勤務三十三年同社を辭し、大阪商船會社基隆支店に轉勤其の後更に、安平小栗臺灣支店に轉ず、四十二年五月東洋漁業株式會社安平支店へ轉勤現時支配人の地位にあり、玉突を嗜む（臺南廳安平街三二五）

市來乙彦

君は法學士なり、舊鹿兒島藩士市來平太の三男、明治五年四月十三日生る夙に鹿兒島造士館に修め後上京して第一高等學校に入り明治二十六年卒業して帝國大學法科大學に入り政治科を專攻し二十九年卒業す此年十二月文官高等試驗に及第し翌年大藏省に出仕し司稅官に任ぜられ熊本稅務管理局に在勤す後臨時沖繩縣土地整理事務局事務官となる爾來那覇稅務管理局長、稅關事務官、專賣局書記官大藏書記官、臺灣總督府事務官等に歷任し大藏省參事官となり現に其職に在り嘗て三十七八年事件の功に依り勳四等に叙し旭日小綬章を賜はる爾來累進正五位に至る（東京市神田區駿河臺鈴木町一六）

生駒親忠

男は舊羽後矢島藩主なり、其先藤原鎌足の後胤生駒雅樂親正に出づ親正初め豊臣氏に仕へ讃州十七萬石を領す、後正俊の代に至り故ありて羽後矢島一萬二千石を領せり先代親承王政維新の勳功を以て賞典祿千石を賜はる後東京府華族となり正五位男爵を授けらる男は侯爵池田章政の先々代慶政の四男、明治四年七月二十七日生る、明治十九年先代親承の後を繼ぐ三十年七月貴族院議員に互選せられ後之を罷む方今閑地に在り（東京府荏原郡品川町大字北品川二六二）

生沼權一郎

君は栃木縣の實業家なり山口六郎平の三男、嘉永元年十一月二十五日生る出て丶生沼家に入り養嗣子となる方今株式會社三川銀行頭取、下野倉庫株式會社取締役株式會社栃木縣農工銀行監査役たり（栃木縣河内郡上三川町）

岩島匡徴

君は神戸の實業家なり、美濃國舊苗木藩士岩島匡明の長男、安政五年十二月八日生る、明治七年岐阜縣中學校創設の際入學し在學二ヶ年餘にして去つて東上し十一年慶應義塾に入り卒業後岐阜縣中學校同師範學校等に教鞭を執る十四年三月再び上京して内務省勸農局屬官となり次で農商務省の設立せらるゝや同省水産局に轉勤す十九年職を罷め專ら鉛鑛を事とする年餘、再び群馬縣中學校長となりて赴任し二十五年辭して一旦歸郷す二十八年三月更に上京して明治生命保險會社に入り金澤支店長として在職八ヶ年餘、三十六年神戸市に出て兵庫倉庫株式會社破綻の際推されて整理委員に擧げられ拮据精勵數年を出ずして事務を整理し債務を償還し四十年增資して百萬圓とし之が支配人となり以て今に及ぶ（兵庫縣神戸市湊町一ノ二八一）

岩本述太郎

君は島根縣の人岩本好太郎の長男、文久元年二月五日石見國大内村に生る明治十二年上京して慶應義塾に入り十九年五月卒業して時事新報に入り外交員として勤務すること多年二十八年辭して三井銀行に入り翌年四日市支店長となり次て廣島支店に轉し幾もなく支店長に、進み在職六ヶ年、三十四年歸京して深川支店長となり三十六年本店詰となり營業課長に擧げらる三十九年職を罷む方今千代田生命保險株式會社日本リボン製織株式會社、東京信託株式會社等の監査役、廣島八戸銀行相談役たり（東京市芝區白金三光町四六二電話芝五三七）

一ノ貫一

君は岩手縣の大地主なり、安政三年十二月二十八日生る、夙ニ宮城縣師範學校を卒業して小學校に教鞭を執る後同縣師範學校教員、縣屬、獸醫學校に等に歷任し郡長に任ぜられ從七位に叙せらる爾來徴兵事務官、縣諸學校教則取調委員、文官普通試驗委員、小學教科書審査委員、市町村制度實施取調、農事取調委員、地方稅收支精算調査委員、國幣社神職尋常試驗委員、第四回内國勸業博覽會事務委員、其他各種の委員を命せらる、又日本赤十字社特別社員、岩手縣農工銀行取締役頭取に推さる明治三十五年八月縣郡部より選出せられて衆議院議員となり三十六年再選す爾來農工銀行頭取として今猶其任に在り（陸中國和賀郡小山田村）

市川克三

君は大阪の實業家なり、兵庫縣の人市川英作の三男、明治六年四月十二日生る、年甫めて十五歳横濱ニ出て貿易商店に奉公すること數年明治二十六年辭して東京に來り獨立ブローカー業を自營す二十九年大阪に移住し鋼鐵材料輸入商を營み爾來苦心經營漸次業務を發展し遂に今日の成功を見るに至る姓溫厚ニして謹直未だ嘗て投機を試みたることなしと云ふ（大阪市西區江戸堀南通四ノ一一、電話ニ西一二四三）

飯塚春太郎

君は群馬縣の實業家なり先代二葉の長男、慶應元年一月十一日生る、明治十五年一月家督を相續し現に兩毛整織

株式會社合資會社代表社員、渡良瀨水力電氣株式會社監査役たり（群馬縣山田郡廣澤村）

五十嵐平作

君は臺灣の土木建築業者なり、越後長岡在の人、五十嵐平治の長男、文久三年十二月新潟縣古志郡太田村に生る、家は土地の舊家たり、明治二十四年北海道に航し、大に爲す所あらんとせしかど思ふに任せず、三十年十二月臺灣に渡り、三十一年舊保山縣の巡査部長として奉職、深井警視引卒の下に匪徒征伐のことに當る、三十五年三月職を退くに當つて功勞金及ひ褒狀を賜はる、同年十二月打狗新開地に入りて質屋業を營み、爾後更に土木建築業を開始して以て今日に至る、君、性仁俠頗る社會の信用厚く、現に打狗內地人組合の組長たり室廣子、嗜好、玉突、碁園（臺灣打狗旗後街）

井上學太郎

君は神戸の刀圭家なり小嶋俊學の三男、安政四年十一月十三日美濃國に生る、幼にして孤獨播州加東郡井上謙學に養はれて家を嗣ぐ明治九年始め和蘭人ヘエベン氏に就て醫學を學び後ち笈を東都に負ひ苦學力行す偶々兵庫縣々費生の募集に會し直に之に應じ十七年帝國大學別科を卒業す爾來兵庫縣立病院黴毒病院縣立醫學校等に職を執り姫路病院長を兼ね二十四年病を以て辭職し後ち神戸東川崎町に外科專門を以て開始す是れ市內專門醫の嚆矢なり方今專ら濟生に從事す（兵庫縣神戸市東川崎町一ノ四）

子爵 稲垣長敬

子は舊志州鳥羽藩主なり其先は鎭守府將軍源經基の支流稲垣藤助重賢の後胤攝津守重種德川家康に仕へ志州鳥羽三萬石に封せらる爾來十代を經て子に至る其八代目從五位下信濃守稲垣長明の二男なり、安政元年七月十二日生る先代實兄長行嗣なし因て子を養ふて嗣子となす明治元年襲封し從五位下對馬守に叙任す二年鳥羽藩知事に任じ四月東京府に貫屬し十七年七月子爵を授けらる方今累進して從三位たり（東京市麹町區富士見町五ノ五、三重縣志摩郡鳥羽町）

飯塚佐吉

君は東京の材木問屋なり飯塚佐兵衛の長男、明治三年十月八日生る、幼名龜太郎明治十六年四月家督を相續し今名に改む先業を繼承し材木商を營み松屋と稱す明治三十年株式會社木場銀行の創立に與り其取締役に擧げられ現に其職に在り（東京市深川區木場町一〇電話浪花長一〇四三）

伊賀正太郎

君は兵庫縣の實業家なり山下榮助の二男、嘉永元年十一月十日生る、出で丶伊賀重助の養子となり家督を相續す現に株式會社兵神館、播磨採鐵株式會社等の社長姫路電燈株式會社、株式會社田原銀行等の監査役たり（兵庫縣神崎郡香呂村）

市川元八

君は横濱の諸紙商なり市川彌左衛門の長男、弘化二年一月十七日駿河國富士郡西比奈村に生る、家世々農を業とす、慶應二年横濱に出で荒物紙類の一小店を開き苦心經營し雁皮紙を以てコッピー用紙の代用品を製出し之を海外に輸出して巨利を博す明治十年現住所の地を購ひ之を本店とし元町を支店とす爾來家礎漸く成り四國中國の產紙を招き之が發達進步を計り紙質改良に貢獻する所少からず二十九年日本紙輸出合資會社を起し自ら業務擔當社員となり三十二年更に相生町に洋紙部商店を增設し愈々營業を擴張す是より先き明治十七年横濱紙商組合を組織し其組長に擧げられ二十六年區會議員に選擧せらる三十一年横濱商業會議所會員に當選し方今太田町交睦會々長及同盟會頭に推され現に其任に在り（神奈川縣横濱市太田町四ノ五七）

入江良之

君は栃木縣の人入江喜平の長男、慶應二年十一月二十八日生る、明治十三年司法省法學生となる次で第一高等中學校に入り二十五年七月帝國大學法科大學を卒業し大藏省試補となる二十六年辭して日本鐵道會社法律事務取扱を托せられ二十八年辯護士となり其事務を執る三十二年第四高等學校教授に任せらる翌年判事に任じ爾來金澤地方裁判所判事大阪地方裁判所部長等に歷任し三十八年八月東京地方裁判所檢事兼司法省參事官となる四十年七月同參事官兼東京控訴院檢事に補せらる四十二年八月歐洲に差遣せられ從五位に累進す（東京市麹町區中六番町二六）

岩堀嘉三郎

君は福井縣の呉服商なり先代嘉三郎の四男、明治二十三年二月生る、幼名憲二後家督を相續し先代を襲名す世々呉服商を營み現に國稅七百餘圓を納め營業頗る盛なり（福井縣南條郡武生町）

岩堂保平

君は岡山縣の人安政元年十月三日生る、本姓堀野氏後出で丶岩堂家を嗣ぐ現に株式會社岡山米穀取引所理事長にして岡山製紙株式會社專務取締役たり（岡山縣岡山市小原町）

男爵 伊賀氏廣

男は舊土佐藩士山內勇の四男、明治十九年九月十八日生る、後出で丶舊土佐藩の國老伊賀陽太郎の養嗣子となる養家は世々宿毛邑六千八百石を領し養

父陽太郎氏は維新の際國事に盡し功勞あり男幼名豊廣後今名に改む明治三十三年先代の勳功に依り特旨を以て華族に列し男爵を授けらる方今從五位たり（東京市小石川區宮下町五三）

市川鰕四郎

丈は神戸の俳優なり文久元年六月大阪大和町に生る、父を大谷萬作と云ひ大阪俳優たり丈本名武田大太郎と云ふ七歳の時五代市川鰕十郎に就て修藝し市川鶴太郎と稱す、初め道頓堀劇場に子役を勤む十二歳父を亡ひ一時親戚に身を寄す十三歳にして江戸に赴く途次伊勢松阪に市川右團治の率ゆる一座あるを聞き伊勢に往き澤村魁藏市川荒五郎等に從ひ紀州に入り熊野に興行し夫より澤村丈と共に坂東太郎に就き堺に出て藝名を鰕四郎と改め同地の劇場に出演す後ち大阪に歸る明治二十五年頃神戸大黒座主の知遇を受け爾來同座附俳優となり以て今日に至る、現に神戸市に於ける有數の俳優たり、嗜好、碁、（兵庫縣神戸市兵庫本町）

岩龜喜助

君は岩手縣の製糸業家なり岩龜牛藏の長男文久三年一月六日生る、家業は製糸業を營み縣下の大地主にして多額納稅者を以て聞ゆ現に稅額二千四百九十餘圓を納む（岩手縣稗貫郡大迫町）

伊藤欣造

君は臺灣の辯護士なり丹後宮津の舊藩士伊藤丈平の長男、慶應三年十月を以て其郷里に生る、夙に學を郷校に修め明治二十一年東京に出で中央大學に入り二十五年七月卒業す一時山梨紡績會社に職を奉じ後ち東京大阪等にありて民間の事業に關係奔走すること數年二十九年臺灣に航し高等法院民刑部に判官たり三十一年官を辭し新竹に於て辯護士業を開き三十四年臺北に移り法律事務に鞅掌し頗る瑛名あり嗜好、謠曲（臺灣臺北新起街二ノ三六）

岩田惣三郎

君は大阪の實業家なり岩田常右衛門の二男、天保十四年三月十五日生る、明治三年三月分家して綿絲卸商を業とす嘗て株式會社大阪絲綿木綿取引所監査役たり明治三十五年以降株式會社尾州銀行頭取、攝津紡績株式會社監査役として今猶其任に在り方今前記の外株式會社大阪三品取引所理事、大阪商業會議所議員たり（大阪市東區北久太郎町二ノ一一、電話長東五三八）

岩田宙造

君は東京の辯護士なり山口縣の人明治八年四月七日生る、樋山彦七の二男後ち出でゝ北海道福山町の素封家岩田家に入り養嗣子となる夙に普通學を修め東京帝國法科大學に入り英法科を專修し優等の成績を以て明治三十一年卒業す三十五年辯護士名簿登錄を受け直に法律事務所を開始し兼て中央大學に入り民法講座を受持ちたり方今東京帝國大學農科大學講師、日本銀行、日本郵船會社、東京海上保險會社等法律顧問たり（東京市麹町區八重洲町一ノ一電話本局一三五六）

男爵茨木惟昭

男は豫備陸軍中將なり舊紀州藩士茨木藤助の長男、嘉永二年九月九日生る幼名守之助後ち改む南峰と號す夙に文學武術を修め常に群を拔き屢々賞せらる元治慶應の間長防兩度の征討に從軍して功あり明治元年藩主に隨行して上京し爾來其の軍政に力を致し後ち陸軍に出仕す五年四月陸軍大尉に任じ同年五月少佐に進む六年從六位に叙せられ七年中佐に昇任す此年野津將軍の麾下に屬し第十大隊を率て佐賀役に參加して功あり尋て大阪歩兵第一隊長に補せられ十年姫路所司令官を兼ね西南の役別動第二旅團に編入せられ各地に轉戰す十一年功を以て勳四等に叙し旭日小綬章及年金百三十五圓を賜ふ次で大佐に進み第十四聯隊長兼小倉營所司令官に補す十六年以後軍法會議判士長參謀本部副官、近衞師團參謀長、戸山學校長等に歷任し二十一年勳三等旭日中綬章を賜ふ二十三年陸軍少將に進み從四位に叙し歩兵第十一旅團長に補せらる二十七八年日清の役旅團を率て大連灣に上陸す此日同旅團長を免じ金州城行政長官を命せられ次で占領地總督部參謀長兼民政部に補す二十八年軍功に依り特に華族に列し男爵を授けられ勳二等旭日重光章及年金五百圓を賜ふ二十九年第八旅團長に補し陸軍中將に任じ三十三年豫備仰付けらる、三十七八年日露の役留守師團長たり後ち功に依り正三位勳一等に陞叙し功三級金鵄勳章を授けらる男故山に歸るや有爲後進者を集め武術を講じ水泳術を鼓舞し自ら進で其術に當り大に蕭陶に努む爲めに其感化を受くるもの太だ多し、方今貴族院議員たり、嗜好、喜多流謠曲、和歌（和歌山市屋形町二ノ四）

稲延利兵衛

君は東京の實業家なり稲延安兵衛の長男、嘉永四年十二月十五日生る、幼名勘太郎明治六年父隱退し君家督を相續して今名に改む家業は履物鼻緒問屋にして常陸屋と稱す明治八九年の交履物商組合紛亂す時に君委員に擧げられ能く整理して聲望を博す後其組合長に推さる明治三十年日本通商銀行の創立に與り其取締役兼支配人となる三十三年富士紡績株式會社取締役に當選し三十五年市會議員、市區改正委員、區會議員等に選擧せらる方今株式會社日本通商銀行常務取締役、第一瀛罐保險株式會社、富士瓦斯紡績株式會社等取締役東京市會議員、同商業會議所議員たり（東京市日本橋區本材木町一ノ一四、

電話本局三五七）

飯島農夫雄

君は東京の辯護士なり飯嶋榮の長男明治十六年十一月二十四日武州北豐嶋郡板橋町に生る、家世々農を業とす夙に早稲田中學校に學び第五高等學校を經て明治四十三年帝國大學法科大學卒業の法學士なり直に辯護事務所を東京新富町に開き爾來專ら其事務に從事し法曹會の一名士たり（東京市京橋區新富町五ノ一四）

五十嵐敬止

君は千葉縣の多額納稅者なり五十嵐佐一郎の二男、萬延元年三月二十五日生る、其先は千葉家の支族にして天正十四年多古城主牛尾能登守胤仲等と共に戰敗れて多古村に潛居し爾來代々農を業とし今に至る君弱冠東京に遊學す明治十七年多古村戸長となり後勸業諮問委員に推さる廿年一府六縣共進會千葉縣審査委員に推薦せらる二十二年農業視察の爲め米國に渡航し翌年歸朝す此年九月貴族院議員に當選す二十九年其任期滿ちて罷む君又力を公共事業に盡し學校衞生警察事業等に義捐し屢々賞狀木盃を受領す嘗て日本勸業銀行監査役千葉縣農工銀行頭取たり三十二年十一月以降勸業銀行理事の職に在り四十三年之を辭し貴族院議員となり現に其職に在り（下總國香取郡多古村、東京市本所區小泉町三五、電話下谷三八五〇）

市來圭一

君は舊鹿兒島藩士なり市來甚七の長男文久三年十一月生る夙に漢學を鄕里に學び明治十六年東都に來り明治法律學校に入る十八年警視廳巡査となり二十年警部補に任せられ二十三年警部に進む三十年以降警視廳に勤務し警察學校の開設せらるゝや直に入學して卒業す三十三年警視に任せられ鹿兒島縣警察署長となる北清事變の際功ありて勳六等に叙せらる三十五年備後沼隈郡長に轉任す三十七年日露戰役の際再び鹿兒島縣警察署長となり四十年備後御調郡長に轉じ翌年職を辭し廣嶋縣福山町長に推さる方今正七位勳五等にして現に其職に在り（廣嶋縣深安郡福山町）

市川門之助

丈は東京の俳優なり大西萬三郎の長男、文久二年六月出雲國八束郡揖屋村に生る、通稱清太郎、幼にして歌舞を好み始め坂東秀之助と名乘り出雲の諸劇場に出勤す明治十二年石州安濃郡波根西村字久平浦の鄕士竹下幸吉郎氏に勸められ大都の名優たらんことを志し鄕里を出で大阪に入り荒川庄兵衞氏に寄り市川右團次の門に入り市川福之亟と改め大阪各座を出勤す明治十八年荒川氏と共に上京して春木座に出勤す二十一年市川女寅と改め二十九年春荒川氏の養子となる四十三年市川門之助と改名す方今歌舞伎座に出勤し其名都下に鳴る（東京市淺草區瓦町二八、電話下谷三二〇一）

石崎勝藏

翁は奈良の刀圭家なり福井仁五郎の第五子、弘化四年六月大和國山邊郡都介野村大字白石に生る、幼名勝之助後ち今名に改む名は親功字は可大、杏陰と號す安政三年十月父歿後母兄の爲めに鞠育せられ夙に醫學に志し同四年五月伯父石崎文平の養子となる養父は周忠と稱し刀圭家たり翁乃ち家學に就き傍ら富松氏の私塾松林堂に入り習字、算術等の學科を受ゝ後ち奈良奉行所立明敎館に入り佐々木西里翁に就き漢籍を學ぶ元治元年十月京都に遊學す當時學資乏しく奥村庄藏の門に藥室生となり兼て醫學を研究す慶應二年三月御所の典醫豐後守從五位福井貞憲の門に入り藥生の雜務に從事し家塾崇蘭館に內科を專攻し特に師の許可を得て伊藤龜鑒、吉野郡災害救恤等に義捐し又奈良之助の門に通學す此年勝藏と改名す明公園に櫻樹を寄附し宮內省、縣知事より木杯賞狀を下賜せらる翁資性恬澹素治元年三月主上行幸の際師の供奉に隨朴にして時に奇行あり曾て地方丁醫連行す同年九月東京へ行幸此時又師の供三十五名を集め丁醫會を開き其發起式奉に隨行す三年四月中嶋市藏翁に從ひを春日神社に催す翌年一團相携へて伊眞影流の劒法を學び同流靈劒の卷を受勢大廟に參詣す行人皆足を止めざるはく此年七月師に隨ひ京都に還る四年十なし到る所兒童其奇觀を指笑す翁顧みて口詠す「こゝかしこゆび指す子等に一月卒業す尋て養父易質し箕裘を繼ぎ事問はん昔の人を知るやしらずや」（奈奈良後藤町に開業す爾來業間有志と謀良縣奈良市高畑町字菩提）

り漢學講究會、和歌會等を起して寧樂舍と稱す七年四月家督を相續す八年八月舊奈良縣醫局に入り洋法醫術を講究す九年五月卒業し次で檢疫醫を命せらる十五年一月關西漢法醫師の組織に係る京都賛育學社に入社し尋て八月全國漢法醫の團體和漢醫學講究所東京溫知社に入社し以來皇漢醫法の隆盛を企圖して大に地方醫務に盡瘁す先是明治十一年以降翁市外の往診には馬乘するを常とす是より遠近相傳へて馬上丁醫の名嘖々たり二十三年十二月私立石崎文庫を創設し隨意公衆の縱覽に應ず翁殊に公共の心に深く、博愛慈善の念に富む嘗て皇居御造營、奈良阪山道路開鑿、

池田庄吉

君は東京の實業家なり池田忠七郎の男嘉永三年一月生る、曾て浦賀船渠株式會社二十七銀行、二十四銀行等の監査役たりき方今東京保稅庫株式會社取締役、東京灣瀨船株式會社取締役の職に在り（東京市日本橋區元大工町四）

市田理八

君は京都の關東呉服卸商なり嘉永元年五月五日生る、明治十六年長嗣理三郎に家督を讓りて隱退す、方今株式會社京都取引所理事、株式會社京都府農工銀行監査役たり「京都市下京區六角通東洞院東入二二、電話一四八、支店（東京市日本橋區元濱町六）

伊藤清八

君は名古屋の表裝家（墨花堂）なり元治元年尾州海西郡彌富村字平島新田に生る、伊藤幸助の三男、幼名己之助後ち今名に改む明治十年名古屋長者町の表具匠百花堂の徒弟となる業を受くる十三年業完く成り辭して自家に歸るや赤手空拳些の資金を有せず頗る艱苦を極む二十五年九月漸く現住所に獨立斯業を自營するに至る爾來刻苦奮勵古書畫の修繕又は其表裝に得意の妙技を發揮して大に好評を博し三十二年以來名古屋東本願寺別院を始め近縣の寺社等より陸續修繕表裝の依頼を受け盛に營業す（愛知縣名古屋市前塚町六二）

岩井楳太郎

君は大阪の石油商なり奈良縣の人明治六年十月二十五生る、本姓藤井氏明治三十一年出でゝ岩井しつの女婿となり家督を相續す同家は岩井文助氏の一族にして石油販賣業を營み家道頗る隆盛なり現に直接國税一千餘圓を納む（大阪市東區大川町甲四二、電話東二八八〇）

伊藤孫左衛門

君は岐阜縣の材木商なり長野新兵衛の二男、文久元年二月九日美濃國武儀郡板取村に生る、家世々製糸を業とせり君幼名米太郎十八歳伊藤家を嗣ぐ明治十七年家督を相續し襲名す後ち材木及白木類卸販賣に從事す爾來學務委員町總代たり三十六年市會議員に選擧せられ其後累選今尚其職に在り後ち區會議員を兼ぬ君又岐阜商業會議所創設以來議員として在任多年方今前記の外岐阜商業會議所議員、日本赤十字社終身社員たり、嗜好、書畫骨董（美濃國岐阜市港町三四九、電話ヰ一〇）

岩田作兵衛

君は東京の實業家なり岩田新七の長男天保十三年十二月二十五日生る、家世々福井縣下の大地主たり、嘗て川越鐵道株式會社取締役、東京商業會議所議員に擧げられ又明治三十五年以來青梅鐵道株式會社監査役となり今尚其任に在り方今川越鐵道株式會社專務取締役、桂川電力株式會社、電氣製造株式會社、名古屋電力株式會社、東京鹽業株式會社、大日本軌道株式會社、東京機械製造株式會社等監査役たり（東京市日本橋區本町一ノ一〇、電話本局一四二〇）

岩永省一

君は東京の實業家なり後藤多仲の次男、嘉永五年四月十八日肥前國東彼杵郡大村町に生る、後ち岩永家に入り養嗣となる明治十八年共同運輸會社と郵便汽船三菱會社との合併に與り盡力し爾來日本郵船會社に勤務し後ち同會社貨物課主任となる三十一年其專務取締役となり今猶其職に在り兼て同社貨物課長たり（東京府荏原郡目黑村下目黑一五六、電話芝一六〇二）

伊庭秀榮

君は醫學士なり舊幕臣伊庭直の長男慶應三年二月江戸に生る、明治二十四年帝國大學醫科大學を卒業して醫學士となり同大學產科婦人科に勤務し二十五年山梨縣病院副院長に聘せられ二十八年縣立福岡病院產科婦人科部長に轉任し三十二年大阪醫學校教諭兼附屬病院產科婦人科醫長を命せらる三十八年上京日本醫學校に教授として在職三年職を辭し今日宅に開業し產科婦人科專門を以て濟生に從事す君明治三十八年以來醫術開業試驗委員にして今尚其職に在り嗜好、喜多流謠曲（東京市京橋區南鍋町一ノ一、電話新橋三三六七）

岩原謙三

君は加賀國舊金澤藩士岩原孝興の長男、文久三年十月二十一日生る、曾て三井物產株式會社に入り現に其常務取締役の任に在り尚王子製紙株式會社取締役を兼ぬ（東京市麻布區宮村町七一電話芝二三八〇）

岩橋謹次郎

君は東京の織物業者なり岩橋轍輔の長男、文久元年九月三十日生る、明治五年慶應義塾に入り十二年卒業して父と共に北海道に赴き開拓事業に從事す十五年父を亡ひ次で母亦歿するの不幸に遭ひ頗る苦境に在りて開墾に從事せり十九年森村組紐育支店長として渡米し紐育ホフキー商業學校に學ぶ歸朝後白木屋呉服店に入り理事たり二十七年自らリボン製造所を創設し傍ら桐生織物株式會社の重役を兼ね現に前記織物業に從事しつゝあり（東京市下谷中初音町四ノ八、電話下谷二九五〇）

乾新兵衛

君は神戸の清酒醸造家なり兵庫縣の人前田甚兵衛の長男、文久二年二月二十四日八邊郡北野村に生る、幼時兵庫乾家に仕へ能く家業に精勵し遂に囑望せられ明治十年同家の女婿となり家督を相續す養家は世々清酒醸造を業とし商船船を所有す爾來勤儉力行益々資產を增殖し聲望頗る高し四十二年神戸信託株式會社の創設に際し推されて其社長に擧げられ現に其職に在り（兵庫縣神戸市湊町一ノ一八一、電話長一三七七）

乾　孚志

君は舊熊本藩士菅沼恒の次男、安政五年八月二十八日生る、明治十二年出でゝ乾家を嗣ぐ九年帝國大學法科大學を卒業し法學士となり直に判事試補に任じ尋で判事となり爾來浦和地方裁判所判事、名古屋控訴院判事、安濃津地方裁判所長前橋地方裁判所長等に歷任し此間累進して正五位勳五等に叙せられ現に廣島地方裁判所の職に在り（廣島縣廣島市地方裁判所官舍）

石川廸畝

君は東京の畫家なり畫家立岡快雪の實弟明治二十八年一月東京市淺草に生る、通稱昂一廸畝は其號、明治二十八年始て荒木寛畝翁の門に入り南北合派の畫法を修め兼て大戸蘭逕に就き漢籍を學ぶ爾來屢々各地に漫遊し到る所の勝區を探り寫生に從事し深く造詣す君常にスケッチ畫に趣味を有し頗る才氣に富み繪事に抱負あり青年畫家中將來に屬望せらる現に中央新聞紙の挿畫は君の擔當する所たり、嗜好としては川柳を能くし又演藝文學の讀物とす（東京市下谷區龍泉寺町三七九）

犬伏九郎左衞門

君は德島縣の多額納稅者なり先代九郎左衞門の長男、元治元年九月一日生る、幼名增太郎後家督を相續し先代を襲名す家世々藍藥商を業とし縣下の大地主たり曾て德島鐵道株式會社の取締役に在り（德島縣板野郡藍園村）

乾　亮

君は石川縣の辯護士なり東與之助の次男、明治二年三月十二日生る、出でゝ乾太平の養子となり家督を相續す夙に上京して和佛法律學校を卒業し明治三十二年辨護士試驗に及第し翌年一月法律事務所を金澤市に設け爾來專ら其事務を執る曾て金澤辨護士會副會長に擧げられ後其會長たり（石川縣金澤市堅町六〇、電話三一九）

入江光藏

君は兵庫縣の人入江伊三郎の長男、文久三年二月五日生る、現に株式會社加古川銀行取締役頭取たり（兵庫縣卯南郡伊保村）

犬丸鐵太郎

君は東京の實業家なり舊岡山藩士犬丸石雄の長男、明治七年四月二十九日生る、父石雄氏は曾て蠶業を奬勵し大に盡す所あり縣下蠶業中興の祖と稱せらる君夙に札幌農學校に學び後農商務省海外實業練習生として米國に留學し同國ハーバート大學に學ぶ歸朝後農商務省商品陳館技師に任せられ內國勸業博覽會審査官聖路圖博覽會審査官を命ぜらる辭して四十年東京人造肥料株式會社專務取締役となり大に盡力す方今東京米穀商品所理事たり（東京市芝區三田小山田町七、電話芝五三五）

伊東增枝

女史は和歌山の花道家なり舊紀州藩士伊東祐信の三女、元治元年三月生る青溪園一路と號す夙に風流韻事を嗜み始め漢學を平野勇輔に學び後ち和歌山縣第十九中學區鐘秀學校を修了し明治十七年京都に出で池坊の門に花道を學びて其奧儀を究む三十三年の頃上京して川口東洲翁の門に書法を修め芳洲と號す兼て川合小梅女史に就き四條風の畫法を學び居る事三ヶ年歸鄕して門戶を張り花道を指南す三十七年日露の戰端開くや陸軍省より招れて看護婦となり戰地に出張して熱心勤務に服す後ち對馬警備隊病院に入り篤志看護婦長として其取締役たり其間常に風紀靜肅慈愛心を以て患者を慰撫し二百有餘日の間終始一貫毫も倦退の色なく躬行實踐自ら模範となりて看護婦を指導監督す爾來入院患者減少し看護婦の必要なきに至り三十八年十月女史の病院を去るに莅み同病院長兼對馬警備隊軍醫部長武市直次郎氏は特に感謝狀を贈與し其功勞を賞せらる三十九年四月官之を奇特として賞勳局より褒狀を下賜せらる女史又竹屋流の盆景に精通す方今自宅に在りて花道と共に門弟に授く四十三年池坊花宗家より紀伊國會頭の稱號を得て門葉益々隆昌す（和歌山市宇治四筋目六）

入江金三郎

君は山形縣の實業家なり松永哲平の三男、明治七年三月十一日生る、同十九年出でゝ入江家に入り養子となり家督を相續す明治三十年大阪高等商業學校を卒業して神戶の兼松商店に入り現に東京支店主として直輸貿易業を營む（東京市深川區佐賀町二ノ二二、電話長浪華五四六）

猪飼史郎

君は大阪の藥種商なり明治十七年十月八日生る、夙に大阪第一中學校を卒業し次で金澤醫學專門學校藥學部に入學し明治三十七年卒業す翌年志願者として入營し三等藥劑官となり正八位に叙せられ四十年豫備に入り後藥種商を營み盛に營業す（大阪市西區江戶堀南通一ノ一三五、電話西七九八）

猪田岩藏

君は滋賀縣の大地主（多額納稅者）なり猪田五兵衞の長男、明治七年一月十五日生る同二十六年四月家督を相續す縣下大地主にして世々農を業とし直接國稅二千餘圓を納む（近江國神崎郡北五個莊村）

五十嵐甚藏

君は新潟縣の大地主にして多額納稅者なり先代岡藏の長男、弘化二年十月

六日生る、家世々商を業とす明治十二年以來新發田第百五十六銀行頭取たり三十年七月貴族院議員に互選せられ後之を罷め方今閑散の身に在り（越後國北蒲原郡笹岡村）

生田是文

君は東京の畫家なり三河國畿本多藩士生田正八の三男、明治十六年八月參州岡崎に生る、通稱是文通して號とす別に雅卿の號あり幼にして繪事を好み歳十八上京して初め水野年方の門に入り大和派の畫法を學び師の歿後寺崎廣榛氏に就き其指導を享く最も歴史人物に長し山水之に次ぐ其作品各種公私の博覽會　美術展覽會、共進會等に於て優等賞を得る數次四十四年三月美術研精會に觀音の圖を出陳し三等賞銅牌を受領す方今研精會巽畫會員たり、嗜好弓術（大和流）謠曲（東京市下谷區上野櫻木町三八）

子爵　板倉勝鏤

子は備中舊庭瀬藩主なり先代勝弘の長男、明治八年五月十七日生る、父勝弘は安政五年備中庭瀬に封せられ二萬石を領せり明治十七年子爵を授けらる子は四十二年五月家督を相續し襲爵仰付けられ正五位に叙せらる（東京市本郷區眞砂町二三）

板倉松太郎

君は山梨縣の人板倉平兵衛の長男、明治元年四月二十三日生る、明治廿一年七月帝國大學法科大學を卒業して判事試補となり廿三年六月治安裁判所判事に任じ正八位に叙せられ爾來前橋地方裁判所東京麹町京橋芝の區裁判所東京千葉の地方裁判所東京函館大阪控訴院判事同部長等に歴補し三十六年一月檢事に轉じ東京控訴院に勤務し後更に判事に任し大審院に在勤す四十年十月大審院檢事に轉じ現に其職に在り方今正五位勳四等たり（東京府荏原郡大崎村上大崎今里八〇四、電話一六九五乙）

男爵　池田長準

男は舊岡山藩士なり池田長常の二男嘉永六年二月二十七日生る、家世々岡山藩の國老にして二萬五千石を領し父を無適齋と號す明治三十三年特旨を以て華族に列し正五位に叙し男爵を授けらる方今舊主池田家事務監督、株式會社廿二銀行、同貯蓄銀行取締役たり君夙に海晏禪師に就て參禪し鵬巖居士の號あり（岡山縣岡山市山下町）

今井省三

君は理學士なり舊幕臣今井守胤の三男、安政元年六月江戸湯島に生る、舊名卯太郎後改む明治六年東京外國語學校に入り尋で東京開成學校に轉じ十年四月東京大學理學部に入り化學科を卒業す爾來石川縣金澤醫學校教授、同縣師範學校教諭及第四高等學校教諭兼舍監に歴任し三十一年一月第四高等學校に心得を命ぜられ次で之を辭し累進して高等官四等に陞り正六位勳六等を賜はる方今正五位勳五等にして同校教授たり（石川縣金澤市長町三番町一六）

伊藤大八

君は長野縣の人平澤健二郎の二男、安政五年十一月十五日信州下伊那郡伊賀良村に生る、家世々里正たり、明治七年三月伊藤家を嗣ぐ同九年上京して中江兆民の佛學塾に入り政治、經濟、心理學を攻究し卒業後塾幹たり二十年陸軍幼年學校譯官に任せられ二十二年陸地測量部兼務を命せらる二十三年縣鐵第七區より推されて衆議院となり爾來累選すること四回に及ぶ三十年毛武鐵道株式會社取締役に擧げられ翌年六月憲政黨内閣成るの際遞信省鐵道局長に任し正五位に叙せらる先是二十四年以降鐵道會議々員たり三十一年十一月臨時鐵道會議々員を命せられ今尚其職に在り三十四年江ノ島電氣鐵道會社を創設し其取締役に擧げらる嘗て立憲政友會の組織せらるゝや入て政務調査委員會理事、本部幹部、協議員等となる四十三年西園寺總裁より幹事長を囑托せられ四十四年廣軌鐵道改築準備委員を命せらる其著に佛和字林、道德論、黄楊梅樓客問等あり（東京市麹町區五番町二、電話番町四〇〇）

岩井禎三

君は東京の醫師なり愛知縣の人安政五年一月六日生る、遠藤英一の次男、後出でゝ岩井家を嗣ぐ明治九年大學醫學部別科に入り十九年卒業して大學附屬病院外科助手となり十五年岩手縣立醫學校教諭兼病院醫員となる十六年公立同縣稗貫郡病院長に轉し十九年布哇に聘せられ日本移民局醫長となり二十年同所癩病院醫官を兼務す二十一年歸朝して東京府養育院副院長の囑托を受け二十二年赤十字社醫員となり濃尾大震災に際し愛知縣に出張して傷者を救護し木盃を下賜せらる二十七八年日清戰役の際同社の捕虜傷病者係の理事となり次で陸軍省通譯として清國に差遣せらる二十八年同社内科主幹となり翌年日清の戰功に依り勳六等に叙せられ歐州赤十字事業調査の囑托を受け獨佛露墺等を巡視し三十二年露國神聖スタニスラス三等勳章を賜はる三十三年北清事變に際し赤十字社病院船博愛丸醫長となり三十四年佛國政府よりカンボウジュ三等勳章を賜はる方今赤十字社内科醫に東京醫事新誌記者、待醫寮御用掛、韓國世嗣殿下御用掛たり（東京市麹町區平河町四ノ六、電話四五八）

岩本吉次郎

君は東京の電氣器具製造家なり山口縣の人岩本甲吉の二男、安政五年三月五日生る、家世々農を業とす明治二十六年出京して東京電氣會社に入り電氣

器械製作術の練習を受け後自然社に入り更に研鑽すること前後六年技大に進み臺灣に赴き大倉組に入り諸器械製造に從事す三十一年再び上京し工場を起し電氣諸器械製造業を開始し爾來扶据鞅掌業務頗る隆昌なり（東京市芝區西町一、電話芝九三七）

一江芳秋

君は名古屋の畫家なり舊尾州家老竹越藩士一江松太郎の長男、明治二十二年十一月十五日生る、名は義雄、字は逸、芳秋は其號なり幼にして畫を好み甫め名古屋の永谷芳年の門に入り丹青の技を學ぶ多年後ち京都に出て贊を竹内栖鳳の門に執り研鑽して大に得る所あり居ること數年後ち故山に歸り爾來專ら丹青を事とす餘技未生流の花道を修得して其蘊奥を究め總會頭師範代に進して松雲齋の號あり其他謠曲を嗜む（愛知縣名古屋市西區井桁町三八）

岩元吉太郎

君は鹿兒島縣の多額納稅者なり先代吉之助の長男、嘉永四年二月四日生る明治十七年五月家督を相續す縣下多額納稅者として知らる現に稅額一千五百五十餘圓を納む（鹿兒島縣肝屬郡鹿屋村）

岩崎次三郎

君は横濱の銅鐵金物商なり、先代由次郎の長男、明治六年十二月二十二日生る、曾て實弟友次郎氏等と岩崎兄弟商會を創立し現に其代表社員として自ら經營に任ず尙横濱肥料製造株式會社取締役、株式會社鐵業銀行監査役を兼ぬ（神奈川縣横濱市太田町一ノ五）

岩崎德五郎

君は新潟縣の銀行家なり、先代榮助の長男、明治二年八月六日生る現今株式會社越後銀行頭取株式會社河西銀行取締役たり（新潟縣西頸城郡大和川村）

岩下清周

君は長野縣の人岩下佐源太の二男、安政四年五月二十八日生る、夙に出京して商業講習所に學び後同所の教諭となり故矢野二郎翁の寵光を得て三井物産會社に入り支店長として英國及佛國に在勤すること數年歸朝後辭して品川電燈會社長となる二十五年再び三井銀行に入り副支配人となり次で大阪支店長に轉ず在勤數年にして辭して大阪に留まり爾來大阪市部より選出せられ衆議院議員たり三十九年四月日露事件の功に依り勳四等に叙せらる四十五年五月又市部より衆議院議員に選出せられ現に其職に在り方今北濱銀行頭取、箕面有馬電氣軌道株式會社取締役社長、營口水道電氣株式會社長、東亞興業株式會社豊田式織機株式會社、鬼怒川水力電氣株式會社等の取締役、名古屋織布株式會社監査役、南滿州鐵道株式會社理事大阪商業會議所議員なり（東京市麹町區紀尾井町三、電話長番町一九四）

石田彦兵衛

君は和歌山の綿布晒白業家なり、先代彦兵衛の男、安政元年八月十二日山城國葛野郡中桂村に生る、家世々晒白業を營む、君幼名正太郎明治二十七年父歿後家督を相續して襲名す、慶應三年居を京都に移し專ら斯業に從事す維新後文物革まり商工業著しく進歩す獨り晒白業のみ依然として舊時の面目を改めず姑息の製法に甘じ改良の方法を講ずるものなし、君之れを慨し一意熱心實地に就き其工夫を凝らすこと數年明治二十四年四月始めて新規綿布晒白法を發明して『都晒し』と稱す此法頗る簡易にして純白且つ地質を損せず從ふて工賃亦廉なり是に於て忽ち高評を博し家業大に進む尙進んで之れが完成を期し孜々研鑽怠らず二十七年五月前の改良を完成して勞力を減じ浪費を除くに至る是より斯業界の發達進歩を促し遂に京都の今日あるに至れるもの君の力與かり多し、後ち思ふ所あり三十三年冬京都を辭し居を和歌山市に移し爾來此地の晒白業に改良を加へ其國產たる紀州綿ネルを發展せしめんとの計劃を起し和歌山精工株式式社（今の和歌山第一綿ネル會社）に人を介して綿布捺染下晒白の請負を爲す三十四年三月和歌山織布株式會社の天竺金巾の晒白を請負ひ家業益々盛大を加ふるに至る嘗て同市同業者の最も苦心を極め而も尙ほ成功し得ざる海軍服地晒白に心力を傾注し研究の結果之れを完成し見本を以て同會社に交渉する所あり同會社は直ちに其見本を海軍省に提出するや大に同省の稱賛を蒙り立所に御用命を同會社に下附せらる是より同會社は一手晒白を請負ふに至る三十六年更らに同會社は海軍省御用品葛城織晒白一手引受所の看板の掲示を許さる三十八年四月工場狹隘を告げ同會社は君の工場を擴張して同市元寺町に一大工場を增設し蒸氣機罐を据付けて以て補助する所あり今や職工五十有餘名を使役し一ヶ年製造高二十萬反に達すと云ふ君此他に於ける捺染下晒白の始祖にして且つ至難の晒白を成功して紀州綿ネル業界に燦然として光彩を放ち名聲四方に揚り方今斯業界の泰斗を以て稱せらる（和歌山市嘉家作町三三、電話五一八）

岩田保太郎

君は大阪の實業家なり、先代常右衛門の長、男慶應元年三月十五日生る、家業は內外綿糸販賣業を營み現に飾磨紡績合名會社代表社員にして株式會社大阪三品取引所監査役たり（大阪市東區北久太郎町二ノ二三、電話東三八八同五五三）

岩田友右衛門

君は東京の實業家なり、愛知縣の人岩田友右衛門の長男、明治九年十一月十五日生る、家世々綿糸商を業とす、君幼名友市明治三十年九月家督を相續し先代の名を襲ぎ家業を繼承す現に營業稅一千八十餘圓を納め盛に營業す。

（東京市日本橋區堀江町三ノ一、電話浪花四二五）

岩田源次郎

君は名古屋の呉服太物商なり、先代惣次郎の二男、安政五年九月十六日生る、明治二十九年二月分家して呉服太物商を營み數年を出ずして產を興し同業者中有數の地位にあり方今株式會社丹葉銀行の監査役たり（愛知縣名古屋市西區本町五ノ一九）

稲茂登三郎

君は現代議士なり、群馬縣の人先代木暮武太夫の二男、慶應二年三月九日生る、明治三十一年出でゝ稲茂登家を嗣ぐ、君夙に鄕里の中學校を卒業し後上京して攻玉舍に學ぶ、三年更に英人ハリス氏に就て英學を修め傍ら土谷温齋に從ひ數學簿記を研究す三十三年以降海國生命保險會社の專務取締役たり三十六年東京市會議員に選擧せられ尋で市參事會員に推され市區改正常置委員を兼ぬ四十一年東京市部より推されて衆議院議員となる四十五年五月總選擧に際し再選せられ現に其職に在り方今前記の外東京商業會議所議員にして東京信託株式會社、東京市場建物株式會社、日本電線株式會社、株式會社倉庫銀行、伊香保電氣軌道株式會社、日本印刷株式會社等の取締役の職に在り（東京市神田區岩本町一二、電話本局一八七六）

岩田孝慈

君は埼玉縣の人、鈴木信潔の二男、嘉永二年九月二十四日生る、後出でゝ岩田家を嗣ぐ明治五年新川縣の書記たり、十四年六月檢事補に任せられ廿年六月檢事に進む爾來横濱新發田上田の區裁所檢事、那覇地方裁判所檢事正富山和歌山の地方裁判所檢事に歷任し四十一年三月韓國公州地方裁判所檢事正に任ぜられ後統監府檢事となり、尋て總督府檢事となる先是三十八年十二月勳四等に叙せらる四十二年六月累進して正五位に至る（韓國公州地方裁判所）

岩坪伍兵衛

君は京都の金銀箔商なり、嘉永三年二月十五日生る、明治十一年一月家督を相續し家業を繼承す屋號を銀五と稱し業務頗る隆昌なり現に國稅七百五十餘圓を納む（京都市下京區松原通東洞院東入、電話六四〇）

公爵岩倉具張

公は舊公卿なり、正二位公爵岩倉具定の長男、明治十一年七月三日生る、其先は具平親王の第一子右大臣源師房に出づ師房二十世の孫具堯從五位木工頭たり姓を岩倉と改む、夫より十三代具視に至る具視は實に維新の元勳なり具視より具綱を經て父具定に至る具定は明治元年東山道鎭撫使となり、次で奥羽征討白川口總督たり十七年制度取調局御用掛となり主獵官を兼ぬ二十一年爵位局長に任じ學習院長を兼務し又貴族院議員に列す三十一年以降帝室禮式取調委員皇族取締委員樞密顧問官侍從職幹事議定官等に歷任し四十二年宮內大臣に親任せられ正二位勳一等に陞叙す先是十七年四月家督を相續し公爵を授けらる四十三年四月病を以て薨す公此年家督を相續し襲爵仰付けらる現に從四位にして陸軍歩兵少尉たり（東京市麹町霞ヶ關三〇）

岩月直彦

君は鹿兒島縣の大地主にして、多額納稅者なり、舊鹿兒島藩士慶應二年十月十日生る、明治二十四年出でゝ岩月家を嗣ぐ家世々農を業とし、縣下の大地主を以て知らる現に直接國稅一千五百三十圓を納む（鹿兒島縣薩摩郡隈之城村）

岩谷民藏

君は和歌山縣の實業家なり、植芝團藏の次男、明治元年八月一日生る、後出でゝ岩谷家に入り養嗣子となる、養家は綿ネル商を營み資產家を以て聞ゆ方今第一綿ネル株式會社專務取締役、韓國興農株式會社取締役たり（和歌山縣和歌山市中之店中之町）

岩崎又造

君は新潟縣の實家業なり、加藤津左圓の次男、天保十二年三月十日生る、後出でゝ岩崎家に入り養子となり家督を相續す現今株式會社三條信用銀行專務取締役、三條物產株式會社、株式會社三條貯金銀行監査役たり（新潟縣南蒲原郡三條町）

稲村源助

君は東京の呉服太物商なゝ、中村新太郎の㊀男、慶應元年二月三十日生る幼名喜太郎、明治二十九年出でゝ稲村家を嗣ぐ後今名に改む家世々呉服太物商を營み稲村商店と稱す（東京市日本橋區富澤町一〇）

岩崎己之亮

君は岩手縣の實業家なり、岩崎林の長男、明治七年九月十五日生る、同三十年七月家督を相續す現に三陸汽船株式會社、氣仙銀行等の取締役の職に在り（岩手縣氣仙郡竹駒村）

稲村貫一郎

君は埼玉縣の理財家なり、稲村彌五右衛門の長男、嘉永三年五月生る、明治五年家督を相續す現に株式會社熊谷銀行株式會社熊谷貯蓄銀行等の頭取たり（埼玉縣北埼玉郡成田村）

稲村辰次郎

君は前代議士なり千集縣の人稲村巳之助の長男、明治二年十二月二十日印幡郡木下町に生る、家世々鄕の素封家を以て知らる明治十三年四月祖父金七の後を承け家督を相續す夙に上京して東京法學院に學び卒業後歸鄕して郡會議員縣會議員等に擧げられ聲望あり四十一年同縣郡部より推されて衆議院議

員となる方今株式會社木下銀行頭取の職に在り（千葉縣印幡郡木下町東京市下谷區櫻木町二、電話下谷三六七八）

乾　龜松

君は前代議士なり、先代喜一の長男安政五年正月二十二日河内國中河内郡南高安村字恩智に生る、其先は楠公の忠臣恩智氏より出で足利執政の常時其邸辰巳に相對するを以て姓を乾氏に改む恩智村字乾小路は之れより起れりと云ふ代を累ぬる十九代とす此地始め垣藩の所領なりしが後ち淀藩に屬するに及で恩智村を南北の二部に分離したるに因り南恩智村に住す爾來南部庄屋の役を勤めり君十八歳の時父病歿し家督を相續す明治七年小學校建設に際し始めて敷地選定委員に推さる、十二年民事總代となる爾後村會議員郡會議員府會議員四回、郡部會副議長二回、同議長二回、府參事會員三回、府會議長四回、となる四十二年北中河内二郡より選出せられて衆議院議員たり、古來高安村は水利の便を缺き干害の爲めに村民の苦痛を受ぐる甚た多く君十歳の頃其慘狀を目擊し之れが救濟の志を起すや久し十三年に至り村民の溜池の必要を說き、賦役徵發規則を設け、十ヶ年の繼續事業にして四ヶ所を定め村民をして農事の餘暇を以て之れを鑿堀せしむるや年と共に進行して終に完成するに至れり其費僅かに五百圓内外にして以來高安村ノ干害の憂を除去し得たるのみならず一反に付五斗内外の增收を見るに至る是より漸次溜池の數增加し今や村内殆んど干害の患を絶てり、後又八尾停車場より恩智村に至る新道路を開鑿す當時村内に反對の聲多かりしも斷然其工を進め二十三年竟に竣功す爾來今日に至りて其道路は普に通行上の便利たるに止まらず前に土地不毛の地とし若くは耕耘に不便の場所として敢て顧みざりし土地も是れが爲めに大收穫を見るに至れり鄉黨深く之を德とし崇拜敬慕措かざるなり君明治十五年以來大和川水利組合會議員となり今猶ほ其職に在り方今前記公職の外八尾銀行取締役赤十字社終身社員たり（大阪府中河内郡高安村字恩智）

稻垣營造

君は横濱の染料品商なり、和歌山縣の人木本藤藏の長男、明治四年九月十七日生る、幼名光吉後出てゝ神奈川縣の稻垣家に入り養子となる家督相續して今名に改む現に株式會社横濱中央蓄貯銀行株式會社横濱中央銀行の監査役たり（神奈川縣横濱市野毛町一ノ六）

子爵　稻葉正繩

子は舊山城淀藩主なり、故伯爵松詮の次男、慶應三年七月二日生る、明治十二年出でて先代稻葉正邦の養子となり翌年從五位に叙せらる、二十年英國に留學し二十八年東宮侍從に任し從四位に累進す三十一年襲爵仰付られ方今式部官にして正四位勳四等たり（東京府豐多摩郡澁谷町大字青山北町七ノ一）

稻垣市兵衛

君は東京の酒類卸商（池田屋）なり稻垣美鄉の二男、明治七年四月二十八日生る、本名六郎明治二十九年出でゝ稻垣市兵衛の養子となり後家督を相續して襲名す方今東京府會議員にして日進銀行の取締役たり（東京市淺草區新福富町七）

泉田平右衛門

君は岩手縣の大地主にして多額納稅者なり先先平松の長男、文久三年九月生る家世々農を業とす明治二十八年三月家督を相續す縣下の大地主を以て知らる（岩手縣氣仙郡世田米村）

稻垣恒吉

君は京都の吳服商なり、福井縣の人稻垣藤助の三男、元治元年八月二十八日生る、後出て京都の稻垣藤作の養子となる明治二十九年分家して吳服商を業とし稻垣合名會社を組織して其代表社員となる方今京都瓦斯株式會社取締役にして京都商業會議所議員たり（京都市上京區室町通御池北入）

泉山吉兵衛

君は青森縣の吳服太物商なり先代吉平の長男、慶應元年十一月一日生る、家世々吳服太物商を業とす明治三十年一月家督を相續す方今合名會社泉山銀行頭取泉山合名會社代表社員株式會社階上銀行取締役、株式會社八戶貯蓄銀行監査役たり（青森縣三戶郡八戶町）

磯部醇

君は名古屋の辨護士なり岐阜縣の人磯部重兵衛の長男、安政六年二月二十五日生る、明治十六年法科大學を卒業して法學士となり十八年十月長崎中學校一等教諭に任せられ後長崎商業學校長に轉ず十九年十一月檢事に任じ從七位に叙せらる二十三年十月判事に轉じ爾來神戶地方裁判所名古屋大阪控訴院判事及同部長等に歷任し三十八年四月富山地方裁判所長に轉ず此間累進して從四位勳四等に叙せらる方今職を罷め辨護士となり名古屋市に開業し訴訟事務に從事す（愛知縣名古屋市東區本重町）

子爵　稻葉順通

子は舊豐後臼杵藩主なり子爵稻葉久通（舊高六萬石）の男、明治八年十月二十六日生る、同二十六年家督を相續し襲爵仰付られ正五位に叙せらる方今從四位たり（東京市麻布區飯倉町六ノ一三、電話麻三三七三）

泉孝三

君は函館の實業家なり泉嘉三郎の二男、明治八年七月二十三日生る、明治二十八年五月祖父藤兵衛の後を相續す夙に函館商業學校に學び卒業後清國に遊ぶ爾來函館區學務委員函館圖書館長函館教育主事等に推擧され專ら教育の普及發達を圖り又函館區會議員函館商

業會議所議員、函館商業同志會長等に擧げられ公共事業に盡瘁する所少からず方今前記の外株式會社百十三銀行、株式會社函館貯蓄銀行、函館馬車鐵道株式會社等の監査役にして聲望極めて高し（北海道函館區曙町六、電話四三三）

磯野直吉

君は京都の實業家なり宮本彌太郎の三男、明治元年一月三日生る、同二十年出でゝ磯野小右衛門の養子となり家督を相續す現に清瀧川水力電氣株式會社、海津製紙株式會社等の監査役たり（京都市下京區松原通室町東入）

泉仁三郎

君は大阪の海産物商なり先代兵衛の長男、明治九年十月二十九日生る、幼名卯三郎後家督を相續して今名に改む家海産物商を業とす方今內外水産株式會社取締役社長、帝國冷藏庫株式會社取締役たり（大阪市西區靱南通五ノ四、電話長四五三八）

子爵 板倉勝貞

子は備中舊高梁藩主なり其先は陸奥守足利義康の後胤板倉次郎義顯より出づ其十代の孫勝重德川家康に仕へ江戸町奉行たり其子重宗明暦二年下總國關宿五萬石の城主となる是より更に十一代を經て正四位子爵勝弼に至る勝弼備中國高梁に封せられ二萬石を領す之れ子の父なり子は其四男にして明治十八年一月二日生る、現今陸軍騎兵中尉にして從五位勳六等たり（東京市本郷區壱島天神町三ノ三）

男爵 到津公熙

男は大分縣の神道家なり其先高魂尊より出づ其三代の孫菟狹津彦命神武天皇東征の時宇佐國造を賜はる其四十六代公世の三男、公連元弘三年別に一家を成して到津と稱し夫より更に廿一代を經て先代公誼に至る家世々宇佐宮の神職たり明治五年華族に列し十七年男爵を授けらる男は其長男、明治二年八月十九日生る、男夙に小學課程を卒へ十三年豊後の儒米原石操に就て漢籍を修むる五年、十九年上京して學習院に學ぶ三十四年六月父公誼逝去し家督を相續し次て襲爵仰付けられ官幣大社宇佐神宮に補し從四位に叙せらる三十九年四月日露事件の功に依り勳六等に叙し瑞寶章を賜はり四十二年正四位に陞叙せらる（大分縣宇佐郡宇佐町）

石原平左衛門

君は愛知縣の銅鐵商なり先代平左衛門の長男、明治八年一月二十五日生る幼名悅太郎明治三十六年十月家督を相續して襲名す家世々銅鐵商を營みかじ平と稱し直接國税千四百圓を納む（愛知縣名古屋市西區東柳町八二、電話四六二）

石原彦太郎

君は甲府の質商なり先代彦太郎の長男、明治十年十二月五日生る、幼名彦造同三十一年八月家督を相續し先代を襲名す質商を業とす方今株式會社富士貯金銀行、株式會社甚崎銀行、山梨薪炭株式會社等の取締役たり（山梨縣甲府市柳町七六）

石川彌七

君は香川縣の實業家なり石川三平の二男、嘉永五年七月二十一日生る、明治二十九年四月分家して一家を構へ地方の資産家として知らる現に株式會社宇多津銀行、宇多津鹽田株式會社等の取締役たり（香川縣綾歌郡宇多津町）

池田文太郎

君は秋田縣の多額納税者なり池田甚之助の長男、明治元年四月二十八日生る、家世々農を業とし縣下の大地主を以て名あり明治三十四年十一月家督を相續す方今株式會社秋田銀行、株式會社大曲銀行等の取締役たり（秋田縣仙北郡高梨村）

子爵 池田政保

子は舊備中鴨方藩主なり其先源經基の後胤源太郎少將光政の二子政言に出つ代を經る子に至り八代章政の二男、元治元年十二月十日生る、明治元年二萬五千石を襲封し翌年六月從五位に叙せられ鴨方藩知事となる十七年子爵を授けらる三十二年十二月正四位に叙し次て從三位に進む（東京市麻布區東町四五）

子爵 池田清就

子は舊因州若櫻藩主（舊高二萬石）なり先代德定の三男、明治卅一年九月十六日生る、父德定は明治元年伏見鳥羽に連戰して功あり後鳥取藩參廳となり九年四月宮中勤番仰付けらる十七年七月華族に列し尋て子爵を授けらる四十三年父逝去し襲爵仰付けらる（東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町原宿二四九）

石井泰助

君は神奈川縣の材木商なり先代泰助の長男慶應元年五月十日生る、幼名泰次郎明治二十四年八月家督を相續し家業を繼き襲名す曾て郡會議員たり方今株式會社川崎銀行專務取締役石井合名會社代表社員たり（神奈川縣橘樹郡川崎村）

石井健吾

君は東京府の人桃井宣三の四男、明治七年六月十六日生る、後出てゝ石井はつの入夫となり家督を相續す明治二十八年東京高等商業學校を卒業して株式會社第一銀行に入り後横濱支店に勤務す次で銀行業視察の爲め歐米に派遣せられ歸朝後本庄營業部支配人となり後更に横濱支店の支配人となり現に其職に在り方今横濱商業會議所特別議員たり（神奈川縣横濱市宮崎町五六）

池田圓男

君は工學士なり池田栗の五男、明治四年八月十五日生る、同二十八年六月實兄政澄の後を嗣く三十年東京帝國大學工科大學を卒業して土木監督署技手となり三十一年一月志願兵となり三十二年土木監督署技師に任せらる三十三年歩兵少尉となり三十七年歩兵中尉に進み三十八年內務屬に出仕し四十年內務技師に任せられ現に從五位勳五等

にして其職に在り（東京市麻布區飯倉狸穴四八）

子爵 石井行昌

子は舊公卿なり先代行知の長男、明治元年六月生る、同十一年十一月父逝去後家督を繼き十七年七月子爵を授けらる方今主殿寮京都出張所殿掌にして從四位たり（京都市上京區武者小路通室町東入梅屋町四）

入江孝次郎

君は兵庫縣の材木商なり入江勇藏の長男、播州明石郡茶園場ニ生る、二十五歳ニして神戸に出て材木商神田直次郎方に奉公すること約二ヶ年後ち主人直次郎病氣の爲め其親戚神田甚兵衛氏と共ニ營業を合同經營するに及び猶ほ勤續すること十有五年辭して兵庫切戸町に斯業を獨立經營す爾來粉骨碎身數年ならずして營業頗る隆盛也是に於て店舗を現住所に移し益々奮鬪す明治三十七年市會議員に選擧せらる三十九ひ始めて市會議員補次選擧に際し衆望を荷年九年改選の際再選せられ爾來累選現に其任に在り嘗て神戸材木商同業組合評議員たり方今同組合組長の職に在りて斯業の爲めに盡瘁しつゝあり（兵庫縣兵庫磯之町、電話一五七五）

池上輝速

君は岡山縣の多額納稅者なり池上文左衛門の長男、嘉永元年六月十七日生る、家世々農を業とし直接國稅三千八百五十圓を納め縣下の多額納稅者として知らる（岡山縣勝田郡北和氣村）

男爵 池田博愛

君は岡山縣の神道家なり舊岡山藩の池田輪負の長男。嘉永五年十一月四日生る、後出て、池田廳壽齊の養子となり家督を相續す明治三十九年九月特旨を以て華族に列し男爵を授けらる現に縣社岡谷神社の神職にして從五位たり（岡山縣岡山市內山下町三二）

池田萬藏

君は東京の茶商（萬屋）なり埼玉縣の人泰麿松五郎の弟、嘉永五年八月十二日生る、幼名庄次郎明治二十年六月出でゝ池田家に入り家督を相續して今名に改む養家累代茶商を業とし區內確質なる老舗を以て稱せらる君家業繼承以來益々業務を擴張し信用日に加はり營業大に殷盛なり（東京市淺草區高原町二、電話下谷二九八五）

子爵 池田仲誠

子は舊因州鹿奴藩主なり池田源の男明治十五年十月廿七日生る其先源經基の裔孫池田忠澄に出づ忠澄別家し一家を爲す是より七代を經て源に至る世々鹿奴三萬石を領す子幼名梅彦、明治卅五年十月今名に改め翌年二月家督を相續し襲爵仰付られ正四位に叙せらるる

（東京市麻布區永坂町六一）

今村繁三

君は東京の實業家なり今村清之助の次男、明治十年一月二十三日生る、父清之助氏は夙に横濱に出て弗商小野屋の店員となり主家沒落後煙草屋となり或は洋酒の買賣又は蠶卵の賣買をなして逆境に奮鬪し日々一朱金を貯蓄し後に之を資本にして弗商を營み莫大ノ利益を獲得せりと云ふ君は明治二十四年東京英語學校に學ひ後高等師範學校附屬中學校に入り十九年卒業して英國に留學し始めケンブリッヂ、リース、スクールに入り三十二年ケンブリーヂ大學に轉學し三十五年バチラル、オブ、アーツの學位を受け歸朝後實業界に入り現に合資會社今村銀行頭取、麒麟麥酒株式會社仁壽生命合資會社等の監査等の職に在り（東京市芝區田町七ノ六、電話芝一二〇八）

男爵 今枝直規

男は舊加州の國老（舊高一萬二千石）なり先代直邦の長男、明治三年七月二十一日生る、同七年家督を相續す後特旨を以て華族に列し男爵を授けらる男は明治二十六年農科大學乙科を卒業し營林主となり盛岡小林區署長に任し後宮城栗駒小林區署長に轉し三十一年石川縣勸業事務を囑托せらる方今正五位たり（東京府荏原郡目黑村下目黑七七〇）

今泉嘉一郎

君は群馬縣の人今泉常子の長男、慶應三年六月二十七日上野國勢多郡花輪村に生る、明治廿五年七月帝國大學工科大學卒業の工學士なり卒業後直に農商務省技師試補となり鑛山局に勤務す尋で臨時製鐵事業調査の爲め練鐵の試驗を囑托せらる二十七年四月獨、墺瑞、英白、北米の六ヶ國製鐵術視察として差遣せられ在留二年餘にして歸朝し製鐵所の創設と共に同所技師に任せらる、後東京帝國大學工科大學講師を囑托せらる爾來製鐵所經理課長、築爐課長製鋼部長、鋼材部長等に歷補し從六位に叙せらる三十九年四月日露事件の功に依り勳三等に叙し旭日中綬章を賜はる四十三年二月製鐵事業視察の爲め再び歐米に派遣せらる四十三年四月官職を辭す此間累進して正五位に至る方今製鐵民業の計劃に盡力しつゝあり。（大阪府西成郡豐崎村）

今泉卯吉

君は横濱の蠶糸仲買業者なり、福島縣の人今泉喜兵衛の長男、慶應三年三月二十日生る、明治十七年出でゝ同姓庄次郎の養子となり家督を相續す爾來蠶糸仲買業を營み業務大に繁盛す現に合名會社安西商店の代表社員たり（神奈川縣横濱市西戸部町七二三）

生島嘉藏

君は大阪の資產家なり、和田半兵衛の三男安政三年一月二十五日生る、明治五年出でゝ生島嘉平次の養子となり家督を相續し市內の資產家として知らる家號を阿波屋と稱し曾て株式會社卅四銀行監査役の職にありき（大阪東區南久太郎町二ノ六二、電話東一八〇二）

一宮喜十郎

君は京都の米穀仲買業家なり、一宮喜八の長男安政元年五月十五日生る、明治五年家督を相續し、米穀仲買業を營み直接國稅一千三百圓を納む現に株式會社京都取引所監査役たり（京都市下京區高倉通錦小路北入一八、電話九〇二）

池田輝方

君は東京ノ畫家なり、池田吉五郎ノ次男、明治十六年三月東京に生る、通稱正四郎、輝方は其號、年、十三、水野年方の門に浮世畫を學ふ年あり、後師の紹介を得て川合玉堂に師事す夙に秀才を以て聞ゆ遂に塾長に推さる最も玉堂を師とし出藍の譽あり其筆最も人物を畫くに妙あり明治四十年内國勸業博覽會に其作品花鳥の圖を出陳して二等賞銀牌を受領す爾來文部省公設展覽會、美術展覽會等に於て優等賞を受領する十數回、嗜好、點茶、挿花（東京市下谷上野櫻木町三六）

生駒權七

君は東京の人高倉庄五郎の次男、天保十三年七月八日生る、後生島家に入り養嗣子となる、現に明治生命保險株式會社、明治火災保險株式會社、火災海上保險株式會社等の監査役たり（東京市本郷區東片町一三五）

池田蕉園

女史は東京の畫家なり、榊原浩逸の一女明治二十一年五月東京神田錦町に生る、父浩逸は大阪堺の人舊岡部藩士にして方今岩倉鐵道學校管理長たり女史は明治四十三年出て、畫家池田輝方氏に嫁す通稱百合、蕉園は其號、年十五始めて水野年方に就き、浮世畫を學び傍ら女子學院に修學す、師歿後川合玉堂を師とし出藍の譽あり其筆最も人物を畫くに妙あり明治四十年内國勸業博覽會に其作品花鳥の圖を出陳して二等賞銀牌を受領す爾來文部省公設展覽會、美術展覽會等に於て優等賞を受領する十數回、嗜好、點茶、挿花（東京市下谷上野櫻木町三六）

生田定之

君は舊高知藩士生田保之の長男、明治三年六月二十一日生る、後出で、生田家を嗣ぐ夙に日本銀行に入り爾來累進して國庫局長の要職に在り（東京市牛込區市ヶ谷應匠町三、電話番町一六八九）

生田新右衛門

君は兵庫縣の銀行家なり、先代新右衛門の長男、慶應三年六月廿一日生る、幼名國太郎後家督を相續し先代の名を襲ふ現に株式會社氷上銀行取締役頭取株式會社佐治銀行取締役たり（兵庫縣氷上郡遠阪村）

生島五三郎

君は神戸の資産家なり、大阪府の人明治元年二月六日生る、本姓辻元氏後出で、生島家を嗣ぐ、幼名竹五郎家督相續後今名に改む市内資産家として知らる現に所得稅一千五百圓を納む（兵庫縣神戸市榮町通二ノ一一〇）

生島四郎左衛門

君は神戸の毛織物商なり、高濱太右衛門の二男、慶應三年一月十二日生る幼名常次郎出で、生島家に入り養子となる、家督を相續して襲名す養家は一鄕の名門にして祖先は生島四郎太夫と稱す先代より四郎左衛門と稱するに至れりと云ふ、神戸開港以前は土地の庄屋を勤め先代四郎左衛門氏極めて奉公の念篤く屢々公事に奔走努力し居留地の設備稅關諸設ノ準備等神戸の貿易港として今日の隆況に達するもの氏の力與りて多きに在り、君夙に神戸商業講習所に入り實業教育を受け明治二十年卒業し爾來毛織物の營業を開始し着々家道を盛んならしめ三十二年九月縣會議員に選擧せられ次で神戸商業會議所議員に當選し方今區會議員、市會議員等の職にありて公共の爲め盡す所また少からず（兵庫縣神戸市元町三ノ五八）

生島一德

君は東京の人高倉庄五郎の次男、天保十三年七月八日生る、後生島家に入り養嗣子となる、現に明治生命保險株式會社、明治火災保險株式會社、火災海上保險株式會社等の監査役たり（東京市本郷區東片町一三五）

一色範叙

君は茨城縣の人一色範疇の長男、安政二年十一月三日生る、現に株式會社土浦五十銀行頭取たり（茨城縣新治郡鍋町）

生島五兵衛

君は神戸の質商なり、柏元林太郎の次男、安政元年九月十四日河内國南河内柏原に生る、幼名市太郎明治九年出で、生島家に入り養子となり、後襲名して五兵衛と改む養家は神戸の素封家生島五郎兵衛の分家にして君を以て三代目とす世々酒造を業とせしも後之を廢し質商を營み松屋と稱す曾て縣參事會員市會議員所得稅調査委員、營業稅審査委員等に推擧せらる方今區會議員神戸赤十字社商議員たり、嗜好、書畫骨董を愛し又謠曲を好む（兵庫縣神戸市元町二ノ一九〇、電話一一二二）

子爵五辻治仲

子は舊公卿なり五辻安仲の五男、慶應三年十一月十三日生る、明治三十九年家督を相續し襲爵仰付けらる夙に身を軍籍に列し陸軍歩兵少尉に任じ從四位勳六等に叙せられ現に其の職に在り（東京府荏原郡入新井村大字不入斗四〇三）

居藤高次郎

君は豫備陸軍武官なり、滋賀縣の人居藤豊次郎の長男、安政元年十一月二十三日生る、明治七年十月陸軍兵學寮に入り十年四月陸軍砲兵少尉に任し爾來累進して少將に至る、日清戰ノの際

大阪砲兵工廠檢査官對馬警備隊ノ野戰砲兵第十三聯隊に歴補し、功に依り勳五等に叙せらる日露戰長に際し留守野戰砲兵第二旅團長として功あり勳三等に陞叙せられ三十九年七月豫備役仰付けられ正五位に進む方今故山に歸臥す（近江國犬上郡彦根町大字東葵二九）

子爵 石川重之

子は舊常州下館藩主なり、先代總管の長男、慶應三年十二月二十五日生る、世々常州下館二萬石の城主たり、子幼名重之助明治二年八月今名に改む十年九月家督を相續し十七年七月子爵を授けられ三十二年三月郡合に依り爵位を返上す三十二年十月更に華族に列し子爵を授けられ從五位に叙せらる（茨城縣眞壁郡下館町六）

石川信

君は東京の實業家なり、埼玉郡の人元治元年三月二十四日生る、本姓原口氏明治二十三年石川家に入り、養子となり家督を相續す方今北海道炭礦汽船株式會社東京支店幹事札幌工業株式會社取締役たり（東京市小石川區白山御殿町一二三）

石田熊三郎

君は千葉縣の銀行家なり、川島庄兵衛の三男、安政三年十月十二日生る、明治七年出でゝ石田倉之助の養子となり十五年養祖母いくの後を繼承す方今株式會社成東銀行、株式會社瀧澤銀行等の頭取たり（千葉縣山武郡源村瀧澤）

石谷傳四郎

君は鳥取縣の人、石谷傳九郎の長男、慶應二年四月二十九日生る、明治二年家督を相續す方今合資會社鳥取銀行頭取、株式會社鳥取縣農工銀行監査役たり（鳥取縣八頭郡智頭村）

子爵 石野基道

子は舊公卿なり、先代基佑の三男、明治四年四月十一日生る、幼名千代丸明治二十七年五月家督を相續し襲爵仰付けらる三十四年六月殿掌となる方今正四位たり（京都府愛宕郡大宮村）

石山儀市

君は廣島縣の實業家なり、石山萬助の長男、明治十一年二月二十日生る、明治二十五年五月家督を相續す現に株式會社吳商工銀行頭取吳陽倉庫株式會社監査役たり（廣嶋縣吳市二川町一〇三四）

石間英太郎

君は銀行の支配人なり、靜岡縣の人石間恒平の長男、明治八年三月七日生る現に株式會社西駿銀行取締役兼支配人島田軌道株式會社取締役たり（靜岡縣志太郡島田町）

伊東雅次郎

君は愛知縣の實業家なり、慶應三年七月十八日生る、本姓加藤氏出でゝ伊東信藏の養嗣子となる現に龜崎水産株式會社長伊東合資會社龜崎釀酒合資會社等の代表社員株式會社衣浦貯金銀行專務取締役、知多商業會議所常議員たり（愛知縣知多郡龜崎町）

伊東卓夫

君は東京の實業家なり、伊東修次郎の長男、萬延元年六月十九日生る、家業は體操用具及博物標本樂器類の製造販賣を營み美滿津商店の名全國に普し、家業頗る繁榮す（東京市本郷區本郷五ノ一〇、電話長下谷八四五）

伊東榮

君は東京の化粧品製造家（胡蝶園）なり、伊東榮の長男明治六年八月一日生る、父榮氏は化粧品の改良に心を潜め明治三十七年始て御園白粉の製造販賣に從事し遂に本邦唯一の聲價を博せり君幼名謙吉夙に慶應義塾東京高等商業學校に學ぶ胡蝶園創設以來實弟貞次郎氏と共に專ら家業に從事す、四十三年五月化粧品視察の爲め歐米各國を歴遊し翌年五月家業を繼承し襲名す爾來益々業務を擴張し家勢頗る旺盛なり（東京市芝區公園地九ノ六號、電話長芝七四七）

伊地知季珍

君は海軍武官なり舊鹿兒島藩士伊地知德四郎の長男、安政四年三月二十六日生る明治十六年海軍少尉に任じ三十四年累進して大佐に任ず此間常備艦隊參謀佐世保鎮守府參謀扶桑艦副長武藏艦長等に歴補せらる日清の役功を以て功五級金鵄勳章を賜はる後金剛艦に長轉し日露戰役中少將に進み舞鶴鎮守府參謀長に任ず後功に依り功三級金鵄勳章を賜ふ四十一年吳海軍工廠長に補せらる現に正五位勳三等にして其職に在り（廣嶋縣吳市三ッ田町）

伊地知彦次郎

君は海軍武官なり舊鹿兒島藩士伊地知季達の長男、安政六年十二月十三日生る、明治十六年海軍少尉に任せられ爾來累進して海軍少將に至る其間海軍大學校教官武藏艦副長海軍々令部第一局員龍田艦長常備艦隊參謀長松島艦長東京灣要塞司令官等に歴補し日清役橋立分隊長たり日露の役三笠艦長として功あり後功三級金鵄勳章を賜はる現に正五位勳三等海軍少將にして軍海將官會議々員を兼ぬ（東京市芝區三田綱町一、電話芝一六二七）

男爵 伊丹春雄

男は貴族院議員なり先代重實の長男安政五年十二月生る、家世々粟田青蓮宮に仕へ父重賢氏は後ち賀陽宮に召され次で青蓮宮に復歸す維新後大阪府判事大審院判事元老院議官等に歴任し晩年金鷄間祗候に命せられ貴族院議員となる明治二十九年男爵を授けらる男明治三十三年家督を相續し襲爵仰付られ現に正五位貴族院議員たり（東京府豐多摩郡澁谷町青山北町七ノ一）

伊丹榮助

君は大阪の清酒味淋釀造家なり先代榮助の長男、明治十三年世々清酒味淋釀造及燒酎白酒干鰯商を營み家號を伊丹屋と稱す有名なる清酒鯛正宗の釀造元なり（大阪市北區木幡町六八、電話東一三一五）

伊藤耕寅

女史は大阪の人伊藤龜太郎の二女、明治十九年七月大阪に生る、父龜太郎氏は鑛業家にして兵庫縣多可郡松井在の宮前鑛山は即ち氏の經營女たり史名は寅子、耕寅は其號又別に白蓮庵の號あり夙に江戸堀女學校、清水谷女學校等を卒業す性頗る風流韻事を嗜み繪畫を庭山耕園氏に就き修め山水花卉を能くす其作品各種の諸會に於て受賞すること數次、又和歌を僧の藤村叡運師に學び、茶道は千家裏流義を汲み、生花は未生流に通す其他等ヴワイオリン等の樂曲を奏し殊に松川松月庵に就き舞曲を修めて堪能なりといふ（大阪市南區安堂寺橋通三ノ九九）

伊丹誠一

君は佐賀縣の實業家なり新ヶ江伊七の二男、安政四年十月生る、後出でゝ伊丹りきの入夫となり家督を相續す現に大地主伊丹彌太郎氏の一族なり方今株式會社桑銀行、佐賀セメント株式會社取締役たり（東京市日本橋區本町三ノ五、電話本局二九九二）

市川繁治郎

君は神奈川縣の銀行家なり市川孫右衛門の二男、明治二年五月十六日生る社等の取締役の職に在り（佐賀縣佐賀市道祖元町五三）

市川喜七

君は東京の雜貨商なり市川喜鹿の長男慶應元年十月十九日生る、幼名忠太郎明治二十八年家督を相續し今名に改む家雜貨商を業とす方今南鳥嶋鳥糞燐鑛會社代表社員、眞崎市川鉛筆株式會

明治十六年十一月家督を相續す現今株式會社足柄農商銀行常務取締役たり（神奈川縣足柄郡福澤村）

市橋保治郎

君は福井縣の人市橋奎兵衛の二男、元治元年一月一日生る、曾て縣會議員縣參事會員縣會議長等に擧げられ又同縣農工銀行の創立委員に擧げられ後其取締役に推さる明治三十二年株式會社福井銀行專務取締役となり爾來勤續し猶其職に在り（福井縣今立郡南中山村）

市橋龜藏

君は鳥取縣の多額納稅者なり市橋善藏の長男、安政五年三月十九日生る、家世々農を業とし兼て金錢貸付業を營み直接國稅三千三百六十餘圓を納め縣下の多額納稅者として知らる（鳥取縣東伯郡東郷村）

一ノ瀨與左衛門

君は横濱の經節商なり山梨縣の人一ノ瀨好太郎の五男、明治十六年六月十八日生る、十七日出でゝ先代與左衛門の養子となり家督を相續す家經節商を業とし松屋と稱す方今株式會社横濱貿易銀行監査役たり（神奈川縣横濱市相生町四ノ七二）

市川謙一郎

君は秋田縣の人市川良藏の長男、嘉永四年十月二日生る、縣下有數の資產家にして聲望あり現に株式會社秋田農工銀行の頭取たり（秋田縣山本郡藤琴村）

市原盛宏

君は熊本縣の人村上直七の長男、安政五年四月五日生る、後出でゝ市原家を冒す夙に京都同志社に學び卒業後仙臺の東華學校長となる後米國に留學し同國エール大學に學ぶ歸朝して同志社に入り法政學校教頭となる後辭して日本銀行金庫局長心得名古屋支店長たり三十五年澁澤男爵に從ひ海外を視察し歸朝後第一銀行横濱支店長となり幾もなく又辭して横濱市長に推さる三十九年辭して第一銀行取締役兼韓國支配人となる後韓國銀行の創立と共に擧げられて其總裁に任じ現に其職に在り（東京市四谷區大番町四三、電話番町二五〇七）

伊藤祐保

君は山梨縣の實業家なり先代友右衛門の長男、慶應元年七月二十五日生る現に甲斐株式成業會社藤井製糸株式會社等の取締役韮崎委託株式會社監査役たり（山梨縣北巨摩郡穴山村）

伊藤清右衛門

君は大阪の賣藥化粧品商なり安政三年正月二十七日生る、家世々薫物線香商を業とし後賣藥化粧品を販賣す又別に合資會社仁壽堂石鹼製造所を起し盛に石鹼製造に從事し同業者中屈指の位置にあり（大阪市南區心齊橋筋二ノ六八、電話南三七一）

伊藤守松

君は名古屋の豪商伊藤次郎左衛門の四

男にして其嗣子なり明治十一年五月二十六日生る、現に伊藤銀行、伊藤貯蓄銀行の取締役たり（名古屋市西區茶屋町三八、電話三三六）

井上善吉

君は神戸の實業家なり井上善次郎の長男、明治六年九月七日神戸に生る、家世々染物業を營み家號を井筒屋と稱し君に至りて家系七代目とす父善次郎氏は茸合村副戸長たり君普通學を神戸に修む後ち京都市立染織學校に入り染物科を專攻し明治二十七年卒業して歸郷し專ら家業に從事す以來熱心染物の改善發達を計り家聲大に發揚す性敏活にして頗る覇氣あり三十二年初めて區會議員の公職に就く三十四年選ばれて市會議員となる三十八年神戸商業會議所會頭に選擧せられ次で所得稅調査委員となる四十年縣會議員に當選す此年市會議員半數改選に當り再選せられて現に其任に在り又同年神戸茸合港灣株式會社取締役に推擧せられ翌年株式會社兵庫館監査役となる四十二年神戸海陸運輸株式會社監査役に進る四十二年株式會社魚鳥青物市場常務取締役に擧げられ現に其職に在り方今前記の外神戸商品陳列館相談役、尚武會幹事、日本赤十字社員にして籍を政友會に列し一方の旗頭として重せらる、嗜好、文學的讀物（兵庫縣神戸市茸合磯之上通り五ノ八、電話一六八一）

伊藤　潔

君は東京の實業家なり靜岡縣の人伊藤市三郎の次男、文久三年十一月十五日生る、明治十三年上京して二松學舍に漢學を修め十九年電信學校に入り二十一年卒業して遞信省電氣試驗所技手となる二十二年日本電燈會社の設立と共に入りて同社の技師となり後ち辭して芝浦田中製作所に轉じ二十六年倉賃會社冲商會業務執行社員となり現に營業部長たり（東京府荏原郡大井町一七一五）

伊藤喜七

君は名古屋の呉服太物商なり先代紋平の次男、安政五年二月十日生る、明治十九年五月分家して呉服太物商を營み糸喜と稱す爾來拮抗奮勵家聲大に揚り直接國稅一千四百圓を納め中京屈指の巨商を以て稱せらる（愛知縣名古屋市中區鐵砲町二ノ二九、電話二〇〇一）

伊藤喜十郎

君は大阪の雜貨商なり小野十右衛門の六男、安政二年三月十六日生る、明治十三年四月出でゝ伊藤善兵衛の養子となり家督を相續す君幼時三井銀行及三十四銀行に雇はれ給使たり明治十四年の頃株式仲買人となり大に株式市場に驅逐せしが一朝蹉跌して悲境に陷り頗る艱難を極め是より斷然投機事業に指を染めず後ち高田久右衛門、平野平兵衛、伊藤九兵衛等の諸氏と攝津紡績株式會社を創設す、明治二十三年第三回內國勸業博覽會の開設に際し上京して仔細に陳列品を視察し大に悟る處あり爾來新規發明品の販路擴張に志し時の特許局長奥田義人及澁澤榮一氏等に謀りて同意を得此年直に大阪市東區高麗橋通二丁目に一商舗を開き發明品を蒐集して之を販賣するに至る爾來拮据黽勉經營亦其宜しきを得て營業日を逐ふて繁盛し家屋の狹隘を告ぐ二十一年遂に現今の場所に壯嚴なる家屋を建築移轉す今や本邦發明品販賣店の巨擘と稱せらるゝに至れり君又明治三十四年以來市會議員、商業會議所會員として公共の事に盡力する所少からず今尚其職に在り方今前記の外日本債券株式會社長、大阪巡航株式會社取締役浪花電車軌道株式會社監査役たり、嗜好、俳句を能くし樵溪と號す（大阪市東區平野町二ノ五三、電話東三二四）

男爵　伊藤文吉

男は山口縣の人木田幾三郎の長男、明治十八年十二月十五日生る、後故公爵伊藤博文の養子となり四十二年十一月養兄博邦方より分家す後特旨を以て華族に列し男爵を授けらる明治三十八年山口高等學校を經て東京帝國大學法科大學に入り四十一年七月卒業して法學士となり直に農商務屬に任じ商工局に勤務す此年十一月文官高等試驗に合格し四十二年九月山林事務官兼農商務書記官に任せらる四十三年三月休職を命ぜられ英國に渡航し現下滯留中に在り（神奈川縣中郡大磯町西小磯八五）

公爵　伊藤博邦

公は侯爵井上馨の甥なり明治三年二月二日生る、後出でゝ公爵伊藤博文の養嗣子となる幼名勇吉後ち今名に改む夙に職を宮內省に奉じ現に從三位勳三等にして式部次官の職に在り（東京府荏原郡大井町、電話芝六〇五）

伊藤嘉七

君は愛知縣の實業家なり、明治三年六月一日生る、本姓林氏後出でゝ伊藤家を嗣ぐ、幼名和三郎家督相續後襲名して嘉七と改む、現に株式會社知多銀行株式會社知多貯蓄銀行各頭取、夏目製造株式會社監査役、知多商業會議所議員たり（愛知縣知多郡野間村）

伊藤悌藏

君は舊山口藩士伊藤兵太の二男なり明治五年八月十三日生る、明治廿九年農科大學を卒業し農學士となり直に農商務試補に任せられ卅一年靜岡縣技師に任じ正八位ニ叙せらる、後鹿兒島縣技師鹿兒島農事試驗所技師を經て卅九年農商務技師に轉任し現ニ同省農產課長たり日露事件の功に依り勳五等に叙せられ四十年從五位に累進す（東京府荏原郡入新井村入新井宿二六二五）

伊藤隼三

君は醫學博士なり、舊因州藩士小林辰造の三男、元治元年五月九日生る、後出でゝ伊藤健藏の養嗣子となる明治二十三年帝國大學醫科大學を卒業し醫學士と爲り鳥取市伊藤病院長となる後札

幌病院長に轉し二十九年醫學研究の爲め歐州に留學し三十二年一月歸朝して再び札幌病院長となり翌年三月醫學博士の學位を授けられ此年七月京都帝國大學醫科大學教授に任し現に正五位勳六等にして其職に在り（京都市上京區寺町通今出川北入五丁目西入櫻木町）

伊藤萬助

君は大阪の洋反物卸商なり、伊藤忠右衛門の三男、嘉永五年三月二十一日生る、明治七年六月分家して、洋反物卸商を營み家號を羽洲屋と稱し市内有數の商店たり曾て大阪毛布製造株式會社長大阪曳船株式會社取締役たりき方今攝津紡績株式會社取締役、三十四銀行に取締役の職に在り（大阪市東區本町四ノ一八、電話東七八）

伊藤彌

君は福島縣の多額納税者なり、伊藤熊吉の長男慶應三年四月二十日生る、家世々清酒醸造を業とし屋號を鹽屋と稱し、縣下多額納税者として知らる祖先は畠山高國に出づ高國ニを去る五百年前上州田子より二本松の探臺たり子孫故ありて分家し伊藤氏を冒す君明治三十二年九月縣會議員に選擧せらる、又株式會社本宮銀行取締役に擧げられ在職多年今尚其職に在り方今前記の外福島殖林株式會社の取締役を兼ぬ（岩代國安達郡本宮町字北町中條）

伊藤長兵衛

君は京都の西陣織物帶地商なり、滋賀縣の人明治元年十一月二十八日生る舊名長次郎後先代伊藤長兵衛の養子となり家督を相續して長兵衛を襲名す爾來家業を繼ぎ西陣織物帶地卸商兼染絹織物販賣を業とし支店を福岡縣博多町に設け、呉服太物を商ふ（京都市下京區室町通佛光寺北入、電話ノ五四八）

伊藤次郎助

君は岩手縣の大地主（多額納税者）なり弘化四年六月八日生る、家米穀商を業とし兼て金錢貸付業を營み、縣下の多額納税者にして税額三千五百四十八圓を納む（陸中國和賀郡黒澤尻町分）

伊藤忠兵衛

君は大阪の呉物太物商なり、滋賀縣の人先代忠兵衛の長男、明治十九年六月十二日生る、幼名精一明治三十六年七月家督を相續して襲名す家業は呉服羅紗綿糸商にして絹布太物販賣を兼ね卸賣を專らとして其取引頗る大なり市内有數の商店を以て知らる、現に直接國税七千四百餘圓を納むと云ふ（大阪市東區本町三ノ八四、電話長一九三六）

井澤吉五郎

君は横濱の廣島屋旅館主人なり、井澤吉五郎の長男、嘉永二年十二月十二日生る、幼名佐一郎後家督を相續し旅館及回漕業を兼業す明治二十五年東京製氷會社の監査役たり尋で其取締役に推さる後ち深川東元町に製氷所を增設するに當り其專務取締役となる二十九年機械製氷株式會社と合併して日本製氷株式會社と成るや君又其取締役たり三十一年株式會社東京信用銀行取締役兼支配人となり後其頭取に擧げられ現に其職に在り方今前記家業に從事し支店を東京神田小柳町に設け營業す（神奈川縣横濱市本町五ノ七〇、電話長四九四）

伊藤平三

君は京都の西陣織物帶地商なり、慶應二年二月二十二日生る、本姓新宮後出でゝ伊藤芳枝の入夫となり家督を相續す家西陣織物帶地卸商を業とし桝屋又桝平と稱す、現に京都織物株式會社監査役にして京都商業會議所議員たり。（京都市上京區室町通御池北入二、電話長二一八）

伊原木藻平

君は岡山縣の多額納税者なり、先代藻平の長男、慶應二年二月七日生る、幼名久三郎後家督を相續し襲名す家業は倉庫業を營み縣下多額納税者として知らる税額七千七百二十餘圓を納む方今天滿屋合名會社代表社員にして株式會社牛窓銀行の監査役たり（備前國上道郡西大寺町）

伊坂市右衛門

君は東京の清酒仲買業家なり、三重縣の人伊阪元景の長男、明治十五年十一月二十日生る、後出でゝ伊阪市右衛門ノ養嗣子となる三十八年五月家督を相續し家業を繼ぎ酒仲買業を營む（東京市京橋區南新堀町二ノ二、電話浪花三三八〇）

伊木常誠

君は鹿兒島藩士押川乙五郎の長男、明治五年九月八日生る、出でゝ伊木七郎の養子となり家督を相續し明治三十年七月理科大學出の理學士なり翌年十二月第二高等學校教諭に任じ、從七位に叙せらる十四年六月農商務省技師に任じ爾來累進して從五位に叙せられ現に同省鑛山局技師の職に在り。（東京府豐多摩郡澁谷町下澁谷一八五九）

飯島純介

君は山口縣の人文久三年六月厚狹郡吉田村に生る、夙に漢學を修め、明治十三年大阪造幣局に入り技師英人ガウラント氏に就て分析術を學ぶ、翌年大阪協同會社に入り朝鮮元山津に渡り砂金金塊等ノ買入に從事す十六年同會社元山支店長となり元山港商業會議所副會頭に擧げらる、十八年歸朝して第一高等中學校に入り次で帝國大學工科大學に入學し採鑛冶金學を專修し二十七年卒業して工學士となり直に藤田組に入り大森鑛山に在勤すること三年にして辭し三十年古河鑛業會社に轉し技師となり足尾銅山鑛毒豫防工事に盡力し次で製煉所長となる三十九年本店詰となり現に技師の職に在り（東京市芝區高輪南町五三、電話芝三〇五〇）

飯島次郎

君は東京の土木建築請負業者なり、茨城縣の人飯島齊平の長男、文久元年二月十日常陸國新治郡小櫻村に生る、歳二十一始て土木工業を請負ひ明治十九年日本鐵道水戸線笠間宍戸間ノ軌道築殺工事に從事し二十二年以降日本鐵

道青森線岩手縣板橋村地先築堤一万二千坪の工事を竣工し戸利を博す爾來東京近縣東北地方を始めとし静岡縣富士郡疏水工事岩越鐵道工事、日本鐵道山手線、東武鐵道利根川鐵橋架設工事、横濱海面埋立工事等を請負ひ其竣功せる工事數三十四ヶ所請負金高二百六十五萬圓内外に及ぶ現に飯島組を組職し盛に工事請負業に從事す方今勿來軌道株式會社監査役たり（東京市本郷區湯島三組町八四、電話下谷一六〇四）

子爵 井上正言

子は舊下總高岡藩主なり、其先は鎮守府將軍源經基に出づ其四代目從四位下頼季の後孫筑後守正重德川氏に仕へ總目附たり寛永十七年上總一萬石を領す數代を經て下總高岡藩主となる父を正順と云ふ、明治元年宮内少輔に任じ二年高岡藩知事となり九年警視廳十五等出仕に任ず、十年警部補に任せられ十七年七月子爵を授けらる子は其長男なり明治九年五月三十日生る、三十七年一月父歿後襲爵仰付けられ正五位に叙せらる（東京市本所區新小梅町一）

井上孝哉

君は岐阜縣の人、井上昌治の長男、明治三年十月十四日生る、明治三十年七月帝國大學を卒業し法學士となり内務省に出仕す三十一年土木監督署事務官に任じ爾來熊本縣參事官滋賀縣警部長、警視内務書記官等に歴任し四十一年十二月東洋拓殖株式會社の創設に際し其理事に擧げられ現に其職に在り。方今從五位たり（韓國京城旭町）

井上虎治

君は兵庫縣の人、川上吉左衛門の三男明治九年六月二十九日生る、後出で丶井上家を嗣ぐ明治二十八年遞信省通信書記となり三十年姫路郵便局電信課長に任じ三十二年大阪商船株式會社に轉じ三十六年合資會社商船臺灣組支配人となる三十九年大阪商船株式會社助役となり以て合資會社富島組に入り現に理事の職に在り（大阪市西區江戸堀北通五）

井上利助

君は京都の木綿商なり、大阪府の人鳥羽重義の五男、明治三年十月二十一日生る、後出で丶井上家に入り養子となる養家は世々木綿商にして家號を美濃屋と稱す現に京都取引所理事商工貯金銀行取締役、株式會社京都商工銀行監査役にして京都商業會議所議員たり（京都市下京區六角通室町西入二一、電話長三二一）

井原文吉

君は長野縣の理財家なり、井原重左衛門の二男、慶應元年八月二十四日生る、後出で丶同姓井原與吉の養子となる現に株式會社信陽銀行常務取締役にして株式會社長野實業銀行の監査役たり（信濃國上水内郡古牧村）

井原喜代太郎

君は佐賀縣の實業家なり、井原陶一の長男文久三年六月二十一日生る、現に株式會社鹿島銀行頭取、祐德軌道株式會社取締役、佐賀米穀取引所の監査役の職に在り（佐賀縣藤津郡本鹿島村）

伊藤快彦

君は京都の洋畫家なり、慶應三年七月八日生る、夙に洋畫に志し明治十七年八月京都府立畫學校教授田村宗立に就き始めて洋畫を學ぶ一年、十九年一月府立畫學校に入學し洋畫を專攻し二十一年卒業す此年二月東上して高等師範學校教授洋畫家小山正太郎の門に入り研學す同年十一月故原田直次郎の經營せる鍾斐館に入り研究すること四年技大に進む最も人物畫に特長を有す其作品内外博覽會、共進會、美術展覽會等に於て賞狀賞牌を得る前後其數を知らず、二十年五月京都府立高等女學校圖畫科擔任教授を囑托せらる、二十六年十月故山階宮晃親王殿下御肖像揮毫の命を拜す三十年五月雪中眞景の圖宮内省御用品たるの榮を荷ふ此年十二月伏見宮殿下御用畫仰付らる三十一年五月男山神社の圖宮内省御用品となる三十二年三月新古美術展覽會審査員に推薦せらる爾來同會鑑査員及審査員たること三十八年三月に至る迄四回に及ぶ三十四年關西美術會委員に推さる此年同會京都彫技會聯合秋季展覽會理事及鑑査員となる三十六年十二月故小松宮彰仁親王殿下御肖像及故伏見宮邦家親王殿下御肖像揮毫仰付らる三十九年關西美術院設立發起人となり後同院の教授及幹事となりて以て今に及ぶ、嗜好、旅行にして最も山、海の眺望にして遠大なるを好む（京都市上京區鹿ヶ谷若王寺五二）

井出百太郎

君は東京の實業家なり静岡縣の人明治元年十月富士郡中野村に生る、明治二十三年三月郷里中學校を卒業し次て米國に遊學し同國カルホルニヤ、ビチネス、カレーヂに入學し英學を修め二十七年卒業す後桑港に於て雜貨店を開き三十七年東京市日本橋區伊勢町に支店を設け瓦斯器具業を開始す三十九年桑港震災後本店を廢して歸朝し四十三年東京市日本橋區馬喰町に合資會社井出商會を創設して業務擔當社員となり專ら瓦斯器製作販賣業に從事す四十三年東京瓦斯器具販賣業組合組長に推され現に其職に在り（東京市日本橋區馬喰町二ノ一九、電話浪花四二三九）

井上仁郎

君は陸軍武官なり、愛媛縣の人、井上渡の次男、元治元年五月二十四日、明治十五年陸軍士官學校に入り十八年

工兵少尉に任じ二十八年獨逸に留學し三十二年歸朝す三十八年累進して工兵大佐に任ず、日清戰役の際參謀本部に在勤し日露戰役に際し臨時軍用鐵道監部員として功あり勳三等に叙せられ功三級金鵄勳章を賜ふ三十九年陸軍省軍務局工兵課長に補せられ累進して從五位に叙し現に其職に在り（東京市牛込區仲町一四）

池田醇

君は函館の農業兼牧畜山林家なり、池田周藏の七男、安政三年七月備前國小田郡川面村に生る、白金堂醇然と號す家世々農を業とす幼名五十衞門後ち今名に改む明治十年岡山遺芳館に入り漢學を修む十四年岡山縣師範學校上等師範學科へ入學を許され十四年七月卒業す在學中平素品行方正學業勉勵の廉を以て縣令より賞詞を受く後同縣小田郡川面村小學校主任訓導となり次で函館上磯郡小學訓導兼校長に轉ず十八年八月職を函館縣に奉し學務課に勤務す十九年函館支廳に轉ず二十一年三月函館區彌生小學校長兼訓導となり爾來教育に從事すること數年三十年十一月北海道廳屬となり函館支廳に在勤し第一課長となる三十四年三月龜田上磯兩郡農會理事に推さる此年八月函館支廳管轄內より推されて道會議員に選出せらる君常に儉素身を奉じ俸給の半を貯蓄して教育其他公共事業等に義捐し賞狀木杯を受くる事前後數十回に及ぶと云ふ方今前記の業務に從事しつゝあり。（北海道函館區東川町）

伊東新吉

君は札幌の辯護士なり、伊東常德の男、明治三十年七月東京法學院を卒業し翌年判檢事登用試驗に及第し村に生る、明治八年一月豐後國速見郡藤原鹿兒島裁判所檢事代理を命ぜられ三十二年九月辭して鄉里大分町に辯護士業務を開く三十五年再び北海道札幌地方裁判所兼區裁判所判事に任ぜられ從七位に叙せらる在職年餘にして又之を辭し三十六年辯護士となる爾來訴訟事務に從事して令名あり（北海道札幌北四條西一、電話一五〇）

五十嵐久助

君は札幌の農業家なり、舊福井藩士五十嵐佐兵衞の五男、嘉永二年三月越前國足羽郡和田村に生る、慶應二年藩命に依り京都詰となる次で伏見の役に從軍す明治六年北海道に航し居を札幌にトし始めて荒物販賣業を營む三十一年本道洪水の際罹災民へ金品を義捐し本道長官より賞狀を受く此年自費を投し石狩國札幌郡豐平村々道を開修し功を以て道廳より賞狀及三組木杯一組を下賜せらる現に農業の傍ら金錢貸付業に從事す（石狩國札幌區南五條西二ノ一一）

飯盛挺造

君は理學家なり、舊佐賀藩士飯盛苗芭の長男、嘉永三年八月二十四日生る幼名熊吉郎後今名に改む明治四年八月外務省洋語學所に入り獨逸語を修む學術優等を以て屢々賞せらる後東京外國語學校に轉し卒業後同校獨逸語教員並に東京醫學校教授に任じ爾來東京大學助教授兼山林學校教授に歷任す十七年私費を以て獨逸に留學し十九年同國「フライブルク」大學に於て「ドクトル、フヒロソフヒー」の學位を受け翌年歸朝し直に第四高等學校教授兼教頭に任じ正七位に叙す次で女子高等師範學校教授となり又私立藥學校及濟生學舍の講師を囑托せられ次で高等官三等從五位勳六等たり君教育上に盡力し木盃賞狀を受くること數次方今正四位勳四等東京女子高等師範學校教授の職に在り其著す所の重なるもの物理學及ひ理學に關するもの數種あり（東京市本郷區弓町二ノ二二、電話下谷二九〇）

印東胤一

君は東京の辯護士なり、印東治郎兵衞の長男、慶應二年四月三日江戸小石川原町に生る、夙に學事に志し家を實弟鎔次郎に讓り專ら研學す歳甫て十一瘁序の門に入り、次で平山成齋の家塾に漢籍を修め十六歳東京外國語學校に入り獨逸語を學ぶ二十一歳にして職を大藏省に奉し後ち法學に志し東京和佛法律學校に入る幾もなく職を司法省に奉し又辭して辯護士となり爾來民刑行政訴訟和解の業務に從事す資性恬淡而かも事件に接する謹嚴精密敢て事を苟もせず頗る好評あり（東京市芝區愛宕下町二）

色部美太夫

君は長野縣の大地主なり、色部義祐の長男、嘉永五年九月九日生る、家世々農を業とし其納むる所の國稅一千二百圓を出づ明治十七年以降縣會議員に選ばるゝこと數次三十年七月貴族院議員に互選せらる翌年十月合資會社色部銀行を創立し推されて其代表社員となり爾來勤續今尙其職に在り（信濃國埴科郡埴生村）

井上茂兵衞

君は名古屋の實業家なり、愛知縣の人富田幸吉の次男、嘉永六年七月十七日生る、後出でゝ井上家を繼ぐ養家は世々扇子商を業とす方今名古屋瓦斯株式會社常務取締役、一宮瓦斯株式會社豐橋瓦斯株式會社、中央興業株式會社等取締役にして名古屋商業會議所議員たり（愛知縣名古屋市西區押切町二六九）

井上十吉

君は外交官なり、舊阿波藩士井上省三の弟、文久二年十月二十八日生る、明治三年英國に航し官立鑛山學校を卒業し十五年歸朝す十七年帝國大學に勤務し十九年第一高等中學校教授に任し二十七年外務省醫譯官に出仕し三十一年公使館二等書記官に任せられ白耳義米國等に在勤す三十五年正六位に叙せらる方今從五位勳四等公使館一等書記官にして外務書記官を兼ぬ（東京府豐多摩郡大久保村百人町三九〇）

井手麟六

君は海軍武官なり、佐賀縣の人井手永敏の實弟、安政三年三月十五日生る、明治十三年七月兵學校を卒業し十八年六月海軍少尉に任し四十一年八月累進

して海軍少將に任せらる其間扶桑艦天龍艦横須賀鎮守府海兵團浪速艦各分隊長、平遠敷島副艦長、武藏豐橋橋立筑紫艦長佐世保鎮守府附佐世保海兵團長吾妻三笠香取等艦長に歷補す、日清戰役の功に依り勳五等に叙し日露の役功を以て勳三等功四級金鵄勳章を賜はる現に正五位佐世保豫備艦隊司令官たり（佐世保元町一ノ一）

井出治

君は舊岡山藩士佐々寅三の二男、慶應元年四月五日生る、後出でゝ故錦鶏間祇候井上正章の養嗣子となる、明治十六年陸軍士官學校に入り十九年工兵少尉に任せられ後東京電信學校陸軍經理學校に學ひ二十九年陸軍經理研究の爲め獨逸に差遣せられ次で澳國に留學し三十三年歸朝す三十九年累進して陸軍一等主計正に任せらる其間陸軍經理學校教官兼陸軍大學校教官及陸軍省經理局御用掛等に補せらる日清の役第四師團監督部々員として從軍し又日露の戰役に際し第九師團經理部長として旅順及奉天の役に參加し後功を以て勳三等に叙し功四級金鵄勳章を賜はる、方今從五位陸軍一等主計正にして兼て陸軍省經理局建築課長たり（東京市赤坂區青山南町二ノ五一）

飯島正治

君は長野縣の人、先代新左衛門の長男、文久元年五月二十二日生る、夙に漢學を修め明治十四年三月家督を相續す爾來戸長縣會議員徴兵參事員郡參事會員等に擧げらる曾て信濃銀行監査役たり又株式會社六十三銀行頭取に推され今尚其職に在り、明治三十年十二月第十一帝國議會解散後縣の第一區より推されて衆議院議員となること二回方今前記の外長野新聞株式會社々長、信越石油株式會社、信濃電氣株式會社等の取締役たり（信濃國更級郡中津村）

飯島魁

君は理學博士なり、舊靜岡藩士飯島道章の長男、文久元年六月二十七日生る、明治十一年東京大學理科大學に入り十四年卒業して理學士となり十五年獨逸に留學し歸朝後理科大學教授に任じ二十年學習院教授を囑托せらる翌年理學博士の學位を授けらる現に正四位勳三等にして東京帝國大學理科大學教授として動物學第二講座を擔任す（東京府豐多摩郡千駄ヶ谷町九〇二）

飯島保作

君は長野縣の實業家なり、先代佐兵衛の長男、文久三年九月二十一日生る、家世々質商を業とす、君雪堂又花月と號す夙に父を輔けて家業に從事す明治十五年上田郵便局長となり二十三年第十九國立銀行取締役兼支配人に推され爾來勤續多年又信濃貯金銀行の取締役の職に在り、二十四年郵便局長を辭す二十六年上田倉庫株式會社の創立に與り其取締役となり翌年再び上田郵便局長に任じ次で之を辭す二十八年上田商業會議所創立發起人となり後ち其副會頭に推さる爾來所得稅調査委員郡會議員、上田町收入役等の公職に在り方今株式會社第十九銀行常務取締役、上田倉庫株式會社諏訪倉庫株式會社等の取締役にして上田商業會議所副會頭たり（信濃國小縣郡上田町字横町）

飯島榮太郎

君は神奈川縣の雜貨商なり、飯島榮助の長男、明治十一年五月九日生る、屋號を近江屋と稱し洋小間物及織物商を業とし別に近榮襯衣店を經營す現に近榮襯衣店無限責任社員にして株式會社横濱貿易倉庫監査役たり（神奈川縣横濱市境町一ノ二五一、電話一五四五）

岩井勝次郎

君は大阪の貿易商なり、文久三年四月十一日丹波國南桑田郡旭村に生る、藤山源右衛門の二男、明治八年春十三歳にして初めて大阪に出て實母の緣に因り舶來物及洋酒類商岩井文平氏家に入り丁稚となる明治十八年一月主人文平氏は商業の名義を其嗣子文助に讓り自ら分家す二十二年二月君拔擢せられて文助氏の養子となる二十三年十月養父文平氏退隱して君をして其業を相續せしむ爾來專ら家業に從事し過去の經歷と時勢の進歩とに徴して漸次に商業の方針を進め二十六年英國倫敦ウイリアム、ダフ社其他歐米各地の商社と直接取引を開始し直輸入業に從事す當時大阪に於て同業を爲すもの三井物産會社あるのみ、二十九年十二月より商業資本に對する利子を養父文助氏に拂ひ殘餘の利益を以て君の所得と爲し商業一切の事を專務とす三十二年七月養父は商業を廢し改めて岩井商店の商號を登錄して營業主となる此年業務を擴張して東京に支店を設く三十三年店員を隨へ歐米漫遊の途に上り各國の商況を視察す時恰も佛國巴里萬國博覽會開設中なりしを以て視察上大に便宜を得たり歸朝後店務を改革し積極の方針を取り店員の待遇を改め人物の養成を主とす、三十四年神戸に支店を設置す三十五年益々商務を擴張し北區富島に倉庫を新設し尋で現住所に移轉す毎年往復一ヶ年半の豫定を以て交代に店員を歐米に派遣せしむ爾來各店員の合宿所を設け其風紀を維持し人材登用の道を拓き鋭意業務の發達を計るに盡瘁す性頗る公共慈善の念に深く鄕里旭村に慈善財團を設け貧民を救濟し又巨額の資金を投じて學校を新築し貢献する所多し爲めに金銀賞杯賞狀を受くること數次方今日本セルロイド會社取締役たり、嗜好、骨董、園藝禪學（大阪市北區北濱四ノ四三、電話長東二三九、全二〇二七一、全〇四四）

池田春渚

君は京都の儒家なり舊肥後藩士池田晴輝の三男、安政四年五月肥後國熊本に生る、父晴輝氏は詩文を能くし白鶴と號せり君字は基秋諱は八命、春渚は其號別に鳴琴洞の號あり年甫めて九歳家學に就く長して戸田熊彦の門に經史

を修むる四ヶ年後ち豊後國肥田町に出て村上小南(咸宜園)に就て研學七ヶ年其間傍ら平野五岳に從ひ書畫詩文を研究す師翁易簀後田能村竹田に私淑研鑽して技大に進む明治三十二年京都に適き田能村直入翁の門に學ひ益を得る多

其作品各種公私の博覧會共進會等に出陳し優等の賞を得る數次方今專ら丹青を事とす嗜好としては圍碁詩賦俳諧等に堪能にして俳號を哇鳴と稱す近汁秋海棠の一詩を得たり「昨夜西風濕艶姿、紅粧露下夢凹遙、閒言多恨玉人淚西作斷腸花一枝」(京都市下京區長寺町通河原町西入)

飯村丈三郎

君は茨城縣の實業家なり先代又五郎の長男、嘉永六年五月十四日眞壁郡上妻村生る、夙に菊池三溪に就き漢學を學ひ後上京して同人社春風社等に遊學す明治八年第六大區十小區戸長となり九年第三十番中學區取締となる十三年以來縣會議員同議長常置委員等に擧げらるゝこと數次十七年第六十二國立銀行の頭取となる二十二年憲法發布紀念章を賜はる二十三年帝國議會の開設に當り縣の第三區より選ばれて衆議院議員となる第二議會解散後再選せられ二十七年六月第三議會解散に際し候補を辭す此間豫算委員として盡す所あり先是十七年水戸鐵道株式會社創立委員に推され後其取統役となり次て常磐炭山の採掘に從事す二十五年茨城新聞を經營し其社長となり爾來刊續す君夙に自由主義を把持し縣下有數の政客たり代議士の職を罷むると共に專ら實業界に盡力し爾後水戸第六十二銀行取締役水戸商業會議所會員日本酒造火災保險株式會社取締役兼東京支店監督たり方今帝國石材株式會社長東京製絨株式會社日本火災保險株式會社、好間炭礦株式會社等の取締役株式會社興業蓄貯銀行東京精米株式會社等の監査役の職に在り(茨城縣水戸市上市南町一六、電話一一五)

飯淵七三郎

君は宮城縣の大地主(多額納稅者)なり先代藤七の長男、弘化三年九月二十日生る、祖先は水戸數馬と云ひ岩代國宇田郡飯淵村の領主たり慶長年間歸農して船岡村に移住し姓を飯淵と改む父藤七氏は名主を勤め聲望あり明治二十二年八十歳の高齢に達し養老の恩典に浴せり君幼名七之亟後ち改む夙に學を修め又劍馬の術を學ぶ家督相續以來專ら意を農事に注ぎ農事組合會を組織し小作人を奬勵して農業の改良に盡し爾來各村に農會勃興し成績頗る擧る明治二十一年船岡村火災あり君乃ち率先して金穀を出し罹災民を救助し更に吏員有志を勸誘し多くの醵金を爲し全村家屋の改築を計り一戸の萱屋根あるを見ざるに至る後銀盃一個を賞賜せらる十二年村會諸員となり爾來十七年の久しき此に職在り其間專ら村内の福利を圖り自ら資を投して慈善公共の事業に力を致す又縣會議員郡會議員等に擧げられ縣治の爲に盡し賞狀木杯銀杯等を下賜せらるゝもの枚擧に遑あらず二十七年七月貴族院議員に勅選せられ三十年七月之を罷む爾來宮城農工銀行、宮城商工銀行の取締役、鹽釜水産株式會社の監査役の職にあり方今株式會社宮城商業銀行取締役たり(陸前國柴田郡船岡村)

飯塚仁兵衛

君は東京の酒舗なり大石源之助の七男、天保十四年九月上總國木更津在に生る、夙に江戸に出で商業に從ひ着實勤勉の名あり遂に先代飯塚氏に知られ入りて養嗣子となる養家は世々酒造業を營み區内屈指の豪家を以て知らる君家業繼承以來益々業務を擴張し信用日に加はり遂に東京府酒造組合頭取に推さるゝこと數回現に其任に在り又市會議員徴兵參事員衞生委員所得稅調査委員區會議員等に擧げられ公共の事に盡力すること前後二十年其間日本赤十字社々員たり曾て海防費を献納し黄綬褒章を賜はり又日清戰役に際し金品を義捐し其他道路の改修教育衞生等の事業に寄附し褒狀賞杯を受領すること擧げて數ふべからず曾て内外火災保險株式會社の創立に與り其社長たりき方今專ら家業に從事す(東京市牛込區横寺町七、電話番町一一三三)

井坊忍教

師は眞言宗の僧なり明治六年七月二十六日奈良に生る、興福寺の衆徒井坊晋の次男にして明治十七年十二月京都清水方丈成就院園部忍慶師に就て得度す師物の故從紀州高野山金剛ノ味院に遊學し次で奈良興福寺勸學林に學ぶこと三ヶ年にして歸山す由來清水寺成就院は園部家の猶子を以て住職とするの慣例あり忍慶物故後其嗣幼少なるを以て一時他より入れて寺務を管理せしめたるより財政上に紊亂を生じ之が爲め師も亦嫌疑を蒙り縲紲の辱を受け鐵窓の下に繫るゝこと約半ヶ年遂に疑ひ解け晴天白日の身となる明治二十八年推されて往職となり爾來信徒總代内貴甚三郎辻信次郎氏等と共に財政の整理に着手し今や全く一段落を告ぐるに至れり現に權僧正にして清水寺の住職たり、嗜好讀書(京都市清水一丁目成就院、電話一四七七)

飯塚彌兵衛

君は栃木縣の人飯塚善左衞門の長男弘化元年六月七日生る、現に株式會社馬頭銀行頭取、馬頭煙草作業合資會社代表社員たり(栃木縣那須郡馬頭町)

飯田定次郎

君は神奈川縣の實業家なり普川五郎兵衞の四男明治四年十二月二十八日生